

禪寺住持となる。開元元年冬、建仁寺禪居庵に退休したが、翌年正月十日薨逝あり。十七日寂した。【業績】正澄の家は代々儒者であつた。四歳より學に從ひ、敏達人に遊んで來朝し、尊氏・直義の歸依を受けた。常に清規を講説して支那の禪刹制度を多く取り入れ、日本の寺制を改新し、文教を指導するところが多かつた。ついで後醍醐天皇の御時依を受け、大德禪師の勅諡を賜はつた。正澄の開山の寺は信濃の同善寺、山城の興聖寺、相模の成願寺、能登の安國寺等である。【著作】清拙語録、禪居集、廣清規、略清規。

【参考】禪林傳傳、扶桑五山記、佛祖宗派綱要、經傳傳、本朝高僧傳、(五山) 象徴、(英) Symbol、【解説】吾々には二つの象徴の仕方がある。一は対象の直接的意味を表象すること、この場合、直観と対象の現実の意味とは直接的に融合する。二は対象の現実の意味以外に間接的聯想的意味をも含めて表象する場合、例へば眼前に櫻の花を觀て櫻の花といふ觀念を大和魂といふやうな觀念をも結びつけて抱く場合とがある。而して後者の場合に、櫻の花といふ直接的觀念を起させる対象を象徴の形式といひ、これに結びついてゐる間接的な大和魂といふ觀念を象徴の内容といふ。即ち象徴の意義は、直接的な櫻の花といふ具象的のものと間接的な大和魂といふやうな抽象的のものとが各々獨立の意義を有しながら結合することゝるに意義がある。かくして個人も或る象徴の一種である。併し一般には結合する兩要素は、必ずしも具象的なもの抽象的なものと限

らない。概して云へば、宗教上とか實生活上に表はれる象徴は經驗上の記憶とか判斷推理等の知的作用によつて成立する所謂知的象徴が多く、從つて形式と内容の結合が不調和であつたり緊密でなかつたり、或は内容過多の場合が多い。然るに藝術上の象徴は形式的方面が獨立の具象的であるのみでなく、内容が、よし抽象的な人生といふやうな觀念であつても、兩者が感情的に結びついてゐる。即ち美的象徴に於ては、象徴の形式的方面に於て美的具象の獨立性であると共に、内容に於て人間の深さが要求され、且つ情緒的に成り立つてゐる事である。ゲーテの「ファウスト」の如きも、この點で高級な象徴の藝術と見做される。次に一般に象徴の形式的方面は、白赤青等の色彩、形、線の如き感覺的なもの、動物植物器具等のものでは表はれるが内容は愛とか人生とかいふ精神的抽象的なものである事が一般である。象徴を知的象徴と情緒的象徴とに分つのが普通であるが、フェルネルトは藝術上の象徴を三つにしてゐる。第一は表象上の象徴、第二は一般の象徴、これは「ファウスト」に見るが如く、個人の中に一般人間性を表現してゐる場合の如きである。第三、情緒象徴、音樂建築の如きものは、象徴の内容は一定の具體的行為や事件ではなく、漠然とした情緒的なものである事が多い。美學理論上の象徴の概念乃至象徴化の機能を認める事によつて、美乃至藝術の本質を説くものは可なり多く且つ古いが、代表的理論としては、アプスの感情移入説の如きがそれであらう。彼によれば、藝術の本質は感情的なものの中に理念的なものを閉ぢ込めること、即ち表現に

ある。表現とは感情的なものに對して、それが美的象徴となるやうな存在方式を與へることであると見た。かくて凡て藝術は象徴として理解される。(個人化、感情移入、移入) 【参考】 Volkelt: Der Symbolbegriff in d. neuzeitl. Art., F. Vachter: Der Symbolbegriff in d. neuzeitl. Kunst, (佛) Le Symbolisme, 【解説】我々の五官を十分に開放すると、そこにその感覺の綜合から來る一種の世界が浮び上る。第六官の世界といつてもよろしい。日常生活の妥協的な意識でない深奥な意識の表出といつてもよろしい。これは在來の言語では十分に言ひ現はせない世界である。それを象徴の世界といふ。現實世界はない象徴世界である。但し象徴は比喩ではない。それ自身が存在してゐるものである。象徴主義の文藝は佛蘭西のボードレール (Baudelaire, 1811-1867), ヴェルケ (Verlaine, 1844-1895), テンネン (Tennyson, 1819-1892), ランボオ (Rimbaud, 1854-1891) 等の詩に現はれるものが、その代表的な表現である。その奥深き意識を開放するためには非常な苦痛と煩悶を要せらる。一種の類型的な苦痛の委をばデカダンス (Decadence) の苦痛の委と云ふのである。この苦痛の告白を経過して、その先きに一種の新しい共通の世界、即ち象徴の世界を求め出し、相結合し合ふことと求むるのである。置の世界の表出ともいふべきである。象徴主義の文藝は、佛蘭西に限らず、北歐スカンディネヴィアに於ては、イブセンや、ビョルンソンの文藝の中にも現はされてゐるのである。イブセンの「鴉」といふ劇は、何を現はしてゐるか。

【参考】大正記、松本、(佛) Symbolbegriff in d. neuzeitl. Kunst, (佛) Le Symbolisme, 【解説】我々の五官を十分に開放すると、そこにその感覺の綜合から來る一種の世界が浮び上る。第六官の世界といつてもよろしい。日常生活の妥協的な意識でない深奥な意識の表出といつてもよろしい。これは在來の言語では十分に言ひ現はせない世界である。それを象徴の世界といふ。現實世界はない象徴世界である。但し象徴は比喩ではない。それ自身が存在してゐるものである。象徴主義の文藝は佛蘭西のボードレール (Baudelaire, 1811-1867), ヴェルケ (Verlaine, 1844-1895), テンネン (Tennyson, 1819-1892), ランボオ (Rimbaud, 1854-1891) 等の詩に現はれるものが、その代表的な表現である。その奥深き意識を開放するためには非常な苦痛と煩悶を要せらる。一種の類型的な苦痛の委をばデカダンス (Decadence) の苦痛の委と云ふのである。この苦痛の告白を経過して、その先きに一種の新しい共通の世界、即ち象徴の世界を求め出し、相結合し合ふことと求むるのである。置の世界の表出ともいふべきである。象徴主義の文藝は、佛蘭西に限らず、北歐スカンディネヴィアに於ては、イブセンや、ビョルンソンの文藝の中にも現はされてゐるのである。イブセンの「鴉」といふ劇は、何を現はしてゐるか。

【参考】大正記、松本、(佛) Symbolbegriff in d. neuzeitl. Kunst, (佛) Le Symbolisme, 【解説】我々の五官を十分に開放すると、そこにその感覺の綜合から來る一種の世界が浮び上る。第六官の世界といつてもよろしい。日常生活の妥協的な意識でない深奥な意識の表出といつてもよろしい。これは在來の言語では十分に言ひ現はせない世界である。それを象徴の世界といふ。現實世界はない象徴世界である。但し象徴は比喩ではない。それ自身が存在してゐるものである。象徴主義の文藝は佛蘭西のボードレール (Baudelaire, 1811-1867), ヴェルケ (Verlaine, 1844-1895), テンネン (Tennyson, 1819-1892), ランボオ (Rimbaud, 1854-1891) 等の詩に現はれるものが、その代表的な表現である。その奥深き意識を開放するためには非常な苦痛と煩悶を要せらる。一種の類型的な苦痛の委をばデカダンス (Decadence) の苦痛の委と云ふのである。この苦痛の告白を経過して、その先きに一種の新しい共通の世界、即ち象徴の世界を求め出し、相結合し合ふことと求むるのである。置の世界の表出ともいふべきである。象徴主義の文藝は、佛蘭西に限らず、北歐スカンディネヴィアに於ては、イブセンや、ビョルンソンの文藝の中にも現はされてゐるのである。イブセンの「鴉」といふ劇は、何を現はしてゐるか。

【参考】大正記、松本、(佛) Symbolbegriff in d. neuzeitl. Kunst, (佛) Le Symbolisme, 【解説】我々の五官を十分に開放すると、そこにその感覺の綜合から來る一種の世界が浮び上る。第六官の世界といつてもよろしい。日常生活の妥協的な意識でない深奥な意識の表出といつてもよろしい。これは在來の言語では十分に言ひ現はせない世界である。それを象徴の世界といふ。現實世界はない象徴世界である。但し象徴は比喩ではない。それ自身が存在してゐるものである。象徴主義の文藝は佛蘭西のボードレール (Baudelaire, 1811-1867), ヴェルケ (Verlaine, 1844-1895), テンネン (Tennyson, 1819-1892), ランボオ (Rimbaud, 1854-1891) 等の詩に現はれるものが、その代表的な表現である。その奥深き意識を開放するためには非常な苦痛と煩悶を要せらる。一種の類型的な苦痛の委をばデカダンス (Decadence) の苦痛の委と云ふのである。この苦痛の告白を経過して、その先きに一種の新しい共通の世界、即ち象徴の世界を求め出し、相結合し合ふことと求むるのである。置の世界の表出ともいふべきである。象徴主義の文藝は、佛蘭西に限らず、北歐スカンディネヴィアに於ては、イブセンや、ビョルンソンの文藝の中にも現はされてゐるのである。イブセンの「鴉」といふ劇は、何を現はしてゐるか。

【参考】大正記、松本、(佛) Symbolbegriff in d. neuzeitl. Kunst, (佛) Le Symbolisme, 【解説】我々の五官を十分に開放すると、そこにその感覺の綜合から來る一種の世界が浮び上る。第六官の世界といつてもよろしい。日常生活の妥協的な意識でない深奥な意識の表出といつてもよろしい。これは在來の言語では十分に言ひ現はせない世界である。それを象徴の世界といふ。現實世界はない象徴世界である。但し象徴は比喩ではない。それ自身が存在してゐるものである。象徴主義の文藝は佛蘭西のボードレール (Baudelaire, 1811-1867), ヴェルケ (Verlaine, 1844-1895), テンネン (Tennyson, 1819-1892), ランボオ (Rimbaud, 1854-1891) 等の詩に現はれるものが、その代表的な表現である。その奥深き意識を開放するためには非常な苦痛と煩悶を要せらる。一種の類型的な苦痛の委をばデカダンス (Decadence) の苦痛の委と云ふのである。この苦痛の告白を経過して、その先きに一種の新しい共通の世界、即ち象徴の世界を求め出し、相結合し合ふことと求むるのである。置の世界の表出ともいふべきである。象徴主義の文藝は、佛蘭西に限らず、北歐スカンディネヴィアに於ては、イブセンや、ビョルンソンの文藝の中にも現はされてゐるのである。イブセンの「鴉」といふ劇は、何を現はしてゐるか。

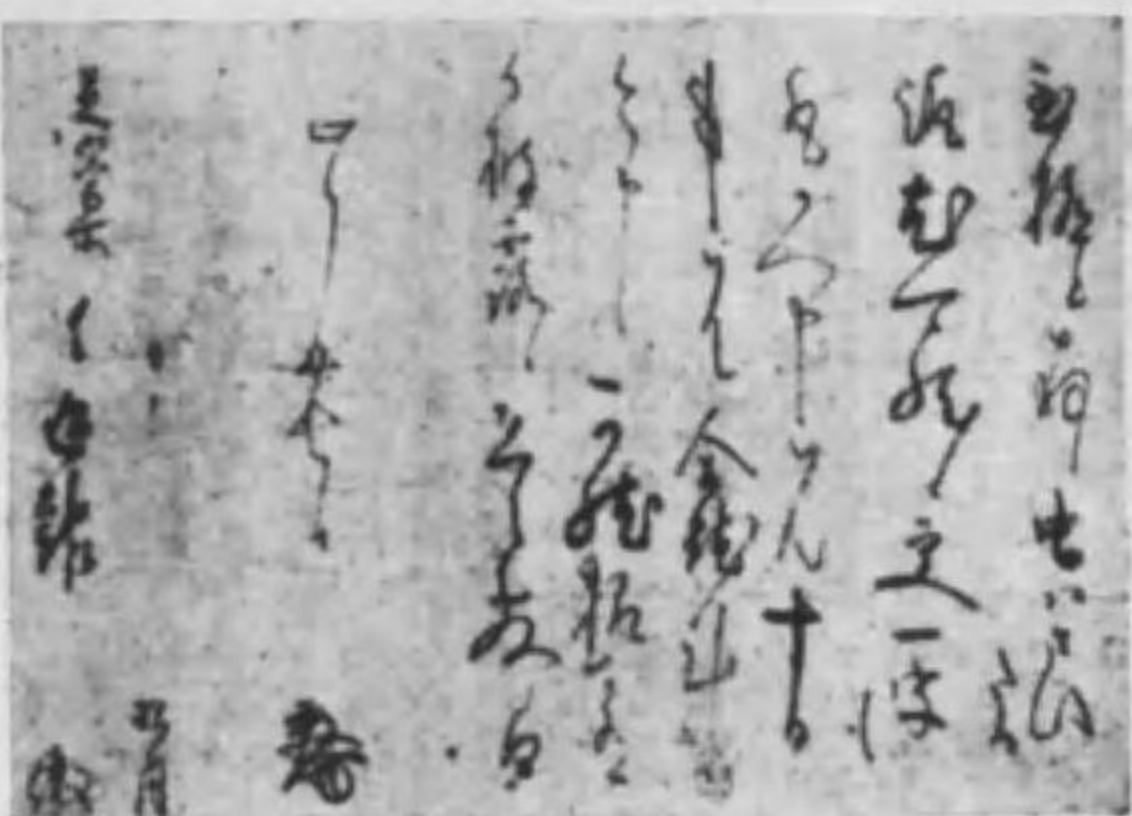
介するもの次第に多く、論争の中では活々客が支那比興詩を象徴詩と解せしに對し、孤村の反駁があり、紹介の中では、梅月、孤村の獨逸詩論が實際上的効果が著しかつた。象徴詩人として立つたものには、蒲原有明を第一人として、岩野泡鳴、澤田泣菫、與野野宮等があり、なほ當時年少詩人であつた北原白秋、三木露風その他があつた。中で泣菫、宣二人は、習作にとどまり、泡鳴は熱心ではあつたが、詩境の混濁に於て象徴的の稱しがたぐ、僅かに有明一人が卓れた詩品を示したにとどまる。詩集としては「有明集」(白秋の「邪宗門」、露風の「廢園」等)が挙げられる。【批評】象徴的手法、技巧に認識不足と心境の不確定とがあり、一見豪壯な詩體も、よく讀めば内容の空虚を感ずる事は出来なかつた。日本の象徴詩運動は、理論に於ても作例に於ても、この種の不徹底に終始した。情調象徴は近代の所産で、世紀末象徴文學は先づ世紀の更新とともに去つたが、凡そ象徴に於ける情調を重しとする一派の文學は、今世紀に及んでもその経路はなほ長く廣くつづいてゐる。本邦象徴詩の経路も、白秋、露風の失敗とともに絶滅したものではなく、その後の様々な詩家の作品にいろいろの種類のなつて分存してゐる。これは恐らく未來に残さるべき問題であらう。

【参考】明治大正詩史、日蓮取之介、【目録】松亭金水、(中村) 中村、(松本) 松本、(佛) Symbolbegriff in d. neuzeitl. Kunst, (佛) Le Symbolisme, 【解説】我々の五官を十分に開放すると、そこにその感覺の綜合から來る一種の世界が浮び上る。第六官の世界といつてもよろしい。日常生活の妥協的な意識でない深奥な意識の表出といつてもよろしい。これは在來の言語では十分に言ひ現はせない世界である。それを象徴の世界といふ。現實世界はない象徴世界である。但し象徴は比喩ではない。それ自身が存在してゐるものである。象徴主義の文藝は佛蘭西のボードレール (Baudelaire, 1811-1867), ヴェルケ (Verlaine, 1844-1895), テンネン (Tennyson, 1819-1892), ランボオ (Rimbaud, 1854-1891) 等の詩に現はれるものが、その代表的な表現である。その奥深き意識を開放するためには非常な苦痛と煩悶を要せらる。一種の類型的な苦痛の委をばデカダンス (Decadence) の苦痛の委と云ふのである。この苦痛の告白を経過して、その先きに一種の新しい共通の世界、即ち象徴の世界を求め出し、相結合し合ふことと求むるのである。置の世界の表出ともいふべきである。象徴主義の文藝は、佛蘭西に限らず、北歐スカンディネヴィアに於ては、イブセンや、ビョルンソンの文藝の中にも現はされてゐるのである。イブセンの「鴉」といふ劇は、何を現はしてゐるか。

【参考】大正記、松本、(佛) Symbolbegriff in d. neuzeitl. Kunst, (佛) Le Symbolisme, 【解説】我々の五官を十分に開放すると、そこにその感覺の綜合から來る一種の世界が浮び上る。第六官の世界といつてもよろしい。日常生活の妥協的な意識でない深奥な意識の表出といつてもよろしい。これは在來の言語では十分に言ひ現はせない世界である。それを象徴の世界といふ。現實世界はない象徴世界である。但し象徴は比喩ではない。それ自身が存在してゐるものである。象徴主義の文藝は佛蘭西のボードレール (Baudelaire, 1811-1867), ヴェルケ (Verlaine, 1844-1895), テンネン (Tennyson, 1819-1892), ランボオ (Rimbaud, 1854-1891) 等の詩に現はれるものが、その代表的な表現である。その奥深き意識を開放するためには非常な苦痛と煩悶を要せらる。一種の類型的な苦痛の委をばデカダンス (Decadence) の苦痛の委と云ふのである。この苦痛の告白を経過して、その先きに一種の新しい共通の世界、即ち象徴の世界を求め出し、相結合し合ふことと求むるのである。置の世界の表出ともいふべきである。象徴主義の文藝は、佛蘭西に限らず、北歐スカンディネヴィアに於ては、イブセンや、ビョルンソンの文藝の中にも現はされてゐるのである。イブセンの「鴉」といふ劇は、何を現はしてゐるか。

【参考】大正記、松本、(佛) Symbolbegriff in d. neuzeitl. Kunst, (佛) Le Symbolisme, 【解説】我々の五官を十分に開放すると、そこにその感覺の綜合から來る一種の世界が浮び上る。第六官の世界といつてもよろしい。日常生活の妥協的な意識でない深奥な意識の表出といつてもよろしい。これは在來の言語では十分に言ひ現はせない世界である。それを象徴の世界といふ。現實世界はない象徴世界である。但し象徴は比喩ではない。それ自身が存在してゐるものである。象徴主義の文藝は佛蘭西のボードレール (Baudelaire, 1811-1867), ヴェルケ (Verlaine, 1844-1895), テンネン (Tennyson, 1819-1892), ランボオ (Rimbaud, 1854-1891) 等の詩に現はれるものが、その代表的な表現である。その奥深き意識を開放するためには非常な苦痛と煩悶を要せらる。一種の類型的な苦痛の委をばデカダンス (Decadence) の苦痛の委と云ふのである。この苦痛の告白を経過して、その先きに一種の新しい共通の世界、即ち象徴の世界を求め出し、相結合し合ふことと求むるのである。置の世界の表出ともいふべきである。象徴主義の文藝は、佛蘭西に限らず、北歐スカンディネヴィアに於ては、イブセンや、ビョルンソンの文藝の中にも現はされてゐるのである。イブセンの「鴉」といふ劇は、何を現はしてゐるか。

て来たものと懸念される。併しこれは、単に狭い歌壇意識のみに促されたものでなく、彼



(藤氏男爵贈) 正徹自叙

多喜郡大田村の莊園寺といふ寺で、歌集の詞

い懐儀を持つやうになつて寺を去つたものら

年の火災の厄にあつたものであらう。即ちそ

【著作】正徹物語(別項)○歌書記物語一巻

慣を捨て得ず、連併に一期天地を作つた了俊

六日對櫻書寫の跋がある。この跋によると、

この定家流に近い事は、正徹が剛玄を以て

向に生れ、明治三十一年十一月二十四日同

の趣を聞き、維摩不思議の説の宗に通達し給うた。御製作の「維摩經疏」二法華經疏は、共に地持院蔵の譯本を依用せられたのである。『摩訶般若波羅蜜經』の註、維摩經疏を本義とし、『法華經疏』は、梁の光宅寺法雲の「法華經義疏」八卷を本義となし引用せられてゐる。『聖德太子傳』について、後の東大寺法華院蔵の註では、法雲の經義を本義と指されたこと云つてゐる。かくの如く太子は、學説は法雲の系統を繼がせられたのであるが、常に批判的態度を取られてゐる。私譯小異と云ひ、今不須と云ひ、數々明言されてゐるのである。

【御問歴】太子は、第三十一代用明天皇の第二皇子で、御母は穴穗部間人皇女であらせられる。御母穴穗部間人皇女が禁中を御遊行の時、阪の戸で備みなく太子を産み給うたので、戸と名付けられたといふ。御幼時より聰明で、一時に數人の語を聽いて審判せられたから、聖德八耳皇子と云はれ給うた。上の宮に住はせられたので上宮皇子とも呼ば奉る。なほ聖德耳法主大王用明紀、東宮聖王(欽明紀)在聖德天皇御時、聖王等と申し奉る。用明天皇は御即位後間もなく御病に罹り給ひ、篤く佛教に歸依あらせられ、御備平座の御祈禱あり、佛佛像造立の御發願あり、御妹額田部皇女及び阪戸皇子とを召され御發願を傳へられた。太子は勅を受けて御盡力なされたが、翌二年四月天皇の御備重らせられ、太子は養食を忘れて孝養あらせられた。且つ御手づから香燭を奉げて佛天に祈禱せられたと傳へられる。天皇崩御の後、大連物部守屋は穴穗部皇子を奉じ、急に河内廣川の津に據つて兵を募つた。太子



太子御幼時(繪) 藤原隆房

は泊瀬部皇子・竹田皇子・藤波皇子等と共に蘇我馬子と謀つて守屋討伐の軍を起された。守屋は稻城を築きて防ぎ戰つた。太子は白藤木を以て四天王の像を造立して勝利を祈願し、遂に守屋の軍勢を平定せられた。尋いで泊瀬部皇子を給ひ、崇峻天皇といふ。この時、百濟より學僧・寺工・鑄工・瓦工・畫工等を貢進したので、太子は用明天皇の遺詔及び守屋討伐の時の誓願に依り、馬子と共に法隆寺、四天王寺建立の工事を起された。崇峻天皇の後に額田部皇女御位につかせられ、推古天皇とならせられた。元年四月、太子は皇太子となり、攝政として萬機を委ねられ給うた。時に御歳二十であつた。これより太子は内外の經綸に當らせられたのである。二年二月、勅を奉じて三寶を興隆せられたが、これは太子の政教改革の第一歩である。この時諸々の臣連等、君親の恩のため讓つて佛舎を造つたが、太子は四天王寺、法隆寺、中宮寺、佛舎、蜂丘寺、池袋寺、葛城寺等を起されたのである。四天王寺

が落成した時、太子は守屋の子孫を納れず、寺に納め、その遺領を寺田とせられた。三年五月、高麗の僧惠慈を歸化した。太子はこれに就いて専心佛教の深義を研究され、幾許もなく諸經論に通達し給うた。佛惠慈を感嘆せしめられた。推古天皇六年御歳二十五の時、額田部皇女を納れ給ふ。尋いで斑鳩の里に宮室を造らせられる。八年、地部連麻呂等に、兵一萬を率ゐて新羅を征し、任那を救濟せしめられた。同十年に再び反亂があつたので、太子は御弟來目皇子を大將軍に任じ、二萬五千の大兵を以て外征せしめられたが、不幸にして太子はその途上、病によつて薨せられたので、當麻呂皇子にその後を繼がせられた。太子が、功未だ成らずして故あつて皇子の軍を廢させられ、この事は中止となつた。

太子は御弟來目皇子を大將軍に任じ、二萬五千の大兵を以て外征せしめられたが、不幸にして太子はその途上、病によつて薨せられたので、當麻呂皇子にその後を繼がせられた。太子が、功未だ成らずして故あつて皇子の軍を廢させられ、この事は中止となつた。

勅が來朝して、解天文地理、通四方術の書を獻じたので、太子は諸學生をしてこれを學ばしめられた。聖十一年(御歳三十)、攝政として、初めて冠位十二階を制定し、翌年正月諸臣に授けられた。即ち大德・小德・大仁・小仁・大禮・小禮・大信・少信・大義・小義・大智・少智等の十二階を分ち、諸臣の階級を定めて人材登用の實績を明かにされたのである。同十二年四月、聖法十七條を制定せられた。「國體二君一民無兩主、車土無民、以王爲主」とい

ひ、皇室中心を標榜して氏族の跋扈を制止しようとした趣意が見られるのである。十三年四月、勅を奉じて銅鑄の丈六佛、各一軀造立の誓願を發し、鞍馬島に製作を命ぜられた。高麗王大興は、これを聞いて黄金三百兩を獻じた。尋いで丈六佛像成り、元興寺金堂に安置して、四月八日、七月十五日の兩會の儀を定められた。十四年(御歳三十三)勅を奉じて宮中に佛堂を講説せられた。藤原の諸親王・王女及び群卿は湯浴した。講説は三日で終了した。天皇は勅して法華經を講説せしめられたので、岡本宮で法華を説かれた。この時天皇は播磨佐野の地を賜つたので、太子はこれを法隆寺に施入せられた。聖年法隆寺が落成して諸堂完備し、金堂には御父用明天皇御願の聖佛三尊を安置せられた。この歳二月、勅を奉じて大臣百寮を率ゐて神祇を祭拜せられた。七月小野妹子を隋に遣はし、國書を齎らして彼國の政教を觀察し、大陸の文化を輸入せしめられた。この時の國書に、「日出處天子、教書日沒處天子、無差事」と書かれて全く對等の體を修められ、自主的外交を開かれたのである。妹子は聖年隋使裴世清等を伴つて歸朝したが、裴世清の西還に方りて再び妹子を隋に遣はし、且つ留學生を遣送せられた。妹子は十七年九月歸朝したが、留學生は彼地に留まつた。今の大化改新の後の南詔請安、高向玄理、僧受等の如き、大化改新の功臣があつたのである。二十一年十二月、太子は片岡山を遊行して路傍に伏せる僧者を哀み給ひ、衣食を與へて歌を詠せられた。二十八年(御歳四十八)、大臣蘇我馬子と謀つて、天皇紀國記、臣連、伴造、國造等八十餘并に、公民等の本記を撰錄せしめられた。これは實に我

が國史撰述の最初のものであるが、不幸にして後皇極天皇四年六月、蘇我蝦夷等の謀せられる時、兵火によつて焼かれた。この年十二月、御母穴穗部間人皇女かくれ給うたので、太子は悲嘆の餘り、翌二年正月疾を發し給うた。二十二日、王經部大郎女と共に病を給ひ、諸王子諸臣共に深く憂愁し、同じく發願して釋迦牟尼佛三尊を造立し、御平座を祈願せられたが、二月二十一日王紀大郎女薨せられ、次いで二十日太子は薨じ給うた。太子の師高麗僧惠慈は太子の遺去を聞いて大に悲しみ、「我來年二月五日必ず死して、淨土に於て太子に遇ひ、共に衆生を教化せん」と誓願したが、翌年朔日に至り、遂に寂したと傳へられる。太子の御子山背大兄王は、太子の御意を嗣ぎ給ひ、殊に賢徳の聞えあつたが、太子薨後二十餘年にして蘇我入鹿の亂に遇ひ給ひ、一歳十五王子等と共に自盡され、後を斷絶するに至つた。太子の御一族に就いては、「上宮聖德法王帝説(御問歴)に詳しい御系圖がある。

【御著作】聖法十七條(日本書紀)推古天皇十二年の條に收載されてゐる。山城大原三千所所藏木等聖德太子傳本がある。○法華經疏(聖德太子傳)自筆の傳本が傳へられてゐる。○維摩經疏及び佛經疏(この二書には傳本がある。「法華經疏」と共に上宮三條院と稱せられてゐるものであるが、「法華經疏」に法王法華經疏七卷を作ると、就して上宮御製疏」とあり、「法華經疏(聖德太子傳)に、「法華經疏三部各四卷、佛經疏一部三卷、佛經疏一部五上宮御製法王御製」とあり、「三條院御製」とあり、「佛經疏一部」は聖德太子の御製と推定される。○聖德太子が我が國體に背馳するところの行動をな

されたかの如く論じ、太子の人格を非難するに至つた。けれども彼等は太子の御理想と御精神とを全然理解することなく、一種の偏見に依つて批判したものであつた。太子は夙に聰明英敏なる御性格を以て内外の狀勢を遠觀せられ、我が國家建設の高大なる理想を以て御功業を樹立せられたのである。當時我が國は氏族政治の弊風漸く甚しく、大臣・大連の擅權時代を見るに至り、大伴・蘇我・物部等諸氏

聖德太子繪傳(繪) 藤原隆房

の勢力は、やゝもすれば皇室を凌ぎ、皇位の繼承を左右する程であつた。太子はこの弊害を一掃し、皇室の尊嚴を發揚し、國民の尊嚴を促進しようとして、大に先進國の文物を求められたのである。

【參考】日本書紀○上宮聖德法王帝説○法隆寺金堂釋迦佛光背銘○天國身院佛龕鑿銘○聖德太子傳傳○太子傳補圖記(寛仁)

代、廣隆寺本は徳川の初め、住吉如慶の作である。聖德太子傳(傳) 藤原隆房

り見て、古本と稱し得る古写本の奥書に、延喜十七年九月藤原實房御中境納言の撰述と明記したものがあったので、奥書の「三寶繪」と成立の永観二年より六十七年を満ることとなつたのである。かくて古寫本を復元的に對査して、その本文研究の後に、實家本は原本の形を傳ふるものなることを認め、更にその底本と見し得る時代より見て、古寫本と稱せらるゝ古本の奥書に傳ふる藤原實房延喜十七年の撰述を肯定するに至つたのである（この撰述は昭和二年十月、藤原太子御書發行、實房「復元藤原太子御書」の巻頭に註し）。

が、單に太子遺墨の餘に成つた宗教的文學的表現として批判せば、それ等の缺點は全く問題とならぬばかりでなく、殆ど歴史的に資料的に顧みる價值を有しないと見做された奇蹟的とも、内面的には反つて有力なる觀察を加へたものもあつて、そこに文學的價值を見出してはならぬ。加之、その時代に於て已に民心に培はれつゝあつた太子傳であることに想ひ到ると、反つて別の意味での價值を有することとなる。されば本書の價值並に影響は決して冷かな史料論的價值の如何によつて遠慮さるべきでない。而して平安時代以來、我が國文學上におけるその影響の大なることは改めて言ふまでもなく、太子の傳記史料としては、殆どすべて本書に據れる所から見ても明かなことである。



(藤原太子御書) 淨土五祖繪

説「鎌倉光明寺所藏一巻、支那淨土教の宗祖と仰がれる慧遠・道愍・道標・道欣・道融の五師の因縁圖を畫いたもので、奥書によれば嘉元三年の製作たることを明かしてある。この五師を淨土五祖として、一宗の祖を立てたのは「法苑珠林」によると、法然の創倡であつて法

然のために重源が宋から傳來したと云はれる二條院の五祖像に始まり、淨土宗の普及に伴ひ本卷の如き五師に因り、淨土宗も作られるやうになつたのである。「佛傳」繪は浄土佐光重源行後筆と鑑してゐるが、勿論明かでない。描寫は大體佛師系統のもので、殊に題材が支那であるだけに、その人物・樹屋の筆致や賦色に宋畫風のところが取り入れられてをり、同書の代りに各圖上に色紙形を劃して、漢文で五祖の傳記を書した遺り方も、また支那式と云ふべきである。（田中八一）

善導は、「觀經疏」を作つて他力往生の要旨を述べ、又「法事理」等の講書著して一宗所修の行儀を定めた。善導の下に懷感があり、「淨土莊嚴論」を作つて大方を開導し、尋いで少康が出てこれに繼いだ。曇鸞より少康までを後五祖と云ふ。本宗の三國相承の就いて、ほこの外に、六祖・八祖・十七祖等の諸説があり、その八祖相承とは、馬鳴・龍樹・天親・善提・支度・道標・道愍・道融といふ。また「淨土集」には、淨土宗の祖として、慧遠・曇鸞・善導の三祖あることを説く。我が國にこの宗を興隆したのは、源空（法然）といふのである。源空は夙に諸宗の祖徳に就いて願望の二教を修め、その蘊奥を究めたが、後、善導の「觀經疏」を読み、「一心專念彌陀名號」の文に至るや、豁然として悟る所あり、專修念佛の淨業一行に歸入した。時に年四十三、承安五年三月である。これを本宗開立の年時とする。乃ち「淨土本願念佛集」を作り、開宗の所以を説示した。門下に多くの英哲を輩出し、各々その所承を異にし、源空は眞西派を、善導は西派を、覺明は九品派を、隆直は長樂寺派を、觀覺は觀經（前項）を唱へ、幾多の分派を生じたが、就中復次に榮えたるものは、眞西派・西山派及び眞西派である。而して眞西派のみ單に淨土宗と稱し、西山派は淨土宗西山派、眞西派は淨土眞西派又は眞西派と稱す。源空は眞西派の祖、源空八年源空に歸し、源空に侍すること八年、一宗の要義を授けて故國に歸り、専ら蓮を郷黨に弘めた。依つて眞西派、或は眞西派と云ふ。「眞西派」末代念佛授手印を作つて弟子長忠に授け、以て法統を傳へた。長忠は京都並に鎌倉に止住して師承を宣傳し、「觀經疏傳通記」「淨土法苑珠林」

等多くの書を著し、眞西派を大成した。良忠の門下甚だ盛んで、説を異にするものも分れて、白觀・名越・藤田・小幡三條、一條の六派となつた。白觀は寂學良曉の門流であつて、良曉は初め鎌倉光明寺に居り、後、白觀に住したところからこの名がある。名越は觀經良辨の一流であつて、鎌倉名越に善導寺を創立して弘宣したところからこの名がある。藤田は唱阿性眞が下總藤田に高僧寺を建てて弘めた一流であつて、その門弟持阿は開國大野に正定寺を建て、又無量壽寺を開いて傳道した。これら土佐義とも云ふ。以上の三派は、主として關東に行はれたが、關東三派と云ふ。小幡は、山城小幡寺の良空慈心一流を云ふ。三條は了慧道光が京都三條菩提院に在つて弘めたところからこの名がある。一條は總阿然空の一流であつて、京都一條光明院を本寺とするが故にこの名が出た。以上の三派を京都三派と呼ぶ。かくの如く六派に分れて、各々宗義を弘通したが、藤田・小幡・一條の四派は、その法統を絶ち、白觀名越の二派のみ後世大に榮え、その法流は殆ど全國に及んだ。名越は、覺明より慈観・慧観を経て妙觀に至り、その下に聖觀・十華あり、聖觀は覺城國園樂に成徳寺を開き、その弟子長榮は、下野に大澤山圓通寺を開いて所承を宣揚した。これを大澤派と呼ぶ。十華は覺城に聖觀寺を開創し、後に至つて奥州本山の號を下賜された。而して江戸末期に至つては、門派また振はず、明治維新後、白觀派に合併されるに至つた。白觀は覺明の下に、良樂定・永慶派あり、定慧の門に智演あり、文治元年、元に入り、壽在五年にして慧遠流の念佛堂に歸宗を傳へて歸朝し、旭苑社を創して念佛を修した。

淨土は定慧に次いで光明寺に住し、その弟子成阿了賢の門に了譽聖固あり、聖固は江戸に傳道院を開き、博學を以て多くの書を著しして宗義を發展せしめ、淨土宗の大成者と稱せられる。その門人向覺聖體は、江戸に増上寺を開創し、傳道の道場としたが、後に至つて大本山となつた。又、道賢・慧覺の二英哲が現はれ、存應・滿譽の二大徳も出た。存應は徳川家康の時依を受けて増上寺を中興し、滿譽は秀忠の歸朝を得て、知恩院を再興した。爾來本宗は徳川氏の外護篤きにより、衣食の資足り、一方には佛徳兼備の善知識を出したが、他方には又安逸に耽り、徳川氏の大政奉還後、一轉して困厄するに至つたが、彌陀行儀等の英才大徳が出て、能くその衰運を支へた。

力難行道と云ふ。又善導は觀經二教、聲聞菩薩二種の教判を立て、「觀經三阿彌陀經」等に説かれた法門を以て頓教とし、他を漸教とした。又「觀經」の所説善惡因果に據り、他を聲聞教に攝した。降つて眞西派開創に至つて、二種三輪の教判を立てて一代教を判釋した。『宗義』今時末世の衆生は、智慧微淺であつて聖道難行には堪へ得ないから、宜しく彌陀廣大の悲願に一身を託して、速かに往生を期すべきである。即ち彌陀の本願四十八願中の第十八願に、「設我得佛、十方衆生、一心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺」とある以上は、至心に心行並三種の要法を行じて業障を除滅し、來迎の聖應を感じて西方往生の妙果を期し、極樂の報土に在つて佛果を證すべきである。さて心行並の三種要法とは何であるか。(一)安心。これに總別の二種がある。總安心とは厭離穢土、欣求淨土と大菩提心である。別安心とは、三心であつて、これ即ち本宗の主要のものである。本願には至心・信心・欲生我國といひ、觀經には「發三種心、即便往生、何等爲三、一者至誠心、二者深心、三者迴向發願心、具三心者、必生彼國」と説いてゐる。(二)起行。已に安心を具すれば、修する所の一切の業は、皆これ善根ならざるはない。併し往生淨土の要因として見る時は、こゝに又輕重の差を生ずる。これについて古來幾多の説があるが、就中、善導の正行三行、助正二業の判別が最も審かである。その正行とは専ら三種所説を如法に修行すること、これに反して修行とは、正行以外一切の善根を云ふ。又正行に五種あり、「讀誦・二觀・禮拜・四稱・五讚歎」供養である。この中前三・後一は助業であつ

で、第四編のみが正定である。(三)作業。
心行として成就せしめる方法であつて、これに四編がある。一、恭敬修とは阿彌陀佛に對して専心恭敬し、二六時中西方に背かず、行住坐臥常に所作することをいふ。二、無餘修とは、心全く西方に向ひ、更に餘事を交へざることをいふ。三、無間修とは、餘行を以て淨行を間斷せざることをいふ。四、長時修とは、命終に至るまで、嘗つて淨業を中止せざることをいふ。

城南評論 雜誌「刊行」明治二十五年三月創刊。二十六年二月休刊後、第十二號を四月に發行したが、これ亦幾ばくもなく廢刊した。『解説』『淨瑠璃史稿』を以て知られた寺山屋川が主宰した文藝評論雜誌で、當時夜理理論で相闘つた兩外、道遠を初め、露伴・寒村・信綱・橋本・大夢等、當時の文人論客の筆を並べて光輝陸離たるものであつた。殊に主筆屋川の『淨瑠璃史稿』信綱の『近世文學評論』兩外の『ルウソウ懺悔記』露伴の『地獄深目記』その他文藝評論に見るべきもの多きが、本誌上によつて紹介された。(『藝文』)

商人軍配圖 小説「刊行」水谷不例氏。『八文字屋研究』中に正徳年間刊し、朝倉無庵の『日本小説年表』は、享保十八年刊としてゐる。菊屋板。『諸本』商人軍配記(寛政元年改題)。其後自來傳集(帝國文庫)下巻所収『内容』一巻三話、五巻十五話を収めてゐる。京・大阪・江戸の商人の盛衰を描いたもの。親が苦心修練して築いた身代も、子の心柄から高擧することもあり、又親一貫の田舎者も努力次第では一代で大富を積み得る。すべて町

人の富は心掛一つであるといふことを表はしたものである。都大宮通りの米屋の成金が、親父は死んで息子の代となり、町内の寄合に白人を買つたのが元で、好色生活に身代を失ふ話(二巻三話)、骨牌の輪かきの仁助といふ者貧しく暮らしてゐたが、人の氣付かぬ商賣をして富を築き、そのとなりの銀持、持丸長三郎は遊樂に耽つて零落したといふ話(二巻三話の如く、町人の盛衰物語である。『史的地位』本書は八文字屋の町人物の一つである。「日本水代藏」(世間御草用)(各別題)以来町人の金の生活を題材とした浮世草子は種々あるが、其種の町人物としては、本書と共に『渡世身持談』(各別題)(各別題)の如きを擧げることが出来る。(『吉田』)

商人職人懐日記 小説「刊行」水谷不例氏。『八文字屋研究』水谷不例氏(日本水代藏)浮世草子 五巻「作者」未詳「名稱」商人や職人が商賣の心得といふ意「刊行」正徳三年正月 大阪毛利田庄太郎、水谷平四郎開板。『提要』(巻の一)江戸で儲け事を採る某、或る屋敷の婚儀を聞きつけ、進物の生類を配り、橋州の生舟を語らうて品川まで廻し、これを諸方の屋敷へ賣り歩いて評判をとり、その機會に出入りとなつて、程なく分限者になつた。○京の或る舞屋、舞所の急用間に合はせ、裏美に御直筆の看板を頼いたが、その後も諸事に精出して、地獄丸といふ丸薬を老人無能の人々に手間賣を出して作らせたところ、その手間が絶えぬので、人々賣りよき薬と評判し、この評判が評判を生んで、三ヶ津に店を出して榮えた。○榮屋といふ商人手ぶらで北濱の相場に立ち入つたが、もつと相場は、手許に現物なく、大抵の金持でも兩替屋の金を使ひ、

折式銀を渡すが常で、金なしの榮屋に好からず打替される。取引の不調から爪弾きされ、はては窮乏する。ふとした拍子で儲けはじめ、以後まもなく大商人になり清まして北濱に重きをなした。(巻の二)東大寺の普請に賣物花屋を預かつた家があると聞いて、或る人が見物に行くに、丁寧にもてなされた後、賣物は預かつてゐないが、その形に似せた銀を買つてゐるのを誤つて喰されたのであらうといふ。そこで、その奈良油煙といふ銀を買つて来たが、案外に良い銀なので、これが次第に名高く諸方へ弘まつた。○京の寺々で互に宗徒を集めようとする苦心中に、何の宗旨でも信心堅固なればよいと説いて人々の信頼を集めた一人の和尚、天照通であるといつて宗徒を試みたが、その時恥をかかされた或る女中の亭主が怒つて和尚を招き、その詐欺を指摘すると和尚一貫もなくなり、やがてこれが聞えて寺を逃げた。○兎角金山と稱通ひで産を失ふのが人の常、平野に住む商人白人に伴はれて腕に遊んだが解になり、三年間に家産を破り、一文無しになつて江戸に下つたが、思はずに尾花澤へ来た。此處で割み煙草の賣れるの目をつけ、初めは僅かづつ賣り歩いて思はぬ儲けをし、徐々に商ひを大きくするうち愈々繁昌し、十年も経たぬ間に、近國に名高い分限者になつた。(巻の三)佛語は、元前句附のみ許されてゐたが、笠附といふのが始まつてから下駄の敷となり、その勝負に金を

買けるに至つてこの道は廢れた。人々は佳句を買つて附けるため、寺の賣買が行はれ、遠方の者は、飛脚を立ててするまでになつたが、高點を取つて勝たうといふのが負ける因で、田地家屋敷まで入買の憂目を見て、結局點者を肥すのが落ちである。○高麗橋筋の或る兩替屋、小判の端を削り取つて儲けた事が

『刊行』明治四十年五月、早稲田文學(東京)出版。大正四年十月、楠竹書院。後、代表的名作選集『新編』所収。『提要』佛語の崩れ、富士の裾野に於ける四季の景色から筆を起し、その一案村に草木と共に育つて行く少年奈良原の身の上及び、奈良原は小學生の折に東京見物に出かけ、書で友達宮川、難題などを通して致へられた。都々かな文明を如實に眺めて、それに憤が後、友達が甲府中學に入學したので、彼の欲望は益々募り、終に家出を計つたが、暗夜湖水に落ち、救はれて家に連れ戻された。これが機縁となり、父から許されて甲府中學に入り、少年の欲望は満たされた。だが、宮川と彼の交情は、學力などのことから溝が出来、宮川は過度な勉強や、複雑な家庭の事情から願を断つた。やがて奈良原少年は宮川との友情を恢復したが、宮川は家の事情で東京に移り住むことになつた。奈良原もつづいて東京に行き、宮川を訪うて友情を温めようと思つたが、彼は王子精神病院の一室に横はつてゐた。あゝ懐かしいのは少年時代、彼は背燈共燈夜月、踏花同惜少年春の感を深くせずにはゐられなかつた。

『批評』この作は、ただに星湖の代表作であるばかりでなく、日本に於ける自然主義文學の典型的作品でもある。多少の味味的な、ロマンティックな、若しくは感傷的な作者の主観が滲入してゐないではないが、文明の未だ及ばない農村に生れた自然兒の如き少年と、半ば文明の空氣を環境的に受けてゐた少年とが、次第に生長すると共に、都會の空氣に感化されて行く状態が、虚心坦懐に傍觀的態度で、

道頓堀の酒屋が或る時僧と連れ立つて高津の宮の邊を通ると、或る家の軒に、「愛敬の呪傳授。出家侍百姓町人はいづれにても調法なる義にて御座候。代銀貳兩」といふ看板が、入りと老婆が奥の小座敷に案内して若い女が酒を進め、やがて僧も別室に閉じられて静かになつたので、スハ呪の傳授と待つてゐると、少しお休みなされと女に笑はれて、この家の正體に氣がついた。(巻の四)或る道頓堀寺詣りして現世の夢なさと、後世の大事を説かれ、その後は飾つたことは一切なし決心から、家業の品の隠せる節を盡々に廻し、精へる所も手を下さずに細工したので、買ふ人なく、遂に家産を破つて橋の下に流るやうなことになつた。○傾城町の橋際にある傾城屋の女房、氣がきいてゐたので、店は繁昌したが、出入の小間物屋との仲を疑はれ、亭主に首領を納めることになり、男が才覚出来ないのでも心申しようといふを抑へて、女は身を賣つて金を作つたので、案に相違した亭主は、處にゐられなくなり、女はこの評判で益々榮えた。○堺の古い魚問屋大江屋の當主は、借藏債家を有つ大身代、學問好きの堅人であつたが、或る時時を借りて酒を密造した者に誘はれて色町に行つてから、酒色の味を嘗み、敵組が大阪へ移ると、その後を追つて新町で遊びぬき、散財の結果は妻子に去られ行方知れずなつた。(巻の五)玉造の裏長屋に母子住ひの針賣りの女が、大金の入つた財布を拾ひ、主がないので、御香所から下げ渡された。この財布を御香打ちから預つて落した染物屋の息子は、これを聞いて取返しに御香所に出たが、その中に博奕の釣子があつたの言はなかつたので、財布は遂に戻らなかつた。○東

福寺に近い古道具屋が、京から古い銀を買つて来て店に出して置く、江戸戻りの家老が通りがかりに、これを買ふと言つたまゝ急ぎ去つたので、亭主は仲間店に並ぶ、遠州から上方見物に来た者と賣つてしまふ、その夕方、今朝見た銀をと言つて来た立派な武士があつた。○どんな折にも金儲けはあるもの。或る男酒の密造を買ひ集めて少し儲け、米が高くて算盤がとれないうち、他で止めてゐる酒を造る伊奈寺屋へ賣り付け、大に儲けた。『解説』原本は漢譯版で、一冊十寸、一頁又は二頁に互る挿畫が、一冊に數葉あるが、重工の名を許かさない。西鶴の『日本水代藏』、『世間御草用』(西鶴續留)(各別題)等を既に古しとして、當時の經濟相を京・大阪・江戸・奈良・堺等を中心として寫し、一巻づつ三つ獨立した十五の挿畫を以て巧に世態の描寫を穿ち、生業の心得を説いたもので、挿畫は成功談と失敗談に分れるが、前者の方が多い。浮世草子にふさはしい洒落れた筆致で、能く世事に通じたなかの連文である。(『笠野』)

少年文壇 雜誌「刊行」明治二十一年十一月創刊。少年團「解説」創刊號は菊判で二十八頁、附録四頁の小冊子であつた。文學を中心に、青少年向きの學術に関する記事も少くなかつた。山縣三郎の編輯にかゝり、約十年間、刊行を継続した。執筆者としては、當時の文壇知名の士が多し、見るべき作品に乏しくなかつた。落合直文の「孝女白菊の歌」(別題)も、亦本誌に掲載されて、名高くなつたものだ。當時の投資者の中には、井筒江・藤井乙男・小島水・眞下飛泉等の名が見える。(『藝文』)

少年文壇 雜誌「解説」年少子女を對照とする文學の謂で、成人を對照とする一類の文學と區別するために、少年文學又は兒童文學等の成語を用ひる。文藝形態としては小説・童話・童話劇・童話等がある(『藝文』)『少年文壇』編輯者等。『内容』明治二十四年(二十五年)博文館「刊行」第一編「黄金丸」(童話)第二編「二人探訪」(足利紅蓮)第三編「今辨慶」(江見水藤)第四編「維新三傑」(川崎雲山)第五編「雨の日ぐらし」(山田美穂)第六編「寶の山」(川上庸出)第七編「二宮尊徳」(幸田露伴)第八編「姉と弟」(藤田の舟)第九編「當世少年團」(大江小波)第十編「親の恩」(宮崎三郎)第十一編「紀文大進」(村井笠野)第十二編「大石良雄」(原田一徹)第十三編「中休暇」(藤野小波)第十四編「近江聖人」(村井笠野)第十五編「河村瑞軒」(太田山)第十六編「甲子侍」(南郷三郎)第十七編「太田秀吉」(高橋太吉)第十八編「徳川家康」(矢野龍溪)第十九編「快活兒」(尾崎直憲)第二十編「みちの長者」(幸田露伴)第二十一編「新太郎少將」(高橋太吉)第二十二編「朝山陽」(三宅吉野)第二十三編「上杉鷹山」(義孝三郎)第二十四編「菅原相」(藤田の舟)第二十五編「日蓮上人」(幸田露伴)第二十六編「五少年」

〔中村花柳〕第二十七編「二代忠孝」(愛田何天子)...



〔別號〕探菊山人山々亭有人、藤月、弄世亭、東隱園(生履)...

から、其業大に行はる云々と「辨異奇人傳」に見えてゐる...

波は絶えず例會に列席し、且つその後、社中の會は彼の亭に於て最も頻りに開かれてゐる...

五編(三年刊)、「唐詩選和解都々逸」...

名院道真句千句、五十九歳の時の「光秀歌行愛宕百韻」...

〔別號〕探菊山人山々亭有人、藤月、弄世亭、東隱園(生履)...

と、(四)正直と海利とを言ふべきことと四項を説いてゐる。

した。寛文四年、五十歳で没した。(支心)支俣の長子で、隠庵と號し、元禄九年に没した。

波は絶えず例會に列席し、且つその後、社中の會は彼の亭に於て最も頻りに開かれてゐる。

は、自ら蕪村の好尚と共鳴する所が多かつたので、句の格調取材、共に師に最も近いやうになつたのであらう。

と、(四)正直と海利とを言ふべきことと四項を説いてゐる。

る。廣く普及したことが裏書される。この外「萬國新書往來」と「和洋商賈往來」萬國通商往來「商法往來」商社往來」などがある。

【参考】實業科往來物についての研究石川龍一往來物分類目録村金太郎（百川選）

宵柏（宵）連歌師（號）夢庵・牡丹花弄花軒（歿年）大永七年（二七）享年八十五（後鳥羽天皇御）【附註】「梅香百集傳」に族中あり、「連歌家譜」には元三宮中院一流とある。三條西實隆に就き「伊勢物語」及び「源氏物語」の講義を聴き、前者に伊勢物語宵柏抄、後者に「源氏物語」の著がある。宗祇に古今傳授を受け、これを宗良の側近宗二に傳へたが、これを宗良傳授といふ（歌道傳授）。初めは和泉の堺に住し、中年には攝津の池田に住んだ。平生年に騎つて往來し、牛角に金箔を塗つてゐたので、行人が怪しみ笑つたといふ。宗祇は山吹を愛し、宵柏は牡丹を好んだ。風尚の相異を見るべきである。連歌に於ては宗長別稱と名を異にした。【著作】宗祇と宗長と共に「水無瀬三吟百韻」湯山三吟百韻」を賦し、その他文明の末頃より屢々宮中民間の會にも加はつてゐるが、著作はさまで多くない。和歌國文方面のものでは、前述の二抄のほか、「後撰集」以来の九代集の選擇である「九代抄」があり、外に「葉抄」「六家抄」「田原抄」のあることが傳へられてゐる。歌集には「春抄」がある。連歌の方面に於ては、「漢和篇」に加筆したりして、新界に重きをなしてゐるが、宵柏の口傳を宗祇が聞き取つた「宵柏口傳」がある位で、その他に傳へるものがない。彼の著と記してある「水無瀬抄」といふ連歌書は、眞に彼の作か否か疑はしい。或は他になほ著書があつたのが長火

に失はれて傳はるに至らなかつたのかも知れぬ。彼の連歌の發句集に、その歌集と同名の「春抄」がある。

尚白（尚）俳人（姓名）江左氏。本姓關川氏。幼名虎助、後大言、後尚白。字は三益。【附註】醫に秀實、俳に木齋、後老翁、字は三益。慶安三年に生れ、享保七年（三八）七月十九日歿。享年七十三。【附註】初め貞享二年、後、芭蕉門（弟子）行。【附註】江州大津の人。祖父存存の代より醫を業とし、尚白もこれを繼ぎ、名醫の聞えあり、富山侯に召されたが辭し、江戸に招かれて津の太守の病を治したことがあり、晩年丹後の京極家の扶助を得ながらその國に下らざることを許された位である。貞享二年京六條の聚會で芭蕉に關して門に入り、同四年に「孤松集」を編してゐる程で、堅田の千那と共に近江藩門の先覺である。酒堂・許六・正秀・州の如きも、尚白の門をくぐつて芭蕉に關したのである。芭蕉は折ごとく尚白の家を訪ひ、尚白も義仲寺や幻住庵や無名庵等に芭蕉を訪ね、或は共に浪浪に遊んだりしてゐる（芭蕉の日記）の句を尚白とすは誤りである。晩年、左の明に病が出来たので、老翁と改め、夕顔のまがりふすべや老の秋、外一句があつたが、その翌年、遂にこれが因で歿したのである。なほ彼は茶・曲・蘭・花・古器・書畫・園藝に互に多岐なる多趣味であつた。【作風】俳諧詩を持つ許六、尚白を評して「かれが器用にして重き所に、一面面白く切たる所あり」（俳諧問答）といひ、輕みの流行に追附き得ないことを云つてゐる。然るに支考は、「故翁の血脈をさぐり得て、虚實に變化の眼を見せしより、世情の流行に心をまどはさず」（後鳥羽抄）と、

善い意味で、流行を越はれないことを認めてゐる。門人の率陀は流行のをとし穴に入らず、不易の大人也（老翁子行）と、これは門人らしい言ひ方で結局は同様の點を認めてゐる。三人の見る所が一致してゐるやうに、尚白には超然としたやうな所があつて、而も穩健で精神な一家の風格がある。許六の明切つたと云ふ所が眉間の精妙な所に當るものと見てよからう。職士は「松尾やにいさんした時は風俗（句）をまよよし（芭蕉）といふが、兎に角晩年の作は見劣りがするやうである。【著作】「孤松四冊（貞享四年刊）夏衣一冊（元禄二年刊）忘れ梅二冊（元禄五年成）安永六年刊【参考】「俳諧問答集」許六〇花見軍馬島士〇老翁子行狀（關川）〇蕉門諸生全傳（關川）〇講家大系（關川）〇俳林小傳（中村久久）〇芭蕉庵春秋（中島重）〇俳諧人物傳（三浦若海）〇元禄十家俳句集（大塚甲山）〇蕉門名家句集（三浦若海）〇蕉門の故老（江左尚白）〇芭蕉木刀（大正二〇）〇江左尚白の一家（西村）

宵柏口傳（宵）連歌書一巻（編者）各宗（諸本）帝國圖書館本がある。【解説】連歌の讀法・故實・切字・雜字・十八切字等に就き、牡丹花宵柏の口傳を宗祇が筆録したのである。（百川選）

證判（しよら）古文書【解説】軍勢の催促に應じて着した時にしよら着判状や、軍忠を申し立てた軍狀等の或は編纂に、上官が「承了」とか「見解」などと書いて花押を加へたものをいふ。或は承了判とも「見狀」とも稱へる。これはまた花押ばかりのこともある。（伊本）

蕉尾琴（蕉）俳諧集三冊（著者）實井其角【名義】其角が火災に逢つて焼いた日記を再び思ひ出して書き集めたものが本書であるから、蕉尾の故事に倣つてかきつけたのである。其角の序に、「蕉尾が蕉より焼けたる例をとり出して、あらたに一張の琴をつくりしに、蕉たる所をのづから蕉尾の聲に成りぬるを、名けて蕉尾琴と傳へ待るおもむきを、彼名琴にたははは、人もあわれと清想にたへてかへつて稱羨するべくや」とある。【成立】元禄十四年【刊行】元禄十五年。再版寛保三年【諸本】其角全集（藤澤晋風編）其角全集（俳諧文庫）所収【内容】自序によると、貞享元年二月中旬の上京以來、其角は日記をつけて置いた。そして元禄十一年冬に至るまで大切に保存した。同年十二月十日の朝、火事に逢つて焼けて了つた。その後著作を思ひ出して忘れぬ形見として書き集めたものが本書である。午波の跋によると、これは妻の勸めによつたものであるといふ。風の巻には黄鳥之鳴・梅花之落・花柳之繁・紅葉の落・二休會・なまけ・花柳之繁・紅葉の落・葉字ノ吟・庚申吟等發句二百、歌仙七巻、文章、頌の巻には早稲の記及びその引古風體句合、詩仙の小序及び歌仙發句二百二十餘、五十韻一巻、歌仙一巻、午波の跋を収めてゐる。元禄十四年其角の序・文章の跋（題がある）、「蕉尾」著作を思ひ出して書き集めたものとは云ふが、書き集めた頃の其角の好み傾向によつて取捨したもの認められるので、大體から云つて書き集めた頃の其角の傾向の窺はれるものである。従つて又早稲時代の作は少く、編輯時に近い作が多いと思はれる。作者も、芭蕉なども入つてゐるが、其角の

門人乃至其角を慕ふ人々である。赤穂義士の子葉・竹平・進歩等の作の見えるのも同様の關係である。特に注意すべきものは、名月之篇に小歌・淨瑠璃の記事や、一休作の小歌と稱するものがあつて、その情調になつてゐることや、葉字ノ吟が「すてゝある」といふ小唄の詞を使った俳句であることや、早稲の記が今川遊びの解任情調のものであることや、古風（芭蕉）體句合は、所謂句合ではなく、蕉の體の俳句を初編以下各種の歌風の題に分つて集めた百句以上の大集め物であることなど、これ等によつても本集が如何なる傾向のものであるかが想像されよう。即ち本集は著しく人事的になり都會趣味に傾き、所謂酒香風（江戸風）の濃厚なもので、芭蕉の幽玄閑寂な句境には遙かに遠ざかつたものである。併し又この間に其角の才氣も十分露はれるが、特に最後の午波と兩吟の詩仙俳諧などは、この點から注意される。要するに本集は、其角の本領であるべき酒香風の道程を極める上に見出し難いものである。（百川選）

小品文（せうぶぶん）小説の如く纏つた結構があつて首尾一貫したものと異なり、日常の些事を採つて、氣の向くまゝに書いた短い文章のことである。それはプロットとか、クライマックスといふものを、必ずしも必要としないのである。叙事文又は抒情文などよりも複雑で、短篇小説よりも一步手前なものに相當する。しかし叙事文又は抒情文などに取つて代つたより新しい名前だともいへる。【解説】誰が最初に用ひ始めたのか明かでないが、明治三十九年創刊の雑誌「文章世界」の投稿欄に、その後にもなく小品文なるものが出来、田山花袋・前田木城等が小品文

に関する語を試みてゐる。又「小品文作法」なる著述も西村清山の手につけて書かれた。同四十年前後から大正の初にかけて流行した文學の一種と見て差支へるまい。同四十二年頃、眞山青果の「夢」、水野葉舟の「響」などが出版されて、文學青年及び一般の讀者層に歡迎された。なほ大正元年には吉江風塵の「青空」が出て、これ亦多くの讀者を得た。更に田山花袋の「橋」、正宗白鳥の「青蛙」、前田木城の「途上」、吉江風塵の「砂丘」、窪田空穂の「旅人」、島村抱月等の現代小品叢書が刊行されたのは、大正二年頃のことである。内容形式の點から見れば、徳富蘇峰の「自然と人生」の如き、明かに小品文であるが、それが刊行された當時に、たゞさういふ名稱が行はれてゐなかつたので、さう呼ばれずにもたといふだけのことである。同五・六年頃から現在にかけては、小品文なる名稱は明らかになつて、隨筆若しくは感想なる名前が用ひられて来た。吉田敏二郎の如きは今日に於ける小品文の唯一人者である。（百川選）

蕉風（蕉）俳諧【名義】芭蕉の俳風といふ義で、それを芭蕉の流風にも用ひる。【名義】蕉門の徒は自派の俳風を蕉風と稱へてゐた。併しこの語は實は必ずしも蕉門に限つた稱呼ではない。自門の俳風を蕉風と稱へた事は、既に蕉門以前から見えてゐて、何人も一風を樹立せんと欲する者は、自己の風を天下の正風と考へないものは無いのであるから、蕉門の獨占的用語とは限らない。蕉風といふ語は、古くは一般的には用ひられなかつたが、麥水の「蕉門一夜口授（別題）」には可なり多

く用ひられて居り、その後の俳書には一向珍らしくない程かなり用ひられてゐる。蕉風無格（別題）といふ書がある位である。【性質】蕉風の精神は蕉風の凡ての文學の基礎概念であつて、蕉門以前の俳諧に照らして、特殊の色調を持つものである。去來の説「俳諧問答」によれば、蕉とは閑寂な句をいふのではない、寂は句の色である。例へば老人が甲冑を待る戰場に働くとか、或は鐘を飾つて御堂に侍るとかして、老の姿が見えるやうに、賑やかな句にも、靜かな句にもあるのであると云ふ。即ち寂は句の情調である。賑や取材が華やかであつても、作者の觀照氣分に靜寂な脱落した點があれば、それが寂になるのである。かかる寂の體得は寂しい心を説つたとて得るものではなく、人生の種々な體驗から自然と備つた人格の色でなければならぬ。茶、細みも去來の説によれば、茶はあはれなる句ではない、細みは細りなき句ではない、茶は句の姿にある、細みは句の心にあると云つてゐるが、即ち句の表現修辭の仕方が寂によつて整うてゐる状態を茶と云ひ、詩思體に入らざるが如く句意が寂の幽玄妙な境地に入つてゐる状態を細みと云ふのであるらしい。又俳諧の法式に就いても蕉風では必ずしも古式に従はなかつた。例へば、發句の切字（別題）に就いても所定の切字の有無に關しないで句作したる句も古式では幾度も賦物（別題）を取らず、戀の句も古式では幾度も戀の句を制定して、それを句に詠み入れたものを戀の句と考へてゐたが、蕉風では戀の言葉の有無に關せず、意味が戀であればそれを戀の句とし、且つ又戀を一句で捨てる事などの相異があつたのである。

指合・去來（別題）の制も一層寛大に自由になつて、言葉の變化よりも思想の變化を重く見るやうになつた。句・移といふ附句の體は明かに古式の附方を離れたもので、蕉風體句に於ける特筆すべき進歩である。芭蕉も附句は三變である。昔は附句、中頃は心附、今はうつり、ひいき、句、位を以て附けるのであると云つてゐる（俳諧問答）。去來の説（俳諧問答）その他によれば、うつりとは前句の餘韻が後句へ移動する事、ひいきとは風韻の呼應する事であるらしい。要するにこの三種の附方は附録の調子で、見方によつて區別したものと思はれる。又芭蕉は文章に於ても新體論を出し、幽玄閑寂な筆致を示してゐる。この點から云ふと、支考・許六などの文致は多少異なるが、兎に角芭蕉一門に於て所謂俳文の格が定まつたのである。

【沿革】支考・許六・去來等の間に、蕉風の十一變論・七變論・五變論等があつたけれど、結局七變論が一般に流布して了つた。芭蕉は寛文に於て古風（別題）を學び、延寶に於て談林（別題）に轉じ、貞享・元禄に於て蕉風を完成したのである。七變論は蕉風の變化を簡便に示す點に於て價値があるけれど、互細に云へば芭蕉一代の俳風は必ずしも七變ではない。併し蕉風の確立は貞享の「冬の日」（別題）以後と見べきで、その後「猿蓑」（別題）と變化して來た事は動かすべからざる事實であるから、大體觀から云へば蕉風は三變と云つてよい。芭蕉以後蕉門の高弟は、或る人々を除いては各自の風を樹立して漸次靜正な蕉風を失つた。享保以後蕉風は隨筆體に墮落して昔日の閑寂味から遠ざかつて行つた。安永天

浄瑠璃正本



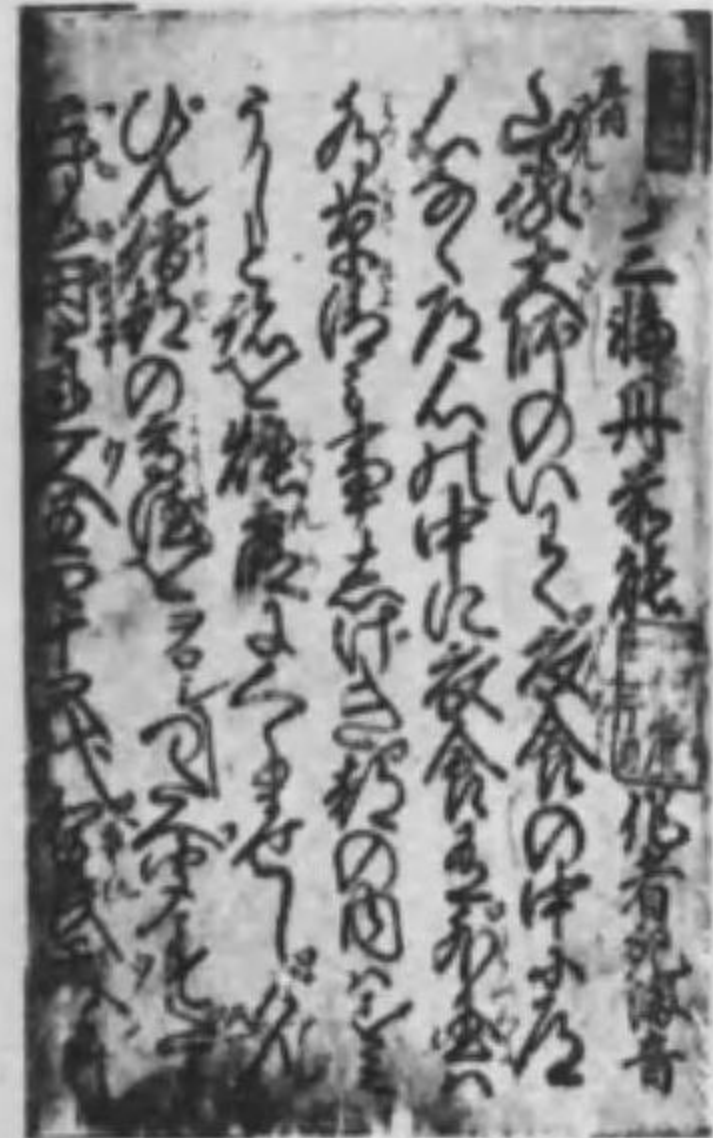
(附典) 語物波呂以



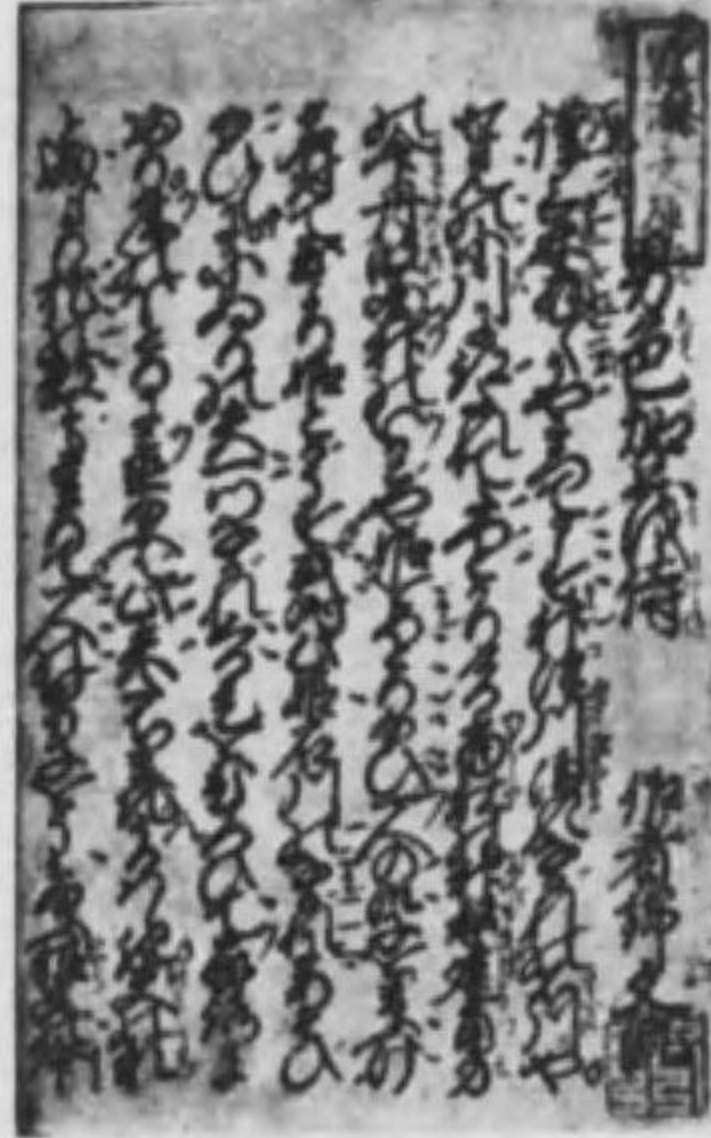
(附典) 宮橋八向北玉生



(附典) 王大本日



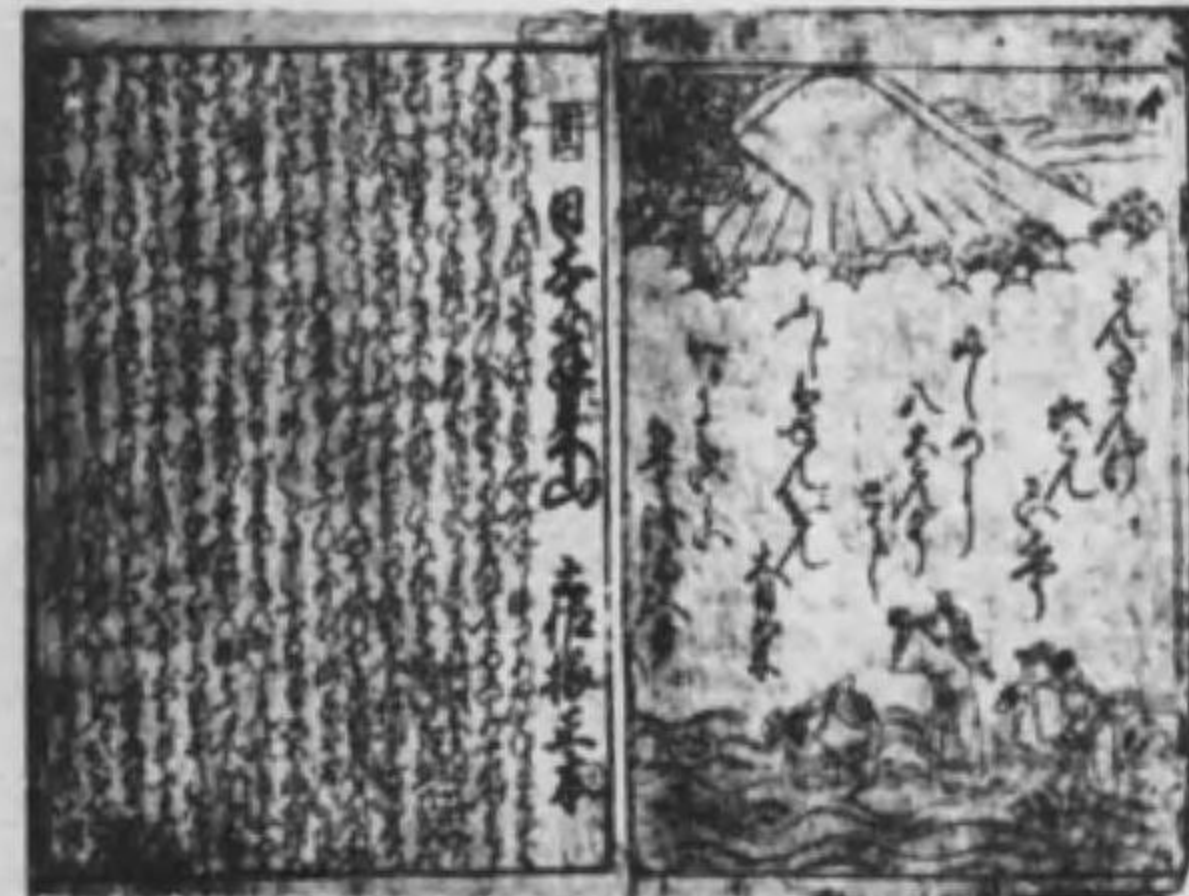
龍前丹輪三



侍茂加色男



記代王本日



山葉蓬本日



(繪師) 區大若り中

しよらふ

明に於ける蕉風の復活は、當時の佛壇に大きな...

の連句に即したものと云へ、白雉の「蕉葉」...

後、訂正補記他日の再刊に備へたものを発見...

なり進んでゐるので、本書は本書の刊行時期...

が許六及び彦根派の考案に役立つ點に取柄がある。

【著者】藤原久安 【刊行】慶應元年か。【由】久安は本書の前に琴瑟合松花の間に對して答へた「蕉風無格辨」一冊（慶應元年序）を著作してゐる。本書はこれを更に擴充補した著作である。【内容】蕉風俳諧の無格なる義を辨じた書で、櫻かれ野の巻、蕉風無格の巻、月（蕉風無格の巻、白紙連の巻）、花（蕉風無格の巻、月日記の巻）に分つてゐる。雪の情野の巻には其内の「枯花」に於ける蕉風の義に病んでの句、又「蕉風無格」に於ける俳諧歌示の同なる夏風冬扇の語、又「蕉風無格」に於ける「前句の心を知りてねばり」を放ち云々一の語句等を擧げて、久安自らの見解を加へ、蕉風無格の巻には、「寂侯（留連）に於ける「梅が香に」の巻、空豆の花の巻「散髪（留連）に於ける「市中は」の巻、長持桶の巻に就いて、指合・去嫌・月花の定座等を吟味してゐる。月の蕉風論の巻、同拾遺の巻には、やはり古人の言説を擧げて蕉風を論じてゐる。花の蕉風論の巻は、去嫌などから蕉風の無格を論じ、同日記の巻は俳諧・俳諧を記して無格の所以を辨じてゐる。

【價值】蕉風の俳諧の指合・去嫌等に就いて寛大であつたことは、東道の「蕉門外傳（留連）や、梅室の「梅林茶談」に既に論ぜられてゐるが、纏まつたものでは本書の如きを見ない。江戸末期になると、法則論がやましく言はれて来たので、これ等に對する頂門の一針とも考へられる。 【註】正札附撰元草撰遺 卷之三「草撰遺」を見よ。 藤原分「いづみ水鏡」を見よ。

小文學 明治二十二年十一月創刊。二十三年四月の第九號で廢刊

【解説】福友社一派の傳來的な體裁であつたが、不知庵主人（無名）宮城島藤子などの名も交つてゐた。本誌によつて紹介された主なものは、紅葉の「關東五部」、柳浪の「寒相如」、乙羽の「福因」等。翌月、藤村・島家・水陸・九華・寒月等の創作、批評、雜文等も多く載せられた。一部凡そ十六頁、一冊二錢五厘であつた。

【正文】浄瑠璃【名稱】原本の轉化かと思はれる。【意義】(一)狭義には、太夫直の正本を意味して、筋附や假名遣に至るまで、太夫使用の原本の儘である場合に、その版を呼ぶのであつて、多くは、巻末に翻版と別なるべき所以を記述してゐる。(二)廣義には、單に技本に對して、九本、即ち省略的な完全の義に用ひられる。この場合浄瑠璃正本などといふ語が生じてゐる。(三)更に廣く應用されて、全然別の流行歌や歌謡伎役者の楽詞書し等に對しても、これを正本と呼ぶ場合がある。【種類】普通に用ひられる主な分類に、次の數種がある。(一)行數丁數による分類。一般には行數の方を重くするらしく、何行本等と稱へる。行數は同時に大字小字の別を生む。早く浄瑠璃本が、讀み物、或は多考本であつた時代は、小字で行數も多く、十行十八行に及んだが、讀み本が流行されるやうになつて、大字となり、行數も八行から七行となつた。七行本の最初は、正徳元年、吉野郡女權であるといふ。細字本は、風本とも呼ぶ。寛文・延寶の頃から細字本に筋附の試みもあつたが、大字八行に筋附の生じたのは、宇治加賀屋正本(寶曆七年刊)の「年若干

人切」に始まるといはれるが、同じく加賀屋正本「本朝中古花鳥集」の發見によつて、更に問題が提出された。(二)排飾の有無による分類。右の二類とも見られるが、主として古浄瑠璃時代の正本は、讀む目的であつた關係から、排飾を含むものが流行した。大體細字であるから、現今では輸入細字本とか、輸入浄瑠璃本とかの語が使はれてゐる。これ等は享保初年の頃で跡を絶つた。但し輸入八行本も過渡期的の産物としてないではなかつた。(三)用紙の大きさによる分類。極く通俗的な稱呼で、大體に於て、大本(重讀用)・中本(半紙用)・小本(重讀用)等と別を立てて稱へる場合がある。これ等は時代的に、また地方的に必ずしも統一した形式ではないが、中本が浄瑠

る如きである。但し法規上の問題ではないから、かゝる態度が常に嚴重に實行されてゐたとも考へられぬ。(五)折敷太夫による分類。正本の發生上、當然あるべき分類であるが、古浄瑠璃時代は、詞章の融通が比較的自由にあつた爲め、かゝる所屬太夫の名を以て、正本を判別する態度が寧ろ必要である。(浄瑠璃

【參考】宇治加賀屋の正本研究(藤村和風) 藤村和風 ○輸入八行本の發見(石田松太郎) 藤村和風

【正文】浄瑠璃【名稱】原本の轉化かと思はれる。【意義】(一)狭義には、太夫直の正本を意味して、筋附や假名遣に至るまで、太夫使用の原本の儘である場合に、その版を呼ぶのであつて、多くは、巻末に翻版と別なるべき所以を記述してゐる。(二)廣義には、單に技本に對して、九本、即ち省略的な完全の義に用ひられる。この場合浄瑠璃正本などといふ語が生じてゐる。(三)更に廣く應用されて、全然別の流行歌や歌謡伎役者の楽詞書し等に對しても、これを正本と呼ぶ場合がある。【種類】普通に用ひられる主な分類に、次の數種がある。(一)行數丁數による分類。一般には行數の方を重くするらしく、何行本等と稱へる。行數は同時に大字小字の別を生む。早く浄瑠璃本が、讀み物、或は多考本であつた時代は、小字で行數も多く、十行十八行に及んだが、讀み本が流行されるやうになつて、大字となり、行數も八行から七行となつた。七行本の最初は、正徳元年、吉野郡女權であるといふ。細字本は、風本とも呼ぶ。寛文・延寶の頃から細字本に筋附の試みもあつたが、大字八行に筋附の生じたのは、宇治加賀屋正本(寶曆七年刊)の「年若干

【正文】浄瑠璃【名稱】原本の轉化かと思はれる。【意義】(一)狭義には、太夫直の正本を意味して、筋附や假名遣に至るまで、太夫使用の原本の儘である場合に、その版を呼ぶのであつて、多くは、巻末に翻版と別なるべき所以を記述してゐる。(二)廣義には、單に技本に對して、九本、即ち省略的な完全の義に用ひられる。この場合浄瑠璃正本などといふ語が生じてゐる。(三)更に廣く應用されて、全然別の流行歌や歌謡伎役者の楽詞書し等に對しても、これを正本と呼ぶ場合がある。【種類】普通に用ひられる主な分類に、次の數種がある。(一)行數丁數による分類。一般には行數の方を重くするらしく、何行本等と稱へる。行數は同時に大字小字の別を生む。早く浄瑠璃本が、讀み物、或は多考本であつた時代は、小字で行數も多く、十行十八行に及んだが、讀み本が流行されるやうになつて、大字となり、行數も八行から七行となつた。七行本の最初は、正徳元年、吉野郡女權であるといふ。細字本は、風本とも呼ぶ。寛文・延寶の頃から細字本に筋附の試みもあつたが、大字八行に筋附の生じたのは、宇治加賀屋正本(寶曆七年刊)の「年若干



【正文】浄瑠璃【名稱】原本の轉化かと思はれる。【意義】(一)狭義には、太夫直の正本を意味して、筋附や假名遣に至るまで、太夫使用の原本の儘である場合に、その版を呼ぶのであつて、多くは、巻末に翻版と別なるべき所以を記述してゐる。(二)廣義には、單に技本に對して、九本、即ち省略的な完全の義に用ひられる。この場合浄瑠璃正本などといふ語が生じてゐる。(三)更に廣く應用されて、全然別の流行歌や歌謡伎役者の楽詞書し等に對しても、これを正本と呼ぶ場合がある。【種類】普通に用ひられる主な分類に、次の數種がある。(一)行數丁數による分類。一般には行數の方を重くするらしく、何行本等と稱へる。行數は同時に大字小字の別を生む。早く浄瑠璃本が、讀み物、或は多考本であつた時代は、小字で行數も多く、十行十八行に及んだが、讀み本が流行されるやうになつて、大字となり、行數も八行から七行となつた。七行本の最初は、正徳元年、吉野郡女權であるといふ。細字本は、風本とも呼ぶ。寛文・延寶の頃から細字本に筋附の試みもあつたが、大字八行に筋附の生じたのは、宇治加賀屋正本(寶曆七年刊)の「年若干

意に據り、また當時の芝居、或は有名な俳優に取材してゐる。

【初編】お仲清七物語。大友判官妻の息小太郎は幼少で行方不明となり、許嫁小結木の息女も幼少で、行方が知られず、



【二編】お梅と別れの節。お梅が、清七は調子の拙者を佐賀右衛門から頼まれる。お梅は離

判兵衛物語。澤瀬小太郎は十二の時、殿様

の刃を刺つて父から勘當されたが、賊に監

【三編】(額見世物語)額信は近江高島に産る見世物語の勳命を

【四編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

菊と幸介とにそれ、手切の文を書かせる。

【五編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【六編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【七編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

に短刀を隠し出したが、實は盗人は綱五郎の

父強助と分り、綱五郎面目なしと暗害を得

【八編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【九編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

種彦の好古癖が誇張し、又落福の専門家が、

【十編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【十一編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【十二編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【十三編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【十四編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【十五編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【十六編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【十七編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【十八編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【十九編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

【二十編】(お菊の御縁)お菊の父は昔川屋の町人

けた天平時代に、天皇が生を享け給うた御不運である。御製の罪でなく、時代の罪と言ふべきであらう。

【條目】古文書【解説】簡牘書きになつてゐる法令の文書。法令には肯定的のもの、否定的のものがあるが、大體に於て、條目は前者に屬し、後者は多く禁制(きんせい)と稱へてゐる。尤も兩者共に双方の意味の簡牘を混じたる場合がないではない。何れも様式は下駄(くだ)型で、簡牘書き(一ツ書き式)であるが、一簡條のみの時は普通一ツ書きとはしない。

【條目】平清門を主眼とした承平天慶年中に於ける關原叛亂の顛末を記したもので、我が國に於ける戦記物の鼻祖である。文體はヤ、和奥を帯びた漢文から成り、冒頭の文句は、少し開失してゐる(抄本は冒頭の文句を存してゐるが、これによると、發端には將門の世系・尊屬や、叔父良兼と不和になつた次第を叙してゐる)。本書の記事は、古記録に見える合戦記事の體裁を踏襲し、幾分それを敷衍したやうなものであるけれども、叙述の仕方から故事出典を引用するとか、對照法・比喩法などによつて行文を修飾する等の過程も見えず、すでに戦記物としての特色を表はしてゐる。

【條目】「源平盛衰記」の記事(卷二)を記したものに用ひられた。佛論書 大正一冊【著者】藤原朝隆【刊行】安永二癸巳九月大阪河内屋兵衛刊【諸本】半紙本の再版本があり、中興佛語文集、佛語大系所収本がある。【解説】加賀の夢水が安永二年秋、難波に遊んで藤原の舊蹟などを訪ひ、旅寓で一巻の夢水の主張は、巻頭に掲げた自序式(別項)の「一、式に曰、佛語は何の爲する事ぞや。答曰、俗談平語を正さんが爲也。されども佛語の姿は歌・連歌の次に立つて、心は向上の一路に遊ぶべし」といふのに、ほぼその基とところが示されてゐる。彼は當時支考の美濃風と淡々の一體とが、最も汎く世に行はれてゐるところから、この二者を評して、一は道を俚俗に引き下して、大に在門を説き廣めた功は多いが、遂には一向に俗談卑理損徳の街に落つと雖、一は高情奇語正しく其角の風韻は備はつてゐるが、ただ附句の意が堅強で父子同坐して見るべからざるに至ると駁した。而してこの兩弊は、皆俗談を正すの字を忘れた失だと論じた。この立場から夢水は「遺業」(別項)の作風を最も重んじ、自家元年の頃の、芭蕉が蕉風の一門を起す初めだから、その頃の佛語を採らずしていつれか眞ならんと言ひ、白雉が夢水を貞草蕉門と讃つたのを、「是は予が願の能なり」として却つてこれを甘受してゐる。又蕉門の七部集は後人の集めたものだから、各人の物好によつて第一に定めてよいと論じつつ、自らは「遺業」を先づ第一に置いて、巻中に風韻高致の吟多きを稱してゐる。要するに彼は支考の徒の俗語、淡々が輩の堅強を忌んで、これを正すためには、先づ「遺業」の如きを

高推著古の調に依らねばならないと信じたのである。かくて彼はこの主張の下に、やがて「新遺業」(別項)を撰ぶに至つたのである。その作品は固よりなほ靜正の域に達したとは言へないが、凡重が明からず(別項)の序にも述べてゐる通り、この選集は所謂天明佛語の革新に與つて最も有力なものであつた事は否めない。

【條目】「源平盛衰記」の記事(卷二)を記したものに用ひられた。佛論書 大正一冊【著者】藤原朝隆【刊行】安永二癸巳九月大阪河内屋兵衛刊【諸本】半紙本の再版本があり、中興佛語文集、佛語大系所収本がある。【解説】加賀の夢水が安永二年秋、難波に遊んで藤原の舊蹟などを訪ひ、旅寓で一巻の夢水の主張は、巻頭に掲げた自序式(別項)の「一、式に曰、佛語は何の爲する事ぞや。答曰、俗談平語を正さんが爲也。されども佛語の姿は歌・連歌の次に立つて、心は向上の一路に遊ぶべし」といふのに、ほぼその基とところが示されてゐる。彼は當時支考の美濃風と淡々の一體とが、最も汎く世に行はれてゐるところから、この二者を評して、一は道を俚俗に引き下して、大に在門を説き廣めた功は多いが、遂には一向に俗談卑理損徳の街に落つと雖、一は高情奇語正しく其角の風韻は備はつてゐるが、ただ附句の意が堅強で父子同坐して見るべからざるに至ると駁した。而してこの兩弊は、皆俗談を正すの字を忘れた失だと論じた。この立場から夢水は「遺業」(別項)の作風を最も重んじ、自家元年の頃の、芭蕉が蕉風の一門を起す初めだから、その頃の佛語を採らずしていつれか眞ならんと言ひ、白雉が夢水を貞草蕉門と讃つたのを、「是は予が願の能なり」として却つてこれを甘受してゐる。又蕉門の七部集は後人の集めたものだから、各人の物好によつて第一に定めてよいと論じつつ、自らは「遺業」を先づ第一に置いて、巻中に風韻高致の吟多きを稱してゐる。要するに彼は支考の徒の俗語、淡々が輩の堅強を忌んで、これを正すためには、先づ「遺業」の如きを

自ら新皇と稱し、下地に偽宮を作つて大區以下文武百官を置いた。この事が都に聞えたので、朝廷では大に驚いて朝敵討伐の祈禱を行ひ、また參議兼修理大夫右衛門督藤原忠文を征討大將軍とし、刑部大輔藤原忠實を副將軍として、將門討伐のため東下せしめられた。然るに征討使の到着に先立ち、天慶三年二月、貞盛は下野野領藤原秀郷と共に兵を率ゐて下野の偽宮を焼き、將門を攻めて滅した。

【條目】「源平盛衰記」の記事(卷二)を記したものに用ひられた。佛論書 大正一冊【著者】藤原朝隆【刊行】安永二癸巳九月大阪河内屋兵衛刊【諸本】半紙本の再版本があり、中興佛語文集、佛語大系所収本がある。【解説】加賀の夢水が安永二年秋、難波に遊んで藤原の舊蹟などを訪ひ、旅寓で一巻の夢水の主張は、巻頭に掲げた自序式(別項)の「一、式に曰、佛語は何の爲する事ぞや。答曰、俗談平語を正さんが爲也。されども佛語の姿は歌・連歌の次に立つて、心は向上の一路に遊ぶべし」といふのに、ほぼその基とところが示されてゐる。彼は當時支考の美濃風と淡々の一體とが、最も汎く世に行はれてゐるところから、この二者を評して、一は道を俚俗に引き下して、大に在門を説き廣めた功は多いが、遂には一向に俗談卑理損徳の街に落つと雖、一は高情奇語正しく其角の風韻は備はつてゐるが、ただ附句の意が堅強で父子同坐して見るべからざるに至ると駁した。而してこの兩弊は、皆俗談を正すの字を忘れた失だと論じた。この立場から夢水は「遺業」(別項)の作風を最も重んじ、自家元年の頃の、芭蕉が蕉風の一門を起す初めだから、その頃の佛語を採らずしていつれか眞ならんと言ひ、白雉が夢水を貞草蕉門と讃つたのを、「是は予が願の能なり」として却つてこれを甘受してゐる。又蕉門の七部集は後人の集めたものだから、各人の物好によつて第一に定めてよいと論じつつ、自らは「遺業」を先づ第一に置いて、巻中に風韻高致の吟多きを稱してゐる。要するに彼は支考の徒の俗語、淡々が輩の堅強を忌んで、これを正すためには、先づ「遺業」の如きを



【條目】「源平盛衰記」の記事(卷二)を記したものに用ひられた。佛論書 大正一冊【著者】藤原朝隆【刊行】安永二癸巳九月大阪河内屋兵衛刊【諸本】半紙本の再版本があり、中興佛語文集、佛語大系所収本がある。【解説】加賀の夢水が安永二年秋、難波に遊んで藤原の舊蹟などを訪ひ、旅寓で一巻の夢水の主張は、巻頭に掲げた自序式(別項)の「一、式に曰、佛語は何の爲する事ぞや。答曰、俗談平語を正さんが爲也。されども佛語の姿は歌・連歌の次に立つて、心は向上の一路に遊ぶべし」といふのに、ほぼその基とところが示されてゐる。彼は當時支考の美濃風と淡々の一體とが、最も汎く世に行はれてゐるところから、この二者を評して、一は道を俚俗に引き下して、大に在門を説き廣めた功は多いが、遂には一向に俗談卑理損徳の街に落つと雖、一は高情奇語正しく其角の風韻は備はつてゐるが、ただ附句の意が堅強で父子同坐して見るべからざるに至ると駁した。而してこの兩弊は、皆俗談を正すの字を忘れた失だと論じた。この立場から夢水は「遺業」(別項)の作風を最も重んじ、自家元年の頃の、芭蕉が蕉風の一門を起す初めだから、その頃の佛語を採らずしていつれか眞ならんと言ひ、白雉が夢水を貞草蕉門と讃つたのを、「是は予が願の能なり」として却つてこれを甘受してゐる。又蕉門の七部集は後人の集めたものだから、各人の物好によつて第一に定めてよいと論じつつ、自らは「遺業」を先づ第一に置いて、巻中に風韻高致の吟多きを稱してゐる。要するに彼は支考の徒の俗語、淡々が輩の堅強を忌んで、これを正すためには、先づ「遺業」の如きを

【條目】「源平盛衰記」の記事(卷二)を記したものに用ひられた。佛論書 大正一冊【著者】藤原朝隆【刊行】安永二癸巳九月大阪河内屋兵衛刊【諸本】半紙本の再版本があり、中興佛語文集、佛語大系所収本がある。【解説】加賀の夢水が安永二年秋、難波に遊んで藤原の舊蹟などを訪ひ、旅寓で一巻の夢水の主張は、巻頭に掲げた自序式(別項)の「一、式に曰、佛語は何の爲する事ぞや。答曰、俗談平語を正さんが爲也。されども佛語の姿は歌・連歌の次に立つて、心は向上の一路に遊ぶべし」といふのに、ほぼその基とところが示されてゐる。彼は當時支考の美濃風と淡々の一體とが、最も汎く世に行はれてゐるところから、この二者を評して、一は道を俚俗に引き下して、大に在門を説き廣めた功は多いが、遂には一向に俗談卑理損徳の街に落つと雖、一は高情奇語正しく其角の風韻は備はつてゐるが、ただ附句の意が堅強で父子同坐して見るべからざるに至ると駁した。而してこの兩弊は、皆俗談を正すの字を忘れた失だと論じた。この立場から夢水は「遺業」(別項)の作風を最も重んじ、自家元年の頃の、芭蕉が蕉風の一門を起す初めだから、その頃の佛語を採らずしていつれか眞ならんと言ひ、白雉が夢水を貞草蕉門と讃つたのを、「是は予が願の能なり」として却つてこれを甘受してゐる。又蕉門の七部集は後人の集めたものだから、各人の物好によつて第一に定めてよいと論じつつ、自らは「遺業」を先づ第一に置いて、巻中に風韻高致の吟多きを稱してゐる。要するに彼は支考の徒の俗語、淡々が輩の堅強を忌んで、これを正すためには、先づ「遺業」の如きを

と見られる楽詞の部分と客観的要素と見られる地の部分とが、並立し交錯するところにある。これは一般歌曲の形式から許容されるのであるが、地の部分も更に細かに分析すると、主観的要素の混入が認められるので、殊に音楽の表現と、採り術の表現とによつて、その點はかなり自由に取扱はれる。併し、その形式は、幸若舞曲や謡曲にも先例があるもので、淨瑠璃はそれ等とも差別を置いた。即ち完成した淨瑠璃に於ては、楽詞の大膽な寫實化が試みられたのである。かうした楽詞と地の文との錯綜した交渉は、歌曲形式に於ては他に例を見ぬ所である。次に一曲の構想の排列は、五段分割の方法によつて定められた。初段は、二段は、三段は、四段は、五段は、五段問答(尋ね答へ)の順序による。この順序もその基本形式の一である。これ等によつて、一曲の進行が完全に遂行されると共に、効果の統一も現はれたのである。第二に、淨瑠璃を音楽と見た場合の特長として著しい點は、まづ、表現態度が、謡ふのでなしに、歌うまで語るにある事である。更に語り方は、五段分割に應じて一曲の結構を注意するは勿論、登場人物をそれ／＼に語り分けて、劇的寫實主義をとるのである。そこに前時代の語り物とは、明確な差別を認めなければならぬ。

【補註】最も一般的には左の如き場合がある。(一)地理上の分割。上方に發達したものを上方淨瑠璃といふに對し、江戸に於けるものを江戸淨瑠璃と名づける。この分類は必ずしも地理上に止まらず、内容からもそれぞれの特徴が現れるが、前者は主として義太夫(浄瑠璃)を、後者は主に豊後節(浄瑠璃)の淨瑠璃をさす。又は、やゝ廣く歌舞伎劇

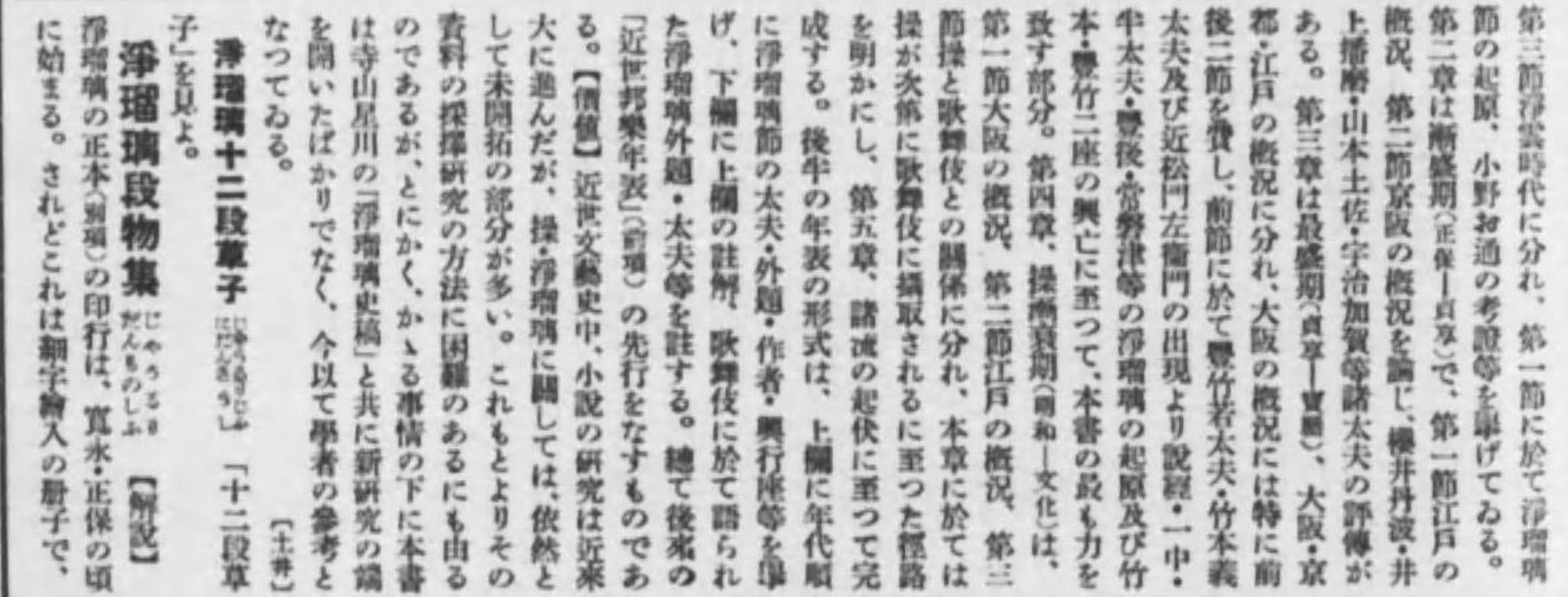


【沿革】(發生期)室町時代中期から江戸時代に入る迄の、百七十年ほどの間、民衆のための新音楽が發生して淨瑠璃が成り、新樂器を伴ひ、採り術の發達につれて、民衆劇としての様式を遂へるに至つた。『開元日記』等の記す所によると、應永末年の頃には、座頭の音曲が専門の平曲から、小歌や謡曲(浄瑠璃)等の新時代の民衆の歌謡に移つて来たことが認められるので、こゝに新音楽發生の機運があつた。その後、百年ほど経て享祿年中には既に淨瑠璃が相當流行してゐた由を宗長の日記に傳へてゐる。淨瑠璃は、元來「淨瑠璃物語」の語り口であつたが、流行により、その語り口を以て他の物語などを語るやうになつた。こゝに淨瑠璃が成立したのである。こ

れは享祿以後と思はれる。爾來、三味線(浄瑠璃)を伴ふ樂器とし、人形(浄瑠璃)によつて演出をなす。文祿年中には京の五條大橋の東に芝居小屋が設けられてゐたといふ(浄瑠璃)。當期の語り物は、初め前時代の軍記類等が流行したかと思はれるが、新作としては、淨瑠璃物語(十二段草子)を初め、『阿彌陀佛』(浄瑠璃)、『牛王姫』(浄瑠璃)などの名が挙げられる。『發達期』江戸時代初期から天和末までの八十年間。普通、古浄瑠璃(浄瑠璃)時代といふ。初期は三都を中心に、全国的に淨瑠璃の分布時代であつて、京には太夫として次郎兵衛等が古く見えるが、六字南無右衛門を初め女太夫も盛んだつたらしい。併し最も活潑したのは江戸であつて、殊に杉山丹後後や藤原浄瑠璃(浄瑠璃)は、淨瑠璃の基礎を定め、斯流の繁昌を計つた。前期の語り物を離れ、外に、『安口』(浄瑠璃)、『もなが』(浄瑠璃)の谷遊落(浄瑠璃)その他の新作淨瑠璃が語られた。中期はその勢をうけ、江戸に於ける新淨瑠璃の活潑な發達が見られる。櫻井丹波後(浄瑠璃)の金平淨瑠璃(浄瑠璃)や、土佐少少の土佐節(浄瑠璃)等が大きな功績を残した。末期は江戸よりも上方が漸く榮えて、名實共に具へた新時代の淨瑠璃を成就せしめる準備時代と見られる。大阪に剛健な節を語つた井上蘭舟後(浄瑠璃)が出ると、京には豊後節語り口を蘭舟後(浄瑠璃)が加賀後(浄瑠璃)がある。或は櫻井丹波後(浄瑠璃)に觀衆を驚かせた山本土佐後(浄瑠璃)がある。かくして浄瑠璃大系圖の出現に具へたのである。この發達期に於て更に注目すべきは、説經節(浄瑠璃)が起つた説經淨瑠璃(浄瑠璃)の上の密接な交渉がなされたことである。曲節の上は勿論語り物の詞章は、本地物や童子座の脚色

の流行に乗じて盛んに説經淨瑠璃から輸入された。これ等によつて高田や脚色の擴大と進歩が實現されたのである。(完成期)貞享元年竹本座創立(浄瑠璃)から明和年中竹本座の第一回退轉に至る八十年間。竹本座・豊竹座(浄瑠璃)の對立時代であり、義太夫節の全盛期ともいひ得る。この期には、義太夫、作者人形道が隆興として發出した(義太夫節)。又別に、淨瑠璃の全盛は、操人形芝居から離れて歌舞伎芝居への接觸といふ新現象を生み、別途各種の淨瑠璃を派生したのである。文樂節、一中節、中太夫節、河東節、外節、大團圓等の發生は初期に屬し、豊後節、常盤節、富本節等の發生は後期に屬した(浄瑠璃)。【補註】明和後半末に至る百年間。浄瑠璃とも見られる。淨瑠璃の最後の飛躍が試みられた時代である。脚色は舞臺技巧本位となり、歌舞伎脚本化する傾向を招き、豊後系統の淨瑠璃は固より固ふ要素を加へて、宮内節・清元節・新内節(浄瑠璃)等を派生した。これ等の各種淨瑠璃はそれ／＼起伏消長を経て、今日に會臨を保つてゐるが、全く滅んだものもある。極く操人形十二段草子、義太夫節、歌舞伎(浄瑠璃)等。

【別項】に語られた淨瑠璃をさす。(二)歴史上の分類。普通義太夫節にのみ用ひられるが、元祿以後の浄瑠璃に當てて淨瑠璃と新淨瑠璃といつたに對し、それより早い淨瑠璃を古淨瑠璃と稱して區別した(浄瑠璃)。【補註】脚色上の分類。武家社會を題材とした作を時代淨瑠璃(浄瑠璃)といつたに對し、町人社會を扱つたものを世話淨瑠璃(浄瑠璃)といひ、更に兩者の混じた場合を時代世話淨瑠璃(浄瑠璃)と稱する。但しこれ等は、實際には演出上の相違と必要が生んだ稱呼と見られる。(四)流派による分類。發達につれて分派し、獨立した各流の淨瑠璃がある。普通の説に従つて信ぜられる主な流派の關係を左に表示する。



第三節淨瑠璃時代に分れ、第一節に於て淨瑠璃の起源、小野お通の考證等を擧げてゐる。第二章は漸進期(正徳一頁)で、第一節江戸の概況、第二節京の概況を論じ、櫻井丹波、井上播磨、山本土佐、宇治加賀等諸太夫の評傳がある。第三章は最盛期(貞享一頁)で、大阪・京都・江戸の概況に分れ、大阪の概況には特に浄瑠璃の概況に於て豊後若太夫、竹本義太夫及び近松門の出現より説經・一中・半太夫、豊後・常盤等の淨瑠璃の起原及び竹本豊竹二座の興亡に至つて、本書の最も力を致す部分。第四章、操人形(浄瑠璃)文化は、第一節大阪の概況、第二節江戸の概況、第三節浄瑠璃と歌舞伎との關係に分れ、本章に於ては操が次第に歌舞伎に攝取されるに至つた経路を明かにし、第五章、諸流の起伏に至つて完成する。後半の年表の形式は、上欄に年代順に淨瑠璃の太夫・外節・作者・興行座等を擧げ、下欄に上欄の註解、歌舞伎に於て語られた淨瑠璃外題・太夫等を註する。總て後來の「浄瑠璃年表(浄瑠璃)」の先行をなすものである。【補註】近世文藝史中、小説の研究は近來大に進んだが、浄瑠璃に関しては、依然として未開拓の部分が多い。これもとよりその資料の探検研究の方法に困難のあるにも由るのであるが、とにかく、かかる事情の下に本書は寺山星川の「浄瑠璃史稿」と共に新研究の端を開いたばかりでなく、今以後學者の參考となつてゐる。【補註】

小説同様歴史的の讀み物であつた。これを音曲として節付を加へ、大字八行の體古本を刊行したのは、宇治加賀後(浄瑠璃)の若千人切が最初で、延寶七年五月である。ついでその翌八年(浄瑠璃)、『聖々九年(浄瑠璃)』といふやうに續出し、山本太夫や竹本太夫等、これに倣つてその正本(浄瑠璃)を刊行した。版式は時により變化して十行・七行・十二行のものもあれど、讀み本でなく節付の體古本であることに變りはない。世にこれ等を浄瑠璃といふ。丸本は全部完結の正本たる意味である。この丸本より進行・章事の如き、節廻しの面白く人口に膾炙する一章一段を選び集めて一冊としたものを段物集といふ。これは元來素人が酒席の餘興などに、一口淨瑠璃を語る體本としたものである。段物集の最も古きは、井上播磨後(浄瑠璃)の「忍四手繪」(浄瑠璃)、『聖々二年』で、加賀後(浄瑠璃)の「忍四手繪」(浄瑠璃)、『聖々二年』で、共に細字輸入本である。同じく六年刊行の加賀後(浄瑠璃)の「竹子集」(浄瑠璃)は細字ではあるが繪はない。大字八行のものには延寶九年刊の加賀後(浄瑠璃)の「大竹集」(浄瑠璃)を嚆矢とする。竹本義太夫以後、淨瑠璃諸流の段物集は僅かに堪へないが、半紙本・横本の體裁が普通である。豊後節(浄瑠璃)・花團圓の如き、元來流行、心中類を主とする浄瑠璃が、加賀節(浄瑠璃)や義太夫節のやうな、五段つづきのものが多数だから、これを段物集といふのはやゝ不適當である。半太夫節・河東節に至つては同草も短く、その悉くが完全な獨立の歌曲であるから、段物集の名は全當らない。義太夫・豊後・宮内・一中等の半紙本は體古本をてのまゝ寄せ集めたものが多く、河東節は

概して横本で、新に版を起し、版下・横下へて挿入である。以上各篇の段物集には内容の重複したものが、同名の書で多少内容異なるものもある。

浄瑠璃譜

【浄瑠璃】浄瑠璃(二巻)【著者】未詳【名】浄瑠璃(浄瑠璃浄瑠璃浄瑠璃浄瑠璃浄瑠璃)【著者】未詳【名】浄瑠璃(浄瑠璃浄瑠璃浄瑠璃浄瑠璃浄瑠璃)【著者】未詳【名】浄瑠璃(浄瑠璃浄瑠璃浄瑠璃浄瑠璃浄瑠璃)

は劇的な物語の要素の加味されてゐない。舞踏で、後者はその反對に極度の複雑な多層にかつたもの、所謂舞踏劇(但し、中には竹本劇と類似したものもある)を指す。併し普通にはこれ等の區別は極めて曖昧である。狂言浄瑠璃は振事よりも舞踏を中心としたものであるから、例へば「勧進帳」(浄瑠璃)の如きは、當然これに属すべきであるが、浄瑠璃といふ以上、勿論長所所作や本行所作は含まない。併し「草人形」(浄瑠璃)の如き、長所と常磐津との結合や、又は「紅葉狩」(浄瑠璃)の如き、常磐津・竹本の三方結合のものはこれに属する。又通行物や狂言物(浄瑠璃)等は、題材からの分類に従つて別に取扱つてある。狂言浄瑠璃は、今日では全く独立した一藝術として行はれてゐるが、本来は全篇の筋と密接な關係を有し、通し狂言の一筋に色あせして舞踏せられたものである。而して古歌や尺八の舞踏の諸要素、即ち在来の一つの纏まつた形式として個々に分れた「丹阿彌」(浄瑠璃)、「浄瑠璃」(浄瑠璃)、「浄瑠璃」(浄瑠璃)等の浄瑠璃要素として纏まつたものである。

【浄瑠璃】浄瑠璃所作は古くから見えてをり、その地は土佐外記・虎屋式部・中六太・河東等が用ひられ、中にも、外記の「逢坂津間敷」(元禄三年正月七日)や河東の「式三郎神樂」(享和元年正月十日)等が有名で、これに一中・後後・義太夫の上浄瑠璃が輸入されるに及んで、江戸民衆の趣味も變化し、遂に在来の江戸固有の浄瑠璃が壓倒されるに至つた。かくて浄瑠璃所作は益々發達の度を高めたが、狂言浄瑠璃の大成長したものは、豊後節が劇場音楽の一として、即ち所作事と並んで

多の浄瑠璃所作が生れ、長所所作と相對立して所作事の主眼に至つて現今に及び、且つ新舞踏劇が作らるゝに至つた。併し順天年の下につれて墮落の傾向を辿つた。

【浄瑠璃】浄瑠璃所作、例へば富本の「全盛浄瑠璃」(浄瑠璃)や、又は浄瑠璃文化元年九月の村原や清元のおどけ御、煮珠取(浄瑠璃)等。天保三年七月の中村、浄瑠璃の如きは省略し、狂言浄瑠璃の各流に於ける重要なもののみを掲げ、(浄瑠璃)以下は省略する。(浄瑠璃)浄瑠璃所作、例へば富本の「全盛浄瑠璃」(浄瑠璃)や、又は浄瑠璃文化元年九月の村原や清元のおどけ御、煮珠取(浄瑠璃)等。天保三年七月の中村、浄瑠璃の如きは省略し、狂言浄瑠璃の各流に於ける重要なもののみを掲げ、(浄瑠璃)以下は省略する。

浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)

【浄瑠璃】浄瑠璃所作は古くから見えてをり、その地は土佐外記・虎屋式部・中六太・河東等が用ひられ、中にも、外記の「逢坂津間敷」(元禄三年正月七日)や河東の「式三郎神樂」(享和元年正月十日)等が有名で、これに一中・後後・義太夫の上浄瑠璃が輸入されるに及んで、江戸民衆の趣味も變化し、遂に在来の江戸固有の浄瑠璃が壓倒されるに至つた。かくて浄瑠璃所作は益々發達の度を高めたが、狂言浄瑠璃の大成長したものは、豊後節が劇場音楽の一として、即ち所作事と並んで

浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)

浄瑠璃譜

浄瑠璃譜

浄瑠璃譜

浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)

浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)

浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)浄瑠璃(浄瑠璃)

の男が思ふに、父は危い海を渡つて遠い島に行かれたが、目前の島は、鳥居・吉原・新町に似てゐる。然るにこの島の美人達は、既に「内証書」に「まき草」(白鳥)「遊女初竹集」(大夫前中書)などに書かれてゐるが、これ等の書は満足なものでない。かういふ考を抱いて彼は或る時有名な新聞等を通じて、島原出口



の茶屋に腰かけて、朝歸りの客を品評してゐると、そこをくといふ古母が通りかゝつた。この女を引留めて過去の経験、見聞を語らせて終日これを筆記した。この話の中には彼自身即ち「二代男」の世傳を初め、當時知られた遊女達が悉く出た。併しその名は憶つて明かにしない。用と遊女に氣をつければ、分

る人には分るであらう。見聞した所は夥しいが、その中の美談と見るべきものだけを載せて、醜態なるものは捨てるべき「宇治拾遺物語」の序や、歴史物語の「大鏡」の序などの故智に倣ひ、且つ「二代男」の連綿をつげんとしたものであるが、花街書遊女評判類との關係を示し、又遊女に關する美談の類を集めようとした趣旨を示した點は、特に注意されるべきである。第一章にいへるが如く、三都の遊女を中心とし、その遊女を最も多く書いてゐることは言ふまでもない。小太夫・薄雲・吉野・小紫などの如く、遊女の名を挙げたものには、所謂遊女美談の類を寄ぎ、名を隠した場合には、その弱點に筆を向けてゐる。なほ美談の穿ち、姿態を離れて遊女の種々なる相、遊女生活の色々を寫し出した點には、「二代男」を凌駕する精細な描寫が見られる。「批評」「好色一代男」は、兎も角も世之介といふ人物を設けて、その上に人の一生に於ける好色の・性的な生活の経過を踏づけ示してゐるが、本書は世傳といふ人物はあつても、それは全然表面に立つ主人公とはなつてゐないので、「二代男」ほどに小説の形態を具へてゐない。故に小説の興味と點では、「二代男」が勝れてゐることは言ふまでもないが、遊女・遊女等の描寫の點では、容易にその優劣をいふべきではあるまい。

田重徳の題意、同年松平直亮の序があり、毎部の首に凡例及び例言がある。著者別の書目に、古くは朝風所編の一部があるが、本書は探求も適かに行届き、作者の範圍も適かに廣がれてゐることは言ふまでもないが、遊女・遊女等の描寫の點では、容易にその優劣をいふべきではあるまい。

【著者】未詳【解説】書誌に關する隨筆である。享保年中、書物御吟味の御觸書、宮崎文庫記、徳川累代官制の圖書名、諸藩藏書名、實業板一切類の領行價録、萬葉集活字本二種の辨、八坂本家物語跋文、二十一代集異同の見分け方、古書的情報等をあげてゐる。(『星』しよがく)「しよがく」を見よ。

【著者】武蔵小島實隆【成立】未詳。實際の反古の中から見出し、孫の實隆が更に書寫したものとある。【諸本】和歌作法集(和歌叢書)所載。「内容」歌の読みや心得のこともの、諸抄物に載つてゐる注意すべきもの、乃至諸抄物に見えず、記憶してゐることを記述したものである。大體に於て二條家歌學の祖述で、獨創味のある歌論書ではないが、當時に於ける歌の入門書としては比較的簡まつてゐる點を稱すべきである。歌を詠み習ふはじめは多作が必要で、やゝ上進して、初めて謂はゆる詞は古きをもて情を新しくと心掛け、第一に詞支に心を寄せて詠み、古歌集・古歌論書も詠むべく、古より今は諸物が手に入りやすいから、すきで精古きへすれば、先達諸能にも至り難くないと論じ、或は當座の題の詠録、本歌取、かけ歌等についての注意を述べ、歌は風體の肝要なことや、作者によつて歌の美惡を定むることの非なるを論じ、歌人平生の心得として、心をつけねばならぬものが面白いので、よくその味を合點して詠歌すれば、感情深い歌も出来る。書を讀むに師のすゝめた書をよく讀み、不審をたゞし、詳しくたづね廣く見るべく、且つ書を捧ぐべき事をすゝめ、歌をよむほど心體ともに修なるはなし」などと述べてゐる。最初の歌の變

遷をのべたところなどにも特殊な見解はないが、二條家歌學の立場から簡明に、よく消化された意見が吐かれてゐる。【價値】「君里元院」の仰にも、實際は道徳院のかたの歌よみなりと贊せ給ひ」とあるが、本書は二條家歌學の系統をあとづける者にとつての必讀書である。【備用】

【初學考鑑】しよがく 歌論書 一册(著者)武蔵小島實隆【成立】未詳。實際の反古の中から見出し、孫の實隆が更に書寫したものとある。【諸本】和歌作法集(和歌叢書)所載。「内容」歌の読みや心得のこともの、諸抄物に載つてゐる注意すべきもの、乃至諸抄物に見えず、記憶してゐることを記述したものである。大體に於て二條家歌學の祖述で、獨創味のある歌論書ではないが、當時に於ける歌の入門書としては比較的簡まつてゐる點を稱すべきである。歌を詠み習ふはじめは多作が必要で、やゝ上進して、初めて謂はゆる詞は古きをもて情を新しくと心掛け、第一に詞支に心を寄せて詠み、古歌集・古歌論書も詠むべく、古より今は諸物が手に入りやすいから、すきで精古きへすれば、先達諸能にも至り難くないと論じ、或は當座の題の詠録、本歌取、かけ歌等についての注意を述べ、歌は風體の肝要なことや、作者によつて歌の美惡を定むることの非なるを論じ、歌人平生の心得として、心をつけねばならぬものが面白いので、よくその味を合點して詠歌すれば、感情深い歌も出来る。書を讀むに師のすゝめた書をよく讀み、不審をたゞし、詳しくたづね廣く見るべく、且つ書を捧ぐべき事をすゝめ、歌をよむほど心體ともに修なるはなし」などと述べてゐる。最初の歌の變

【女學雜誌】しよがく 雜誌【刊行】明治十八年七月創刊。東京萬春堂。同三十七年二月五二六號發行。慶刊未詳。【編輯者】明治女學校長岩本善治の主宰で、その夫人岩本か子(若狭子)これを助け、編輯者中、最も長い間携はつたのは青柳有英である。【解説】當時進歩的教育を以て稱せられた明治女學校内から出たもので、「女學雜誌」(明治十七年六月一號至五月)の後身である。岩本善治が毎號連載した「國語」は、宗教的情感の濃つた清新な文章を以て熱讀を受けた。「女學雜誌」時代は、純然たる女子教育の機關であつたが、「女學雜誌」はその範圍を廣めて、政治・社會・文學の諸方面に及び、その評論を掲げることとなつた。北村透谷・星野天知・内田不知庵・尾崎等、一時これを舞臺として筆を揮つた。第三百二十號(二十五年六月)より甲乙二種の雜誌に區別し、號數は同一なるも、一は赤表紙と稱し、純然たる女子教育の機關とした。そして後者にして、青年男女の讀物とした。そして後者にして創作乃至外國文學の紹介に努められたが、これによつて認められた以上の諸氏は、後に分れて「文學界」(別題)を創刊するに至つた。又二十六年四月には、白表紙「女學雜誌」を「評論」と改題した。明治文學史上、最も重きを置かるべき「文學界」は、實に「女學雜誌」

【女學雜誌】しよがく 雜誌【刊行】明治十八年七月創刊。東京萬春堂。同三十七年二月五二六號發行。慶刊未詳。【編輯者】明治女學校長岩本善治の主宰で、その夫人岩本か子(若狭子)これを助け、編輯者中、最も長い間携はつたのは青柳有英である。【解説】當時進歩的教育を以て稱せられた明治女學校内から出たもので、「女學雜誌」(明治十七年六月一號至五月)の後身である。岩本善治が毎號連載した「國語」は、宗教的情感の濃つた清新な文章を以て熱讀を受けた。「女學雜誌」時代は、純然たる女子教育の機關であつたが、「女學雜誌」はその範圍を廣めて、政治・社會・文學の諸方面に及び、その評論を掲げることとなつた。北村透谷・星野天知・内田不知庵・尾崎等、一時これを舞臺として筆を揮つた。第三百二十號(二十五年六月)より甲乙二種の雜誌に區別し、號數は同一なるも、一は赤表紙と稱し、純然たる女子教育の機關とした。そして後者にして、青年男女の讀物とした。そして後者にして創作乃至外國文學の紹介に努められたが、これによつて認められた以上の諸氏は、後に分れて「文學界」(別題)を創刊するに至つた。又二十六年四月には、白表紙「女學雜誌」を「評論」と改題した。明治文學史上、最も重きを置かるべき「文學界」は、實に「女學雜誌」

を母胎として生れたのである。(『書目録』)

【初學抄】しよがく 傳記 雲傳 二卷【刊行】初版、寛政四年七月。再版、同十二年三月【著者】池水野蘭【解説】明治二年三月【著者】池水野蘭【解説】明治二年三月【著者】池水野蘭【解説】明治二年三月

【諸家人物誌】しよがく 傳記 雲傳 二卷【刊行】初版、寛政四年七月。再版、同十二年三月【著者】池水野蘭【解説】明治二年三月【著者】池水野蘭【解説】明治二年三月

【諸家著述目録】しよがく 書誌 四册【編者】中根直治。傳は詳かでないが、明治三十餘年まで帝國圖書館に勤務し、和漢書に精通した人であつた。【名目】以來と角書がある。【刊行】明治二十六年七月【解説】慶長以來江戸時代を通じて、著作者として聞え

た人々の著書を作別にして目録としたもので、刊行された分は、和漢家之部一冊、漢學家之部二冊、小説家之部一冊である。但し著者の凡例に従ふと、佛語・醫學・兵學・天文・解遺及算數・地理・農學・藝術・雜門・叢書の諸家に分類して刊行の計畫であつたと見える。和漢家之部の巻首に明治二十七年田中稻城、同年松平直亮の序、漢學家之部の巻首に同年島

田重徳の題意、同年松平直亮の序があり、毎部の首に凡例及び例言がある。著者別の書目に、古くは朝風所編の一部があるが、本書は探求も適かに行届き、作者の範圍も適かに廣がれてゐることは言ふまでもないが、遊女・遊女等の描寫の點では、容易にその優劣をいふべきではあるまい。

【女官裝束織文圖會】しよがく 圖會 一册【成立】門人松波及興の請に依つて刊行した題が著者の跋に見える。【諸本】文化十四年、門人本間游清が政所の裝束全部及び女官御裝束の御五衣・御單、女御御裝束の小袖等三十餘種を増加したものがあつた。明治三十五年一月刊行の故實叢書中に收めた織文圖會女官は、この本間游清の増補したものである。【解説】女官女御御裝束、典侍・侍・命婦・采女・舞妓の裝束に就いて、唐衣・表着・五衣・打衣・單・小袖・袴・袴等の色目を擧げて着色したもので、寛政十二年藤原正臣の序、享和元年著者の跋がある。

【書簡文】しよがく 國語學(名稱)書簡文と【解説】手紙に用ひる各種の文、言語から見れば、何れも文語に屬し、對手に對する尊敬や自己に關する謙讓の意を表はす語や言ひ方、及び應對のための特殊の語を有するを特徴とする。なほ書き方には、宛名・日附などに、社會一般に通ずる法式がある。【種類】現代普通に行はれてゐる書簡文は二種ある。(一)口語體書簡文。口語體の文語、口語體の一種で、對話體に屬する口語文(二)文體體書簡文。候文ともいふ。文語の體類として書簡文といふ時は、この種のものを意味する事が多い。文章語體の文體文(三)文

種で、敬語や挨拶の語などに、他の種の文語では用ひない特殊の語があり、それ等を書くにも、敬語を用ひず、漢字のみを用ひ、又は漢文の如く韻脚して讀むやうに書くことが多し(『書目録』)の書簡文を消息文といふ。これは又和文の書簡文を消息文といふ。これも今も普通用ひない。

【治事】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

【消息】しよがく 消息の項参照。

の職官の概要を記述した心情は、實に人をし... 慶長十三年出納大納言中納言忠が刊行した... 正平二年、著者源房の男頼純の書...

講究することとなり、廣く讀まれたことは、そ... の註釋書、末書の數多いのでも知られる。從... 古くから後人の筆削進入等が少なくなつ...

二卷〇職原抄註一〇職原抄註書二十六卷〇... 職原抄註書一〇職原抄註書一〇職原抄註書... 職原抄註書一〇職原抄註書一〇職原抄註書...

神原抄印本文藏大序二、神原抄印本文藏... 波點有、波點有、波點有、波點有、波點有... 二十、神原抄中相傳位階有、波點有、波點有...

はれた(勅撰次第)によると、「寛文被行... 件歌勅撰入賀部」とあるが、今本にはかゝ... 前書を持つ歌はないやうである。【由来】...

萬葉集の千十代集のほかを、弘く記しあま... ねく求めて「云々」といへる點、「古今集」と「新... 古今集」と「古今和歌集」の三集を以て、「と...

らとのふるは」と云つて、院の歌集の書に... 振らつてある點など、全く彼集と同じであ... 一、附録(山のみせ)には、「元久のため...

【内容】序を缺く。これに就いて後成婦女は... 「天曆五年とかやの後に、序の條はぬしもよ... しく」として、「後撰集」に準へて、かゝる體裁...

の如きも、その中にこの「職人遊藝」の延長を
見るべく、紙形斎の「近世職人遊藝」(常盤
館刊)も、獨創多き新傾向の一例となるもの
である。(田中一)

織文園會

本間清江【刊行】 袴衣部文化十四年六月、禮
服部文化元年六月、御幸部初編文化七年、後
編八年【成立】 袴衣部は、著者の跋に、その
部松岡辰方が古今の綾羅縷を蒐集し、考古の
證としてゐるのに依つて集めたものを發行し
同好の士に贈るとある。禮服部は、同じく著
者の跋に、「右一冊者我々於故紙中、上古之持
以給好古之士」とある。御幸部初編は、
その跋に、文政七年光緒上皇が、新に修築さ
れた修學院村離宮に御幸の時の供奉諸員の服
装を、舊記に依つてその服色を版にしたもの
であると言ふ。後編は翌年これを増補したもの
であると言ふ。【諸本】 故實部
書所収【解説】 袴衣部は、袴衣部、同種之
部、裏打袴衣部に分つて、色目五十八種、
禮服部は、深紫袴、鞠袴、淺紫袴、蘇芳袴、
緋袴、烏袴、烏袴、緋袴、比羅、大袖、
袴袴、雲裳袴、經綳袴、虎代等四十九種、御幸
部は、花山院大納言以下廿二人の袴衣、直衣、
衣、草・奴袴等の色目百二十四種を著して美
麗に刷り出したもので、頗る參考となるもの
である。(石村)

諸葛袖日記

【作者】 序に自笑、其笑の遺著があるが、實際
の作者は多田南嶺であると傳へる。【角書】 諸
【刊行】 寛保三年正月二日とある。【諸本】 珍
本全集(帝國文庫)八文字屋本五種有堂堂文
庫所収【解説】 本書の序に、「往昔の淨瑠璃
に、鎌倉袖日記とかやおもひ出でて、諸葛の

風骨を及ばぬ筆に書分ちて、いつゝの巻の笑
ぐまとは成ぬ」とあるに依つて、「鎌倉袖日
記」(項)と多少の關係あることが知られる。
【鎌倉袖日記】は松本治太夫の淨瑠璃正本で、
おそくも元禄初年までのものである。實は井
上播磨屋の正本「日向景清」の外題書であつて
本書の内容は鶴ヶ岡八幡の社に、祖傳の無
體講の遺稿から發展してゐるのに暗示されて
製作されたものである。また藤岡太郎博士
の「近代小説史」には、「夜會記の影響があら
うと謂つてゐるが、寧ろ日向景清の直接の
影響を受けたものと考へるべきである。「鎌
倉袖日記」と關係があるといふのは、頼朝の前
に於て諸大名が物語をなすといふ形式と、古
代の事をすべて現代化してゐるところに共通
點があるので、本質的に見れば、其後以來の
氣質物(項)である。本書は五巻を以て一部
をなし、一巻に三篇を収め、すべてで十五の
短篇より成る。即ち一之巻第二話の閑才と云
ふ儒醫の息子が老莊の學に凝る話や、同じく
第三話の天外和尚と云ふ相撲狂の僧の話や、
四之巻第一話の唐書種古の八右衛門と淨瑠璃
好きの太郎右衛門の話の如きは、おのが好
む道に凝り過ぎて失敗する話で、この傾向は
從來氣質物の常に持つたものである。又一之
巻第一話の香久山勾當の話、二之巻第一話の
蜂屋屋の茶會の話、三之巻第二話の輪廓神之
進と云ふ陰陽師の話の如き、頑固なる性質若
しくは律儀過ぎる性質のために失敗する話も
同じく氣質物の系統に屬するものと謂はなけ
ればならぬ。本書が多田南嶺作と謂はれる
には確證があるのではなく、推定に過ぎない。
併し全篇の叙述中、屋々同學方面又は漢方方
面に觸れてゐるやうなのが、即ち南嶺の作と

性的同種即ち教育上、職業上、政治上及び社
會上の平等を主張し、女性も男性に比し、不
平等な取扱ひを受けてゐる歴史的事實に反抗
する運動である。この運動は、古代ギリ
シヤ・ローマの時代に既にその萌芽を見た
が、近代の意味に於けるフェミニズムは、フ
ランス革命以後に始まり、ルソーの自由民権
人類平等の思想が、その根柢となつた。而し
て始めて女性擴張の叫びが歐羅巴の天地に高
く叫ばれたのは、一七九二年即ち英國のメリ
イウールストンクラフト女史(一七五九—
一七九七)が著したところの「女性の確立」(一
七九九年)に依つてである。その後、異常な伸
張を遂げ、殊に歐洲大戰後は、歐洲の先進國
に於ては婦人參政權が完全に確立され、今や
その力は法律的社會的改革に向けられ、その
一部は、社會改造運動に合流するに至つた。
【日本に於ける女性主義】 早くは福澤諭吉の
主張などに現はれてゐるが、文藝的方面に起
つたものが、最も著明である。即ち明治四十
四年九月、女流文學者等の組織せる青鞜社同
人が、雑誌「青鞜」(項)を發刊し、女性運動
を起したのが、日本女性主義の明かな現はれ
である。その後、社會的方面に於ては、基督
教婦人矯風會、廓清會等の廢娼運動、産兒制限
運動、女子教育運動等、漸次成功の域に近づ
き、或はすでに爲政者の承認を得たものもあ
る。經濟的方面に於ては、労働婦人運動が主
となつてゐる。漸次その活動は旺盛になりつ
つあるが、歐洲のそれに比しては、なほ不活
潑なるを免れない。更に政治的方面に於ては
男尊女卑の長い傳統的思想に縛られてゐる。
大したものとなつてゐないが、政治的自由
の半ばは、既に議院を通過して居り、普選最

思はしめる點である。其頃の殊後、八文字屋
物の傾向は益々傳奇的となり、淨瑠璃風、若
しくは歌舞伎風の趣向を醸らす方面に進んだ
のであつて、氣質物の製作は極めて少い中
に、本書の如きが存在してゐるのは珍しい。
この作品は元文以後の八文字屋物全體を通過
してもまた注意すべきものである。(吉田)

敘景文

【作者】 坪内逍遙【性質】 文章の種
類の一。抒情文(項)と併せて又これを記實
文ともいふ。抒情文が自己の感情を抒ぶるこ
と、即ち主觀を主とするに對し、敘景文は自
然と人間とを寫すこと、即ち客觀を主とする
ものである。その素材は、都市・村落・湖海・山
川・草木・風雨・雷電・原野・鳥獸・神祇・佛閣・禽
獸・蟲魚・金石・男女・老幼等、すべてこれ等の
形狀・色彩・位置・組成・性質等を寫して、讀者
をして作者と同じ感覺を起さしむるを本領と
する。寫生文(項)は、敘景文の一種と見るこ
とができる。他の文種との關係を言へば、こ
こに水に關する敘景文を作るとする。その山
中に派へ、敘景文であるが、その一たび派れ
て小川となり、激湍となり、瀑布となり、遠
に溶々として大海に朝するに至る運動、即ち
「事」を寫すは敘景文(項)の領域に入る譯で
ある。又犬を寫すにしても、自己の飼ひたる
ものか、友人の飼ひたるものか、兎も角實存
のもので、毛色はどうか、形はどうかと特定の犬を
寫し出すのは敘景文もしくは記實文である
が、それが特定のものをなく、動物學上で説明
するが如き犬の一般概念を示すに止まれば、
その文は説明文となるのである。併しひと
叙景文と敘景文、敘景文と説明文に限り、
すべてその文種は必然と區別して相犯すを得ぬ

といふのではなく、一二、もしくは二三の文
種が相混してゐるのが當である。
青楓川のほとりに出づれば、御膳の花さき満ちた
り。高き岸にのぼりて眺むるに、渡り山々、近き
村々、いづれも一帯のうちにさまざまで、御膳
りし蟹籠に入る橘の花のけしき得もいはず。
蟹籠川は小川川とも書けり。渡れて別荘に入ると
右に村の遺家を眺め、橘の花水に映りて、御膳
女のおさまも風情を添へたり。(「御膳」) (武島)

舒言三轉例

【著者】 鹿持雅澄【刊行】 明治二十六年十二
月【内容】 舒言即ち舒言(項)について研究
したもので、舒言に、佐行・波行・可行に依つて
働くものがあるが、その延びる行に依つて
意味が違ふことを論證したものである。即ち
「さ行の轉用」については、上代の文獻から、
「なかさまく(波かん)」「たまをぬかさか(玉
をぬかぬ)」「いはなさん(いはん)」「こと
よさし(ことよし)」「大御手にとらし給ひ」
「大御手にとり給ひ」等、六十三の例を挙げ、
「とらさんと云は、とらんの舒りたるにて、取
賜はんと云ふ」とらさんと云は、とらねの舒
りたるにて、取賜ひねと云ふであるとし、本
居宣長の「古事記傳」に、「見之、見須をメシ、
ミスと讀んだのは誤り、メシ、メスと訓むべ
きことを論じた。次に「は行の轉用」について
は、「ヤ行・ウ行の轉用も意味は同じであるか
らとて併せて説き、「ひさしくすまはん(久し
くすまん)」「なげかひ(なげき)」「なげかか
(なげく)」「いやさかかえに(いやさかかえ)」、
「やすまはん(やすまは)」等五十四の例を挙げ、
「語らばん(は)語り居らん(は)のやうに、すべて
事を緩めた意であるとした。次に「か行の轉

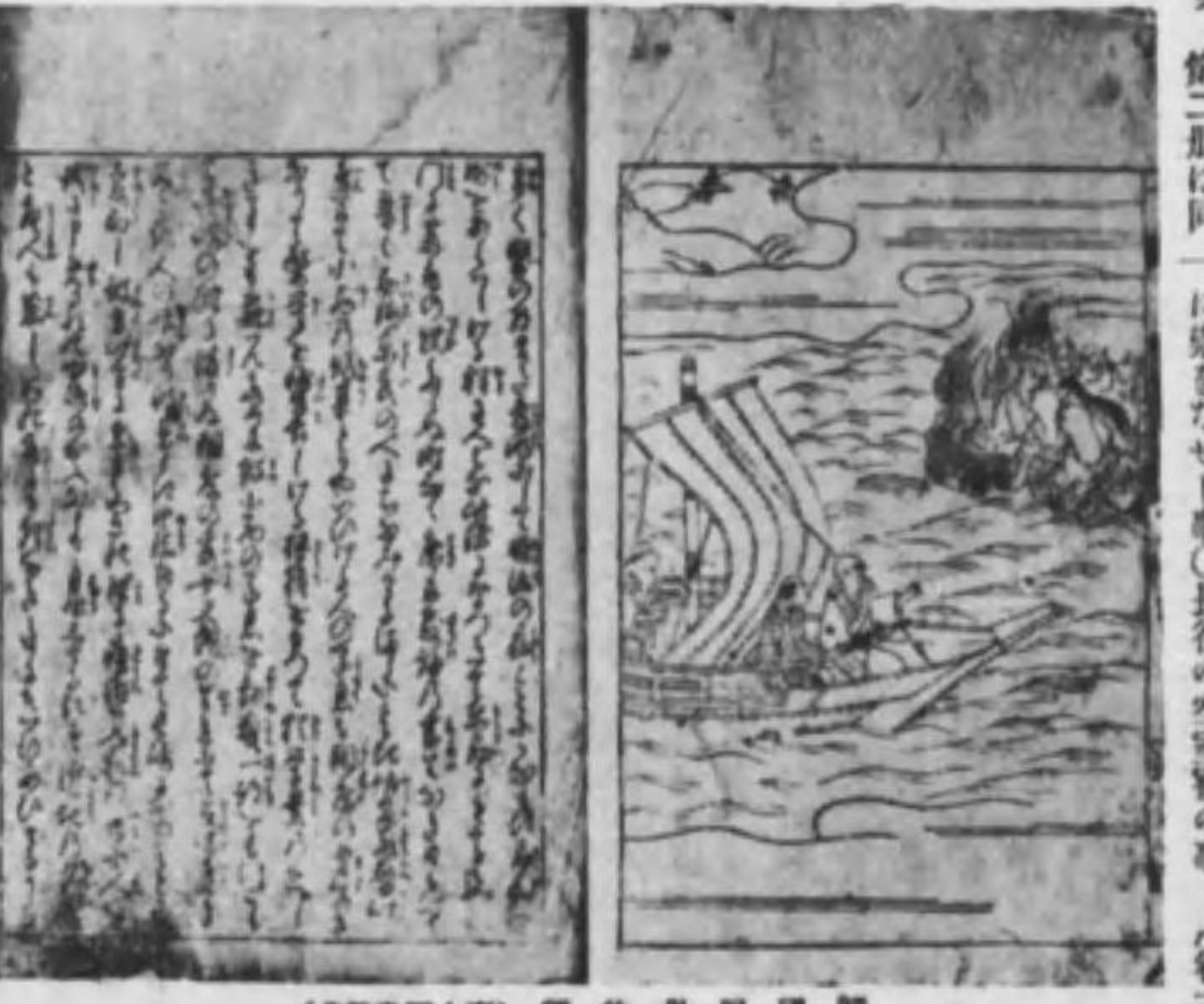
用」については「きく(きく)」「まをさく」
(申す)、「つきの(か)く(く)」「月の(か)く(く)」等二
十二の例證を挙げ、「見らく」「こふらく」は、
「見る事」「こふる事」の意であるとした。なほ
かやうな意味の差異は、喉から出た「なげか
す」「なげかか」「なげかく」。舌から出た「なげ
す」「なげか」「なげかく」などをくらべて見て考
へれば、明かであるといつてゐる。【價值】 従
來延言のことは説かれたが、その意味とどん
な關係があるかは、まだ明かにせられてゐな
かつた。この書に、上代語に於て動詞が加行、
佐行・波行の三行に延びて活用することを説いたの
意味の上にも明かに區別があることを説いたの
は注目すべきである。雅澄は舒言の意味に關
係あることは、自分が初めて説くものである
と云つてゐる。が、延言については、春庭の
「詞の通路」(項)にも研究があり、意味の方
にも觸れてゐる。しかし雅澄はこれを見なかつ
たのであらう。(田中)

女權主義

【解説】 英語のフェ
ミニズム (Feminism)。ラテン語のフェミニナ
(Femina) 即ち女から出たもの。女性の一般
的權利を主張せんとする主義である。併し
フェミニズムを更に厳密に限定して女性主
義・女性主義・女性問題と區別する者もある。
この場合の女性主義とは、女性の政治的權利
が男子のそれと同等なるべきを主張するもの
であつて、一に婦人參政權獲得運動を意味す
るのである。これは一例に過ぎないが、兎に
角フェミニズムを主張する思想の根柢は、多
種多様であつて、必ずしも一律ではないが、結
果から見れば、あらゆる方面に於ける男女兩

諸國因果物語

【著者】 浮世草子 六册【作
者】 白梅園水【名稱】 内題
及び柱には、「諸國因果物語」
とある。但し題簽には、「近代
因果物語」として、角書に「近
代諸國因果物語」とある。【刊
行】 寛永四年三月【題材】 多
くは當時諸國にあつた事實や
傳説に依つたものであらう。
中には、古い傳説の影響を受けたものもあら
う。【解説】 目次を掲げると、(卷之一) 商人
の銀を盗つて後に報し事○炭焼屋五郎死して火
雷になりし事○男の亡女下女の首を絞殺せし
事○山賊しける者佛圖を得し事○妻死して頼
を返せし事。(卷之二) 人の妻姪姪により生



(諸國因果物語) 諸國因果物語

初の誤會には、婦人參政權問題が、議題に上
つたほどである。
【藤軒日記】 日記 三册 寫【著
者】 藤軒大波【解説】 この書は、手弘大波の
漢文で記された日記である。第一册は天明十
六年甲辰六十四歳の時に起り、同年四月一日
より、同十七年乙巳七月に至り、第二册は同
年八月一日より、同十八年丙
午五月に至り、第三册は同月
十一月より、同年十二月に至
つてゐる。手弘大波は、東福
寺住持を退き、堺に隠棲して
病を療つた。この書は當時の
日記である。常に藥所に親し
み、讀書に耽つてゐることが
見え、内外の學問に關する記
事が多い。(田中)

ながら鬼になりし事○蛇の子を殺して報を請
し事○二十二年を事て妻殺を討し事○女の執
心夫をくらふ事○妾語の罪によりて腹なへた
る人の事。(卷之三) 女の執心人にかたきを
討する事○祖父の死靈來りて祖母を喰殺す事
○盛せしもの神罰をかうふる事○猫の生靈人
に祟をなせし事○長谷の空平雲の事。(卷之

念鬼の面に移る事。正直の人娘の種を遺る事。...

田新草屋町西村年兵衛、皇都三條通西村市郎...

名簿は、その中の假名字、浮世草子に属する...

五種の説話を配して、各々これを四章に綴つた...

諸國風土記逸文 諸國風土記逸文の著者は...

諸國風土記逸文の著者は、山家鳥見歌に見よ...

大凡各別項を主とする。 治承の初期は...

みられたのである。これ等の代表的な手として...

分類の精緻、材料の豊富、既に耳聞乎
波研究史上の偉業である。耳聞乎波の分類
として見るべきものは、廣隆の『詞の玉璠』の
説であつて、廣隆はその所謂辭源を論じて、
言(體言)詞(動詞)また動辭(動詞)に繁り、上
の意を下なる言詞に言ひ掛けて、下の結に拘
ると拘らぬとの二種と、頓・款・結・下知とな
り、また上の意を同ひ掛けなどして斷ちて止
むる一列と、併せて三種あると云つてゐる。
明治になつて、また助詞について論ずるもの
が多い。そのうちで、山田孝雄氏の『日本文法
論』、岡津祐太郎氏の『日本文法論』等は見
るべきものである。

【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄
【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄

とす。書誌学の考査の範圍に關しては、
種々の説があつて一定しない。(一)圖書に關
する一切の事項、即ち書物に就いての種々の
研究記述の一切を包含するとなすもの。(二)
一切の書物及び印刷物、並にこれに直接間
接あるもの。(三)刊本について研究
する。寫本は除外するもの。(四)著者・印
刷・版式・版次及び分刷の事を含むとなす
もの。(五)第四項中分類を除くものとなす
もの。(六)書目と解題に限らんとするもの。
(七)圖書の分類なりとするもの等である。大英
百科全書の説によれば、(一)圖書の分類、(二)
圖書の書誌の四項をその範圍となしてゐる。
(一)圖書の分類、(二)圖書の書誌、(三)圖書の
研究、(四)圖書の保存と云ふ。(三)圖書の研
究、(四)圖書の保存と云ふ。古書の原本を發見
し、疑點に對して考證をなし、若しその圖書
にして不完全なものであつたならば、その不
備の點を補正し、若し完全なものであつた
ならば、更に自筆か否かの寫本の鑑定をなす
もの。(二)圖書の分類とは、或る一の圖書に
就いてその歴史を究め、筆書の上から印刷
の上から、その筆寫出版などの様式及び年月等
これに附屬する種々の事項を檢して、(一)書
名及び著者名を確定すること、(二)圖書の形
態及び形式、頁數、活字の種類、彫版印字な
上の事項を完全にし、(三)その書目、編纂
とは、圖書の内容の細目をよく檢し、これ
に關する種々の事研究し、且つ書物の排列
についての研究をなすこと、(四)書誌の書誌
とは、東西古今の書籍の目錄を編纂すること
である。H. Taine の『歴史の科學』に、大英百科全書
の歴史に於て、書誌学を寫本論と刊本論とに
大別し、刊本書誌学を次の如く分つてゐる。

種々の説があつて一定しない。(一)圖書に關
する一切の事項、即ち書物に就いての種々の
研究記述の一切を包含するとなすもの。(二)
一切の書物及び印刷物、並にこれに直接間
接あるもの。(三)刊本について研究
する。寫本は除外するもの。(四)著者・印
刷・版式・版次及び分刷の事を含むとなす
もの。(五)第四項中分類を除くものとなす
もの。(六)書目と解題に限らんとするもの。
(七)圖書の分類なりとするもの等である。大英
百科全書の説によれば、(一)圖書の分類、(二)
圖書の書誌の四項をその範圍となしてゐる。
(一)圖書の分類、(二)圖書の書誌、(三)圖書の
研究、(四)圖書の保存と云ふ。(三)圖書の研
究、(四)圖書の保存と云ふ。古書の原本を發見
し、疑點に對して考證をなし、若しその圖書
にして不完全なものであつたならば、その不
備の點を補正し、若し完全なものであつた
ならば、更に自筆か否かの寫本の鑑定をなす
もの。(二)圖書の分類とは、或る一の圖書に
就いてその歴史を究め、筆書の上から印刷
の上から、その筆寫出版などの様式及び年月等
これに附屬する種々の事項を檢して、(一)書
名及び著者名を確定すること、(二)圖書の形
態及び形式、頁數、活字の種類、彫版印字な
上の事項を完全にし、(三)その書目、編纂
とは、圖書の内容の細目をよく檢し、これ
に關する種々の事研究し、且つ書物の排列
についての研究をなすこと、(四)書誌の書誌
とは、東西古今の書籍の目錄を編纂すること
である。H. Taine の『歴史の科學』に、大英百科全書
の歴史に於て、書誌学を寫本論と刊本論とに
大別し、刊本書誌学を次の如く分つてゐる。

【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄
【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄

【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄
【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄

【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄
【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄

特色を持つては、その類似の點を求め
て分類すると、凡そ儒・道・陰陽・法・名・墨・從
横・雜・農の九の流派に大別し得るので、これ
を九流百家、或は九流百家の學とも云ふ。『由
來』皇紀二世紀から五世紀の初頭に互る三百
有餘年間の支那は、政治的にこれを觀れば所
謂春秋戰國の世で、中心を失ひ統一を缺いた
時代であるが、これを文化史の上から論ずれば、
言論の自由な思想の最も華やかな時代で、
儒教を初め、幾多の學者思想家が興起して、
互に言論を競はして世に用ひられようとす
所謂諸子百家の學が起つたのであるが、その
書はもと儒家の六經と同様に讀ばれて居つた
が、漢初、董仲舒が武帝の問に對して、『諸々
六藝の科、孔子の術に在らざるものは、皆其
の道を絶つて、並び進むこと勿からしめん』
（實錄三）と言ひ、帝も亦これに従つて儒教
を用ひて以來、六經以外の書は、その次に位
することとなり、劉歆の『七略』に至つて、初め
て分類上明確にこれを區別した。而して諸子
の學流を分類して、九流を分つたのも同じく
劉歆を以て初めとする。支那の先秦の古書は
一度秦の始皇帝によつて焼く棄てられたが、
漢が興るに及んで、燒け残つた舊典を搜集し
て、文選の復興を圖つた。即ち武帝は孫公相
孫弘に命じて、劉歆の學を以て天下の遺
書を求めしめ、光祿大夫劉向をしてその整理
に當らしめた。然るに武帝の世に及んで、劉
向がその事業を完成せしに及ばなかつたので、
劉歆が劉向によつて父の業を繼ぎ、遂に『七略』と
稱する分類目錄を作つた。この書
は今既に亡んで傳はつてゐないが、後漢の班
固の手に成つた『漢書』の藝文志(第三十卷)は

「七略」に從つて書かれたもので、これに依つ
て吾々はばその内容を窺知することが出来る。
而してこれに據れば、先に司馬遷の父司
馬談が、周末の諸子を陰陽・儒・墨・名・法・道徳
の六家に分類して評論した(史記太史公自序)も
のに、更に縱横・雜・農の三家を加へて精密な
らしたもので、劉歆の分類は彼の創意に出
たものでなく、恐らく當時の學界の通説であ
つたと思はれる。藝文志はこれに小説家を
加へて十家としてゐる。

【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄
【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄

【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄
【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄

「七略」に從つて書かれたもので、これに依つ
て吾々はばその内容を窺知することが出来る。
而してこれに據れば、先に司馬遷の父司
馬談が、周末の諸子を陰陽・儒・墨・名・法・道徳
の六家に分類して評論した(史記太史公自序)も
のに、更に縱横・雜・農の三家を加へて精密な
らしたもので、劉歆の分類は彼の創意に出
たものでなく、恐らく當時の學界の通説であ
つたと思はれる。藝文志はこれに小説家を
加へて十家としてゐる。

【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄
【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄

【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄
【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄

【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄
【参考】日本文法論 山田孝雄 ○日本文法論
岡津祐太郎 ○日本文法論 岡津孝雄

二 録 目 籍 書

Table with 2 columns: Title (e.g., 天台宗), Author/Editor, and other details.

全大録目籍書益廣 刊年五録元

Table with 2 columns: Title (e.g., 天台宗), Author/Editor, and other details.

録目籍書 刊年四層實

Table with 2 columns: Title (e.g., 法華文句), Author/Editor, and other details.

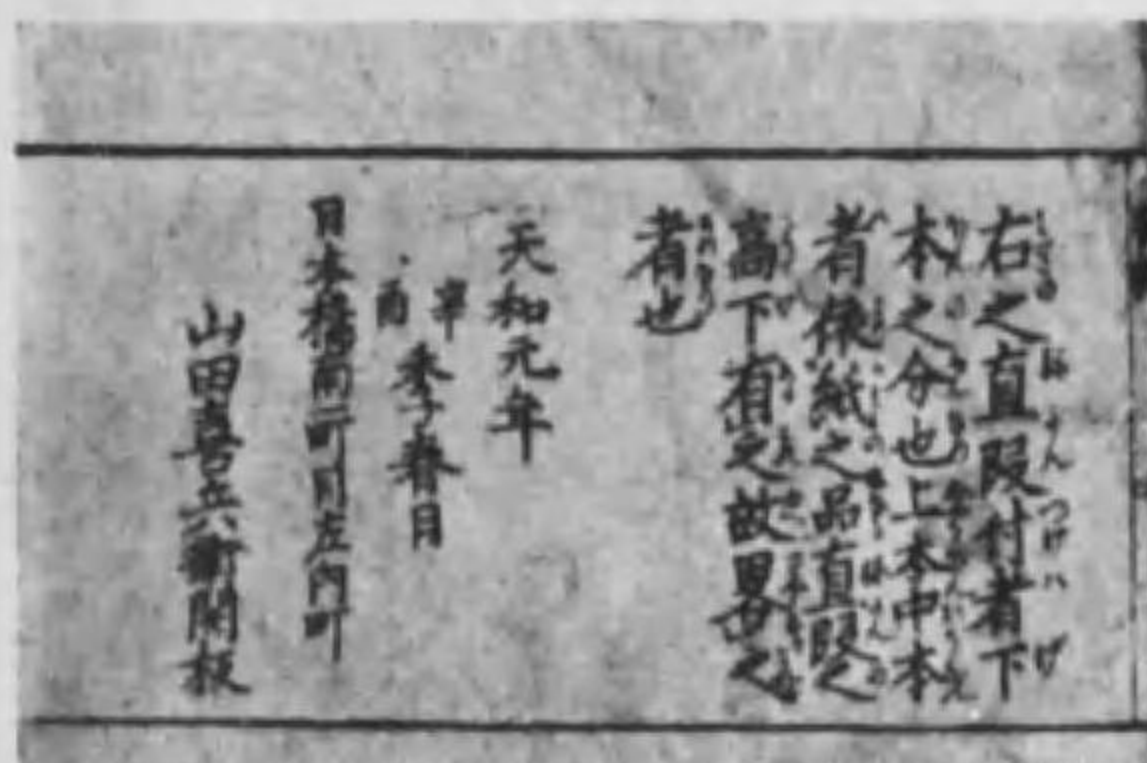
録目籍書新 刊年四十保享

Table with 2 columns: Title (e.g., 天台), Author/Editor, and other details.

録目籍書 刊年九和明



紙表巻下 録目籍書増新 板門衛左兵本舊年元和天



裏扉 録目籍書増新 板衛兵喜田山刊年元和天

Table with 2 columns: Title (e.g., 法華文句), Author/Editor, and other details.

録目籍書増新 板門衛左兵本舊刊年元和天

Table with 2 columns: Title (e.g., 法華文句), Author/Editor, and other details.

録目籍書益増 刊年一十録元

うち、後に詩人として大成したのは一人もなかつた。花袋は小説に赴き、岡野は民俗學者となり、阿歩も小説に轉じ、湖島子は教育者となり、嵯峨之舎は文壇を退き、玉若は編衣の徒として終つた。時後を持つてゐるのは湖島子、阿歩の兩人であつたが、共に一種の特長を認められつゝも、藤村、晩景對立の詩壇に一旗幟を樹てるに及ばなかつた。...

抒情文 抒情文とは、作者の感情を寫し出したもので、他の文種との關係を言へば、抒情文はその感情の由つて来る事物を叙べるには、敘景文別項もしくは敘事文別項を借り、敘事文も亦その効果を多くするために、抒情文の力を借りることもある。即ち文の實際では、抒情文と敘事文とは、相混じり出入して當然と區別し難いことが多い。文の主眼が敘事にある時は敘事文と名づけ、抒情が主眼となつてゐる時は抒情文といふのである。...

初心假名遣 〔著者〕未詳 〔刊行〕元禄四年八月 〔内容〕假名で書く時、假名遣の誤りならしめられため作つたもので、天地時節、家屋、國名、所名、神祇、釋教等三十二門に分けて、假名の誤り易い漢字を挙げ、語毎に誤る假名と正しき假名と漢字を示してある。その假名遣は主として定家假名遣(假名遣無用)に基づいた。...

書道の別名として用ひた。〔書法〕 筆の、雙鈎、提管、捺管、控管等の諸法がある。(一)單鈎法は提指と食指で筆管を執り、中指を後に添へて字を書く法で、細字假字の如き小さい文字を書くには至極便利な執筆法である。(二)雙鈎法は提指と食指・中指を以て書く法で、大字中字を書くには筆力を十分發揮することが出来る。...

〔日本〕三韓との交通以來、彼の國の文物が渡

124124 124124

六〇五

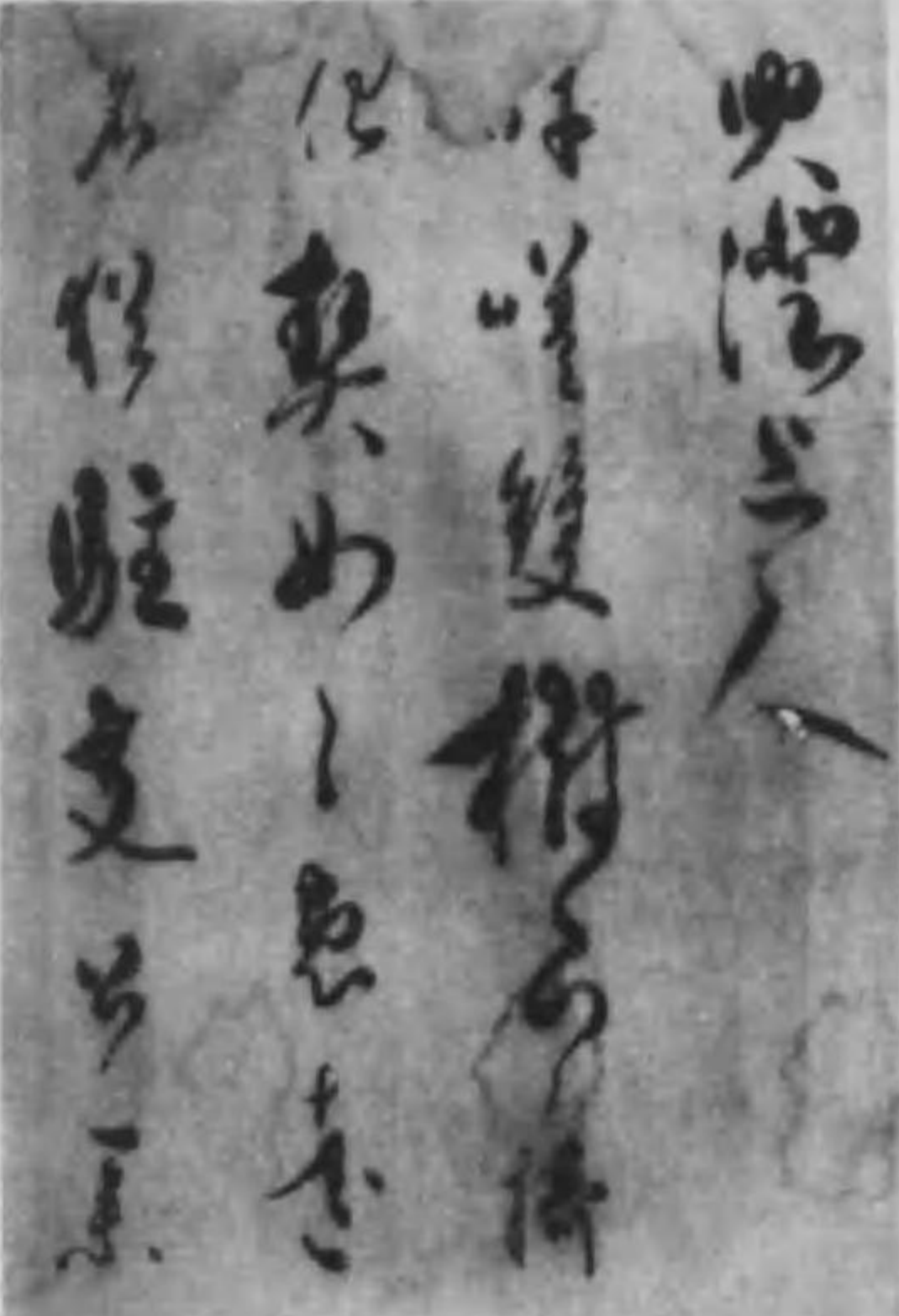
来すると共に文字も傳來し、その弘通と共に巧拙風趣などを批評するやうになり、こゝに書道が問題となるやうになつたものと思はれる。彼の王仁の如きは書法にも習熟してゐたものと思はれるが、當時は未だ書道の風致を教へて至らなかつたものか、歴史にその證據もない。その後天智天皇の御代には既に書道が傳へて盛んに講じられたり、彼の二體日本紀(天平勝興八年の條に、「淡海朝書法一百卷、入崇福寺」と見えてゐる。又天武天皇の二年には書生を聚めて一切經を大和の川原寺に於て寫させ、持統天皇の五年には、書博士百濟木士善信等に白銀二十兩を賜つた事などが日本書紀に見えてゐるのに依つて、大寶令以前既に書博士・書學生等を置いて書道を授けしめられたことが窺はれ、又現存する推古天皇以後、天武・持統兩天皇までの御代の(經緯・寫經)・金石文(寫經)等によつても立證せられる。令制に式部省の書省、大學寮の條に、書博士二人を置いて書を教ふる事を掌らしめ、又書學生は寫書の上中以上の者を以て貢とする事を許した。而して書學生の筆蹟の巧劣なを以て宗とし、字樣を習得するのを以て業としなかつた。引續の前後支那留學の事が行はれて、支那の名家の書法結體が多く我が國に傳來し、従つて書道の發達は他の美術と共にその頃から大に進んだ。支那の名家の書法が傳來した中で、王羲之の筆蹟は標榜として引く一世に行はれたと見え、東大寺藏物帳に「書法二十卷、撰晉右將軍王羲之草書、同羲之扁書」と記し、又「萬葉集」に「羲之大王」と書いて、「てし」と訓ませてゐるを以て見ても(王羲之とその子王獻之とを大小二王と稱す)、當時王羲之の筆蹟を手師として

習熟したことを知る事が出来る。奈良の正倉院には羲之の書を習字したものがあり、また聖武天皇・光明皇后の御筆蹟、その他名家の書蹟を見ても、當時二王等の筆蹟を師範とした事が明かである。要するに奈良朝までの書風は支那の南北兩派の書風が並び行はれて居り、我が國人の書いたものも凡て力強い筆蹟で、支那人の筆と殆ど變りがない。次いで平安朝に入り、嵯峨天皇深く書道に好ませられ、また、菅原道長等が支那の書法を傳へて歸朝するなど、書道は愈々隆盛となつた。中に留學中、勅命を被りて、王宮の學士で王羲之の筆が一間破損してゐたが、その人を得なかつたから、晋代から唐代まで調べてゐたのを補ひ、又左右の手足と口とに筆を執り、同時に五行の文字を書いて五筆和尙の名を得たと傳へられてゐる。その書風は變化が自由で、神飛び魂動といふべく、世にその書風を大體の二體といひ、嵯峨天皇と空海を尊稱して入木道の二聖といつた。逸勢は神宗元の筆法を傳へて、最も體に妙を得、唐人はこれを呼んで「神秀」といふことである。以上三の書を世に三筆(別稱)といふ。當時から書道は愈々隆盛を極むと共に、書風の上に幾分の變化を生じ、支那風を脱却しつつあつた。この過渡期に出た有名な人々には、小野篁(紀實)・井原原房(小野篁材・菅原道長等)であるが、等いで天曆・天喜の頃にはこれ亦、三筆(別稱)或は三賢として有名な小野道風・藤原佐理・藤原行成を初め、紀實之大江朝綱・藤原親王・小原行成・藤原道長・藤原公任・藤原定家・藤原頼通・藤原忠家など、多数の能筆家が相繼いで出てゐるが、この頃になると、既に過渡期を過ぎ

て、支那様の硬い筆法は無くなり、優麗なる日本風のものとなつて來た、この風は假名書(別稱)に於て極まつてゐる。この王代に於ける和様の書風は、一般に上代・中代・下代と上代流とか呼ばれ、我が書道史上最も重要な事柄である。而してこれ等上代・中代・下代流と云ふべきは小野道風である。道風は草書體を善くし、二聖の後を繼いで新體を出した。その書體は寛平・延喜・長祿・天長、世にその筆蹟を野跡と稱して尊重した。道風が出でて唐様の書法が漸く變つて和様を創め、こゝに和漢の書法を興にするに至つた。紀實之また草假字體を善くし、能書の名が一世に著聞した。道風の書法はその子孫時がこれを傳へて參議藤原佐理がこれを學時に承けた。佐理の筆蹟は世に佐理といひ、清楚にして雅朴の風を帶び、唐人の詩とする連綿綿綿の草體にも巧で練達の妙を表はし、和様書風の特徴を愈々發揮するに至つた。「新撰樂記」に佐理の筆蹟を賞めて「佐理之一筆之様」と云ひ、又永延二年嵯峨の僧徒は佐理の手書二卷を宋朝に贈らしたといふ事である。等いで藤原道長・藤原行成が彼の野跡を創めて、これに和様を加へ、世に「草假字」を大成した。世にこれを權跡といふ。かくてその子孫長朝の御右筆を勤め、上代様の中心となり、爾來、能書も非能書も皆權跡を師範として習熟し、行成を尊稱して本朝人木道相承の大祖とするに至つた。然るに世尊寺家の筆道にも盛衰あり、伊房・定信・伊行・行能などは出色の方であるが、大體時代が下るにつれて拙劣となり、却つて他より多くの名筆が現はれて來た。今、院政時代より鎌倉時代を経て南北朝時代にかけて

の上代様の主なる人々を舉ぐれば、藤原師通・藤原公經・藤原光俊・源俊房・源實朝・藤原兼光(在性寺)・源賴政・西行・藤原成成・藤原兼實・藤原良經(東山)・寂庵・藤原俊成・藤原兼房・源實朝・坊門局・藤原家隆・藤原定家(定家)・宗尊親王・後宇多天皇・伏見天皇(伏見院)・後伏見天皇・花園天皇・後醍醐天皇・兼好・兼光・王(尊圓)・青蓮院・西園寺・素直・光厳天皇・後光厳天皇・後醍醐天皇などである。中にも、法性寺關白忠通は、權跡を意つてのち一流を成した。これを法性寺流(別稱)と云ふ。この流は孫の後醍醐院政長親によつて繼承せられ、鎌倉時代の初期に於て、全盛を極めた。後成・定家父子の如きもこの流を學んだものであるが、定家は更に自家獨特の流風、恰も野跡の如き書風を案出し、定家流として天下後世に傳へられた。又宗尊親王は上代様の古法を傳へて一流の名手であらせられ、伏見天皇は殊に假名書を以て優れ給つたが、その第六の皇子で、天宮座主青蓮院門跡の尊圓親王は青蓮院流即ち所謂御流(別稱)の始祖として後世に影響が大きい。親王は初め書法を世尊寺行房に學び、行房が延元二年(前金ヶ崎で歿)した後は、その弟行尹に就いて入木道の筆法を承けられた。併し親王は師家の筆法へて結構の流弊に墮してゐるので、上代の古法を參照して一家の書法を創め給つた。その書風は上代様の一層豊麗にしたもので、爾來々々の書道院門跡これを繼承し、天下後世に弘通するに至つた。殊に豊臣秀吉の右筆であつた建部傳内賢文は、この流より出でて更に傳内流を興し、その子傳内昌興に至りて江戸幕府の右筆となつた。江戸時代には普通教育たる寺小屋に於ても多く御流を授けたので、四

一道書



(藏院運青) 帝宸皇天順德

女成書先進勞度者如伏在軌道運通自是
 最長河洞極端無極端變水沈頓以運林
 去國心理通早
 津上
 法津心運津心真主其真當備三福業於十
 方國實地安堂則道華華身難逢有慶多
 往恨無人
 法教心運津心真主其真當備三福業於十
 統家火始安堂則道華華身難逢有慶多
 書道三東
 隆恩忠 慎口言 以內忠 是外孫

(藏院會正) 集雜論宸皇天武聖



(物御) 文順御王親内子都伊筆勢邊撰得

忽披相乃之領陶尔
 御香兩畧及左衛士
 皆尊書狀益從領
 乾迫以法係若爾後
 披過此法期彼雲

(狀披忽) 狀書筆自海空

三道書



(藏氏子淳森谷) 息清御答贈御王親親啓



(藏御家宮見伏) 案狀讀御論皇天見伏



(藏公禮文衛近) 日記筆自伊信衛近

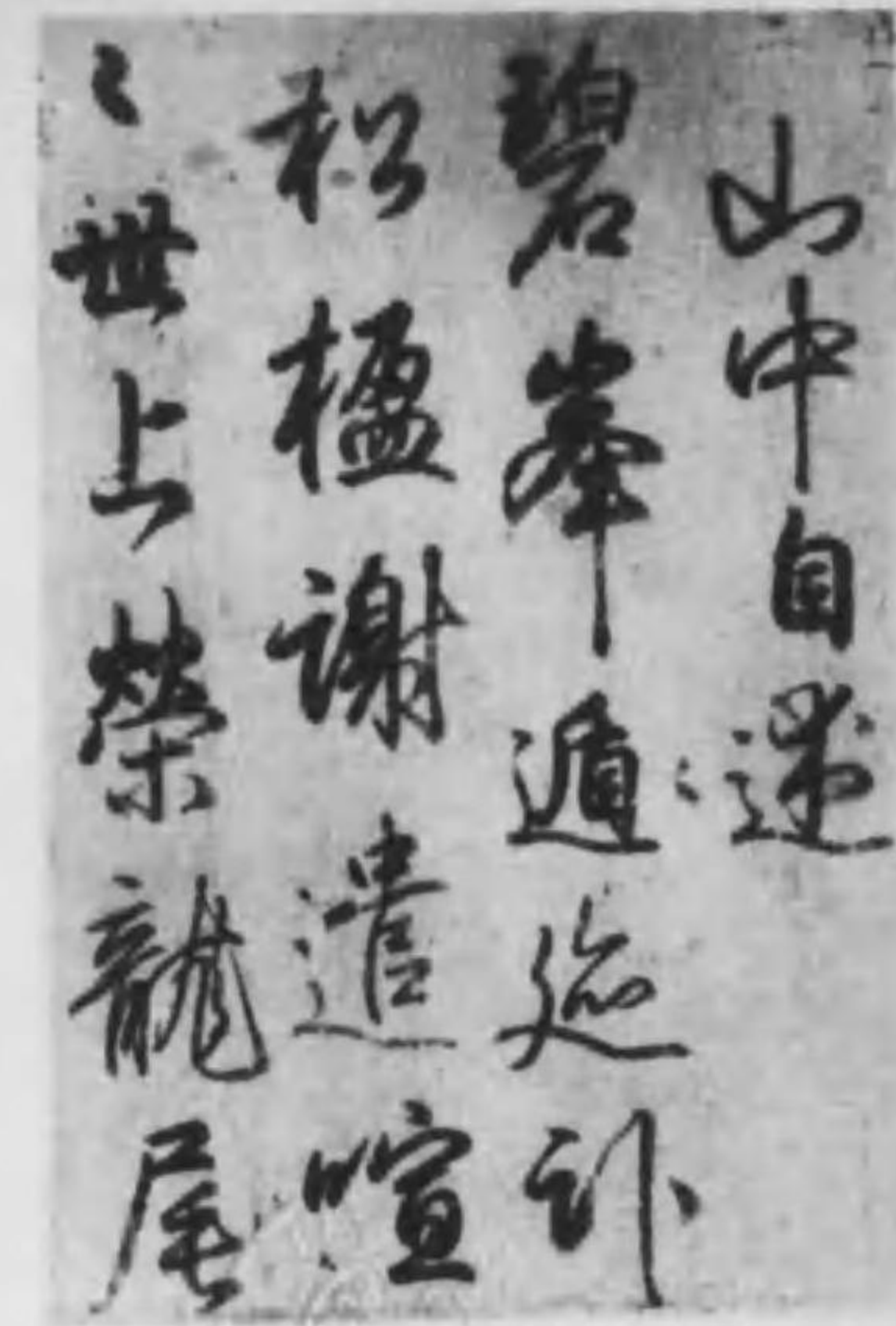


(藏子維元利毛) 息清御論皇天原拍後

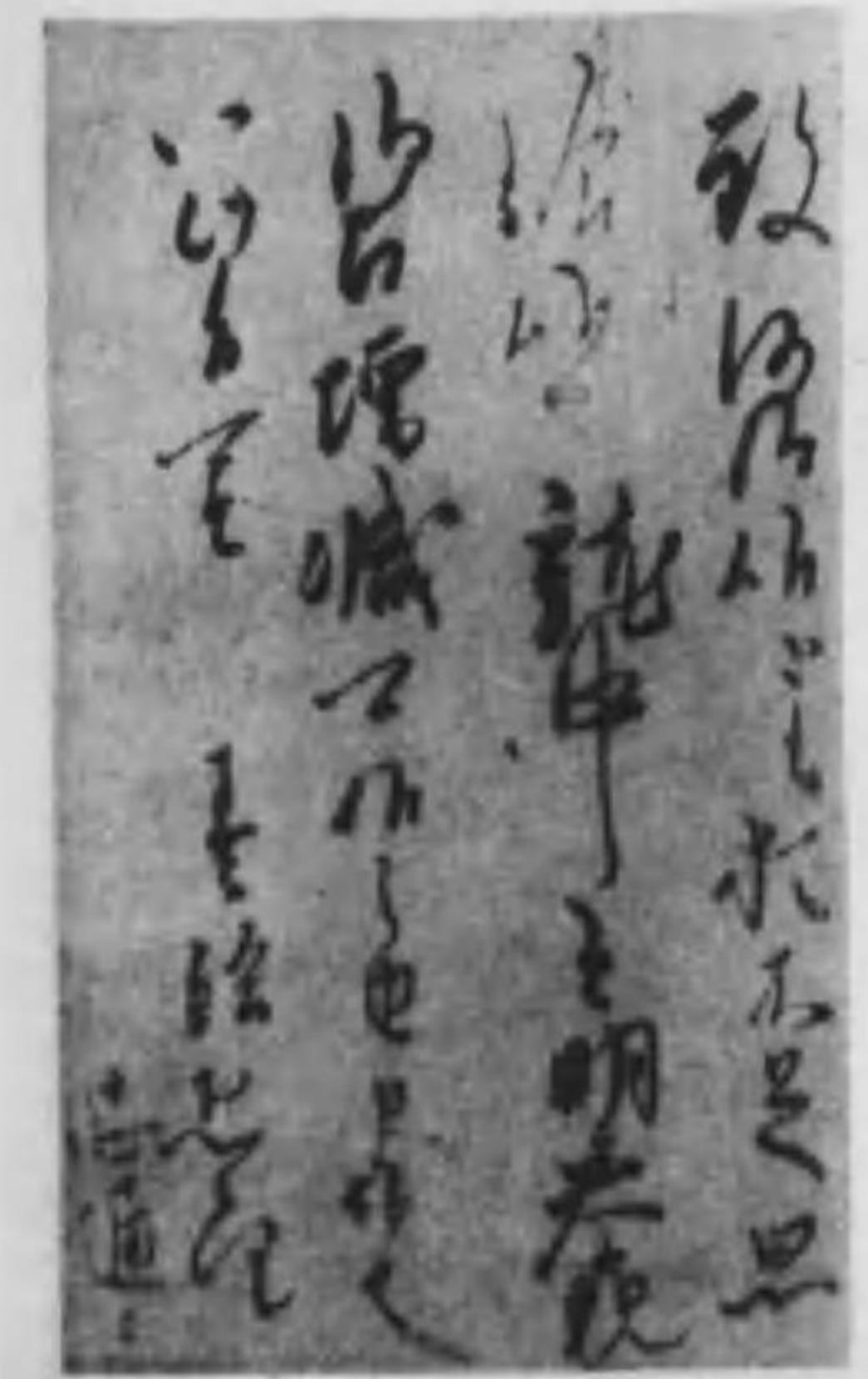
二道書



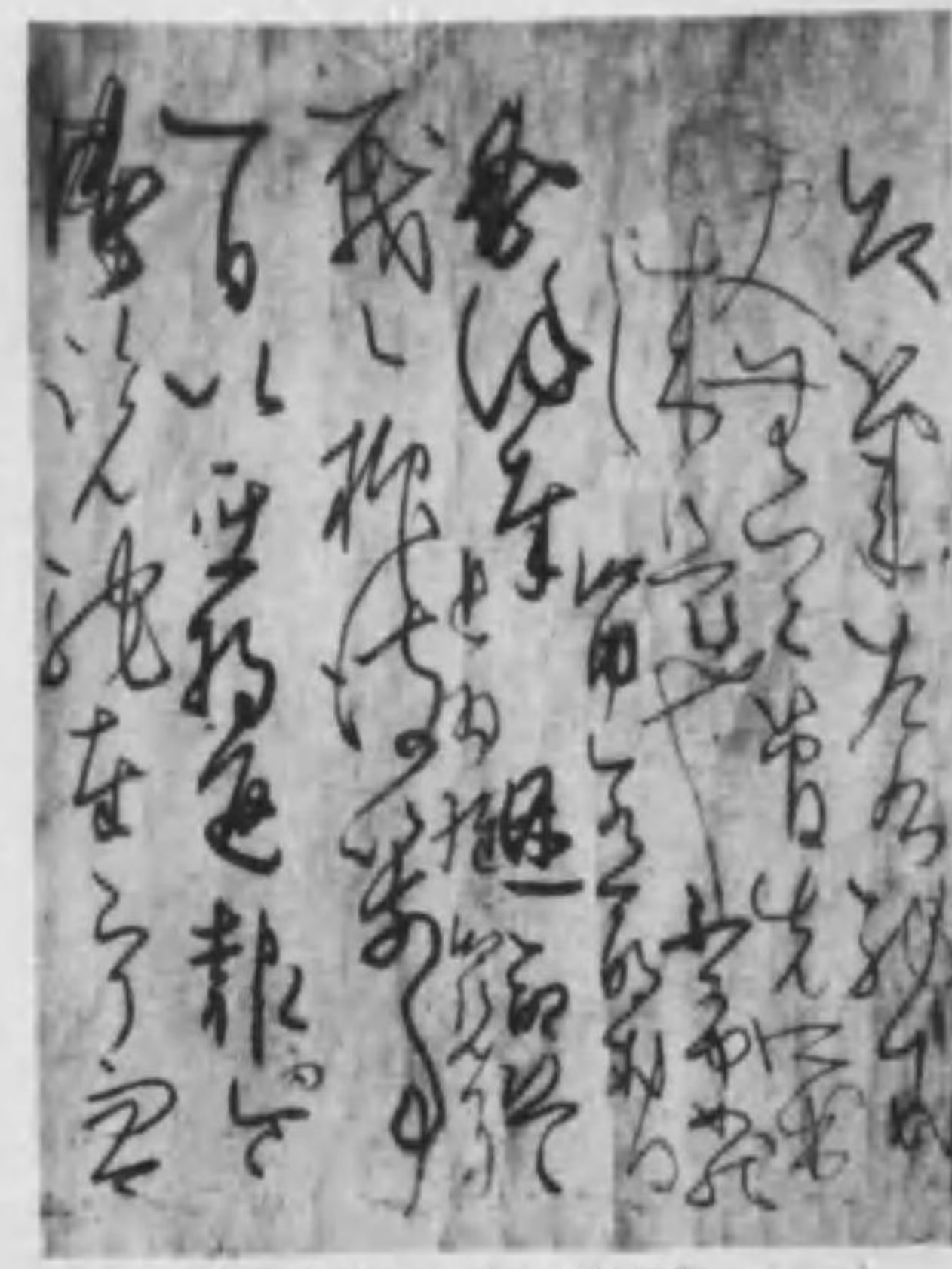
(藏御家宮松高) 集文氏白筆成行原藤



(藏家侍候上井) 代土風屏風道野小

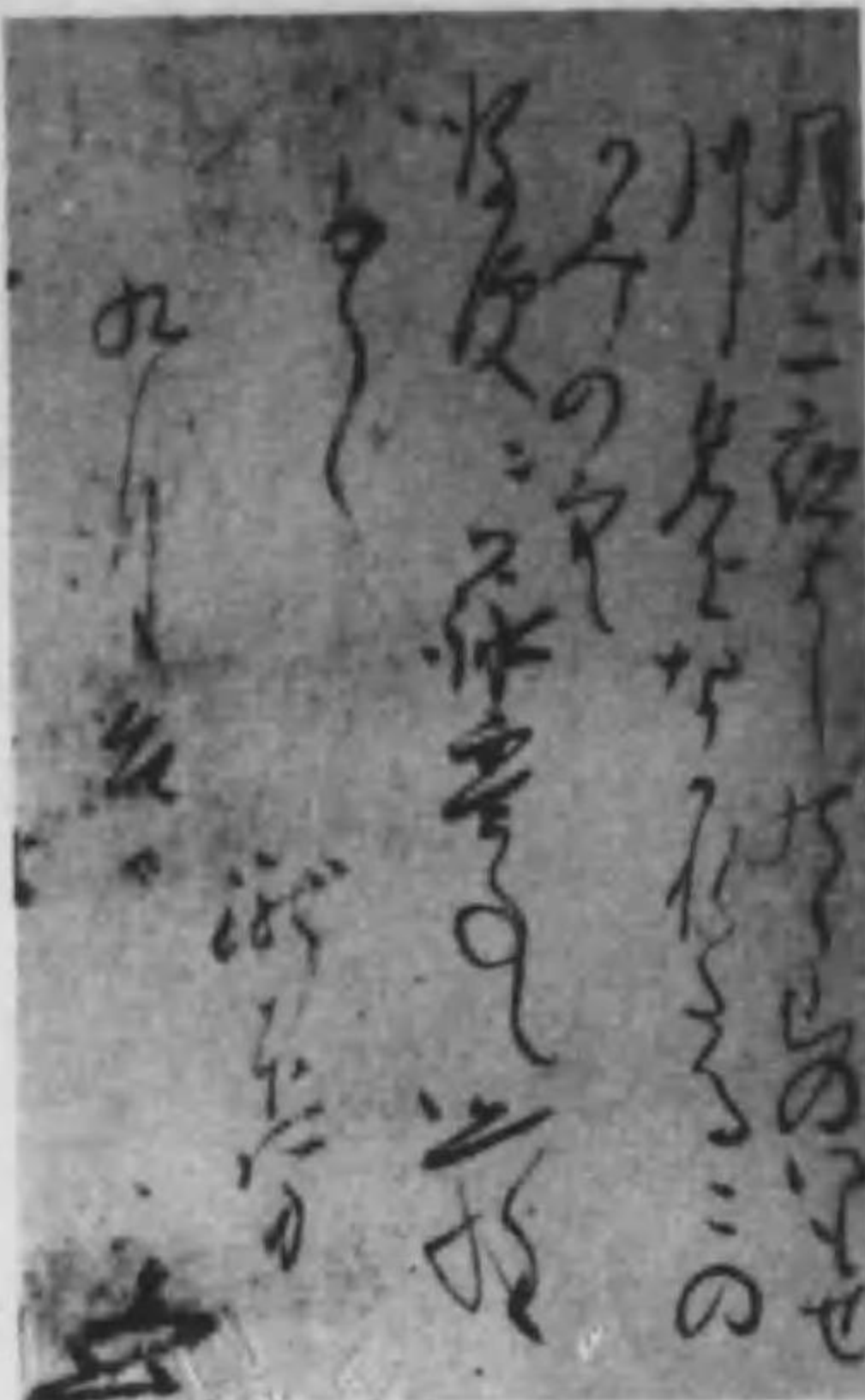


(藏家門御土) 狀書筆自道忠原藤



(物御) 息清筆自理佐原藤

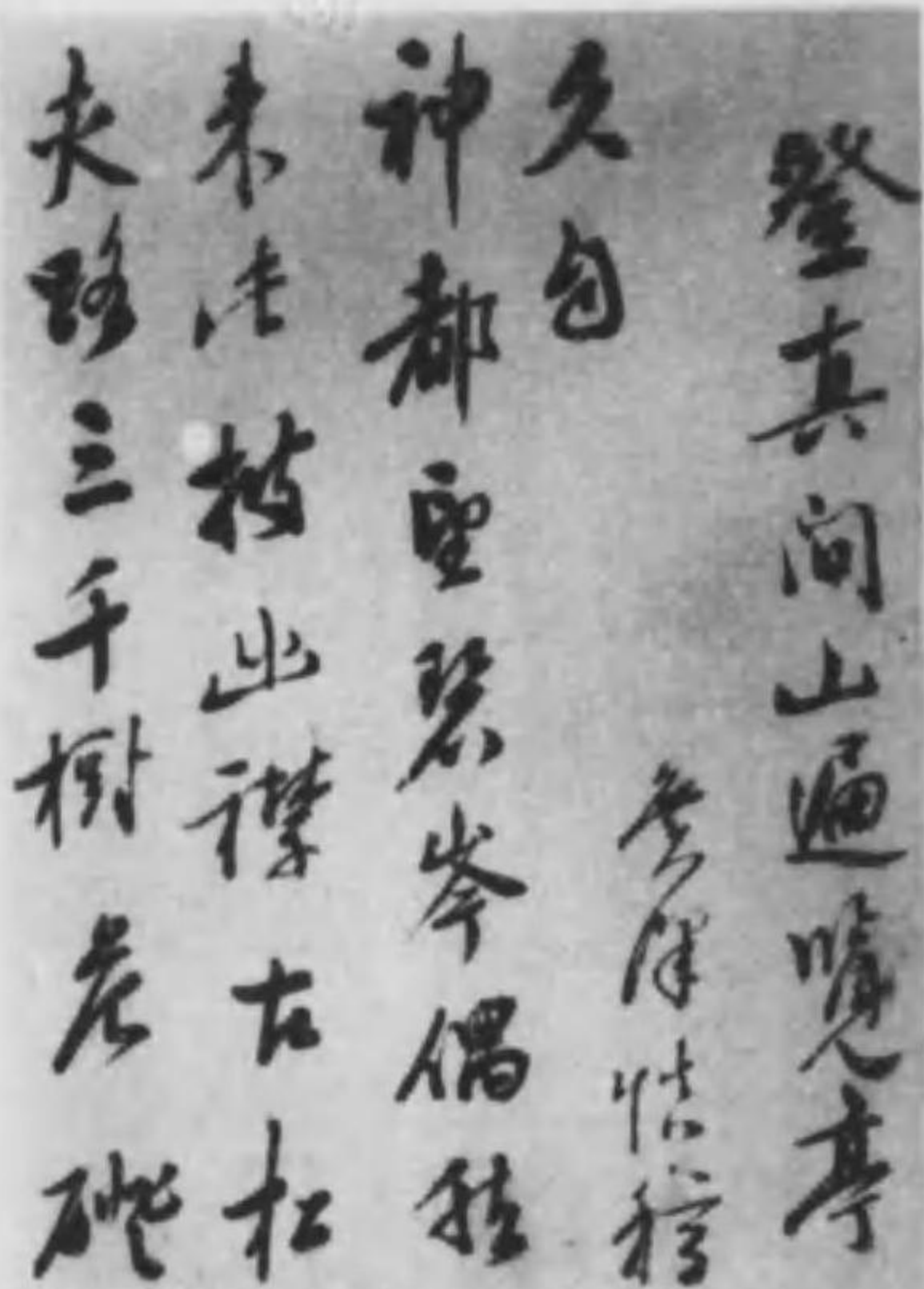
四道書



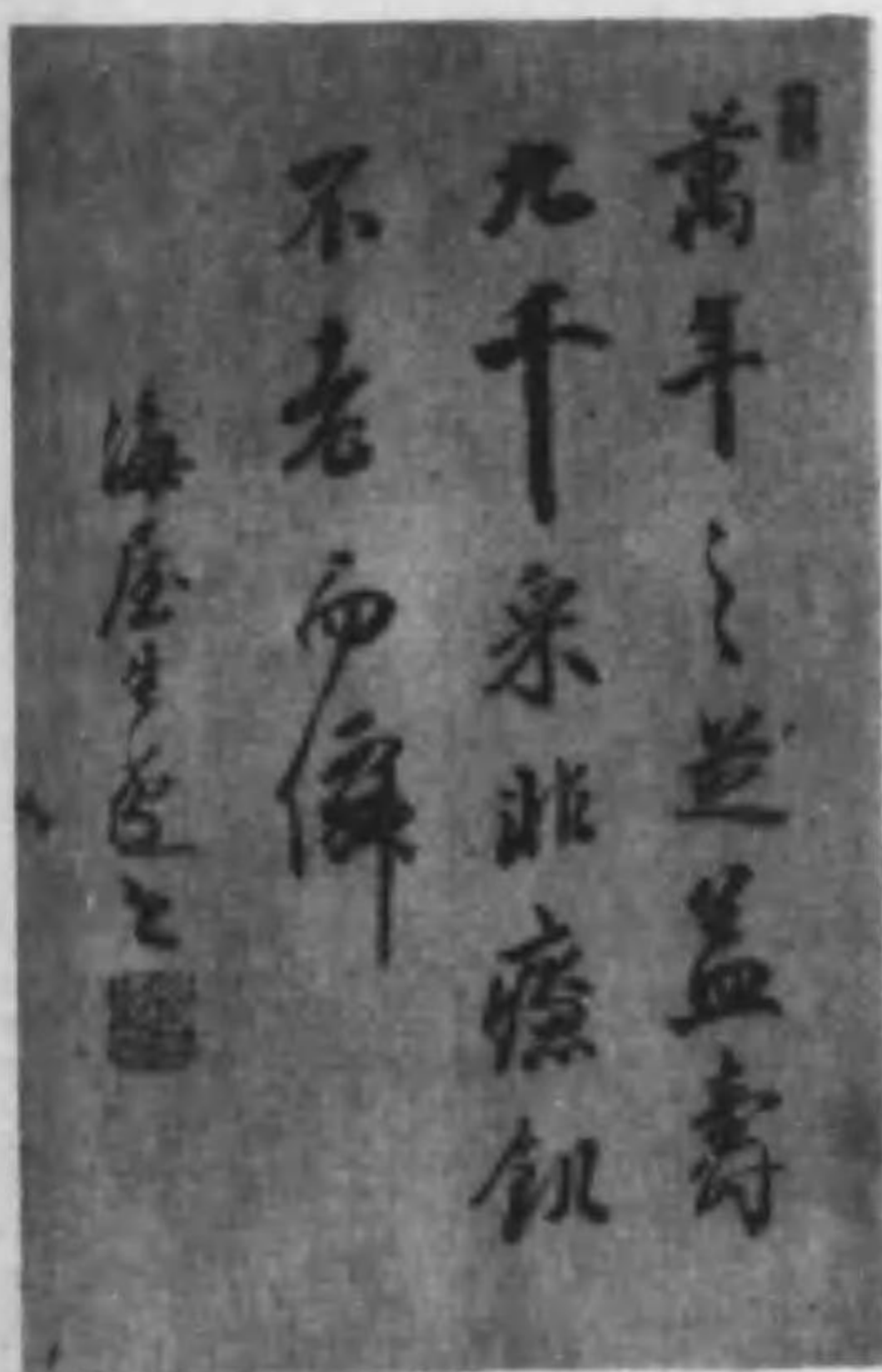
(藤氏古當吹韻) 狀書筆自乘昭堂花松



(藤氏郎六原) 物巻歌和筆自悅光圃阿本



(藤氏之野高) 詩古言四筆自原海名貞



(藤氏之野高) 詩古言四筆自原海名貞

民の間に弘通したのである。さて又、一方僧...

は擧ぐべき重要な事項は、先づ鎌倉時代に...

今は家業の刀劍の鑑定を初め、繪畫・陶器・時...

流と稱して持てはやされたものである。然る...

【解説】圖書の目録。何等かの目的を以て幾つかの圖書を編録したもの。単に書名を記したものと、更に解説を附したものとある。解説を附したものは、編者や著者、刊行年(書名)版次、発行所、形状等を簡単に記載したものと、更に一層詳細に圖書の外形方面(内容)に五つてある場合もある。を記述したものとある。解説と云ふのは、後者を意味する。しかし解説は、一個の圖書についてなされた場合をも云ふ。書目解説と重ねて用いたものもある。【種類】圖書を編録する際に、(一)或る一定の時、處に於て、現に存在するものを記載しようとしたものがあり(例へば、日本國見書目録)、この中には、管見用のもの(所蔵書目録)、個人蔵書目録(通人蔵書目録)等、開館の蔵書目録(圖書部蔵書目録)などがある。(二)必ずしも現存するを要せず、或る事項に關する圖書を網羅しようとするものがある(日本國の軍文圖書を編録した大日本書紀、開村全大蔵の在籍書目録等)、この方は事項が幾数にある以上、種々の種類があるわけである。【著者】種々の種類があるわけである。【著者】種々の種類があるわけである。【著者】種々の種類があるわけである。

らも、三十にあまれる年月をかぞへみるに、夏の夜の夢もあだにこそ覺ゆれ、けふよりのなごり、四十五を経て百世になりぬとも、又かくのごとくなるべしと云つてを。この詞より考へて、當時五十位の人であるから、天正の末年に生れ、承應四年までは生存したことが確實であるから、その後程なく歿したと推定する。はば七十餘歳と推定される。【附録】確實な事は判らない。實傳説に従へば松平光仲(新太左衛門尉)に仕へた備前守、浪人し、喜兵衛時盛・又右衛門(無名)の二子がある。鬼も角(可笑記)によると、天正十六年、本庄正宗の鎧刀で有名な、出羽庄内子安合戦に戦死した正宗の持主東藤守右馬頭は、如備子が母方の舅であると云ひ、又上杉景勝麾下の將大井右近は、彼のをちであると言ふ。されば彼の父は、最上若しくは上杉に仕へた歴々の武士であつたが、運拙く浪人となり、流離のうちに被後で父を失ひ、母を伴うて江戸に出で、知識を助けて仕へることを志す。一時、時勢を助けたこともあるが水滸せず、一生不遇に終り、晩年佛に歸依したことが、その著作で知られる。

【著作】可笑記(五巻別題)寛永十三年成り、寛永十九年刊。〇百八丁記五巻、寛永四年成り、寛永三年刊。この書は如備子が寛永の、即ち彼が門下で働いた後のもので、大體三教一書を唱へたものであるが、中には佛法に關するものもある。【人物】彼は自ら小男であつたと云ふ。併し顯赫な實績で、武人に稀な學問を好み、歌も読み、詩も作り、かどの文人で、東北生れの

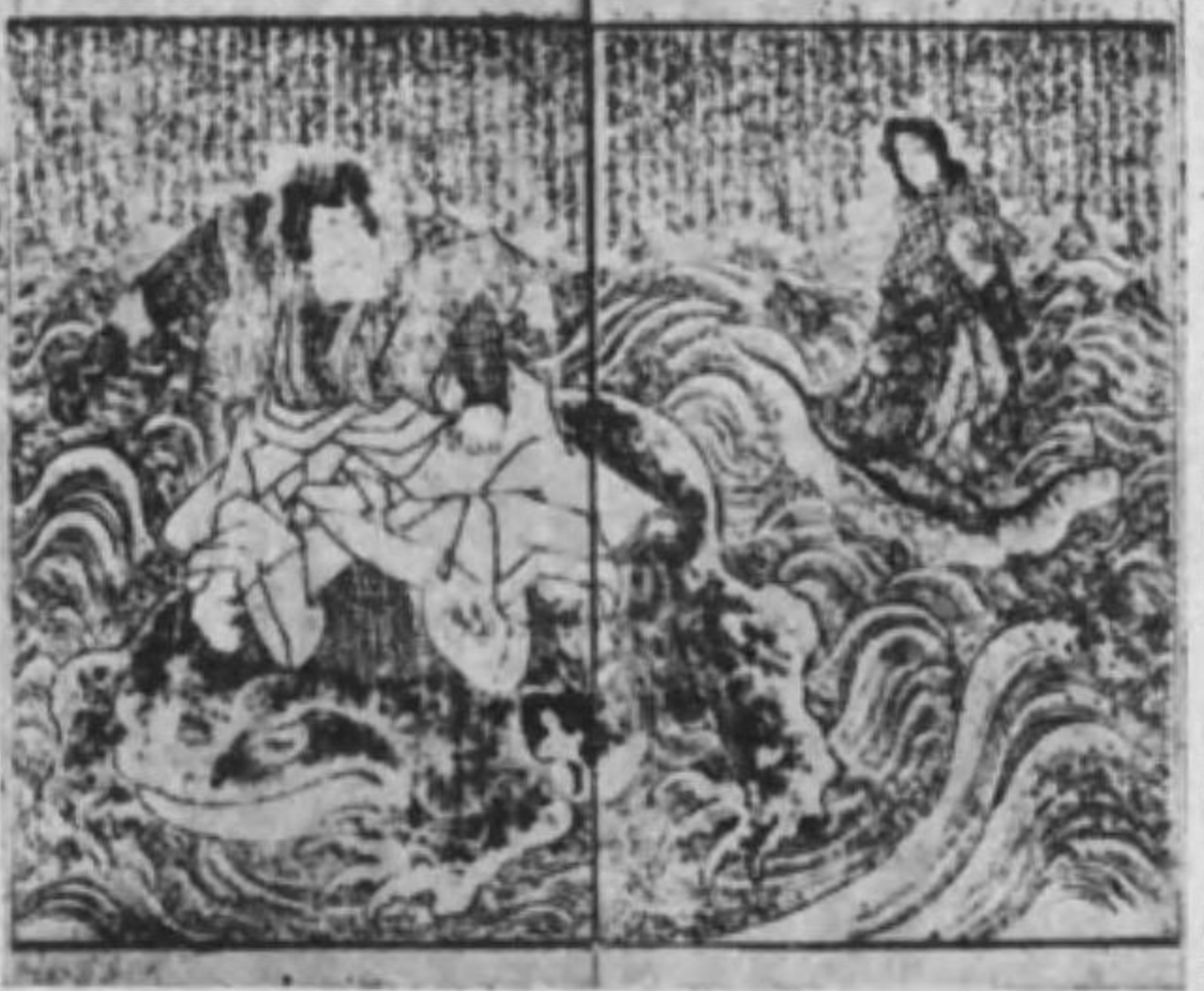
【著者】新撰列傳小説史(前編)水谷不則(可)可笑記の著者如備子は何人か、森三(日本書紀)六(二)【緒分床軍談】(書工)川島信清【本編】通稱分床軍談【刊行】正徳年間板【解説】大坂北濱に、五代續いた資家家の嗣子長太郎は、茨城屋の太夫にかゝつて怨み身代分散の憂目にあひ、各町に住所を求めて貧窮の生活を送つてゐる。夜店を見に出かけ、四橋の所で五十歳許りの女に、戒壇の柳を川中へ落したから拾つてくれと言はれたので、一時は立腹したが、その女が死んだ母親によく似てゐるため、怒を抑へて川中へ入つて柳を拾つてやる。お禮にその女から色道楽時の一巻を買ひ受け、都に上り頼問となつて暮せと教へられる。こゝに高松屋吉吉、香具屋平次といふ大盛がある。各々その頭字をとつて、高松屋香字と呼ばれ、天晴大盛振りを演舞しようとするが、未だ修業足らずして、幹に至らな

【解説】圖書の目録。何等かの目的を以て幾つかの圖書を編録したもの。単に書名を記したものと、更に解説を附したものとある。解説を附したものは、編者や著者、刊行年(書名)版次、発行所、形状等を簡単に記載したものと、更に一層詳細に圖書の外形方面(内容)に五つてある場合もある。を記述したものとある。解説と云ふのは、後者を意味する。しかし解説は、一個の圖書についてなされた場合をも云ふ。書目解説と重ねて用いたものもある。【種類】圖書を編録する際に、(一)或る一定の時、處に於て、現に存在するものを記載しようとしたものがあり(例へば、日本國見書目録)、この中には、管見用のもの(所蔵書目録)、個人蔵書目録(通人蔵書目録)等、開館の蔵書目録(圖書部蔵書目録)などがある。(二)必ずしも現存するを要せず、或る事項に關する圖書を網羅しようとするものがある(日本國の軍文圖書を編録した大日本書紀、開村全大蔵の在籍書目録等)、この方は事項が幾数にある以上、種々の種類があるわけである。【著者】種々の種類があるわけである。【著者】種々の種類があるわけである。【著者】種々の種類があるわけである。

【白糸册子】(著者)五巻【作者】芍薬(著者)高橋北斎【名義】詳しくは「白糸册子」といふ。【刊行】文化七年正月(同五年仲夏)【提要】周防大内家の土杉長左衛門は、主君義興の安否を問ふため京に上り、次いで大和諸越に御見をしたが、その時、誤つて土人が佐國の靈として愛する鏡を殺し、歸宅して妻麻生にこの事を話すと、彼女は同じ日に、蜘蛛の風にかゝつた鏡を助けたといふ。その夜麻生は、二匹の鏡が室の外に飛ぶ幻を見て懐妊し、鏡吉といふ子を生み、間もなく病歿したので、長左衛門は乳母お菊を入れて正室とした。お菊は元同國鶴田草村の百姓長蔵の妻で、鏡五郎といふ子があり、夙く夫に死なれて、家老冷泉兵衛の子小太郎の乳母となつたが、兵衛の貧しいのを見兼ねて長左衛門方に轉じ、私に二人の子を養つてゐるのである。さて鏡吉は長ずるに従つて力強く、十四の時奔馬を飼つて放駒の鏡吉と呼ばれたが、又杉十郎一味の駒を懸らしたり、甚勝負に勝つて怪力を現したりしたことが聞えて、遂に義興の二男山口義順の侍臣に召された。當時義興は西國の雄として勢旺んであつたが、多く京に住んで華美の風があり、駒子義隆を疎んじて側室の方の子である義順を愛したので、

【白糸册子】(著者)五巻【作者】芍薬(著者)高橋北斎【名義】詳しくは「白糸册子」といふ。【刊行】文化七年正月(同五年仲夏)【提要】周防大内家の土杉長左衛門は、主君義興の安否を問ふため京に上り、次いで大和諸越に御見をしたが、その時、誤つて土人が佐國の靈として愛する鏡を殺し、歸宅して妻麻生にこの事を話すと、彼女は同じ日に、蜘蛛の風にかゝつた鏡を助けたといふ。その夜麻生は、二匹の鏡が室の外に飛ぶ幻を見て懐妊し、鏡吉といふ子を生み、間もなく病歿したので、長左衛門は乳母お菊を入れて正室とした。お菊は元同國鶴田草村の百姓長蔵の妻で、鏡五郎といふ子があり、夙く夫に死なれて、家老冷泉兵衛の子小太郎の乳母となつたが、兵衛の貧しいのを見兼ねて長左衛門方に轉じ、私に二人の子を養つてゐるのである。さて鏡吉は長ずるに従つて力強く、十四の時奔馬を飼つて放駒の鏡吉と呼ばれたが、又杉十郎一味の駒を懸らしたり、甚勝負に勝つて怪力を現したりしたことが聞えて、遂に義興の二男山口義順の侍臣に召された。當時義興は西國の雄として勢旺んであつたが、多く京に住んで華美の風があり、駒子義隆を疎んじて側室の方の子である義順を愛したので、

【白糸册子】(著者)五巻【作者】芍薬(著者)高橋北斎【名義】詳しくは「白糸册子」といふ。【刊行】文化七年正月(同五年仲夏)【提要】周防大内家の土杉長左衛門は、主君義興の安否を問ふため京に上り、次いで大和諸越に御見をしたが、その時、誤つて土人が佐國の靈として愛する鏡を殺し、歸宅して妻麻生にこの事を話すと、彼女は同じ日に、蜘蛛の風にかゝつた鏡を助けたといふ。その夜麻生は、二匹の鏡が室の外に飛ぶ幻を見て懐妊し、鏡吉といふ子を生み、間もなく病歿したので、長左衛門は乳母お菊を入れて正室とした。お菊は元同國鶴田草村の百姓長蔵の妻で、鏡五郎といふ子があり、夙く夫に死なれて、家老冷泉兵衛の子小太郎の乳母となつたが、兵衛の貧しいのを見兼ねて長左衛門方に轉じ、私に二人の子を養つてゐるのである。さて鏡吉は長ずるに従つて力強く、十四の時奔馬を飼つて放駒の鏡吉と呼ばれたが、又杉十郎一味の駒を懸らしたり、甚勝負に勝つて怪力を現したりしたことが聞えて、遂に義興の二男山口義順の侍臣に召された。當時義興は西國の雄として勢旺んであつたが、多く京に住んで華美の風があり、駒子義隆を疎んじて側室の方の子である義順を愛したので、



白糸册子 鏡吉と鏡五郎

郎(後五郎と改め)を捜し出さる。(四編)兒雷也は深澤に雁八を討たせ、海上に出たところ、陣代の八兵衛六が捕へようとする。大蛇丸を妖術で出し、捕手を海に沈める。兒雷也の山笠屋廻山で、萬浦とたがねの二女は愛を争ふ。萬浦の嫉妬は大蛇丸の怨念からで、たがねを喰ひ殺す。持丸長者は零落する。(五編)長者の伴富貴太郎は兒雷也の同類と誤られ、新海の濱で處刑されるところを大蛇丸が攫つて去る。大蛇丸の胸から赤男兒雷也が現れ、驚は驚の如く消え去る。(六編)兒雷也の本名は尾形周馬弘行で、軍用金を集めるための盜賊である。鎌倉で捕は眼病となる。忠僕の高平と救つた旅の生財とで眼病が全快する。豊衣は今はお六と言ひ、夢の鎌倉の妻である。捕と捉とは強盗兼暗殺軍太左衛門(九郎の改め)に反り討にあふ。(七編)信濃の領主更科判官と越後の領主月影兼領とは和睦して、更科家の田毎を月影家の子息深澤雪之介に娶はす。この際に兒雷也は上使と偽り、月影家所蔵の尾形家の軍勢傳説の刺符月形の印と、尾形の系圖とを盗み見せんとし、高砂勇見之助に裏をかくれたが、二品を妖術で奪ひ取る。(八編)尾形兼領は妻が兒雷也の義妹であるために傍同にあふ。甲斐の黒駒山の萬、浦不二左衛門輝景は、越後、信濃を攻めへんと謀り、兒雷也を味方にしようとする。(九編)兒雷也は、義によつて飯松の孤兒、檢松を育てる。(十編)越中の立山で鶴崎仙人の教を受けた怪力の少女於綱は、勇士の妻にならんと希ふ。兒雷也は、四歳の檢松に親の敵軍太左衛門を討たせる。(十一編)檢松を叔父高砂勇見之助に引渡す。高砂は信濃に感ずる。於綱は女盜鬼火及びその手下を従へ、小金村の悪僧林平の財

寶を奪ふ。(十二編)越後國青柳の池の大蛇丸と郷士の伴玉之助の仲に生れた玉吉は、祖父を殺して母の大蛇丸の怨を晴らし、佐渡に逃れ大蛇丸となる。(十三編)大蛇丸、兒雷也の黒姫山の山笠を奪はんとする。於綱は未来の夫が兒雷也であると知る。兒雷也は一功を立てれば、尾形家を再興させると言ふ。御守文をうける。(十四編)越後、市振の濱の親不知駒返などの難所で、兒雷也、大蛇丸、於綱の三人は出會ひ、兒雷也は尾形の系圖を大蛇丸から取戻さんとす。難所に地雷火を伏せて兒雷也を討取らんとする大蛇丸の計策は、却つて味方を捕する。母の大蛇丸が守護する故、蝦夷の術も行はれず、大蛇丸の手下が敵軍を追ひ、危急の兒雷也を、於綱は結城丸の名で救ふ。(十五編)濱坂三郎の詮議する結城丸は、兒雷也の手下から瀆表の手にもとる。(十六編)管領持氏の区知守大將は、沈牡丹の香爐を失ひ、切腹せんとするを、兒雷也の力で香爐が戻る。(十七編)大蛇丸は、兒雷也を味方につけんとする。(十八編)兒雷也は、父の舊臣西上平人の後、今は藤太夫の聲の美保七に戀する。(十九編)兒雷也の一方に大蛇丸と君臣關係が、藤太夫の一家に結成し、藤太夫は自殺し、伴の田子作は出家する。(二十編)綱手(於綱の改め)、月影家の若殿深澤雪之介の持場で力を現はす。(二十一編)綱手、深澤雪之介の館に伴はれて、大蛇丸に内通する五十嵐義典との密術の試合に互角となり、田毎の前侍女と戀する。兒雷也は三保ヶ崎にて今川時秋の慶を救ふ。(二十二編)兒雷也、府中の遊女岸川の許へ通ふ。(二十三編)熊形領の徳により、兒雷也の五體が煉む。(二十四編)大蛇丸は田毎の前を襲ひ、離

魂の法によつて難所に忍ぶ。(二十五編)浦不二左衛門は、忠臣山梨堅六を殺す。(二十六編)兒雷也も兄の敵と狙ふ。瀨田現太は岸川を難とする。(二十七編)大蛇丸に討たれた偽物の妻の妹が岸川で、敵討を兒雷也に頼む。漫問の社頭で、兒雷也を見集めた望月の娘白露は、戀の病になる。(二十八編)服裝が似てゐたので、仲人が兒雷也と白露とを取違へる。兒雷也の庵を今川時秋が訪づれ、禪秀退治の計略をたづねる。(二十九編)望月して来た禪秀は人遊びで、白露は嫁ふ。(三十編)兒雷也は妖術を以て望月に望入の懇請を断念させる。(三十一編)山梨堅六の二子喜之助と清心法師は松人の家に宿り、骨肉の奇遇に驚き、悪人は改心する。禪秀謀叛し、持氏は自害しようとする。(三十二編)兒雷也は、幻術によつて敵を退け、自害をとどめる。大蛇丸の密書が、綱手の手に入り、五十嵐義典の陰謀も露見する。(三十三編)典義切腹。時秋の軍勢は結んで鎌倉へ出陣。大蛇丸の術で時秋の船は沈没したが、綱手の遺品船輪の背で救はれる。(三十四編)禪秀が持氏を失はんとて遣はした忍術の名人福満兄弟は、兒雷也に捕はられる。(三十五編)兄弟は持氏方に味方する。親の敵土尾六を捜し出した半七、お花は両義を棄てるとする。(三十六編)福満兄弟には、兒雷也が持氏を殺したと語り、禪秀等をして伊豆に軍勢を向けさせる。(三十七編)今川時秋は蝦夷の吹き出す長橋を渡つて進軍する。相州高麗山に陣する月影深澤雪之介の軍勢も、蝦夷の長橋を渡つて伊豆に向ふ。禪秀は、大軍を率ゐて伊豆の國高寺の持氏を攻める。(三十八編)大蛇丸の母の魂が持氏の愛妾百世の前の體に入り、主を殺さんとす。

兒雷也の計略の中して禪秀勢は全滅する。浦不二も時秋に滅される。(三十九編)兒雷也と綱手は大蛇丸と戦ひ、伊豆の海にあつたて絶命したが、おぼばこの薬の効能で蘇生する。大日ヶ嶽の淨雲に文武を習つた檢松名力之助は、淨雲の術で中天竺から術傳香樹を持ち歸る。(四十編)藤澤の藤大蛇丸が大蛇丸の術によつて、兒雷也、綱手の治療を妨ぐるのを、數多の天狗が居る。(四十一編)術傳香樹の治療により兒雷也、綱手は本復する。(四十二編)大蛇丸は田毎の前を奪つて駿河國おどろし山の岩窟に移る。綱手は鈴掛姫と共に田毎の前を捜索に出で、強勇婦龜鬼火車を家來にし、羽衣織姫の娘糸遊が大蛇丸に攫はれんとするを助ける。大蛇丸は田毎の前を口説く。(四十三編)猫鬼火車の母は藤大蛇で、大蛇丸に斬り去られた怨があり、その仇を復すために大蛇丸の手下の辰丸と夫婦の縁を切つて綱手に味方する。糸遊の嫁入を火車が大蛇丸に内通し、足柄山で奪はせ、供人中の綱手等も山笠へ拉致され、大蛇丸退治の計略が漸次に進む。福満兄弟は持氏を縛し、兒雷也の首級を得たと稱して禪秀の御前に出る。(四十四編)草紙中の長篇物の一で、四人の作者の手を絶たすが、なほ未完成である。笑顔は先行の「自來也説話」(開道女自來也等から趣向を得、自來也を兒雷也とする機骨の甘味もあるが、兒雷也出生が書けてゐない。それを受けた一筆應は、先行作品と類似の輪郭に移らんとするが如き傾向を示しながら、三編の構想によつて、後に展開すべき端緒を與へて通つた。挿話は前二作者の後に立つて大蛇丸を案じ、於綱と兒雷也とを結ぶべき縁とし、「化物太平記」(別題)、「三島傳説」(別題)

文政二年刊)等の系統をうけて三編を完成し、「水滸傳」を取入れた所は、四作者中で起筆の笑顔の功に勝るものであらう。かの市振の濱の窮迫せる場面は如き人口に膾炙する。越後、信濃、相模、甲斐、伊豆、佐渡に跨る廣大なる舞臺の上に、多數の陰謀を編み交せ、「源氏物語」や「種彦・馬守京傳」等の作品から得た所を加へる勳業主義を徹底し、兒雷也を初瀬中懸後忠の水滸傳式の英雄とするが、その腹を割れば、復讐、家名再興に志す肥後國八代郡興正寺山の城主の公達頼若丸で、先行作品より人物が遙かに高められてゐる。信義を守り、戀愛問題に厳格な態度が見える。空想の奔放さ、怪奇人の豪放に出て、超人間的の力を巧みに利用して多様な事件を進展させてゐる。作者が次々と變つた爲めに矛盾誤謬が多く、創作に脚手が悪かつた點は確に認められ、作が不統一で、細き足しにより間が延びた感がある。大蛇の執念深き陰謀は、全篇に一貫する。兒雷也の風貌の如きは、大百日の大蛇丸に比して上品・柔和で、田舎源氏(の光氏)型であり、人氣者の八代目十郎をモデルにしてゐる。役者の似顔による挿繪、流行物の暗示なども認められる。後年補筆は兒雷也を須佐之男命に、大蛇丸を八咫大蛇に、綱手を龍名田比賣にたくへてゐる。【影響】兒雷也物と田比賣にたくへてゐる。【影響】兒雷也物と世評甚だ高く、各種の流行物・挿繪・玩具類等に行はれ、挿繪も「自來也家説話六」(別題)の如き物まで作つてゐる。【影響】自來也物語(通稱)作、同書、安政四年刊)は「自來也説話」に話をもとし、「兒雷也一代記」(御守文再考)の兒雷也は、復讐をやめて悟に入り、仙人となり、何れも「兒雷也家説話」の末流である。

【影響】自來也(自來也)二作、「怪傑自來也」(開道女自來也)第六卷、「女來也」(自來也)の如き、今日にもその名残りが認められる。演劇方面では、「自來也」は文化四年九月に大阪角座で、同七年四月には江戸森田座で上演し、且つ先行する兒雷也家説話を河竹阿彌が脚色して「兒雷也家説話」とし、嘉永五年七月江戸河原座で演じ、後大阪・京都も上演された。【自來也説話】(別題) 讀本 十二卷 【作者】和泉守武吉(別題) 葛飾北斎(角座) 【刊行】文化三年。【挿繪】信濃國飯田の勇源太郎は、課税が滯つて投獄されたので、妻衣重は夫を救はんと身を賣つたが、父が盜賊野原軍太夫に殺されてその金は奪はれてしまつた。その後出獄した源太郎は父の敵を尋ね、偶々越後の城主権津國久の危急を救つてその家臣となり、國久の自國時と遊女清野實は衣重との仲を取り持つて抱へられた軍太夫と共に、義賊自來也實は三好家の浪十尾形周馬の詮議に當ることになつた。そのうち源太郎は國時の妾清野が衣重であることがわかり、夫の對面したらず自來也に救はれ養育されてゐた源太郎の一人俱吉に仇と狙はれて、主家の重寶西天草を盗み、その奇特によつて逃れてしまつた。然るに妙香山の仙人から妖術を修した自來也は、一日俱吉を招き、手下天原禪兵衛に計を授けて軍太夫から西天草を奪ひ、俱吉に敵を討たした。そこで俱吉は権津家に仕へ、自來也は主家の仇石堂家を討つまで西天草を借りて鎌倉に赴き、又鷹島で海賊となり、石堂家の吾川采男が同家中の義人萬里野禪摩之助の妹江

と邂逅するのを捕へて、江を人質として采男を海に投じた。采男は舊臣島崎金吾に助けられ、金吾の娘は火城に身を賣つて采男に盡し、それより二人は深く契り、遂に義は悪病で死んだ汀の靈に憑み殺され、采男は石堂家の婚儀に忍び入り、萬里野禪摩之助の計に落ちた自來也に害され、また自來也は破産之助が江之島禪財夫から授けられた石鏢を吹かれ、その妖術で失ひ、俱吉が生命によつて再三追つてゐた西天草を返し、その一生の恩讐を果し、敢なく終つた。【構想】東洲洲は序して「自來也家説話」(別題)を著、然其終歸、義頗有遺憾之轉と、一篇の作意を述べてゐる。元來采男の「水滸傳」に據るものであるが、盜賊自來也の義勇を報仇奇談に交へつた趣向が、却つて効果を收めてゐる。馬琴は「江戸作者部類」に、「此人の創作多かりしが、その中に自來也物がたりと云ふよみ本のみ頗る時好に稱ひたり」と言つてゐる。【影響】文化四年九月、大阪角の芝居で「自來也」といふ狂言に脚色され、天保十年美國頃笑顔によつて「兒雷也家説話」(別題)といふ合巻となつた。【登場人物】(別題) 白雄(自來也) 佛人(姓名) 加倉吉春、通稱五郎又、五郎吉、一説に新八(佛人) 別題 昨鳥、しらす尾、しらす尾、藤村庵、鳴立庵、春秋庵 【生涯】元文三年八月、江戸深川の藩邸で生れたといふ説もあるが、確かでない。寛政三年(一四二)九月十三日江戸に歿す。享年五十三。【法名】徹心白雄居士【墓所】品川海雲寺(家系) 信州上田の藩士加倉六右衛門の次男である。寛政二年の「佛道齋」には、同藩松平伊賀守の老臣松平八左衛門の次男で、その組

父八左衛門は先君侯の弟とす、なほ白雄が繼いだ家は、戸倉氏・加倉氏兩説があると言つてゐる。又信州松代出身説(佛人)と、萬家人名籍もある。【脚色】少壯時代は明かでないが、故有つて佛道に入り、上州館林に遊世參禪したといふ。その後、佛門を出で、寶曆末年頃から松澤庵三世佛明に従つて佛道に志したが、なほ終生業を要らなれて終つた。初め鳥明の門にあつて昨鳥と號してゐたが、明和二年去つて大藏鳴立庵に鳥明の師白井鳥禪(別題)を訪ね、その門下となり、又百明にも兄弟した。その後、號をしらす尾と改め、昨鳥としらす尾とは一時併用した。更にしらす尾と文字を書きかへた。明和五年夏、師鳥禪が歿した後は、東都の松澤庵にあつたが、同七年六月、同庵に別れの辭を遺して信州に去り、更科八幡の里なる藤白納の獨樂庵に八年の春を留へて、歳旦帖「田毎の春」を出した。その年夏門人古樫(天徳)を伴つて北越を遊つて洛に入り、七條の觀音に暫く足を留めた。その秋には佛論「加佐利那止」に筆を執り、又伊勢の兩宮に詣つて松成なる一葉庵に年を越した。ここに滞在中心「文庫」を撰んだ。それから安永元年夏には又古樫の外に清波・如思・泉庵を加へて南紀に遊んだ。百明の「賈のうち」に載する南紀吟行は、即ち當時の紀行である。次いで安永二年の夏から秋にかけては遠く奥羽地方に行脚を試み、袋井、歸途信中に赴いて門人秋卷其明の家に暫く杖を停めた。そして奥州船岡大光寺住職也藤村庵に乞ひ得た芭蕉の枕表紙を其明に示して、共に「袋表紙」を撰んだ。かくて同三年、一度江戸に歸つたが、その頃から藤村庵との間が面白くなく、再び江戸を去つた。その後の消息は不明である。

自由を求めた千代文房の作は、詩壇の珍とされた。なほ大に海外美術の紹介にも努め、セザンヌ、ロダン、ルーベンス、ミケランジェロ、レンブラント、レオナルド等のものを盛んに誌上に掲げたことも、大きな貢献であつた。(白樺派)

白樺派

文学の一流派「名流」雜誌「白樺」に據つてゐた作家美術家連を總括的に呼ぶ。この派の主張が當時の理想主義の主潮であつたために、白樺派即ち理想主義といふやうに考へられてゐた場合が多い。「白樺」自然主義(別項)の行き詰りの後を承けて起つた肯定主義。所謂新理想主義運動の一派として、一方独自の理想主義を高く擧げてゐると同時に、他面一種の享樂派的傾向をも濃厚に有つてゐた。つまり舊きもの美しきものを追求し、これを愛しむといふ所に、この二つの傾向の調和があつた。而してこの派は理想主義者の集團と見られながら、その理想には別に一定の方向がなく、ただ飽く迄も個人、個性の成長といふことだけが、この派としての標榜とされてゐた。その理想派的主義は、人格主義とか文化主義といふもの、それと相通つた自由主義的理想主義の文藝を示す一種の根本的なものであつたが、この派としての根本的な主張以外に、同人の主な人々の中に、道徳的倫理的な潔癖性を強く有つた人が多かつた關係から、派全體に所謂人道主義的な感傷もかなり著しかった。そのため、白樺派と云へば、直ちに人道主義者の團體と考へられ易い傾きがあつた。が、元來がさういふ傾向を第一義としてゐたのではなく、又理想主義一面の團體でもなかつたので、往年の自然主義に對して、自ら精神的

自然主義の團體だと稱してゐる者もあつた。要するに理想主義的要素が多かつたが、結局は極めて自由な、個性主義者の集團であつたといふことになる。従つて派としての作風などといふものも、容易に規定し得ない難多面性を有つてゐた。一方に厳正な實質主義に非關する人があるかと思ふ、他方空想的な非寫實的傾向に立つ作家もあつた。大正期有産者文學としては、思想的にも、技巧的にも、最も頂點的な位置に立つ人を多く含む。だにも拘はず、徹底自由主義的個性主義の團體であつただけに例外はあつたが、あらゆる傳統から解放されて、極端な作品構成法の自由さ、表現の新鮮さなどを有つてゐた。その代り、其處に生れたばかりのものゝ有つ素材さや種さが多かつたのも争へない。併しそれは白樺派同人各自の成長と共に、洗練され靜化されて行つた。途中里見洋子の脱退を見、有島武郎の意見が一般同人のそれと離れるに至つたことがあり、遂に「白樺」は廢刊されるに至つた。併し派としての結束はなほ固く、「白樺」廢刊後も、主たる舊同人連の間には常に相當の連帯が保たれ續けて、大正十三年四月には長興善堂を中心に雜誌「不二」が創刊され、新理想主義末期の文藝界混亂時代に、白樺派の理想を宣傳(の努力が續けられた。なほこの派は單なる文學者のみの集團でなく、美術家、音楽家も含んで居つたために、美術展覽會が催されたり、大正八年には白樺派劇社を設立し、新劇運動に貢献した。出版物として白樺派著者・編輯者著・新しき村著者・人類の本等の書籍類をはじめ、「白樺」同人「白樺の林」等の著者「白樺派同人集」等の同人及び同人等の合著物を多く出してゐる。「史的地位」

日露戦争を境として急激にその社会組織を變遷させた我が國の若きアルジ・アジイが、所謂自然主義の時代に於て、舊封建時代の觀念形態の一切を否定し、破壊し盡した後に、アルジ・アジイの歴史的使命であつた個人主義的自由主義の理念を確立しようとして我が國の藝史上に登場して來たのがこの派であつた。それにも拘らず、この派は、その同人の多くが階級的に新しきアルジ・アジイではなく、却つて舊き貴族階級人であつたために、自然主義が植ゑつけた時代の唯物的傾向を發展させる代りに、唯心的な精神主義を以てして、その意味では、この派は新しき時代の代表者では決してあり得なかつた。「影響」白樺派としては附隨的な主張であつた人道主義及びその激しい理想的情熱などが、多く受け入れられたに過ぎなかつたが、流石に直接白樺派の傾向に立つ人々として、劇作家宮田百三、詩人千代文房等を初めとして、小泉鏡子、古原芳雄等相當数の人々を、その影響下に成長させた。まして江戸橋以下、よく時代に受け入れられた人道愛や道義主義の傾向からの影響を受けた人の数は少くなく、一時は所謂人道主義が文藝界を風靡するかの觀をさへ呈した。併し更に重大なこの派の功績は、自由奔放的な作品構成法や新形式的な表現法を確立し、従つてその點に於て特に著しい影響を後進文壇に及ぼした點であらう。「白樺派」

白河夜蘭(註)「南宮雨庭」を見よ。
新羅樂(註)「新羅樂」古く新羅國から我が國へ傳へた所の樂器の總稱。樂器は主として新羅琴を用ひ、舞があつた。併し如何なる曲が存在してゐたかは不明である。その中の數曲は或は後世に改作されて、右方の樂舞の中に入れられた。【沿革】新羅の樂が我が國へ初めて傳はつたのは明らかでないが、國史に傳へられる所では、允恭天皇の四十二年に帝の崩御された時、新羅王これを悲しんで樂人八十人を貢し、新羅の樂器を奉り、或は歌ひ舞ひ、或は哭き泣いて、難波から難波宮に至つたといふ。その後益々盛んに輸入され、天武天皇の時には高麗・百濟・新羅三國の樂を庭中に奏されたといふから、この時には既に三韓の樂が並行してゐたものらしい。その後大實帝、天平三年の雅樂寮制、大同四年の制度などには、常に新羅樂師が他の高麗樂師・百濟樂師と並び記されてゐるから、仁明天皇の頃までは古風の儘の新羅樂が行はれてゐたものらしい。然るに承和の頃に樂制の改革が行はれ、樂舞は凡て左方と右方に分れ、三韓樂は大改作が行はれて、渤海樂などと併して右方の樂に輸入されてしまつたので、古風の儘の新羅樂は兎に角消滅したものと考へられる。【備考】

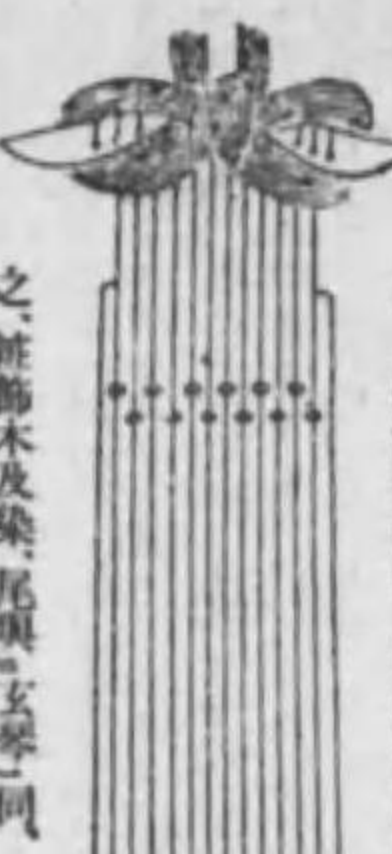
新羅樂(註)「新羅樂」古く新羅國から我が國へ傳へた所の樂器の總稱。樂器は主として新羅琴を用ひ、舞があつた。併し如何なる曲が存在してゐたかは不明である。その中の數曲は或は後世に改作されて、右方の樂舞の中に入れられた。【沿革】新羅の樂が我が國へ初めて傳はつたのは明らかでないが、國史に傳へられる所では、允恭天皇の四十二年に帝の崩御された時、新羅王これを悲しんで樂人八十人を貢し、新羅の樂器を奉り、或は歌ひ舞ひ、或は哭き泣いて、難波から難波宮に至つたといふ。その後益々盛んに輸入され、天武天皇の時には高麗・百濟・新羅三國の樂を庭中に奏されたといふから、この時には既に三韓の樂が並行してゐたものらしい。その後大實帝、天平三年の雅樂寮制、大同四年の制度などには、常に新羅樂師が他の高麗樂師・百濟樂師と並び記されてゐるから、仁明天皇の頃までは古風の儘の新羅樂が行はれてゐたものらしい。然るに承和の頃に樂制の改革が行はれ、樂舞は凡て左方と右方に分れ、三韓樂は大改作が行はれて、渤海樂などと併して右方の樂に輸入されてしまつたので、古風の儘の新羅樂は兎に角消滅したものと考へられる。【備考】

白河夜蘭(註)「南宮雨庭」を見よ。
新羅樂(註)「新羅樂」古く新羅國から我が國へ傳へた所の樂器の總稱。樂器は主として新羅琴を用ひ、舞があつた。併し如何なる曲が存在してゐたかは不明である。その中の數曲は或は後世に改作されて、右方の樂舞の中に入れられた。【沿革】新羅の樂が我が國へ初めて傳はつたのは明らかでないが、國史に傳へられる所では、允恭天皇の四十二年に帝の崩御された時、新羅王これを悲しんで樂人八十人を貢し、新羅の樂器を奉り、或は歌ひ舞ひ、或は哭き泣いて、難波から難波宮に至つたといふ。その後益々盛んに輸入され、天武天皇の時には高麗・百濟・新羅三國の樂を庭中に奏されたといふから、この時には既に三韓の樂が並行してゐたものらしい。その後大實帝、天平三年の雅樂寮制、大同四年の制度などには、常に新羅樂師が他の高麗樂師・百濟樂師と並び記されてゐるから、仁明天皇の頃までは古風の儘の新羅樂が行はれてゐたものらしい。然るに承和の頃に樂制の改革が行はれ、樂舞は凡て左方と右方に分れ、三韓樂は大改作が行はれて、渤海樂などと併して右方の樂に輸入されてしまつたので、古風の儘の新羅樂は兎に角消滅したものと考へられる。【備考】

新羅樂(註)「新羅樂」古く新羅國から我が國へ傳へた所の樂器の總稱。樂器は主として新羅琴を用ひ、舞があつた。併し如何なる曲が存在してゐたかは不明である。その中の數曲は或は後世に改作されて、右方の樂舞の中に入れられた。【沿革】新羅の樂が我が國へ初めて傳はつたのは明らかでないが、國史に傳へられる所では、允恭天皇の四十二年に帝の崩御された時、新羅王これを悲しんで樂人八十人を貢し、新羅の樂器を奉り、或は歌ひ舞ひ、或は哭き泣いて、難波から難波宮に至つたといふ。その後益々盛んに輸入され、天武天皇の時には高麗・百濟・新羅三國の樂を庭中に奏されたといふから、この時には既に三韓の樂が並行してゐたものらしい。その後大實帝、天平三年の雅樂寮制、大同四年の制度などには、常に新羅樂師が他の高麗樂師・百濟樂師と並び記されてゐるから、仁明天皇の頃までは古風の儘の新羅樂が行はれてゐたものらしい。然るに承和の頃に樂制の改革が行はれ、樂舞は凡て左方と右方に分れ、三韓樂は大改作が行はれて、渤海樂などと併して右方の樂に輸入されてしまつたので、古風の儘の新羅樂は兎に角消滅したものと考へられる。【備考】

新羅樂(註)「新羅樂」古く新羅國から我が國へ傳へた所の樂器の總稱。樂器は主として新羅琴を用ひ、舞があつた。併し如何なる曲が存在してゐたかは不明である。その中の數曲は或は後世に改作されて、右方の樂舞の中に入れられた。【沿革】新羅の樂が我が國へ初めて傳はつたのは明らかでないが、國史に傳へられる所では、允恭天皇の四十二年に帝の崩御された時、新羅王これを悲しんで樂人八十人を貢し、新羅の樂器を奉り、或は歌ひ舞ひ、或は哭き泣いて、難波から難波宮に至つたといふ。その後益々盛んに輸入され、天武天皇の時には高麗・百濟・新羅三國の樂を庭中に奏されたといふから、この時には既に三韓の樂が並行してゐたものらしい。その後大實帝、天平三年の雅樂寮制、大同四年の制度などには、常に新羅樂師が他の高麗樂師・百濟樂師と並び記されてゐるから、仁明天皇の頃までは古風の儘の新羅樂が行はれてゐたものらしい。然るに承和の頃に樂制の改革が行はれ、樂舞は凡て左方と右方に分れ、三韓樂は大改作が行はれて、渤海樂などと併して右方の樂に輸入されてしまつたので、古風の儘の新羅樂は兎に角消滅したものと考へられる。【備考】

山英子・佐藤蘭舟・吉原庄亮・土岐嘉麿(當時の友人と號して)であるが、初めの四名は相前後して早世した。なほ白菊會歌集、雅樂第三卷、一人(山英子)、「朝夕」(白菊會歌集)、「御白遺稿」(武山英子遺稿)、「米海」(佐藤蘭舟遺稿)、「波光」(吉原庄亮遺稿) [NAKIWARAI] (佐藤蘭舟遺稿)等を出した。



之、箏、篳篥、尺八、尾張、玄琴、凡笙、篳篥、不、用、御付耳耳頭、則、於、箏、篳篥、控、支、於、箏、凡、二、三、武、越、至、五、短、音、漸、次、而、漸、柱、漸、次、而、低、とある。これに前後の如き圖が入つてゐる。これは有名な朝鮮樂舞の古典たる「樂學執節」中にある圖と同じ。この圖に尺度が記入してあるが、我が正倉院にある古新羅琴とその形大同小異である。この新羅琴は「東大寺歌物帳」に記載してあるものとは別で、弘仁十四年四月十九日に納め入れたものである。

新羅琴(註)「新羅琴」異稱「御琴」解説「新羅の琴の義で、昔三韓時代に新羅國から我が國に傳來し、奈良朝頃に新羅樂の主要樂器として用ひられたところの十二絃の琴。【構造】大日本史に「新羅琴、長五尺、十二絃、有甲乙丁戊己庚辛壬癸天地之目、未詳其始、蓋出於新羅」とあり、「朝鮮樂器要」に、「御琴之制、以桐木爲之、其飾木及琴尾與玄琴同、凡笙篳篥不、用、御付耳耳頭、則、於、箏、篳篥、控、支、於、箏、凡、二、三、武、越、至、五、短、音、漸、次、而、漸、柱、漸、次、而、低、とある。これに前後の如き圖が入つてゐる。これは有名な朝鮮樂舞の古典たる「樂學執節」中にある圖と同じ。この圖に尺度が記入してあるが、我が正倉院にある古新羅琴とその形大同小異である。この新羅琴は「東大寺歌物帳」に記載してあるものとは別で、弘仁十四年四月十九日に納め入れたものである。

新羅琴(註)「新羅琴」異稱「御琴」解説「新羅の琴の義で、昔三韓時代に新羅國から我が國に傳來し、奈良朝頃に新羅樂の主要樂器として用ひられたところの十二絃の琴。【構造】大日本史に「新羅琴、長五尺、十二絃、有甲乙丁戊己庚辛壬癸天地之目、未詳其始、蓋出於新羅」とあり、「朝鮮樂器要」に、「御琴之制、以桐木爲之、其飾木及琴尾與玄琴同、凡笙篳篥不、用、御付耳耳頭、則、於、箏、篳篥、控、支、於、箏、凡、二、三、武、越、至、五、短、音、漸、次、而、漸、柱、漸、次、而、低、とある。これに前後の如き圖が入つてゐる。これは有名な朝鮮樂舞の古典たる「樂學執節」中にある圖と同じ。この圖に尺度が記入してあるが、我が正倉院にある古新羅琴とその形大同小異である。この新羅琴は「東大寺歌物帳」に記載してあるものとは別で、弘仁十四年四月十九日に納め入れたものである。

新羅琴(註)「新羅琴」異稱「御琴」解説「新羅の琴の義で、昔三韓時代に新羅國から我が國に傳來し、奈良朝頃に新羅樂の主要樂器として用ひられたところの十二絃の琴。【構造】大日本史に「新羅琴、長五尺、十二絃、有甲乙丁戊己庚辛壬癸天地之目、未詳其始、蓋出於新羅」とあり、「朝鮮樂器要」に、「御琴之制、以桐木爲之、其飾木及琴尾與玄琴同、凡笙篳篥不、用、御付耳耳頭、則、於、箏、篳篥、控、支、於、箏、凡、二、三、武、越、至、五、短、音、漸、次、而、漸、柱、漸、次、而、低、とある。これに前後の如き圖が入つてゐる。これは有名な朝鮮樂舞の古典たる「樂學執節」中にある圖と同じ。この圖に尺度が記入してあるが、我が正倉院にある古新羅琴とその形大同小異である。この新羅琴は「東大寺歌物帳」に記載してあるものとは別で、弘仁十四年四月十九日に納め入れたものである。

新羅琴(註)「新羅琴」異稱「御琴」解説「新羅の琴の義で、昔三韓時代に新羅國から我が國に傳來し、奈良朝頃に新羅樂の主要樂器として用ひられたところの十二絃の琴。【構造】大日本史に「新羅琴、長五尺、十二絃、有甲乙丁戊己庚辛壬癸天地之目、未詳其始、蓋出於新羅」とあり、「朝鮮樂器要」に、「御琴之制、以桐木爲之、其飾木及琴尾與玄琴同、凡笙篳篥不、用、御付耳耳頭、則、於、箏、篳篥、控、支、於、箏、凡、二、三、武、越、至、五、短、音、漸、次、而、漸、柱、漸、次、而、低、とある。これに前後の如き圖が入つてゐる。これは有名な朝鮮樂舞の古典たる「樂學執節」中にある圖と同じ。この圖に尺度が記入してあるが、我が正倉院にある古新羅琴とその形大同小異である。この新羅琴は「東大寺歌物帳」に記載してあるものとは別で、弘仁十四年四月十九日に納め入れたものである。

偶々事実は妻が十重と密通したのを共
に殺害したので、関心は妻殺を伴ってこ
を立ち退き、京都、六、向修館、橋本、
藤原、等を経て、信濃法華寺の頭僧西園
心となつて、白玉が待ち惚ける所へ現はれる。
やがてこゝに横行して来た星兵衛が、妻を
の仇呼ばりをするので、北辰組と法華組
との衝突となる。これより先、氏郷の執政松
浦重良は、若殿を失つて己が娘の子を立て
んと謀り、一味星兵衛の妹お十重を家
中大佛印藏今の御橋市の妹今九重に預けた
が、廿實は事秘の手によつて、既に御橋市の
所へ返つてゐたので、北辰組と法華組が白
刃を交へる。この時関心は證據の品によつて
星兵衛が白玉の仇である確かめ、折柄ゆゑ、
七夕長庚星、實は加毛家の問譯の急報に駆け
つけた捕手に助けられ、白玉と共に星兵衛を
討つて復讐を果たした。

【構想】傾城白玉の奇遇を主題として、仇討と
お家騒動を配した物語で、前編三冊は主に白
玉の側面、後編は北辰組と法華組の男伊達
争に分れてゐる。後者の趣向は、かの名古屋
山三と不破伴左衛門の鷹の建引を取つた山屋
京傳の「稻妻表紙(別項)」に類似してゐる。全
篇を通じて文に句讀點がない。情緒的描寫に
せよ成功して、合巻(別項)への歩み寄り
を示してゐると思はれるが、大筋に急に一切を
重ねて露出させる手法は、當時で附合した
餘ひがある。なほ作者の序は文政六年正月に
書かれてゐる。
【白鳥省吾】(しらとり) 詩人(開眼)明治
二十三年二月宮城縣若槻町に生る。筑前中學
を経て早稻田大學英文科を出た。詩壇への出

發は、人見東明主宰の「創造」(大正二年)及び
「劇と詩」西宮藤樹と共に「詩と評論」等に
於てあらはれ、大正三年第一詩集「世界の
人」を出す。その後「天竺詩集」(同五年)、「大地
の愛」(同八年)等の詩集を出し、爾後「幻の日
の愛」(同九年)、「樂園の途上」(同十年)、「遺蹟集
」(同十一年)、「憧憬の丘」(同九年)、「共
生の旗」(同十一年)、「若き時節」(同九年)、「愛恋」
(同二年)等多くの詩集の外、評論「ホイト
マン詩集」(同十一年)、「民主的文藝の先驅」等の
著がある。又雑誌「地上樂園」を主宰した。彼
の傍友としては、宮田碎花・福田正夫・加藤一
夫・百田宗治等があり、それ等と共に「泰西
社會詩人詩集」の如きもある。一時詩壇に「民
衆派」と言はれた一派が存在した當時の主な
一人である。近時民謡の研究に於て一見地を
示し、東洋方面にも活躍した。詩話會の主な
會員でもあつた。川路柳虹・福田正夫と共に
著の「明治大正詩選」もある。
【作風】彼の詩は、最も素朴な平民的平明な表
現をもつと同時に、その内容に於て自然の現
實の題材をもち、思想としては民衆主義を基
調として、人道的な社會主義的風潮を重んじ
てゐる。元来土臭をもつ作家であるから、そ
の詩は平明な寫實と粗雑な民衆主義的思想と
を最も散文的形式の上に表現してゐるが、
その土臭ある田園の寫實に一つの特徴をもつ
てゐる。
【白渡五八男】(しらとり)「青砥花影裏」(見よ)
白渡五八男(白渡) 草野紙 合巻 九十
【編各四冊合二冊】(作者) 柳下亭博員
(自叙傳) 三十一編、三十二編より三十八編までは「
世變雜草集」(二冊) 柳下亭博員三十九編、六十二編。

【構想】傾城白玉の奇遇を主題として、仇討と
お家騒動を配した物語で、前編三冊は主に白
玉の側面、後編は北辰組と法華組の男伊達
争に分れてゐる。後者の趣向は、かの名古屋
山三と不破伴左衛門の鷹の建引を取つた山屋
京傳の「稻妻表紙(別項)」に類似してゐる。全
篇を通じて文に句讀點がない。情緒的描寫に
せよ成功して、合巻(別項)への歩み寄り
を示してゐると思はれるが、大筋に急に一切を
重ねて露出させる手法は、當時で附合した
餘ひがある。なほ作者の序は文政六年正月に
書かれてゐる。
【白鳥省吾】(しらとり) 詩人(開眼)明治
二十三年二月宮城縣若槻町に生る。筑前中學
を経て早稻田大學英文科を出た。詩壇への出

【白鳥省吾】(しらとり) 詩人(開眼)明治
二十三年二月宮城縣若槻町に生る。筑前中學
を経て早稻田大學英文科を出た。詩壇への出
發は、人見東明主宰の「創造」(大正二年)及び
「劇と詩」西宮藤樹と共に「詩と評論」等に
於てあらはれ、大正三年第一詩集「世界の
人」を出す。その後「天竺詩集」(同五年)、「大地
の愛」(同八年)等の詩集を出し、爾後「幻の日
の愛」(同九年)、「樂園の途上」(同十年)、「遺蹟集
」(同十一年)、「憧憬の丘」(同九年)、「共
生の旗」(同十一年)、「若き時節」(同九年)、「愛恋」
(同二年)等多くの詩集の外、評論「ホイト
マン詩集」(同十一年)、「民主的文藝の先驅」等の
著がある。又雑誌「地上樂園」を主宰した。彼
の傍友としては、宮田碎花・福田正夫・加藤一
夫・百田宗治等があり、それ等と共に「泰西
社會詩人詩集」の如きもある。一時詩壇に「民
衆派」と言はれた一派が存在した當時の主な
一人である。近時民謡の研究に於て一見地を
示し、東洋方面にも活躍した。詩話會の主な
會員でもあつた。川路柳虹・福田正夫と共に
著の「明治大正詩選」もある。
【作風】彼の詩は、最も素朴な平民的平明な表
現をもつと同時に、その内容に於て自然の現
實の題材をもち、思想としては民衆主義を基
調として、人道的な社會主義的風潮を重んじ
てゐる。元来土臭をもつ作家であるから、そ
の詩は平明な寫實と粗雑な民衆主義的思想と
を最も散文的形式の上に表現してゐるが、
その土臭ある田園の寫實に一つの特徴をもつ
てゐる。
【白渡五八男】(しらとり)「青砥花影裏」(見よ)
白渡五八男(白渡) 草野紙 合巻 九十
【編各四冊合二冊】(作者) 柳下亭博員
(自叙傳) 三十一編、三十二編より三十八編までは「
世變雜草集」(二冊) 柳下亭博員三十九編、六十二編。

【白鳥省吾】(しらとり) 詩人(開眼)明治
二十三年二月宮城縣若槻町に生る。筑前中學
を経て早稻田大學英文科を出た。詩壇への出
發は、人見東明主宰の「創造」(大正二年)及び
「劇と詩」西宮藤樹と共に「詩と評論」等に
於てあらはれ、大正三年第一詩集「世界の
人」を出す。その後「天竺詩集」(同五年)、「大地
の愛」(同八年)等の詩集を出し、爾後「幻の日
の愛」(同九年)、「樂園の途上」(同十年)、「遺蹟集
」(同十一年)、「憧憬の丘」(同九年)、「共
生の旗」(同十一年)、「若き時節」(同九年)、「愛恋」
(同二年)等多くの詩集の外、評論「ホイト
マン詩集」(同十一年)、「民主的文藝の先驅」等の
著がある。又雑誌「地上樂園」を主宰した。彼
の傍友としては、宮田碎花・福田正夫・加藤一
夫・百田宗治等があり、それ等と共に「泰西
社會詩人詩集」の如きもある。一時詩壇に「民
衆派」と言はれた一派が存在した當時の主な
一人である。近時民謡の研究に於て一見地を
示し、東洋方面にも活躍した。詩話會の主な
會員でもあつた。川路柳虹・福田正夫と共に
著の「明治大正詩選」もある。
【作風】彼の詩は、最も素朴な平民的平明な表
現をもつと同時に、その内容に於て自然の現
實の題材をもち、思想としては民衆主義を基
調として、人道的な社會主義的風潮を重んじ
てゐる。元来土臭をもつ作家であるから、そ
の詩は平明な寫實と粗雑な民衆主義的思想と
を最も散文的形式の上に表現してゐるが、
その土臭ある田園の寫實に一つの特徴をもつ
てゐる。
【白渡五八男】(しらとり)「青砥花影裏」(見よ)
白渡五八男(白渡) 草野紙 合巻 九十
【編各四冊合二冊】(作者) 柳下亭博員
(自叙傳) 三十一編、三十二編より三十八編までは「
世變雜草集」(二冊) 柳下亭博員三十九編、六十二編。

【白鳥省吾】(しらとり) 詩人(開眼)明治
二十三年二月宮城縣若槻町に生る。筑前中學
を経て早稻田大學英文科を出た。詩壇への出
發は、人見東明主宰の「創造」(大正二年)及び
「劇と詩」西宮藤樹と共に「詩と評論」等に
於てあらはれ、大正三年第一詩集「世界の
人」を出す。その後「天竺詩集」(同五年)、「大地
の愛」(同八年)等の詩集を出し、爾後「幻の日
の愛」(同九年)、「樂園の途上」(同十年)、「遺蹟集
」(同十一年)、「憧憬の丘」(同九年)、「共
生の旗」(同十一年)、「若き時節」(同九年)、「愛恋」
(同二年)等多くの詩集の外、評論「ホイト
マン詩集」(同十一年)、「民主的文藝の先驅」等の
著がある。又雑誌「地上樂園」を主宰した。彼
の傍友としては、宮田碎花・福田正夫・加藤一
夫・百田宗治等があり、それ等と共に「泰西
社會詩人詩集」の如きもある。一時詩壇に「民
衆派」と言はれた一派が存在した當時の主な
一人である。近時民謡の研究に於て一見地を
示し、東洋方面にも活躍した。詩話會の主な
會員でもあつた。川路柳虹・福田正夫と共に
著の「明治大正詩選」もある。
【作風】彼の詩は、最も素朴な平民的平明な表
現をもつと同時に、その内容に於て自然の現
實の題材をもち、思想としては民衆主義を基
調として、人道的な社會主義的風潮を重んじ
てゐる。元来土臭をもつ作家であるから、そ
の詩は平明な寫實と粗雑な民衆主義的思想と
を最も散文的形式の上に表現してゐるが、
その土臭ある田園の寫實に一つの特徴をもつ
てゐる。
【白渡五八男】(しらとり)「青砥花影裏」(見よ)
白渡五八男(白渡) 草野紙 合巻 九十
【編各四冊合二冊】(作者) 柳下亭博員
(自叙傳) 三十一編、三十二編より三十八編までは「
世變雜草集」(二冊) 柳下亭博員三十九編、六十二編。

【白鳥省吾】(しらとり) 詩人(開眼)明治
二十三年二月宮城縣若槻町に生る。筑前中學
を経て早稻田大學英文科を出た。詩壇への出
發は、人見東明主宰の「創造」(大正二年)及び
「劇と詩」西宮藤樹と共に「詩と評論」等に
於てあらはれ、大正三年第一詩集「世界の
人」を出す。その後「天竺詩集」(同五年)、「大地
の愛」(同八年)等の詩集を出し、爾後「幻の日
の愛」(同九年)、「樂園の途上」(同十年)、「遺蹟集
」(同十一年)、「憧憬の丘」(同九年)、「共
生の旗」(同十一年)、「若き時節」(同九年)、「愛恋」
(同二年)等多くの詩集の外、評論「ホイト
マン詩集」(同十一年)、「民主的文藝の先驅」等の
著がある。又雑誌「地上樂園」を主宰した。彼
の傍友としては、宮田碎花・福田正夫・加藤一
夫・百田宗治等があり、それ等と共に「泰西
社會詩人詩集」の如きもある。一時詩壇に「民
衆派」と言はれた一派が存在した當時の主な
一人である。近時民謡の研究に於て一見地を
示し、東洋方面にも活躍した。詩話會の主な
會員でもあつた。川路柳虹・福田正夫と共に
著の「明治大正詩選」もある。
【作風】彼の詩は、最も素朴な平民的平明な表
現をもつと同時に、その内容に於て自然の現
實の題材をもち、思想としては民衆主義を基
調として、人道的な社會主義的風潮を重んじ
てゐる。元来土臭をもつ作家であるから、そ
の詩は平明な寫實と粗雑な民衆主義的思想と
を最も散文的形式の上に表現してゐるが、
その土臭ある田園の寫實に一つの特徴をもつ
てゐる。
【白渡五八男】(しらとり)「青砥花影裏」(見よ)
白渡五八男(白渡) 草野紙 合巻 九十
【編各四冊合二冊】(作者) 柳下亭博員
(自叙傳) 三十一編、三十二編より三十八編までは「
世變雜草集」(二冊) 柳下亭博員三十九編、六十二編。

部等を助け、その陰謀に加はる。近野山鹿玄
之丞は妻白梅を愛したが、近野西園の娘に
戀され、白梅を不憚に思ひながら、餘なく
結縵を承諾する。(十九編)若菜娘は捕へよ
うとして刑部等は失敗する。(二十編)義成
阿修羅丸は夫の系圖を得たので、それを圖
にして若菜娘を手に入れんとし、幻術に驚嘆
する。(二十一編)若菜娘は若菜娘と若菜娘
に邂逅し、關路屋の女主人お牛を討つ、巨萬
の黄金を中島の別邸へ運ばせる。(二十二編)
白梅の兄關路の三笠山は、大蛇川と岩岡錦帯
橋上で戦ふ。(二十三編)晴の相撲で、大蛇川
は三笠山に負かれ、殺害せんとして失敗す
る。(二十四編)綾織を餌にして、白蓮大造
の若菜娘を捕へる計畫を、お牛は刑部から諒
かす。(二十五編)若菜娘を、お牛は刑部から諒
かす。操の妻と娘は殺される。(二十六編)
出雲國早雲山古寺で、若菜が遺されたよう
とする。許の島山秋作が救ふ。(二十七編)
男裝の白蓮大造は若菜娘にかへり、養母たつ
きの仇お牛を殺し、莫大の黄金を奪ふ。春之
助は阿修羅丸を伏す。(二十八編)將軍義
經の息女高麗娘が、怪人に誘かれたのを能す
ために、菊池家の重寶花形の鏡を盗まれ、鳥
山豊後之助がその使となり、御鏡を奪はんと
する春之助。阿修羅丸の裏を、春之助等が
散々の目にあはせる。(二十九編)白梅は夫の
愛を西園の娘に奪はれる。夫の系圖を奪は
阿修羅丸から奪ふ。(三十編)娘は美女
に扮装して自行の危難を救ひ、自己の大望を
語り、和陸の御座に、蜘蛛の術を破る力を持
つ花形の名鏡を所望する。(三十三編)白
梅を西園等がおとし、山鹿に嫁はせる。
太宰の長石石動景國は左海野右衛門に會ひ、

小女郎の怪術に驚く。(三十五編)豊後之
助は刑部を倒して自衛を告げ、そこへ高麗六
郎が来て、秋作等が高麗娘に誘ふ怪術を退け
たが、若菜娘が阿修羅丸に誘はれる。阿修羅丸
は四面大菩薩の御告により、花形の鏡の威徳
を消すために、重傷の我が子の生體を取る。
【三十七編】三笠山は何處か別荘、揚羽
を襲ふ。三笠山は、大蛇川の伴で、養理に拘り
【三十八編】了彦は、大蛇川の伴で、養理に拘り
【三十九編】春之助、美浦の密會
が自行の眼につき、美友の兄弟と言ひぬける
不義者にこしらへられて殺された白梅の魂鏡
は、三笠山に事情を告げる。(四十一編)
三笠山は山鹿夫婦を討つて妹の怨を晴らす。
菊池・大友の両家和睦し、相互に交換した家の
重寶は双方とも偽物である。豊後之助は追放
され、娘は不慮に夫の仇刑部を討取り、菊池の
大守を降伏させ、腹心の警備七郎を菊池家
老の座にすえる。(四十二編)入平の三笠山
を奪はす。秋作は、自行の弟若菜と若菜
を奪はす。大守自行の弟若菜と若菜
に入り、真龍齋から猫の過去を聞く。(四十四
編)照葉は弟力を逃れ、叔母の横の戸か
ら一部始終を聞きとる。先行、秋作、直龍
齋等が来り、養理と忠義に真龍齋の戸は自
殺する。(四十五編)力松が怪術を退治す。
【四十六編】御房は、太宰家を奪ふ。(四十七編)
海右衛門は、太宰家を奪ふ。(四十七編)
【四十八編】夢に眞龍齋が現れて、幻術を捨て
やうに娘を誘ふ。娘は、眞龍齋の一族を倒す
會ふ。(四十九編)先行は、關路のお夏を養母

【白鳥省吾】(しらとり) 詩人(開眼)明治
二十三年二月宮城縣若槻町に生る。筑前中學
を経て早稻田大學英文科を出た。詩壇への出
發は、人見東明主宰の「創造」(大正二年)及び
「劇と詩」西宮藤樹と共に「詩と評論」等に
於てあらはれ、大正三年第一詩集「世界の
人」を出す。その後「天竺詩集」(同五年)、「大地
の愛」(同八年)等の詩集を出し、爾後「幻の日
の愛」(同九年)、「樂園の途上」(同十年)、「遺蹟集
」(同十一年)、「憧憬の丘」(同九年)、「共
生の旗」(同十一年)、「若き時節」(同九年)、「愛恋」
(同二年)等多くの詩集の外、評論「ホイト
マン詩集」(同十一年)、「民主的文藝の先驅」等の
著がある。又雑誌「地上樂園」を主宰した。彼
の傍友としては、宮田碎花・福田正夫・加藤一
夫・百田宗治等があり、それ等と共に「泰西
社會詩人詩集」の如きもある。一時詩壇に「民
衆派」と言はれた一派が存在した當時の主な
一人である。近時民謡の研究に於て一見地を
示し、東洋方面にも活躍した。詩話會の主な
會員でもあつた。川路柳虹・福田正夫と共に
著の「明治大正詩選」もある。
【作風】彼の詩は、最も素朴な平民的平明な表
現をもつと同時に、その内容に於て自然の現
實の題材をもち、思想としては民衆主義を基
調として、人道的な社會主義的風潮を重んじ
てゐる。元来土臭をもつ作家であるから、そ
の詩は平明な寫實と粗雑な民衆主義的思想と
を最も散文的形式の上に表現してゐるが、
その土臭ある田園の寫實に一つの特徴をもつ
てゐる。
【白渡五八男】(しらとり)「青砥花影裏」(見よ)
白渡五八男(白渡) 草野紙 合巻 九十
【編各四冊合二冊】(作者) 柳下亭博員
(自叙傳) 三十一編、三十二編より三十八編までは「
世變雜草集」(二冊) 柳下亭博員三十九編、六十二編。

【白鳥省吾】(しらとり) 詩人(開眼)明治
二十三年二月宮城縣若槻町に生る。筑前中學
を経て早稻田大學英文科を出た。詩壇への出
發は、人見東明主宰の「創造」(大正二年)及び
「劇と詩」西宮藤樹と共に「詩と評論」等に
於てあらはれ、大正三年第一詩集「世界の
人」を出す。その後「天竺詩集」(同五年)、「大地
の愛」(同八年)等の詩集を出し、爾後「幻の日
の愛」(同九年)、「樂園の途上」(同十年)、「遺蹟集
」(同十一年)、「憧憬の丘」(同九年)、「共
生の旗」(同十一年)、「若き時節」(同九年)、「愛恋」
(同二年)等多くの詩集の外、評論「ホイト
マン詩集」(同十一年)、「民主的文藝の先驅」等の
著がある。又雑誌「地上樂園」を主宰した。彼
の傍友としては、宮田碎花・福田正夫・加藤一
夫・百田宗治等があり、それ等と共に「泰西
社會詩人詩集」の如きもある。一時詩壇に「民
衆派」と言はれた一派が存在した當時の主な
一人である。近時民謡の研究に於て一見地を
示し、東洋方面にも活躍した。詩話會の主な
會員でもあつた。川路柳虹・福田正夫と共に
著の「明治大正詩選」もある。
【作風】彼の詩は、最も素朴な平民的平明な表
現をもつと同時に、その内容に於て自然の現
實の題材をもち、思想としては民衆主義を基
調として、人道的な社會主義的風潮を重んじ
てゐる。元来土臭をもつ作家であるから、そ
の詩は平明な寫實と粗雑な民衆主義的思想と
を最も散文的形式の上に表現してゐるが、
その土臭ある田園の寫實に一つの特徴をもつ
てゐる。
【白渡五八男】(しらとり)「青砥花影裏」(見よ)
白渡五八男(白渡) 草野紙 合巻 九十
【編各四冊合二冊】(作者) 柳下亭博員
(自叙傳) 三十一編、三十二編より三十八編までは「
世變雜草集」(二冊) 柳下亭博員三十九編、六十二編。

なる。長官死を決して逃み、大友刑部と同じく...

復讐態度には不徹底な處があり、性格的にも...



(繪師人瑞畫一十七) 子 拍 白

白拍子は、これ等の女舞の外、鎌倉時代を通じて...

白拍子 神楽の舞の語を以て、白拍子と云ふ...

を奏さない意かとも思はれる。即ち白拍子、...

白拍子の語源 白拍子の語源は、白拍子と云ふ...

入道(信西)が舞臺の舞の手中から選んで、...

白拍子は、これ等の女舞の外、鎌倉時代を通じて...

白拍子の語源 白拍子の語源は、白拍子と云ふ...

翌年、後村上天皇御説を賜ふ。北朝光厳天皇御野の地を賜ふ。依つて此地に御徳寺を建てた。六十八歳、足利氏より建長寺補佐の命を受けたが、老病の故を以て辭し、翌年七月入寂した。人物、師範の父は、左金吾校尉、母は源氏の出で、共に佛法に歸依してゐた。父母には五人の子があり、彼はその第三男であつた。内外の明匠を歴訪して學問修行し、佛體の奧蹟に博通し、詩文に堪能であつた。殊に我が國の傳傳の研究を以て聞え、責任剛毅にして氣骨があつた。

【著作】元亨釋書(別項)三十卷(清北集別項)二十卷(佛語心論)十八卷(乘分略)別項(五卷)○佛徒問答二卷○佛徒問答二卷(正修論)一卷○佛徒問答一卷

高僧傳 海藏和尚紀年録(延寶傳燈録)本朝(寛治) 佛人(姓名)井上正春、通稱(別項) 佛人(姓名)井上正春、通稱(別項) 佛人(姓名)井上正春、通稱(別項) 佛人(姓名)井上正春、通稱(別項)



人、産科醫専ら老として名高かつた。俳諧を嗜まに、國學を専らに、繪畫を范古に學んで、詩その堂に入つた。鳴鶴門の頭目として特に連句に長じた。鳴鶴の喜雨巷は同門臥失をして嗣がしめ、己は此國主人又は朱佛聖の名を以て伊屋に願願したが、鵲色を愛好したので此國と號し、庭前に一株の老松があつた。

たので、朱樹聖と稱した。安永三年京に上つて蕪村門と交り、寛政二年には二條家俳諧(別項)に列した。享和元年門人松尾卓郎を伴つて江戸に遊び、歸路を中仙道に取、本庄、上田、黄光寺松本、諏訪、飯田を經、風越峠を越えて歸つた。天明二年から文化九年までの三十一一年間に、約四十種もの著書を出したのを見て、士朗の勢力の如何に大であつたかを知らしめよう。寛政三大家(別項)の一人として東海道の中樞に占據し、上り下りの俳人をして仰ぎ望まされたのも當然である。【著書】此國七部集(別項)○士朗五七集(同上)○此國句集(別項)○此國句集(別項)○此國句集(別項)○此國句集(別項)

【著書】元亨釋書(別項)三十卷(清北集別項)二十卷(佛語心論)十八卷(乘分略)別項(五卷)○佛徒問答二卷○佛徒問答二卷(正修論)一卷○佛徒問答一卷

【著書】元亨釋書(別項)三十卷(清北集別項)二十卷(佛語心論)十八卷(乘分略)別項(五卷)○佛徒問答二卷○佛徒問答二卷(正修論)一卷○佛徒問答一卷

たので、朱樹聖と稱した。安永三年京に上つて蕪村門と交り、寛政二年には二條家俳諧(別項)に列した。享和元年門人松尾卓郎を伴つて江戸に遊び、歸路を中仙道に取、本庄、上田、黄光寺松本、諏訪、飯田を經、風越峠を越えて歸つた。天明二年から文化九年までの三十一一年間に、約四十種もの著書を出したのを見て、士朗の勢力の如何に大であつたかを知らしめよう。寛政三大家(別項)の一人として東海道の中樞に占據し、上り下りの俳人をして仰ぎ望まされたのも當然である。【著書】此國七部集(別項)○士朗五七集(同上)○此國句集(別項)○此國句集(別項)○此國句集(別項)○此國句集(別項)

【著書】元亨釋書(別項)三十卷(清北集別項)二十卷(佛語心論)十八卷(乘分略)別項(五卷)○佛徒問答二卷○佛徒問答二卷(正修論)一卷○佛徒問答一卷

【著書】元亨釋書(別項)三十卷(清北集別項)二十卷(佛語心論)十八卷(乘分略)別項(五卷)○佛徒問答二卷○佛徒問答二卷(正修論)一卷○佛徒問答一卷

新象派

【新象派】(解説)近代フランスを中心として、印象派の繪畫様式の後を繼いで、光の描寫を目的とし、更にこれが描寫上新たな技巧を用ひた繪畫様式の名稱。新たな技巧とは対象の光の色を光學理論に従つて分析し、それによつて得たる原色を一定の大きをもつ筆觸によつて並置し、その畫面を一定の距離から観るとき、その原色相互が、觀者の網膜上に於て混合せらるることによつて、

新時すゆき物語

【新時すゆき物語】(作者)文藝家・三好松洛・小川半平・竹田小出雲(角書)解説(初演)官保元年五月十六日(竹田)【諸本】竹田出雲(新演)【題名】新時すゆき物語(新演)人物と筋を用ひて、院本風に脚色したものである。【解説】(上の巻)六波羅北條(鎌倉)鎌倉將軍若君誕生(観)家老葛城民部丞(初め)國部兵衛(幸)時伊賀守(秋)月大膳等が参する。若君の守り刀を打つたが、來國行と正宗の伴郎九郎の兩人が召されたが、結局國行に命ぜられる。(案地外)幸時(奥)は娘海雲に向ひ國部の伴左衛門を誘つてきかせ、秋月大膳が海雲を所望するのを青かぬ。大膳は津川藤馬及び國九郎と共に、左衛門の奉納する刀に將軍家調伏の御符を入れ、國部父子を科に落さうと謀る。(清水花見)左衛門は國行及び叔妻平を従へ、領奉納のため清水寺へ来るのを、海雲が眼見、妻平と戀仲の腰元まがきの世話で對面し、別れる。國行が勸告した伴郎俊に逢つてゐる間に、國九郎が鎌倉に歸入れるのを國行に発見され、危い所を大膳が手裏剣で國

【解説】全體として餘り小技巧に走らず、角書にあるやうに時代と世話を拗ひ交せて、場面

自由意志に依つて、あるがまゝの人生を演説し、しかも愛すること、一英雄的なもの

新演藝 三月刊行 同十四年四月発行 東京英文社發行

上賞 櫻 佛人 姓名 原本熊吉 別

歌を詠んでみたが、頭父や父の跡を継ぐだけ

門心學にあらざることを示すために、特に石

心を脱して「生成」に還元し、その「生成」を

の所を得しめられる。神道の神明、釋教の佛

などをするために都講(通称)がある。都講は今日の財団法人・社団法人の理事の如きものであつて、講舎の経営運用を統括する。都講を補助する者に、輔仁司、會友司があつた。この外に會中の長老を老友とし、會の顧問として重要事務の相談に與らした。かくて心學會には、一方では會主・講師があつて、會中の修行を指導し、道話の席を開き、他方では都講・老友があつて會の事務と、會の維持に志に當つた。道話などによつて心學修行に志を起したものは、會の席に出て事知性の工夫をするのである。漸く透過(通過)して本心を體認したものを初入といひ、石門の道友たることを證明した斷書を與へる。斷書は手島堪庵の作つたもので、京都から與へられるのが原則である。關東方面ではこの斷書に中澤道二の別書が添へて渡されたものである。斷書を買つた者は初入善導と道話前講とが許されるのであるから、嚴重な試験と儀式を経て渡された。後には江戸の參前會、廣島の敬信會などでは、豫め京都から斷書を預つて置き、自らの認定によつて渡すことの出来る特權が授けられた。上河洪水に至つて、更に三合印鑑の制を定めたが、これは斷書を受けて後、更に長年月修行を怠らさず、その奥を極めた者に對して、全国各地の道話席に出て後講を勤め得る資格を認めたものである。三合印鑑とは、京都の明倫・修正・時習の三合が印鑑を揃えて保證したからの故である。これを受けるには、京都に出て發明の心境と道話の巧拙について、試験を受けるのを原則とした。かくして會中を長年月の間、絶えず切磋琢磨して怠るなからしむるやうに仕組まれてゐた。勿論、心學は士農工商、四民共通の教

へではあつたが、梅原が奮起した教化の當面の對象は、主として町人であつた。商人に道なしと傲然して商人を嘲笑し去らんとした者對して、彼は「我教ふる所は、商人に商人の道あることを教ふるなり。全く士農工の道とを教ふるにあらず」と力説した。蓋し享保時代は武家上下の財政破綻に窮乏し、農民亦重税に苦んで困窮の途に沈んだ。この間にあつて商人階級が擡頭し來り、富の力は止めどなく膨張を遂げた。かくて一方には營利のためには、憚るところ慎む所あるを知らぬ商人が擡出したと共に、他方にはこれに對する極端なる反感が起つた。爲政者の中に重農抑商の傳統的政策を抱いてゐる上に、新興勢力に對する過度の憎惡と恐怖とを含んで、商業墮落を策するものさへ生じた。かくて社會の思想は混亂に陥り、社會生活に對する一般の信念が壞れかゝらうとした。かうした時勢の中にあつて、商人のために堂々とその地位を主張すると共に、これに嚴重なる道徳を課したものが梅原であつた。近世教育史上に於ける心學の地位は、この立場のみから見ても、甚だ高しとしなければならぬ。併し後には四民に行きわたりに、上は公卿・大名より一般庶民に及び、實業(の御前)進講をさへ見た。【沿革】(創始時代)心學創始の普及状態は詳かでないが、要するに梅原一代の間は自覺した社會の進出を見なかつた。享保十四年開講以來、次第に盛んとなり、寛保・延享の頃には京都市中が勿論、大阪・大和・河内までも出講に赴くやうになつた。併し梅原一代の間は大阪・大和方面よりも、及門一味の道友が互に切磋琢磨する修行會の力が注がれてゐたことは疑はれない。梅原先生神字

【沿革】(創始時代)心學創始の普及状態は詳かでないが、要するに梅原一代の間は自覺した社會の進出を見なかつた。享保十四年開講以來、次第に盛んとなり、寛保・延享の頃には京都市中が勿論、大阪・大和・河内までも出講に赴くやうになつた。併し梅原一代の間は大阪・大和方面よりも、及門一味の道友が互に切磋琢磨する修行會の力が注がれてゐたことは疑はれない。梅原先生神字

【沿革】(創始時代)心學創始の普及状態は詳かでないが、要するに梅原一代の間は自覺した社會の進出を見なかつた。享保十四年開講以來、次第に盛んとなり、寛保・延享の頃には京都市中が勿論、大阪・大和・河内までも出講に赴くやうになつた。併し梅原一代の間は大阪・大和方面よりも、及門一味の道友が互に切磋琢磨する修行會の力が注がれてゐたことは疑はれない。梅原先生神字

は高弟の第一であつて、道二の地方遊説中は、いつも參前會の留守を預り、諸侯・旗本の邸に代講し、人足寄場の教諭を代理した。植村自謙(道三)は徳と行とに於てその師道二の徳を譽するものがあつた。北は奥州、西は四國地方まで遊説し、關東・關西兩地方の心學のため力を盡したが、殊に信州・甲州の心學は彼に負ふ所大であつた。北は安曇も亦江戸心學者の歸するもので、その一人の手によつて心學講舎を取立てること七合の多きに至した。常陸の太田・下館・土浦・小田、下野の烏山、奥州の泉・白河・柳屋等は、主として安曇の取立てた心學地であつた。この外、池田寛月・大島有隣(道四)・中澤道博等があつた。(文化・文政期)前期に次ぐ心學發展の時代であつた。地方への進出は目覚ましいものがあつた。文化前半の七ヶ年間に十二の新しい講舎が設立せられた。文政末年には公許を受けて會館にその名を掲げられたものだけでも百三十餘に達し、三十四ヶ國に分布した。大島有隣は文政五年に人足寄場取替役へ提出した「一年恐事願上候口上書」に於て、心學講舎の數百八十餘と言ひ、二百餘と言つてゐるが、蓋し大した誇張ではなかつたであらう。越中富山の仁俊會などのやうに、私に會館を建てて會館を附してゐたもの數も、可なり多かつたであらう。併し文化・文政期の心學運動は、關東・關西互に對峙して相譲らず、やゝもすれば全國的に統制が亂れようとした。上河洪水は心學の正統を承けて五樂會に據り、四方心學運動の統一に専念したが、寛容萬人を抱容する器ではなかつた。道二在世中は、彼の偉大なる抱擁力と底知れぬ親切とによつて、その間を調停して事なきを得たが、享和三年

六月道二没後は、漸く心學分裂の徴候を生じた。殊にこの頃になると、梅原門下の英傑が道二に對して地方有爲の心學者は、必ずしも京都仕込に限らぬこととなつた爲めに、この傾向は益々助長せられた。江戸・慶應の直轄會に歸して、文化・文政から天保に亙る三十餘年の間、關東心學を指導したかに見え大島有隣は、事によつて洪水と快からずして獨立した。彼の門下に矢口來應(道五)が出て廣島心學の獨立全く成り、中村徳水(道六)出て參前會に五世の會主となつた。更に門下近藤平格(道七)出て松山心學を六行會に獨立し、掛川心學の隆盛を招致した。かくして京都に對抗する關東心學が所在に擡頭し、中央の統制力や甚だ力弱きものとなつた。文化十四年上河洪水没いて京都心學全く振はず、薩摩徳澤(道八)に狂瀾を既倒に支へつゝあつたに過ぎない。奥田頼枝、洪水の門より出て中河各地を遊説し、分けても長州心學の隆盛を招致したが、その力は來應に及ぶべくもなかつた。文政中葉に至つて徳軒門下の後秀榮(道九)出て、培摩(道一)洪水等先賢の開拓に成る地盤を復興したのみならず、新に越前を開拓した。關西心學は彼によつて再び關東の勢力に對抗することを得たが、失はれたる統制は遂に反展することが出来なかつた。(天保以後)中央に於ける統制力愈々衰へて、心學運動が地方化し郷土化した時代である。これを全體として見れば、新しく起るもの、漸く廢絶し行くものの痛ましい交流期で、その聲は十九で、新に進出した國が五ヶ國であつた。廢絶したものも五ヶ國を暫く視野の外に置けば、累計百四十九國で、三十九ヶ國に分

布したことになる。天保七年十月、大島有隣没いて直轄會にあつた關東心學の指導權は再び參前會に歸つたが、會主竹田道跡(道十)といふ病めて、參前會にその人、道二の偉業を以てその形骸を留むるのみであつた。榮田鳩翁はこの間にあつて、修正會の類たるを起し、北小路大亮と提携して教諭所を新に起すなり、其だ斯むるところがあつたが、同年五月没して、新道の將來をその子遺精に遺託した。遺精(道十一)業を繼いで遊説する勢いが、酒々たる短勢の奔流を如何にもすることが出来なかつた。大阪には秋田周輔(道十二)出て、復興したが、寛政の感時を學せしめることは不可能であつた。今や關西心學、關東心學といふ兩派の系統さへも、その中に幾多の反逆者を生じて、心學は今や地方的、郷土的に孤立してしまつた。自講舎を創始して江戸心學に一異彩を放つた清水春齋は、參前會と争ひ、京都本山たる三合と斷ち、自ら三合印鑑を返附して自立した。遠州掛川に於ける心學運動の領袖であつた池田孝忠も亦京都に向つて獨立を宣言した。廣島心學はこの時代を以て最隆盛期とするもので、教信・勳心の兩會を押し立て、矢口來應・奥田頼枝・中村徳水・林左仲太など名だたる心學者を擁して、京都・江戸も亦薄候保護の下に著しい發展を示したが、何れも自治の形勢を示した。弘化二年、中村徳水、廣島より入つて參前會に主となつてから、道二の精神の復活を期し、「教化より修行」を標榜して精勵よく努めた。内は參前會の内紛を治め、外は自講舎や明倫會との關係を改善し、出でては遠く出羽に布教して鶴鳴會を鶴岡に起し、九州に踏み出して廣徳會を

豊後の國に立てた。江戸の徳講會、靜岡の信貞會など何れも彼の指導によつて作られたものである。併し彼のこの偉大なる努力も頗る大波を暫し支へたに過ぎなかつた。廢會相尋いで起つた爲めに、會館の整理を餘儀なくされた程である。かくて洪水より廢絶に至る間は、地方的には心學の勢を盛り返へした處も無いではないが、全體から見れば悲しき漸衰の過程を辿つたものに外ならぬ。【參考】石門心學の研究(白石正邦)○石門心學提要(藤田謙堂)○心學參前會一覽(藤田謙堂)○心學綱要(上)○心學明誠舎の起源(山本安藏)○心學(心學)關西(關西)○心學全書(山本安藏)○心學史要(立川謙堂)○心學教化の本質(並發達石川謙堂)○埼玉心學發展の概略と關口保宜石川謙堂(並發達石川謙堂)○東北地方に於ける心學教化の發展(石川謙堂)○心學(石川謙堂)新樂批「雅樂」を見よ。人格化(Peronalization)【解説】人間化と云ふに同じ。人間以外の生物或は無生物が人間と同じく人格的活動を行ふものであると想像することである。かくの如き想像は原始人の間に著しく現はれ、神話を形成する源となる。パウゼンは宗教意識に於ける人格化を、「(一)神靈力的人格化(二)自然力的人格化(三)理想的人格化」に分類してゐる。蓋し自然人的意識に於ては、主觀・客觀は明確に區別して理解されず、従つて自然的狀態の變化から起される自己の不安或は歡喜等の感じから判斷して自然力を認め、凡て自己主觀を標準として自然萬物皆心ありとする。然るに知力の發達に伴ひ、一方にはこの主觀的方面を抽象して客觀物質の方面を中心とす

心學道の話

【著者】奥田頼枝(編者)平野橋翁(成立・刊行)天保年間【解説】天保十年、江戸の参府...

新累解脱物語

【作者】曲亭馬琴(挿巻)歌川豊廣(刊行)文化四年【撰本】橋本宗作(撰本)...

はれ、西入権之丞と名乗つて寺小姓となつたが、計らずも醜態なる世をはかんで出家...

新可笑記

【作者】四鶴 序文に「難波俳林西鶴の署名」と「松雪」の印がある。【名義】...

承継と珠鷲に引き分けられた。かゝる處へ鳥有が来て、一同に向つて妖怪は各人の悪心の...

新可笑記

【著者】馬琴研究社(刊行)日本無名撰【撰本】...



四冊は何れも五話、巻二のみは六話より成る。巻二の二話「官女に人のしらぬ愛所」だけは公...

の傍に「武士は人をたすく一言の事」の如く内容の概要を示す一句を添へてある。各話の...

新歌舞伎十八番

義に最初から新歌舞伎十八番の内と外題に角書したものが十種内外、その時々々に應じて...

新蛙合

【著者】西島長持(字は元鶴、蘭名と號し、江戸の傳書柳谷の養子で、また蘭を以て開え...

新可笑記

者を別にして判詞を加へた二十番の蛙の句合に、所々に蛙の世と古今俳人の蛙の發句とを...

新可笑記

るゝや、當時僅か十二歳の眞觀も流刑に處せられたのであつたが、父の罪狀明瞭なると共に、その翌年召返された。光親には心言...

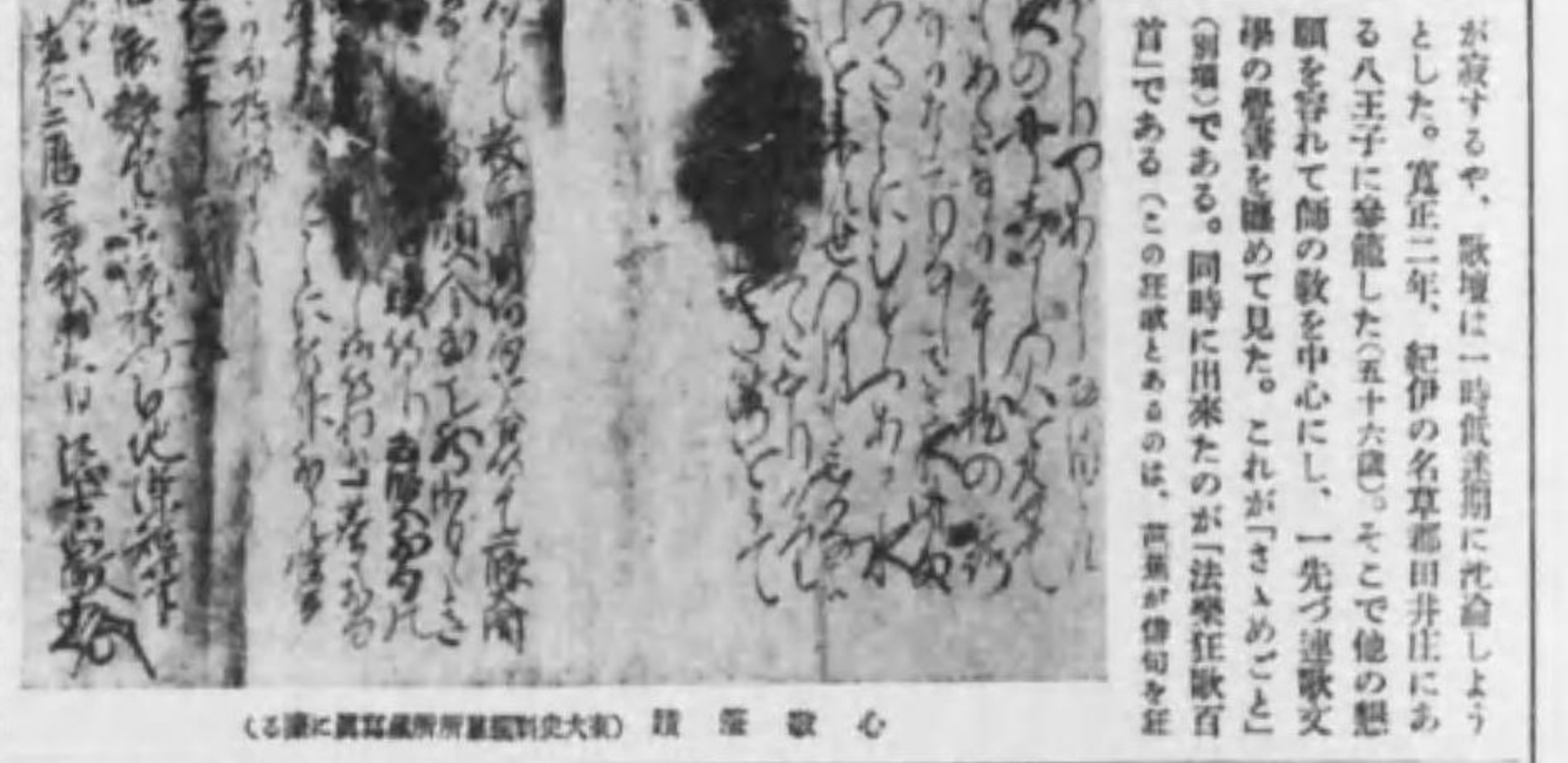
【題材】浦島傳説に基づく。
【梗概】(丹後の渡の江の浦)一度
幻を見た浦島は人心なく、それがために雨の
怒りに觸れる。そこへ奮て龜となつて陸近
くに浮び、子供等に捕へられて命を浦島
に助けられた乙姫が現はれて、浦島を龍宮に
誘ふ。浦島は恍惚として、乙姫と舞ひ狂ひつ
つ勝ふがまゝに海底に赴かうとする。(中
の墓)乙姫は、歡樂きはまつた浦島が、はるか
に閉ゆる船に昔を思ひ、老父母の面影を思
び、遂に乙姫の誨めも用ひず、玉手箱を形見
に納めて人間界に歸る。(話の墓)丹後網野
村のうぶすな祭から渡の江の浦に歸る。三百
年の月日を経て歸つてきた浦島は、茫然とし
てゐるが、乙姫を思ひ出して玉手箱を開くと、
標が立ち昇つて忽ち老翁となつてしまふ。

に感なるは越後の如きはなし。男女老幼相兼
つて足を踏んで唱ひ、手打つて其節を正し、
聲を助く。今に至つて此風四方に在りて人々
常には風ありと思へり。享保の頃より往て々々
此風起るとなり」と見えてゐる。享保よりは
少し後かと思ふが、兵庫口説といふ流行音楽
(西歌)が今の兵庫や大阪地方に行はれた。こ
の口説歌に、「長崎をびや其九」と題するもの
があつて、長崎の海老屋基九が親の代からの
小間物賣をやめて、織物類を積んで海路から
上つて来て、大阪新町の遊女芝と深い仲と
なつたことが綴つてある。これから出たので
あらう。兵庫口説に海老屋基九といふものも生じ
て、「お夏清十郎兵庫口説其九」し、「お梅博次
郎兵庫口説其九」し、「お六揚巻兵庫口説其九
ぶし」などと題する話ひ物が刊行された。思ふ
に長崎から来た海老屋基九の事蹟を説つた口
説節といふ意で、海老屋基九は其九節と呼ん
だのであつて、兵庫港が風生地なのではあ
るまいか。それが海運関係で瀬戸内海沿岸か
ら日本海沿岸に広まり、次第に各地に及んだ
ものらしい。今著名なのは越後版で、それ
にも幾種があるが、米山其句が最も名高い。
又名古屋其句も周知のもので、相模其句はこ
れから出たのだといふ。又北の方では相模其
句、御茶其句、小坂其句を導ぐべく、南の方で
は海老屋其九が盆節歌として愛樂囃下に遺存
してゐるのをとすると、同より地方によつて
變遷を興し、曲調も歌詞も様でない。

【参考】日本歌謡集成高野田編○近代歌謡集
(高野)
【著者】伊勢 謙次
【刊行】明治三十九(一九二六)年。『新撰
書類』(編輯者)水谷不備・幸田露伴『成
立』國書刊行會叢書の第一期に属するもの
で、『新撰書類』(編輯者)水谷不備・幸田露伴
の『新撰書類』(編輯者)水谷不備・幸田露伴
の文學を編してゐるのを補つた形で編輯さ
れてゐる點に特色がある。主として徳川氏の

世の書物の、或は傳ふること稀にして題ること
と罕なるもの、或は未だ刊せずして泥ぶに垂
んたるもの、或は断片漸く著に塵散ら
せんとするものを集め刊して」と願言にある。
【内容】第一―四册『演劇』(西澤文庫、後作
者)伊勢謙次。第二―五册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第六―八册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第九―十册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第十一―十二册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第十三―十五册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第十六―十八册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第十九―二十册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第二十一―第二十三册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第二十四―第二十六册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第二十七―第二十九册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第三十―第三十二册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第三十三―第三十五册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第三十六―第三十八册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。第三十九―第四十册『演劇』(伊勢謙次、
後作者)伊勢謙次。

【題解】其は漢として、確とした後り所が無
い。幼年時、東山文化催進の連環が世相の
溫暖の中に却つて抒揚されつゝあつた時に際
會してゐる。かくて幾年、幾つ年を離れて
辛した頃、心数は當時の新撰集を率ゐる大正
徹の門下に歸せられたやうであるといふ。心
数より先輩の宗匠、伊勢謙次等の名も
既に漸く社會の認められたとなつて
ゐた(さゝめこと)。しかし内へ内へ
と求めて止まない眞摯の心持主
である心数は、輕薄な後進道徳を
排した。彼は三十年一日の如く、
端正徹の指導に與る傍ら、佛學
や儒教の研究を疎かにしなかつた
(伊勢謙次)。この時代にふさわ
しい。



白河下りの旅立ちもしたが、それは、文學的精
進の回熟期となつた。「ひと月言」「老の言」
「心教」(編輯者)伊勢謙次。二年八月法華百首」等
は、すべてその間の著作で、相模の大山の麓
にある知るべの寺に止し中執事されたものが
多い。宗匠(伊勢謙次)もその頃度の東下りをし
てゐたが、心教とも交り、文明元年の太田道灌
撰行の「河野千首」は、共に兩人名を連ねて
ゐる。文明二年正月は、共に三人名を連ねて
ゐる。その法華の意味で「正徹百首和歌」(心
教百首)とも題された。時洛後の心教は、時折
津歌の會席に老體を出してゐる(江戸歌合)が
別體のため閉居しがあつたものやうに
思はれる。その翌七年四月、七十歳の高壽で
歿した。

【著者】「さゝめこと」(私語とわら)○ひとり
ごと○老のくり言(以上各初稿)○馬上集(巻一)
(編輯者)伊勢謙次。九年若菜に侍り山田の途中、
尋ねられるまゝ、馬上で書へた歌謡の遺稿が書名が
ついである○心教紀行(巻一)二十冊(編輯者)伊勢謙次。
仁の風を讀んで中下、品目に置いたこと、又鎌倉
にも止したことを記す○心教抄(心教百首)
(巻一)○心教抄(心教百首)
(巻二)○心教抄(心教百首)
(巻三)○心教抄(心教百首)
(巻四)○心教抄(心教百首)
(巻五)○心教抄(心教百首)
(巻六)○心教抄(心教百首)
(巻七)○心教抄(心教百首)
(巻八)○心教抄(心教百首)
(巻九)○心教抄(心教百首)
(巻十)○心教抄(心教百首)
(巻十一)○心教抄(心教百首)
(巻十二)○心教抄(心教百首)
(巻十三)○心教抄(心教百首)
(巻十四)○心教抄(心教百首)
(巻十五)○心教抄(心教百首)
(巻十六)○心教抄(心教百首)
(巻十七)○心教抄(心教百首)
(巻十八)○心教抄(心教百首)
(巻十九)○心教抄(心教百首)
(巻二十)○心教抄(心教百首)
(巻二十一)○心教抄(心教百首)
(巻二十二)○心教抄(心教百首)
(巻二十三)○心教抄(心教百首)
(巻二十四)○心教抄(心教百首)
(巻二十五)○心教抄(心教百首)
(巻二十六)○心教抄(心教百首)
(巻二十七)○心教抄(心教百首)
(巻二十八)○心教抄(心教百首)
(巻二十九)○心教抄(心教百首)
(巻三十)○心教抄(心教百首)
(巻三十一)○心教抄(心教百首)
(巻三十二)○心教抄(心教百首)
(巻三十三)○心教抄(心教百首)
(巻三十四)○心教抄(心教百首)
(巻三十五)○心教抄(心教百首)
(巻三十六)○心教抄(心教百首)
(巻三十七)○心教抄(心教百首)
(巻三十八)○心教抄(心教百首)
(巻三十九)○心教抄(心教百首)
(巻四十)○心教抄(心教百首)
(巻四十一)○心教抄(心教百首)
(巻四十二)○心教抄(心教百首)
(巻四十三)○心教抄(心教百首)
(巻四十四)○心教抄(心教百首)
(巻四十五)○心教抄(心教百首)
(巻四十六)○心教抄(心教百首)
(巻四十七)○心教抄(心教百首)
(巻四十八)○心教抄(心教百首)
(巻四十九)○心教抄(心教百首)
(巻五十)○心教抄(心教百首)
(巻五十一)○心教抄(心教百首)
(巻五十二)○心教抄(心教百首)
(巻五十三)○心教抄(心教百首)
(巻五十四)○心教抄(心教百首)
(巻五十五)○心教抄(心教百首)
(巻五十六)○心教抄(心教百首)
(巻五十七)○心教抄(心教百首)
(巻五十八)○心教抄(心教百首)
(巻五十九)○心教抄(心教百首)
(巻六十)○心教抄(心教百首)
(巻六十一)○心教抄(心教百首)
(巻六十二)○心教抄(心教百首)
(巻六十三)○心教抄(心教百首)
(巻六十四)○心教抄(心教百首)
(巻六十五)○心教抄(心教百首)
(巻六十六)○心教抄(心教百首)
(巻六十七)○心教抄(心教百首)
(巻六十八)○心教抄(心教百首)
(巻六十九)○心教抄(心教百首)
(巻七十)○心教抄(心教百首)
(巻七十一)○心教抄(心教百首)
(巻七十二)○心教抄(心教百首)
(巻七十三)○心教抄(心教百首)
(巻七十四)○心教抄(心教百首)
(巻七十五)○心教抄(心教百首)
(巻七十六)○心教抄(心教百首)
(巻七十七)○心教抄(心教百首)
(巻七十八)○心教抄(心教百首)
(巻七十九)○心教抄(心教百首)
(巻八十)○心教抄(心教百首)
(巻八十一)○心教抄(心教百首)
(巻八十二)○心教抄(心教百首)
(巻八十三)○心教抄(心教百首)
(巻八十四)○心教抄(心教百首)
(巻八十五)○心教抄(心教百首)
(巻八十六)○心教抄(心教百首)
(巻八十七)○心教抄(心教百首)
(巻八十八)○心教抄(心教百首)
(巻八十九)○心教抄(心教百首)
(巻九十)○心教抄(心教百首)
(巻九十一)○心教抄(心教百首)
(巻九十二)○心教抄(心教百首)
(巻九十三)○心教抄(心教百首)
(巻九十四)○心教抄(心教百首)
(巻九十五)○心教抄(心教百首)
(巻九十六)○心教抄(心教百首)
(巻九十七)○心教抄(心教百首)
(巻九十八)○心教抄(心教百首)
(巻九十九)○心教抄(心教百首)
(巻一百)○心教抄(心教百首)

の作の流記が「やまと新聞」に載つた。【尾巻】根津七軒町に住む針賣吉川宗悦は治療の傍ら高利貸をしてゐた。故本小普請組の深見新左衛門はその金を借りてゐた。宗悦がそれを手打に、下男の新左衛門にその死骸の死骸を往來に捨てた。...

うとするのを無理に押し倒した。と、丁度土蔵を直してゐる最中で、そこら一面に散らばつた草の下に刃を切る押切が隠されてゐた。お久はその押切のために命を奪られた。...

い境地を捨てて、作者の見た真を描き、人生的興味を傳へようとする。即ち慰安を主眼とした唯美主義の演劇ではなく、切實な反省的な感情に依つて作者の心を満たさうとする。〔二〕これと同じく、従来の演劇が動蕩蕩の道徳に安住して手盛りで解決をつけてゐるのに、新劇の作者は一切の既成觀念に對して鋭く批判し、更にわれわれを閉鎖する社會問題や兩性關係等の眞相を開明することに努め、思想劇とか問題劇とか稱せらるゝ種類の戯曲まで生むに至つた。〔四〕波瀾重疊、荒唐無稽な筋の變化で耳目を驚かした歌舞伎劇に對して、新劇は主として言葉に依つて心靈に訴へんとするものである。前者は外的な美を専らとしたが、後者は内的な思想的文學的美や價値を具へる演劇となつた。又言葉に就いて言へば、前代の人物を描く場合さへも殆ど例外なく現代語が用ひられてゐる。これは近代人に訴へる演劇として、われ等と同じ人間たる現實感を與へるために外ならない。劇々たる七五調や誇大な美辭麗句の代りに、言葉の微妙な陰影や會話のイキが新劇の舞臺の美しい魅力を作ることになつた。〔五〕事件深山の行爲に依らず、主として臺詞に依つて劇の展開を可能ならしめるのは、一に近代舞臺設備の進歩の力である。韻律舞臺は作者の注意力を集中せしめ、背景は場面の要求する情調を準備し、更に電氣照明が俳優の微細な表情をも十分傳へ得ることになつたので、作者は幕地に簡潔にその欲するところを描く事が出来るからである。歌舞伎劇に於けるが如き美しき無駄は一切除いたばかりでなく、効果ある暗示的手法が新劇の一特長となつて来た。〔六〕わが在來の演劇の様式的固定

は、歌舞伎劇は勿論新派にあつても女方を使つてゐたことが大半の原因である。これ等の演劇に對する不滿から立つた新劇は、その現實的主眼からしても生きた女性を舞臺に理想として脚本が書かれてゐる。女方の限られた品目にあつてはめて書く拘束から解放されて、人生の眞を自在に寫す機會が、新劇の發生と共に始めてわが國に到來したといつてよい。この點にも、既に我が國に對して西洋近代劇の著しい影響を見出し得るであらう。〔沿革〕我が國に於ける新劇運動は、歐洲に比して約二十年も遅れ、明治四十年代に入つて開始された。それは素より日露戦後の社會情勢が生活の上に急激な變化を齎したのにも因るが、一方歌舞伎劇は名優團・菊・左の相次ぐ死に依つて漸くその魅力を失ひ、又黄金時代を現した新派劇のマンネリズムが漸く飽きられ出した爲めであつた。爾來四半世紀、その消長の跡はほぼ四期に分つて出来る。〔第一期〕第一に立つた坪内逍遙博士主宰の文藝協會(前)は、まづ研究所を設けて俳優養成し、學校内の試演から社會の公演に漸進の方針を執り、沙翁劇の用意深き演出を最初として十餘回の公演を重ねた。次に小山内薫・市川左團次(自由劇場)も、演出者として俳優との協同事業の故もあつて頗る急進的な方法に出で、第一回に歐洲近代劇の清新な戯曲を上演して開演九回に及んだ。この二者は單に先驅者としてののみならず爾後の新劇運動に對して二つの指針となり、それら異なる影響を與へた事實は記憶せらるべきである。即ち前者の社會的進出を目的としたの對して後者の舞臺運動を志したの對して常に先驅

的態度を持した事、一が俳優養成の基本から始めて漸進的に刷新の實を擧げんとするに對して、他は急進的戯曲の上演に依つて革新を策した事これである。結果として文藝協會は新劇界に多くの演技者を殘し、自由劇場の舞臺は戯曲家を刺激して新作家の出現を促すに至つた。さてそれ等の烽火に應じて新派俳優の養成に努め、その卒業生は後に相寄つて士魂劇場を興した。新社會劇なるものも生れ、また井上正夫は新時代劇協會を組織して大正年代に入つたが、新劇運動は俄然急激にその勢を加へて、劇團數も既に十指に餘り、その主なるものに村田實等のとりて、上山草人の近代劇協會、市川猿之助の青雲會、伊庭孝の新興社、川村花菱の創作試演會、下山草子の合衆社、M.公演社等がある。更に文藝協會は、内部の紛擾から解散して島村抱月・松井須磨子の藝術座(前)・東海劇團・土肥春晴等年長劇の演劇協會、森美次郎・横川唯治等少壯派の舞臺協會の三團體を生んだ。澤田正二郎の新興劇(前)は更に後年藝術座より脱化したものである。かくしてそれ等が當時新劇の本城とされた有樂座に公演を遂げ有様變化した舞臺を残して第一期の運動は悲愴な終末を告げたのである。併しそれとて決して徒勞に終つたのではない。未だ新しき創作戯曲を描いてゐない草創期とて、上演日目の殆ど全部を演劇に求めたが、近代劇の種目

的作品の上場は思想的にも手法的にも如何に我が國を啓蒙したか知れない。優秀な翻譯脚本を寄與した森島外功と共に忘るべからざるものがある。〔第二期〕一度消滅に瀕したかに思はれた新劇運動は、大正の中華に至つて職業俳優の手に依つて再び行はれ、それが既成劇壇の内部に影響を及ぼしたことがこの期の特色となつた。即ち尾上菊五郎の狂言座(大正三年)をはじめ、守田勘彌の文藝座(大正七年)、市川猿之助の春秋座(大正九年)、更に新派の花柳政太郎の新劇座(大正十一年)等がそれ、彼等は主として日本の新劇作家の作品を上演して前期との著しい對比を見せたが、修練を積んだ俳優の技藝で創作戯曲を演じたので、何れも舞臺的にすぐれた成績を擧げる事が出来た。そして、彼等の成功が濼踏みとなつて、武者小路實篤・菊池寛等の作品がやがて商業舞臺の関心を浴びる機縁を作つたが、商業舞臺に於けるこの種作品の上場が新劇趣味の弘布、社會的浸潤に、非常に役立つたのは言ふ迄もない。従つて一時大劇場の出し物も、たゞは景物としてと云へ、毎月新劇の追加を見るが如き現象を示すに至つた。これは藝術座の不斷の興行と相俟つて上記劇の招來した効果である。併し職業俳優は藝術的作品の進出に依つて別に特殊劇團を組織するの必要を見なくなり、次第にその活動を停止した。他に新劇團としては、林幹の創作劇場(大正八年)、如中藤波の新劇協會、西條東之助等の研究座(大正九年)があつた。〔第三期〕第三期のために商業舞臺が殆ど亡失した後、大震災のたけに商業舞臺が殆ど消失した。第三期の新劇運動が起つた。焼け残り會館・講堂等をその舞臺として二十に近い群小劇場が一時に盛起したが、舞臺的にもその多くは殆ど何等

の功績を残す事なく、劇場の復興と同時に影を消め、水谷八重子が再興した藝術座、金平軍之助の近代劇場、如中の新劇協會等が僅かに開演を續け、また東上後の新劇が間々新劇を演ずるに過ぎない状態であつた。而も震災の衝手を受けた舞臺劇場は、次第に健全な息を専らにして藝術的作品を顧ることになつたが、この時に立つたものが小山内薫・土方與志主の築地小劇場(前)である。これは自身の劇場を所有し、俳優を養成しつつ不斷の興行を續ける等、従来の新劇運動に對して見られぬ特色を持ち、而も新しい劇創成に、優秀な演出に、卓然たる規範的業績を示し、この小劇場の存在がその期を代表するものとなつた。即ち本據たる劇場を有して、一種の實驗室芝居の常設館としての年中間演場に對抗し、一個の興行劇場として年中開演し、「歌舞伎劇でも新派劇でもない、新しい劇創成」を達成し得たことは、とりも直さず日本の新劇が、はじめて大地に根を下ろした證となすべきであらう。かくて築地小劇場は經濟的悲境に處しながらも、苦闘を續けること六年、小山内薫の死に依つて實際上の解散を見た昭和四年の春まで、終始藝術劇場たる使命を果し、又よく次代演劇の母胎となつて、我が新劇運動の上に特記すべき時期を作つたのである。〔第四期〕これより先、歐洲大戦後の社會情勢は階級争闘を愈々激甚ならしめ、左翼的演劇の派生を見るに至つた。我が國に於ても大正十年頃より労働劇團、先驅座が生れ、震災後は先驅座の解消によるや、有力な前進座(後、前進劇)とトランク劇場(後、プロレタリア劇場)の二者が、主として左翼思想の宣傳運動のために活動したが、昭和三年「ナツア」日

本舞臺(前)の結成と共に合同して左翼劇場を組織し、その公演を重ねて来た。築地小劇場は分裂して劇團築地小劇場と新築地劇場とを生んだが、當時河原崎長十郎の心座の如きも左翼演劇に轉向し、世を擧げてマルキシズムへの關心が熾んな折向し、兩者は互に上演日目にその赤き旗を掲げ有様であつた。而してかゝる傾向の極限は、結成たる政治劇場と化するより外ないで、新築地劇場は遂に「プロレタリア」(日本プロレタリア劇場)に加盟して、その統制に服するに至つたが、一方劇團築地小劇場は方針を異にする一群の脱退に依り、また同五年舞臺地の優秀な演技者を組織した劇團新東京が生れ、約一年の活動を續けた後、友田夫妻は新に研究劇團築地座を興し、爾餘の青山・沙見等は、劇團大東京に據つて大衆劇にその使命を行はんとする。即ち舞臺地小劇場に於て成育された我が新劇は、左翼的政治劇場と自由主義的藝術劇場と分派對立しつつ、今後の進展を期待されるのが現下の状態である。(木本)

に、有機的關係を保つてゐるものであることを知らざるが如く、或は知つてゐても何等顧慮されたいところから、かゝる現實は、眞の現實でないといふので、現實主義に社會的意義を與へて、これを主張するやうになつた。これが即ち新現實主義である。〔解説〕新現實主義の主張は、社會的變動によつて、藝術も亦變るといふことを認める。即ち生きたとする意志は藝術の根本的要素であつて、從來の現實主義も、この生きたとする意志を肯定してはゐるもの、それは單に社會から孤立し、社會の變動と無交渉であつて、極めて淺薄である。この淺薄さにあきたらずして、現代の意志が選んで創造した新しい統一のある藝術を求めようとするのが新現實主義の態度である。かゝる態度は、イブセンやチェホフの作品などに既に見えたもので、今日のプロレタリアの文學は、この新現實主義から出發したとも言へる。從來の自然主義等の現實主義文學に於ては、題材としての現實は、自由に廣く取入れられてゐる。そして表現の技巧も洗練され、確實に明快になつて來てゐるが、その取扱はれてゐるところの現實は、言はずば人生の一つの波としてのみ取扱はれてゐるにすぎない。換言すれば靜的に取扱はれてゐたえない緩慢な、而も不可避な勢で動きつたあつた時勢の移動が、現實をゆり動かしてつたのである。それに伴ふ不安、疑ひ、及びそれ等と交錯するところに自ら開解せられる個人生活の生理的表現、その生命乃至意識として振入れられるに至らなかつた新要素であつて、新現實主義は、かゝる要素を振り

入れて、現實の一切の事象のうちにして、經濟的・社會的・倫理的意義をその中心點としよとするのである。〔日本に於ける新現實主義〕新現實主義は、歐洲大戦中若しくはその後に於て、ロマン・ノール、バルビュス、ド・ボエ、イバノ・エ等の作家の紹介と共に、日本の思想界に現はれて來た。片上伸を初め二三の思想家批評家に依つて主張され力説された。片上伸の廣く現實を直視せよといふ叫びは、個人の行動のみに局限された現實でなく、個人といふ結びつけてゐる社會の現實に注目せよといふ當時の心境的作家に對する忠告であつた。作家としては、志賀直哉・星亨・佐藤春夫・菊池寛等の名があげられる。なほ菊池寛を中心とする所謂新技巧派(前)の作家達を新現實主義の名で呼ぶ場合もある。(宮本)

人權新説 しんげき 論文 〔著者〕加藤弘之 〔刊行〕明治十五年十月 〔由来〕著者は嘗て明治八年に著した「國體新論」に於て、天賦人權説を主張したが、後、グロウインの進化論を知り、社會進化の理を究むるに及んで、天賦人權説の妄誕たるべきことを悟り、人權は國家の強盛な力によつて始めて正當に賦與せらるべきものであるとなし、本書を公試した。〔解説〕著者は以上の理由を三章に分つて論明し、「凡そ吾人の權利は蓋し專制の大權力を掌握せる治者即ち最大権者の保護に由りて、國家の成立と共に始めて生じたるものと認めてよいと信ずる。專制の大權力を掌握せる最大権者が起らねば、國家も亦未だ實に成立せず、吾人の權利も國家を離れて獨り生ずることが出来ぬ。これに依つてこれを觀れば、國家と吾人の權利とは實に巴むを得ざる



(藏家傳侯田前) 本家田前



(藏家源傳) 本岐隠

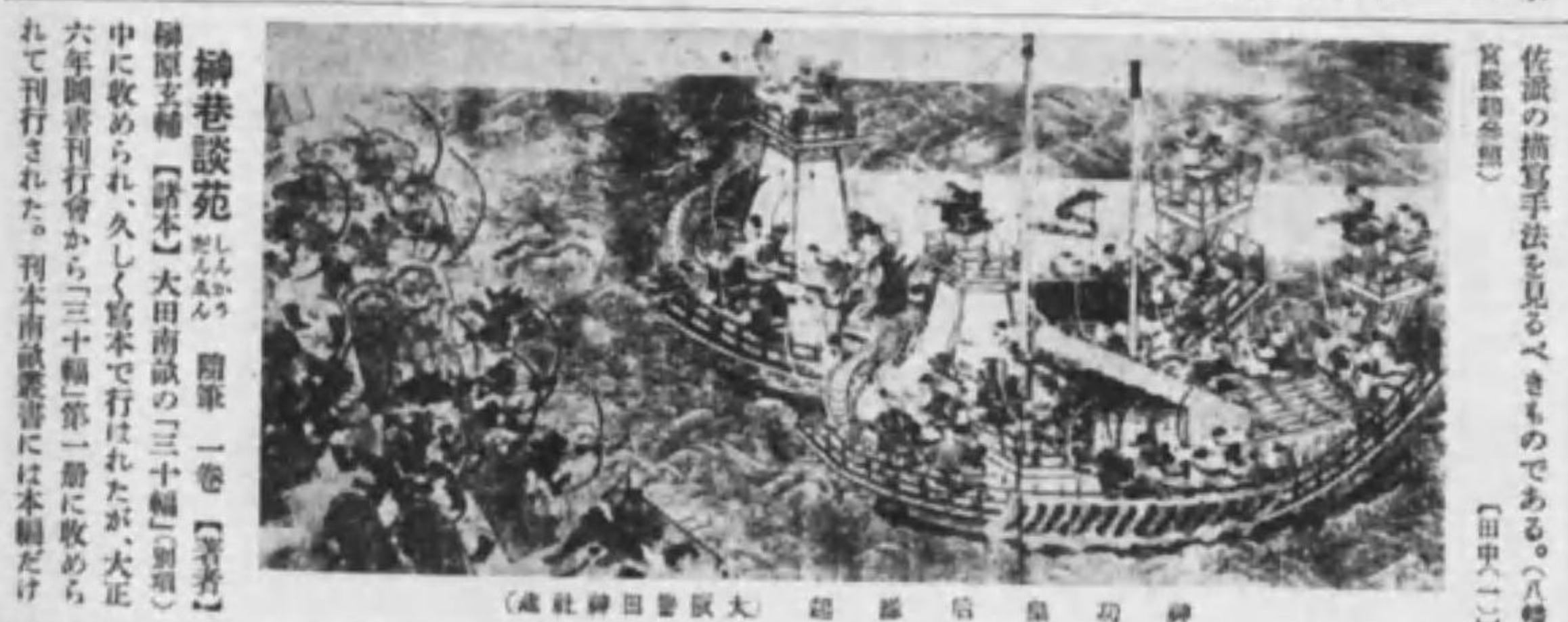


書典 本長親



(藏氏綱信木佐佐) 本長親

の場合に際し、各人衆及び各個人の安全を求むるがために、専制者が始めて設立したのだ」とした。が、著者は権利保有の用意として、イギリスの例を引用し、「たとひ人民が治者の保護によつて権利を得るをも、人民が能く之を保有して安に他のために毀損妨礙せらるゝを防禦し、並にその足らざるものは、更に之を得せんとする氣力と並にこの権利を保有若くは得せんとするに耐ふべき知識がなくては、その権利も殆ど有名無實となる」と戒めた。言ふところ、少しく中庸を失してゐるが、極端な「天賦人權論」の弊を矯める上に効果があつた。【附記】本書が出版されると、自由民権派論客は一齊に立ち上つて本書を論駁し、中村尚樹編「人権新説論集」が出た位である。それと同題で梶木甚三郎編のものも出た。駁論の主要なものは、矢野文雄の「人権新説論」、馬場辰猪の「天賦人權論」、植木枝盛の「天賦人權論」などである。なほ本書出版と共に、明治十五年六月にかけて、主権王權を論じた書が数種刊行された。【高田】



佐渡の捕魚手法を見るべきものである。(八幡宮蔵書)

【附録】河内豊田神社所蔵二巻、神功皇后の三御征伐を圖繪した繪巻であつて、奥書によれば、永享五年四月、足利將軍義満が寄進したものである。本誌にはこの繪巻以外に、二巻田宗廣繪起三巻があり、これも同時に義満の寄進に係る。當時、義満は左大臣となつたので、源氏の祖神たる八幡宮に祈願奉養の心を盡めて、これ等の繪巻を寄進したものと想はれる。この兩巻とも、その筆致や構圖等相類似し、いづれも土佐光信の筆と傳へられてゐるが、永享五年は光信生誕以前である。併しその書風から見れば、また足利時代の土

で附録はない。三十編の本誌には南歌の序及び本編並附録の後に各説語がある。【解説】和漢の故事・世説等について考説し、又古語の出所、和漢類似の事跡、有職の事に及んでゐる。「源氏物語」以下の古典・歌集等を引くことが多く、言語の研究上参考になる。さてもさ以下八十二則を収め、別に附録二十則を添へてゐる。この附録は原本になかつたのを、大田南畝が三十編を編する際、著者の遺稿の家から著者手書の故紙を得て添へ補つたのである。【著者小傳】編原玄輔、字は希朝、通稱小太郎、京洲と號した。和泉の人で本姓下山氏。幼時父に養はれて編原氏を冒し、やゝ長じて京都に上り、木下順庵の門に入り、才學を以て偏に稱美せられた。後に紀州藤川氏に招かれてその備員となつた。その學博通達、殊に經傳を以て自任したが、別に兼筆を善くし、又天文・術數に精しかつた。寶永三年正月三日歿、享年五十一。藩命によつて「大明律傳解」を著し、その他「印章備考」等の著作がある。曾て明國人甘地法に依つて朱肉を製し、文人界を益したことは一佳話である。【編原】新古今演劇十種(ゆきんじゆ) 演劇【解説】市川宗家の歌舞伎十八番(別項)及び新歌舞伎十八番(別項)に對して、五代目尾上菊五郎が、元祖尾上松助以來の家傳の中から歌舞伎と相談の上、比較的高尚な狂言のみを選び、新古今演劇十種と稱した。なほ尾上梅幸、六代目菊五郎によつて脚色にも演出にも修正が施され、曲日も追加されてゐる。曲日は「土細木」「一つ家」「離世」「刑部屋」「古寺の猫」「英木」「戻橋」「菊屋敷」「羽衣」「骨牌座敷」で、この外に「掛り三番」を加へる場合もある。

渡尾家歌集(二) 渡尾家歌集(一) 新古今和歌集
 渡尾家歌集(二) 渡尾家歌集(一) 新古今和歌集
 渡尾家歌集(二) 渡尾家歌集(一) 新古今和歌集
 渡尾家歌集(二) 渡尾家歌集(一) 新古今和歌集

新古今和歌集詳解
 新古今和歌集詳解
 新古今和歌集詳解

用ふるものにて、古歌の運脚して思ひ出さる
 用ふるものにて、古歌の運脚して思ひ出さる

新古今和歌集の樹立を目ざして生れたのが、こ
 新古今和歌集の樹立を目ざして生れたのが、こ

渡尾家歌集(二) 渡尾家歌集(一) 新古今和歌集
 渡尾家歌集(二) 渡尾家歌集(一) 新古今和歌集
 渡尾家歌集(二) 渡尾家歌集(一) 新古今和歌集

新古今和歌集詳解
 新古今和歌集詳解
 新古今和歌集詳解

用ふるものにて、古歌の運脚して思ひ出さる
 用ふるものにて、古歌の運脚して思ひ出さる

新古今和歌集の樹立を目ざして生れたのが、こ
 新古今和歌集の樹立を目ざして生れたのが、こ

より延文年間(新千載集)の撰ばれるまで、二條師範家より撰者の出でざるなしと述べて、『水鏡』の二年三月の二十八日になしと述べて、

従つてその歌には技巧も少く、調も穏かである。因みに良基の名は、本集では各部までは太政大臣と記し、以下は攝政太政大臣と記してある。これは四季部奏賀、即ち水鏡二年三月十七日の翌月に攝政に任ぜられたからである。以上の事も、主ある歌、制の詞など、極めて退屈的な、東偏された思想をもつた當時の歌壇に在つての事で、全體としては異色なきものである。『草廬集』(和歌四六二)各別題のしらべと共に、考索せらるべきである。ただ本集が、『新撰集』以来、大部分の勅撰集撰者を占めた二條家(別題)の撰の、最後のものではあつた事は注意される。

何法皇の院政時代で、この元年より降ること十九年(大正)まで、『金葉集』の撰があつた頃である。その頃より撰の命が下る年迄の歌があつた由である。『撰本』二十一代集本がある。國歌大系歌部(國歌大系第六卷所収)『内容』序はなく、歌数は勅撰次第には千六百二首、『拾芥抄』には千九百七十首と言ふ。國歌大系本は千六百六首を収めてゐる。部立は、春(七)・夏(七)・秋(七)・冬(七)・離別(七)・神祇(七)・禊祓(七)・哀傷(七)をたてざる外、特別なものはない。撰入歌の多きものよりすれば、定家三十二首、爲家二十八首、實業・爲氏二十七首、龜山院二十五首、基忠二十首、伏見院、後宇多院、後二條院、後成・家隆各十八首、宗尊親王・國助各十六首、後醍醐院、家長・實業各十五首、良經十四首、和泉式部十三首、順徳院、公卿十二首、西行爲世十一首、後鳥羽院、隆博、信實、光俊、寂蓮の各十首、爲兼有、藤原・定爲(爲氏の子)・從二位爲子(爲兼の子)・式部院御所の各九首である。その他、本集によつて初めて勅撰集作者となりしもの、後宇多院以下約六十人に及び、本集にのみ名を載せたるもの約四十人。その多くは二一首首を入れるのみである。これ等は、『撰拾遺集』に於ける前例によるものとは言へ、撰歌の範囲を近きに限つたこと、及び時の政權との交渉なども原因するであらう。

と共に、二條家風の手法の如く評せる人もある。ただ作者とその撰入歌より見て、大覺寺に厚く、持明院統に薄かつたやうに思はれる。撰者爲世は、後宇多院の御師であつたといふ理由もあつたであらう。こゝにわづかに時勢との交渉が見られるが、撰者爲世の十一首撰入に對して、爲兼の九首を入れた等の點から見れば、二條家對爲兼一派との軋は、未だ甚だしく大ではなかつた事を想はせる。全體として考ふれば、ただ二條家正統の爲世の撰といふに過ぎぬ集である。

せるものとしてゐる。或は密教ともいふ。法身直説の秘密の法門なるが故である。【所依の撰論】大日經及び金剛頂經を以て正依の本經とし、これを兩部の大經と稱する。台密では、これに蘇悉地經を加へて三部の大經と稱し、東密では、これに蘇悉地・地持・要略論の三經を加へて五部の大經と稱する。論釋では釋尊阿闍梨・發菩提心論・大日經疏(台密では大日經疏)・金剛頂經疏等を依用し、特に空海の撰述せる十住心論・關三教論・秘藏寶鑰・即身成佛義・摩訶實相義・時字義等を以て、本宗によつて立つ要書とする。台密につきてはこれを略す。【教理】體相用の三大によつて本宗教義の骨格が成立する。體大といふは地・水・火・風・空・識の六大であり、相大といふは大・三・法・觸の四曼であり、用大といふは身・口・意の三密である。六大・四曼は教理であり、三密はその教理を實現する方便である。地・水・火・風・空・識の六大、これを簡せば、色・心の二大は法爾の體性で、上は大日如來より下は萬象に至るまで、悉くこれによつて成らざるものが無いから、體の上よりいふ時は、一切平等となる。他の大業教が眞如法性を以て萬法の體と爲せるに反して、本宗が六大を以てせるは、彼に一步を寫せるものである。四曼とは四種の曼荼羅で、即ち大曼・三摩耶曼・法曼・羯磨曼である。これ萬象の何物にも具はる相であつて、大曼とは全體の相をいひ、三摩耶曼とは部分一々の相をいひ、法曼とはその名稱をいひ、羯磨曼とはその作業をいふのである。四曼によつて、同じく六大より成つてゐるに拘はらず、そこに縁起萬有の別相が成り立つ事となるのである。かくて四曼によつて萬有に差別あるけれども、同じく六大所成

なるを以て、この身の儘にして大日如來と同一の境地に遊び得べき可塑性のあるのである。その可能性を實現しむるものは、實に三密の業用である。身に印契を結び、口に眞言を唱へ、心に三摩耶地に住する時は、父母所生の身のまゝにして、大覺位を即證すべしといふのである。これによつて即事而證の教理と實際とが成立するのである。かくて本宗に於ては、即身成佛を主張するが、この成佛の理具と加持と顯得との三種を分ち、六大の體大具と加持と顯得との三種を分ち、六大の體大具の上に立つて、このまゝを大日如來と觀るは理具の成佛であり、その理具が實現して顯得の成佛となるのは、加持によらねばならぬのである。加は佛力の加はること、持はこれを信力によつて持することである。佛力我に加里、我これを持する時に、入我我人の作用が己と佛との間に起り、自身と佛身とが一體となる。この間に父母所生身、即生大覺位となるのである。その佛身顯は法身であつて、本有の理法界としつゝ而も常恒の說法を認める。これに四種を分つ。自性身・受用身・變化身・等流身であつて、自性身とは大日それ自身であり、受用身とは大日如來が他に應ずる四方あり、變化身とは釋迦如來であり、等流身とは六道衆生であるから、眞言教義よりする時は、一切衆生は悉く大日法身となるのである。而してこの法身の居する世界を密嚴淨土といふ。本宗の宗旨は、三密加持の修行によつて、この身のまゝにして密嚴淨土、中臺八葉院の中に住せんとするにある。

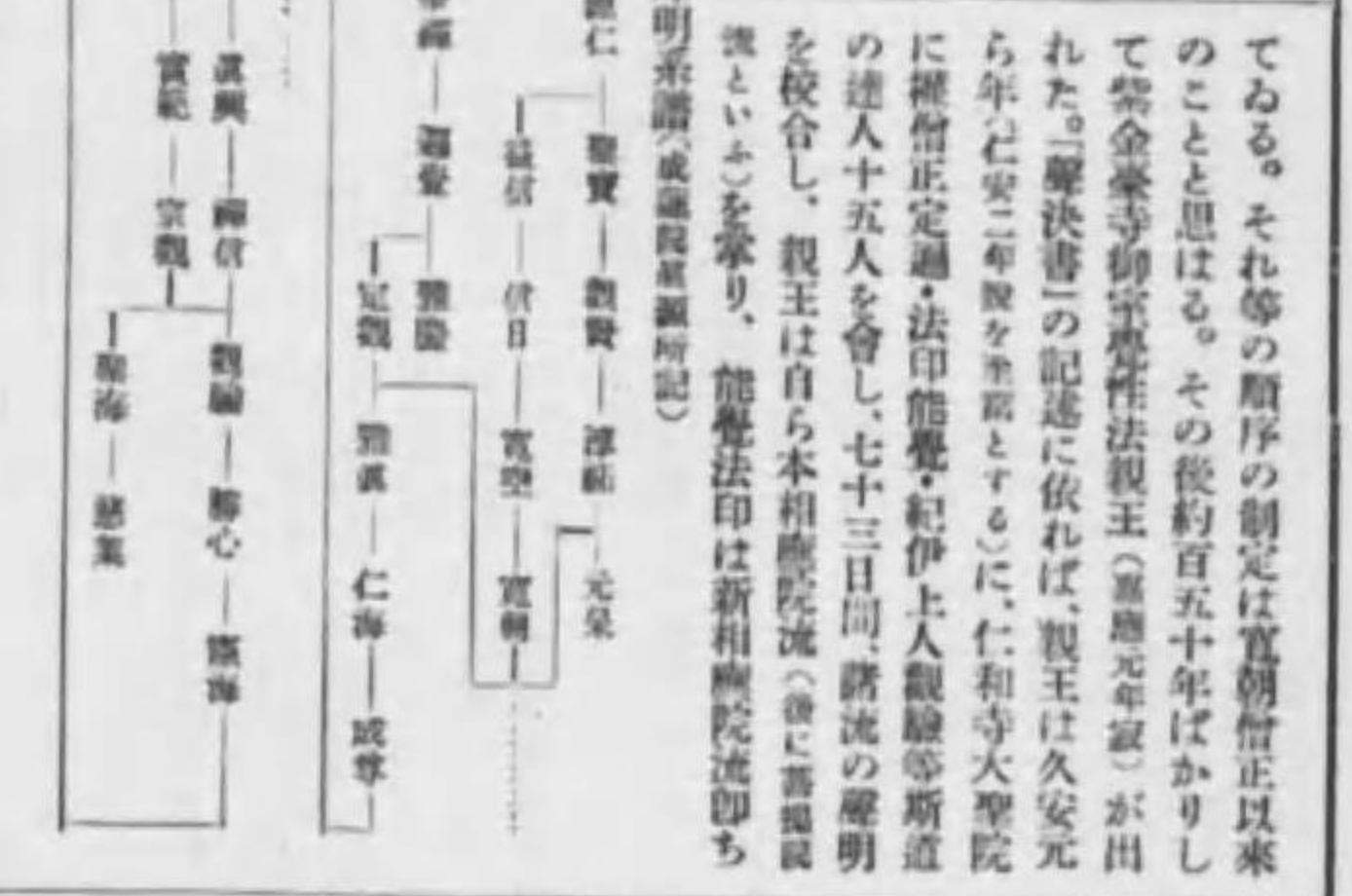
である。二教は、全佛教を顯教・密教に二分し、顯教を隨教の釋教と、密教を隨自意の大日教とし、その間に勝劣を論ずるのである。空海は、法相・三論・天台・華嚴の四個大業を以て顯教とし、顯教とは文義顯露にして、淺習をして解し易からしめんがためにせる隨機方便の施設なりと見たのである。この二教を更に細分し、更にこれに入天教・小乘教を加へたものが、十住心であつて、これによつて空海は、密教一乘の位置を、いやが上に高からしめた。



日經を譯し、門下の一行は大日經に二十卷の疏を加へた。開元八年、金剛智は年少の空を伴ひて渡來したが、經本を傳へずただ金剛頂經の義のみを傳へた。金剛智の没後、空は南天竺に還つて、天寶五年に歸唐し、十二年を以て金剛頂教主を譯した。大日經を譯表せるものは胎藏界曼荼羅で、金剛頂經は密無畏と金剛智とにより、時を異にして別々に傳へられたのである。空の弟子に、長安青龍寺の惠果があり、これに従つて我が空海別稱は、兩部を共に傳授し、歸朝して後、これを日本に於て開宗したのである。されば本宗は、印度に於て基礎が出来、支那に於て花が開き、我が空海によつて始めて、一宗として佛敎中に獨特の位置を占め、而も他の諸宗を風靡するの勢を盡つたものである。空海別稱は、延暦二十三年入唐し、二年にして歸朝し、高野山に金剛峰寺を立て、東寺を歸はり、高麗・新羅等を問き、一代の化益甚だ多く、弟子に十哲あつた中に眞實の門に源仁があり、源仁の門に仁和寺の開基・眞實と醍醐寺の開基聖實の二傑が出た。眞實の没後、廣澤流といひ、聖實の没を小野流といふ。兩流より更に各々六流を分つたので、これを十二流といふが、併しこれ等は事相上の區別に過ぎぬ。教理上の分派は新古の二派である。新派の祖は、空海三百年後の覺禪であつて、鳥羽法皇の歸信を得て高野山に大傳法院を創し、故あつて根來に遷した。百四十年を経て、大傳法院の學頭賴業、大傳法院を根來に移し、その傳學を以て門下を創成し、その末流は自ら新義派と稱し、他を舊義派と稱した。新義派の本山は大傳法院である。南

北朝の時代に至り、東寺に河東・泉實・實賢の三人の碩学が相次いで出て...

開元言並一百八名讀一卷・梵字蓮花部讀一卷(以上弘法大師著)等を録してある。...



とは「大進上人流」の意で、その本家は山和申ノ川寺成身院であつて...

と云ふ。第四は貞享二年同村上野兵衛判行と云ふ。...

謂に五音語を記した。蓋し隆然は意より二十歳の若年...

かくの如き仁和寺流は、江戸時代末期までその相傳を失はなかつたけれど、今はこれを知ること由らぬ。



と云ふ。後三年を経て慶安二年には同じ本を中野小左衛門が出した。...

Advertisement for a performance titled '大日 香華供養佛' (Daibutsu Kōwa Kyōyō Butsu) with details about the cast and location.

第五は正徳元年十二月に出た。版元同上。この天和貞享、正徳の三本は共に智積院用の魚山本である。貞享本は今日見られるが、正徳本は、少く、天和本は極めて稀である。



第六は寛保本で、「魚山集外傳」の上に「南山遊記寛保再版」の八字を表題に冠してある。寛保三年七月、高野山の御願八左衛門尉、當

代高野山一之故實者であつた成徳院眞海師の序と、同第一の聲明家と謂せらるる、普門院理峯師の跋文が載せられてゐる。第七は「聲明正律」と題され、天保五年刊行。金剛寺僧恩院藏版。第八は明治魚山で、同二十五年四月に出版された。初めに大勲位是親王の題字があり、時の眞言宗長者大僧正原心猛、仁和寺門跡榮殿和尚の序並に自序がある。第九は「新義聲明大典」、題の上に「新編改訂」の四字を加ふ。智山の能化壇師の記述するところ、大正六年に初版發行され、同十一年に再版された。首に自序があり、次に表内山教如師の刊行の辭が載せられてゐる。第十は古義眞言宗松帆諸師の「便蒙魚山假題」である。以上數次の刊行を重ねるも、正保・慶安の二本を以て、高野山を中心とする遊説聲明の標準とし、寛保版はそれを編き、明治本は寛保本を踏襲した。而して明治・寛保の二本は、共に聲明故實の研究のためには良本であるが、聲明の音階に関する研究に就いては、十二分の注意を要するものがある。天和・貞享・正徳の三本は、前述の如く智山系に用ひ、「新義聲明大典」は、更に増補改訂を試みたもの、「便蒙魚山」は、その名の示す如く、「魚山集」の全體に假語を用ひて、初心者向けに便せんとしたものであるが、なほ多くの研究を要すべき點があらう。「天保魚山」は普及されたいが、その内容は可なり注意すべきものがあり、研究者は一瞥しなればならぬ書である。【音階の名稱】音階のことを單に「音」といひ、或は「調」と呼び、「博士」と稱し、或は音の曲節高下を記して「符」を用ひることもあらう。「調」の代りに「符」を用ひることもあれば、「博士」ではなくて「博士」であるともい

ふ。すべて聲明音律の規準を掲げて萬人の依拠たるべきによつて「博士」の名がある。五音の作用を音階そのものによつて示すのを「五音調」といひ、聲明音階として最も新しい形式に屬する。發聲の標子を最も簡單な符號にて表はしたものを「博士」と、若しくは「博士」といひ、五音の約束に従ひ、聲の出所を規定し、第二節目より「博士」のやうに付けた語を「博士」若しくは「博士」といひ、音階の示すまゝに唱ふるやうにしたもの、即ち上げる音は上げるやうに、下げる音は下げるやうに、搖る所は搖るやうに講付したものを「目安博士」といひ、更に進んで眞言聲明には「假博士」を用ひることとなつた。而して仁和寺や醍醐の聲明として見るものには、「博士」に屬するものが多く、「目安博士」は現在の天台宗用に見る。遊説聲明に「假博士」の成立したのは、恐らく高野山東南院の寛光師、文政五年（一八一七）までは不明である。その當年（不知）が、寛政元年（一五〇〇）五音階假博士を出したのを以て最初とすべきであらう。依つてこれは極めて新しい時代のものである。【五音調】次の圖の如く、宮商角徵羽の五音を圖に示したものである。



五音各々
に初重・
二重・三
重とあり
これに變
換・轉調・
揚羽・揚商といふ半音の移動が起つて、各種の聲明調を形成する。が、その主體は五音ばかりである。【音階】眞言聲明の音階は、音律「善花集」に就いて見るのが最も便利である。

今該書の所述を十二律圖に照合して圖にすれば、次の如くなる。

Table with 12 rows and 2 columns, likely a musical scale diagram or reference table.

右の中、呂律曲については異論はないが、中曲に於ては、なほ考査を要すべきものがあるが、今は「善花集」の所述をそのままに現はした。蓋し「善花集」は通院院に於て頼法印の口説する所を抄門某（個人）不知なる人が、正平年中、高野山通院院に於て記した書である。なほ「善花集」は應永三年七月中旬より八月上旬に互つて、阿州の人樂鏡が二十九歳の時に撰する所であつて、時代聲明道の史的動向を知るに便利なる書である。（聲明天台宗の聲明書）

神婚説話の神話【名義】超自然的存在と人間との結婚を物語の語根とする説話の總稱。神學上の一名辭である。【解説】神婚説話は、結婚當事者の性質及び結婚の方法を基礎として四個の類型に分つて出来る。即ち（一）超自然的存在、人間を採りて人間の異性と結婚することを説くもの、（二）超自然的存在が、動物若しくは器物に化して人間の異性に接近することを説くもの、（三）超自然的存在と人間との結合及び分離が或る禁制・條件の下に行はるゝことを説くもの、（四）神性を有する動物が、人間の異性と結婚することを説くもの等がこれである。第一類型に屬するものは、大物主神と玉依姫との神話、大物主神と德彦彦彦彦命との神話（且土主神と神妻）等である。當該書の

超自然的存在が、見知らぬ男が夜來つて去去し暮るれば母と語る。神の子であらうと淨杯に入れたが、ぐんぐん大きくなるので、度々容器を換へた。兒、成長して父の許に行くといふ。母とその兒とがこれを抑止したので、怒つて殺せんとして天に昇ると、母が驚いて殺を投げつけたといふ神話（高野山集、第一日經子の許に、夜毎に壯夫が續ね來て、嚙むにかけ、これを逃つて行く、翌の邊に蛇を見出したといふ神話（高野山集、如きも、この型である。第一類型の神婚説話の特徴は、（一）超自然的存在が夜のみ來つて晝は見えずといふことと、（二）該存在が、常に蛇神であること（少くとも日本の説話界では）である。而して（イ）は、アンドロイド（Andrew Lang）が、「風習と神話」(Custom and Myth)の中で明かにしたやうに、自然民族の婚姻制にあつて、新婦は或る期限、夜のみ女の家に留まることの反映であり、（ロ）は、龍蛇が神として崇拝せられることの多いことや、蛇が淫性のものであると信ぜられ、若しくは男性の性器の象徴とせられることから來てゐるであらう。第二類型に屬するものは、大物主神と勢夜陀多良比賣との神話、大物主神と勢夜陀多良比賣との神話、火野の仙姫が和の小枝に化して、水を流れて味稻といふ男の妻に留まつたのを、味稻が取り上げると女の妻に還つて、その妻となつたといふ神話（高野山集）等である。天日槍にまつたは神婚説話（天日槍）も、この型の一變種と見ることが出来る。第二類型の神婚説話の特徴は、超自然的存在が、當に或る事物に變容して異性に近

づく點にある。而してその事物は、大體から云へば（イ）或る神に神聖な動物、（ロ）婚姻としての關係を有する事物、（ハ）蒸氣（steam）として昇降せられ得るもの等である。（ロ）即ち或る器物に變容する説話の變種は、我が國の神婚説話の特徴といふことが出来る。（イ）と（ハ）とは、他の民族の間にも多く見出されるが、（ロ）は、他は無いが、頗る稀であるからである。第三類型に屬するものは、希臘のエロス（Eros）とフン（Tyche）との神話、その典型的なものとする。我が國の産火々出見尊と玉依姫との神話は、或る意味に於てこの型に屬すると見做し得る。この類型の特徴は、或る禁制の遵守を條件として神人の結合が行はれ、且つ持續せられ、而してその破棄が兩者の分離の因となる點に存する。人類學的の神婚説話の型は、この説話的變種を自然民族に於ける配偶者間の風習によつて説明しようとしてゐる。低い文化階層に於ける生活には、文化人が豫想し得ないほど多量にして且つ奇異な禁制（taboo）が存在し、これを破るものは、さまざまの制裁を受けなくてはならぬ。そしてこの事は、結婚に於ても同様である。第三類型の神婚説話に於ける特徴は、這般の風習の産物であらうとなす説がこれである。またフレイザー（J. G. Frazer）の如きは、聖潔せられ、異族の部落に來た女が、一定の数の子を産み、そこから逐ひ出されるといふトーテムと外婚との信仰風習から來た現象で、神婚説話に於ける夫婦別れを説明しようとしてゐる。第四類型に屬するものでは、世界的に云へば、「白鳥處女説話」、我が國で云へば「羽衣説話」が、その典型的なものである。この型の説話の特徴は、（イ）配偶者の一方が、必ず

超自然的な女性の動物であること、（ロ）その女性が、變形の衣を有し、これを奪はれて、結婚を催はせられることである。（イ）即ち何故に配偶者の一方は常に人間で、他の方は常に動物でなくてはならぬかといふ問題に關しては、説明が乏しい。自然民族は人間と動物とを同一面層に立つ存在として、その間の結婚の可能を信じたとする説、ランダグが主張した動物祖先説（Zoodontism）の如きこれである。しかしいづれも未だ確説とするにはならぬ。（ロ）に關しても、さまざまの假定的な解釋が提出せられてゐる。即ち（A）巫女の着ける衣は、これを奪はれば人が神となり、これを脱げば元の人間となると信ぜられた。説話中の變形の衣は、この信仰の反映であるとなす説、（B）本原的には、動物は無條件で自由に人間を探ることが出来ると信ぜられたが、後代の文化期になつて、變形に種々の條件が生じて來た。衣を着たり脱いだりすることによつて變形するとの觀念の如きも、這般の條件の一つであるとなす説、（C）自然民族は、衣を身體の一部であり、且つ衣に變形の力が内蔵すると考へた。だから、これを他の者に奪はれると、變形の力を失ふばかりでなく、衣を通して呪術的に自己の生命・肉體を支配せられる愛ひがある故、衣を取り返すまで、衣を盗んだもの意志に従はざるを得ない。衣を盗られたとなす説等がこれである。しかし今日のところ、何れが正しいか分らない。終りに一言して置くべきは、神婚説話のすべての類型を通じて、人間と動物との結合が、屋々の一變種となつてゐる現象に關して、實際に類人猿の如き動物が人間の女性を攫つて行つて、共に性的生活をなす事實に、少くとも

もその成立の一要素を有するであらうとなす説の存することである。マカロック（D. A. Macauloch）の説くところの如きもこれである。近時宇野圓夢氏も這般の示唆を與へてゐる。一の假説として注意に價すると思ふ。【参考】信太妻の神話、新口信夫、古代研究、民俗學、第一〇〇、神婚説話の原形、宇野圓夢、民俗學、第一〇〇、比較神話學、高木敏雄、日本神話學の研究、目上、〇神話學論考、松村武蔵、Harland, E. S.: The Strives of Fairy Tales, Macauloch, J. A.: The Childhood of Fiction. (英訳) 仁齋 信太 備書【姓名】伊藤仁齋、字は源佐【別號】古義堂、愛媛。私設して古學先生といふ。【生没】寛永四年七月二十日京都に生れ、寶永二年（一六六五）三月十二日歿す。享年七十九【經歷】十一歳の時、始めて大學の治國平天下の章を讀んで感ずる所があり、十九歳にして李延平問答を讀み反復研習す、紙のために爛敗したといふ。これより鋭意性理の學を修めた。三十七八歳の頃始めて宋儒の學の孔孟の意に透くことを疑ひ、自己の信



伊藤仁齋

ずる所によつて「論孟古義」中篇釋義を著し、堀川に塾を開いて生徒を教授した。弟子三千餘人、全國中門人のなかつたのは、ただ

飛騨・佐渡・安波の三國のみであつた。明治四十一年十月十四日に起筆して元治元年七月五日に再び火災に罹つて亡び、同年八月以後の分だけが保存されたものである。著者は壯健な體で、餘り多くは外出せず、旅行などは晩年に於て江戸附近を時々遊歴した位であつたから、徒然に苦しむ時間を経験しに向けたらしい。本書は隨筆と題するものの主として柳亭中、又江戸坊間に起つた大小の事變を記し、慶長前後の武蔵野や江戸時代の異聞類、その他思出話等を含めてゐる。凡そ十八年間の不鮮の記事である。今内閣文庫所蔵の本は著者自筆の薄墨らしく、每巻起筆脱稿の年月日が押出してある。惜しい事に巻八の一番一冊が缺けてゐる。著者が元治元年七月に、本書の末巻を書き了つた時は六十六歳

であつたと云ふ。毎巻の首に、「江府隱士眞如實隱居士中山業智撰集」とある。撰集は眞作の意であらう。【別名】『實隱居士』【著者】中山業智【成立】弘化三年八月十四日に起筆して元治元年七月五日まで稿を續けた隨筆で、著者の自叙による。これより以前文化十一年の初秋から見聞の事どもを記して二十餘巻に及んだが、天保五年二月七日火災のために烏有に歸し、その後更に「言葉の塵」と題して同様の隨筆を作リ十數巻になつたところが、弘化三年正月十五日に再び火災に罹つて亡び、同年八月以後の分だけが保存された題である。【解説】著者は壯健な體で、餘り多くは外出せず、旅行などは晩年に於て江戸附近を時々遊歴した位であつたから、徒然に苦しむ時間を経験しに向けたらしい。本書は隨筆と題するものの主として柳亭中、又江戸坊間に起つた大小の事變を記し、慶長前後の武蔵野や江戸時代の異聞類、その他思出話等を含めてゐる。凡そ十八年間の不鮮の記事である。今内閣文庫所蔵の本は著者自筆の薄墨らしく、每巻起筆脱稿の年月日が押出してある。惜しい事に巻八の一番一冊が缺けてゐる。著者が元治元年七月に、本書の末巻を書き了つた時は六十六歳

【別名】『實隱居士』【著者】中山業智【成立】弘化三年八月十四日に起筆して元治元年七月五日まで稿を續けた隨筆で、著者の自叙による。これより以前文化十一年の初秋から見聞の事どもを記して二十餘巻に及んだが、天保五年二月七日火災のために烏有に歸し、その後更に「言葉の塵」と題して同様の隨筆を作リ十數巻になつたところが、弘化三年正月十五日に再び火災に罹つて亡び、同年八月以後の分だけが保存された題である。【解説】著者は壯健な體で、餘り多くは外出せず、旅行などは晩年に於て江戸附近を時々遊歴した位であつたから、徒然に苦しむ時間を経験しに向けたらしい。本書は隨筆と題するものの主として柳亭中、又江戸坊間に起つた大小の事變を記し、慶長前後の武蔵野や江戸時代の異聞類、その他思出話等を含めてゐる。凡そ十八年間の不鮮の記事である。今内閣文庫所蔵の本は著者自筆の薄墨らしく、每巻起筆脱稿の年月日が押出してある。惜しい事に巻八の一番一冊が缺けてゐる。著者が元治元年七月に、本書の末巻を書き了つた時は六十六歳

【別名】『實隱居士』【著者】中山業智【成立】弘化三年八月十四日に起筆して元治元年七月五日まで稿を續けた隨筆で、著者の自叙による。これより以前文化十一年の初秋から見聞の事どもを記して二十餘巻に及んだが、天保五年二月七日火災のために烏有に歸し、その後更に「言葉の塵」と題して同様の隨筆を作リ十數巻になつたところが、弘化三年正月十五日に再び火災に罹つて亡び、同年八月以後の分だけが保存された題である。【解説】著者は壯健な體で、餘り多くは外出せず、旅行などは晩年に於て江戸附近を時々遊歴した位であつたから、徒然に苦しむ時間を経験しに向けたらしい。本書は隨筆と題するものの主として柳亭中、又江戸坊間に起つた大小の事變を記し、慶長前後の武蔵野や江戸時代の異聞類、その他思出話等を含めてゐる。凡そ十八年間の不鮮の記事である。今内閣文庫所蔵の本は著者自筆の薄墨らしく、每巻起筆脱稿の年月日が押出してある。惜しい事に巻八の一番一冊が缺けてゐる。著者が元治元年七月に、本書の末巻を書き了つた時は六十六歳

五郎の體に於て天才的演技を示した爲めである。作者晩年の世話狂言中、代表的な物として定評がある。

【参考】尾上菊五郎自傳『河竹默阿彌』【新猿樂記】『河竹默阿彌』【新猿樂記】『河竹默阿彌』

【参考】尾上菊五郎自傳『河竹默阿彌』【新猿樂記】『河竹默阿彌』【新猿樂記】『河竹默阿彌』

【別名】『實隱居士』【著者】中山業智【成立】弘化三年八月十四日に起筆して元治元年七月五日まで稿を續けた隨筆で、著者の自叙による。これより以前文化十一年の初秋から見聞の事どもを記して二十餘巻に及んだが、天保五年二月七日火災のために烏有に歸し、その後更に「言葉の塵」と題して同様の隨筆を作リ十數巻になつたところが、弘化三年正月十五日に再び火災に罹つて亡び、同年八月以後の分だけが保存された題である。【解説】著者は壯健な體で、餘り多くは外出せず、旅行などは晩年に於て江戸附近を時々遊歴した位であつたから、徒然に苦しむ時間を経験しに向けたらしい。本書は隨筆と題するものの主として柳亭中、又江戸坊間に起つた大小の事變を記し、慶長前後の武蔵野や江戸時代の異聞類、その他思出話等を含めてゐる。凡そ十八年間の不鮮の記事である。今内閣文庫所蔵の本は著者自筆の薄墨らしく、每巻起筆脱稿の年月日が押出してある。惜しい事に巻八の一番一冊が缺けてゐる。著者が元治元年七月に、本書の末巻を書き了つた時は六十六歳

他消息の往來物語に、その例を見ることが出来る。又玉道小町町書『御代三三』や『桂川地蔵繪巻』(『新猿樂記』の如きも同系の文藝を具備してゐる。これを國文の方面に見ると、『塚中納言物語』の「よしなしごと」や『御草子の書』の「かきこぼれ」等にその例を見ることが出来る。本書は猿樂研究上の資料となるのみならず、各職業上の術等に関する点も参考とすべき點が少なくない。故に大江匠房の『遊女記』(傳記『湯島田記』及び『信西古樂圖』等と共に、日本演劇の起原等を研究する上には欠くべからざるものである。

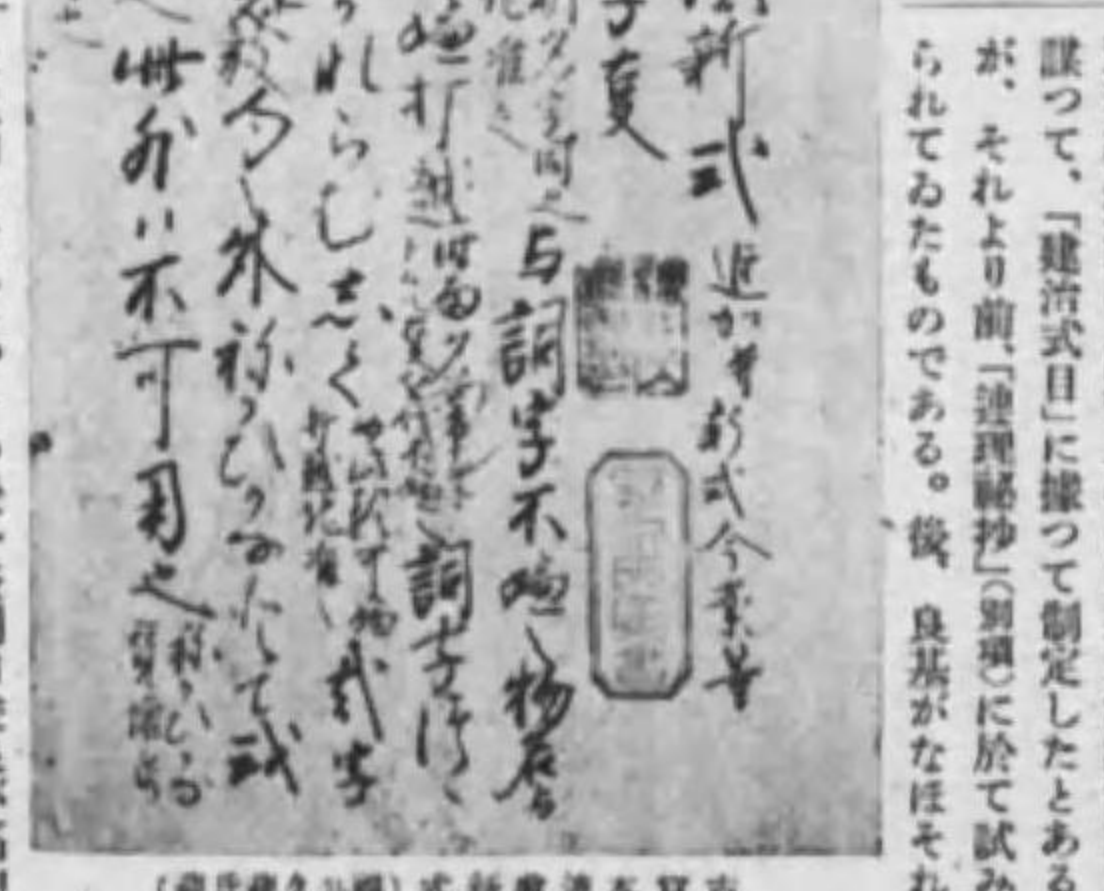
【参考】『歌謡曲考』高野聖『日本演劇の起原』【参考】『歌謡曲考』高野聖『日本演劇の起原』

【参考】尾上菊五郎自傳『河竹默阿彌』【新猿樂記】『河竹默阿彌』【新猿樂記】『河竹默阿彌』

【参考】尾上菊五郎自傳『河竹默阿彌』【新猿樂記】『河竹默阿彌』【新猿樂記】『河竹默阿彌』

【参考】尾上菊五郎自傳『河竹默阿彌』【新猿樂記】『河竹默阿彌』【新猿樂記】『河竹默阿彌』

【参考】尾上菊五郎自傳『河竹默阿彌』【新猿樂記】『河竹默阿彌』【新猿樂記】『河竹默阿彌』



(編者久永) 式新新式新新式

へられた事などに依つても、それが知られよ...

従多く通俗長篇に成功した人々を出しし、...

大正五年中既に芥川・久米等は相當の文壇...

さうした態度から生れたものである。...

若い男、前ツと連れ立つて来て、その社の様...

Table with names and titles, including 山田洋次, 佐々木康, etc.

新小説(しんしや) 小説(著者) 矢野龍溪...

新釋日本文学叢書(しんしゆ) 日本文学叢書...

「あるがまま」といふ意義を単なる描写や、形...

いの町おつた事件、はり物や奥九郎うばまつ事件、表具屋助右衛門上御屋小かん事件、豊太夫おしゆん事件(以上二篇)を含み、巻三、四は大坂の部で、九尾お梅手代六兵衛事件、浪人李兵衛お山きよ事件、平野屋徳兵衛天満屋はつ事件、六尺助平わんやよし事件、石津津市郎兵衛兄よめおさん事件、紙屋おむめこんや平助事件、はり木屋清介徳屋おはな事件、津村かめいせうし新兵衛清や又右衛門女房お



(巻二) 徳大中心

くら事件を含み、巻五は諸國の部で、山崎の吉太夫強正松之助事件、大津の油屋治郎左衛門井筒やから橋事件、大和八木の午之助遊女しの子事件、堺の帯屋久兵衛ひしやおはつ事件を含んでゐる。右のうち、巻五巻頭の二話だけは男色に關する果し合ひ自殺事件で、他は悉く男女の既遂未遂の情死事件である。なほ巻三の第三、曾根崎の囃しと題した徳兵衛おはつ事件は、近松門左衛門の浮瑠璃(曾根崎お

中)の材となつた事件、巻四の第一、袈裟御前の裏表と題した市郎兵衛おさん事件は、近松の『大徳師普門』の創作にヒントを與へたものかといはれ、巻五の四、戀の胸騒ぎ結んだが因果と題した久兵衛おはつ事件は、紀海音の『心中涙の玉の井』(巻五)の材となつた事件である。本書は何れの話も、觀照に描寫に、深みのない、素材の藝術化の足らざるところに、文學作品としての弱點を持つてゐるものであるが、同時に原書に比較的忠實と見えるところに、折松等の作品の研究に參考資料を提供するものとされる。巻末に京都大阪諸國中後日塚全部五巻板行の豫約廣告があつて、その中に、十二件の心中事件の目次が載せてある。

心中重井筒 (近松門左衛門) 浮瑠璃 三段 世物語 (作者) 近松門左衛門 (名譽) 情死の男徳兵衛の兄が重井筒屋であるが、徳兵衛の最期は埋れ井に陥ちたので、それにも因んだかと思はれる。外題に就いては諸本の體多照(興行)本曲の内容及び「本朝清千鳥」の記事によつて、寶永四年末かと推定されてゐる。「諸本」八行二十七丁本、八行三十丁本、八行三十二丁本(後版で「道喜重井筒」或は「重井筒」題)と題するものがある。六丁三十四丁本(重井筒)と題するものがある。近松世語瑠璃集(帝國文學)・近松世語瑠璃評解(近松傑作全集第一巻)・近松世語瑠璃集(有朋堂文學)・近松門左衛門全集第五巻(近松名作集上(名譽文學)・近松全集第八巻等に所載。「題材」本朝清千鳥(巻四)の重井筒のお局と新七との心中が當時の實況を傳へるものであらしく、浮瑠璃も大體、この事實に據つたと思はれる。

(二)二段 (勘介住家) 信玄は益々景虎と戦ふに當り、勘介を軍師と仰がうと庵を訪ねること三度及んだ。遂に老母は信玄の器量を見込み、不在の勘介に代り親を主従の契りをつかみ、(備前)徳兵衛(重井筒)と題するものがある。六丁三十四丁本(重井筒)と題するものがある。近松世語瑠璃集(帝國文學)・近松世語瑠璃評解(近松傑作全集第一巻)・近松世語瑠璃集(有朋堂文學)・近松門左衛門全集第五巻(近松名作集上(名譽文學)・近松全集第八巻等に所載。「題材」本朝清千鳥(巻四)の重井筒のお局と新七との心中が當時の實況を傳へるものであらしく、浮瑠璃も大體、この事實に據つたと思はれる。

【梗概】(上巻) (尉屋)もと雨の茶屋重井筒屋の弟徳兵衛が、上町高年町の相屋の掣となつたが、早くから井筒屋の抱へお房と深い仲だつた。久し振りにわが家に歸つたが、お房の留守を幸に、連れ込んだお房をわが女房と見せ、堀江の治右衛門を呼んで四百目の銀を借り入れた。お房の父親は又彼女を抵當に他人の請に立つて逼迫した金の工面をしてやつたのである。そして出かけた跡へ、外から歸つた女房お辰は、散らされた印判を見て良人の身持を悲しんだが、折から治右衛門から話を聞いたお辰の親宗徳が、突り聲で入つて来たのを、お辰は良人の顔の立つやう、話を静めて引取らせた。女房の色々の苦勞を物陰で立ち聞いた徳兵衛は、始めて心から女房に詫言する。喜んだお辰は、せめて父親にも安心させてくれと頼む。承知して徳兵衛は門口を出たが、お房の頼みも忘れ難く、行きつ戻りつしたお辰は、お房の許へ向いた。「中巻」(重井筒) お房は徳兵衛の姿が見えぬため、わが身の不運と父親の薄情を歎いたが、やがて徳兵衛の聲がそこへ。肥後屋からの迎へが来た。お房のいそぐ立つた跡を道はうとする徳兵衛をば、兄夫婦が見抜いて止めを喰ひ、徳兵衛を待つたお房が、物干傳ひに忍び歸つて二人を叫んだ部屋には、偶々徳兵衛が居た。二人の語聲に、兄が来てお房の體れた距離にわざと火を入れさせて懸らした。お房の決心を固め、屋根を傳つて裏へ逃げた。「下巻」(血潮の懸架) 死所を探して、二人は、大佛殿前庭に着いた。(勘通所) かなたにお房等の噂を寄る提燈を見て、徳兵衛はまづお辰を刺したが、人目を避けて隠れ廻る中に、

自身は埋れ井戸を踏み外して命を絶つた。【解説】情死の動機をなした事件から、お房は父親との關係で當然さうなるべき運命のやうにも思はれるが、徳兵衛は、一度女房の深い愛と義理を感じたのであるから、言はば誘惑に負けたのである。こゝを作者は極めて自然に描寫する事に成功した。両人物描寫のみでなしに、脚色の進行から見ても、其た輕妙に觀察の心理を捉へてゐる。かくて上巻の切は、非常な緊張を以て、中巻への運びを遂げてゐる。更に上巻が女房お辰との夫婦愛を強調するために、愛見を出し、養父を用ひてゐるが、中巻はこれに對すべき情人お房との愛情を切らしめんとするために、重井筒の主人たる兄を出した。又上巻は商家で、中巻は茶屋にしてある。これ等の照應によつて、感興の單調が救はれた上に、兩場面は相互に協調を遂げてゐる。二人の最期が通例の情死の場合と異なつてゐるのは、徳兵衛が、歸郷の末、遂にお房に走る場面は、寛政年中に入つてから、歌舞伎芝居で、中山文七により「羽織落し」の型となつて好評を得たが、人形振の名案が懸はれる箇所である。享保五年春、江戸三座で十七回忌追善と稱し、本曲を歌舞伎狂言として上演してゐる。中村座は「金生水車井筒」(大谷廣治の徳兵衛、佐野萬の徳兵衛、市村座は「心中重井筒」(市村竹之丞の徳兵衛、三輪野の徳兵衛、森田座は「道喜重井筒」(市川團十郎の徳兵衛、三島勘太郎の徳兵衛)であつて、智仁勇の三徳兵衛と評された。その後、主に江戸の歌舞伎狂言に流行し、殊に豊後の浮瑠璃によつて所作事としての生命が續いた。草壁紙類の重井筒は、これからの影響が多い。

【参考】近松研究の序篇(四)巻三〇近松世語瑠璃評解(高野武之)近松傑作全集第一巻(近松世語瑠璃集)近松名作集上(名譽文學)近松全集第八巻(守屋)松全集第八巻解説(守屋)

信州川中島合戦 (近松門左衛門) 浮瑠璃 五段 時代物 (作者) 近松門左衛門 (名譽) 内容その儘に用ひた。「興行」享保六年八月三日初日、竹本座上演。「外題」二によると、この興行の時、従来の山鏡を改めて張抜の本山を初めたとし、三段目まではその儘も上演された。「諸本」七行七十八丁本。近松世語瑠璃集(帝國文學)・近松世語瑠璃評解(近松傑作全集第一巻)・近松世語瑠璃集(有朋堂文學)・近松門左衛門全集第五巻(近松名作集上(名譽文學)・近松全集第八巻等に所載。「題材」川中島合戦の史實を中心に、勝頼や勘助等の傳説を配した。

【梗概】(初段) (諏訪明神) 武田信玄の息勝頼と長尾景虎の頼朝の娘とは、密に契つた仲であつたが、偶々親の武運長久を祈りに、明神に参り合はせられた所へ、豫て娘に婚約を申込んだ當國の領主村上義清が来たので、兩人は義清を避けて、何れへか姿を消してしまつた。(矢橋の渡) 信玄と景虎とは歸國の途をこゝに落ち合つたが、折柄、義清から景虎へ使者が立ち、娘の不義を諷してわが義談の承諾を督促されたので、景虎は怒つたが、やがて勝頼と頼朝の娘との不義通電が、信玄・景虎の双方に報告された。兩家はこの恥辱を雪ぐために、戈を交へる事となつた。(精進ヶ原) 三州牛窪の浪人山本勘助幸は、自ら得た軍術の譽れ高く、諸大名の招きを斥けて山中に老母を養つてゐる。願望の二人は計らず勘介に逢つて村上方の難を逃れたが、この時、

其れ猪のために、勘介は左右右眼を負傷した。

(二)二段 (勘介住家) 信玄は益々景虎と戦ふに當り、勘介を軍師と仰がうと庵を訪ねること三度及んだ。遂に老母は信玄の器量を見込み、不在の勘介に代り親を主従の契りをつかみ、(備前)徳兵衛(重井筒)と題するものがある。六丁三十四丁本(重井筒)と題するものがある。近松世語瑠璃集(帝國文學)・近松世語瑠璃評解(近松傑作全集第一巻)・近松世語瑠璃集(有朋堂文學)・近松門左衛門全集第五巻(近松名作集上(名譽文學)・近松全集第八巻等に所載。「題材」本朝清千鳥(巻四)の重井筒のお局と新七との心中が當時の實況を傳へるものであらしく、浮瑠璃も大體、この事實に據つたと思はれる。

んで自害する。頼虎は遂に髪を切つて謙信と名乗る。勘介も法體の供たらんと髪を切つて道鬼といふ。謙信は更に母への道義、信玄への土産として義理を止めた代り、越後から甲斐へ義理を送るべきを約した。「四段」(天目山) 千首の和歌の徳も濃まり、新築の高殿に信玄は山川の美を樂んだ。高坂正等が、勝頼の不興を解かれないとの願ひに、信玄は怒つて、耳を洗はうと頼本に下りる。谷川を挟んだ義の男と勝の女は、勝頼と頼朝の娘がやつした姿であつた。謙信の義氣に感した信玄は、近づいた頼朝の義を助けるのであつた。その夜も更けて谷陰から現はれた頼朝が、信玄を助けてゐるので、勝頼はこれと争つて遂に首を上げた。それは村上義清であつた。こゝに始めて信玄の怒りも解けた。「五段」(川中島) 永祿四年九月十日、信玄は味方の勝色に軍を進めようとする時、突然謙信が現はれ、肩先を斬り下げた。この信玄と見えたのは山本勘介で、一命にかへて兩家の和睦を願ふのだつた。こゝに信玄も姿を現はして、勝頼・頼朝の娘の婚姻もめでたく調ふ。

【解説】筋は簡單であるが、各場面の脚色とそれ等の配置に對する作者の苦心は十分認められる。二段目の社堂や四段目の天目山の如きにかね、脚色としての成功は、やはり後世に残された三段目であらう。頼虎は緊張が頂點に達して、最後に解けて行く爽快を味はふ事ができる。更にその上の緊張の層を造るのが次の直江屋敷の場である。而して秋葉を詰め、武士精神を強調する等、複雑な氣分を集中させるのである。後世の合作浮瑠璃に見る如き内容の複雑さに據る隈田の感興も、時代浮瑠璃としての重要な必然的要求であつたらうが、本曲の如き、脚色態度の眞曲の成功といふ事、必須の要件でなくてはならぬ。今日まで残つてゐる「浮瑠璃」は本曲の三段目によつた。吃りのお房は「傾城反魂香」から得た案であるが、「天目山」は、後に牛二等の「妹背山婦女庭訓」の段を生んだ。最も成功の改作は、「本朝二十四孝(別題)」である。本曲興行の好評は、怨歌謡芝居(影響を及ぼして、享保七年正月、京、龜屋座の「けいせい足曳山」や、同月大阪中の芝居の「信州川中島合戦」等を初めに、三段目迄は後世傳へて續けられた。

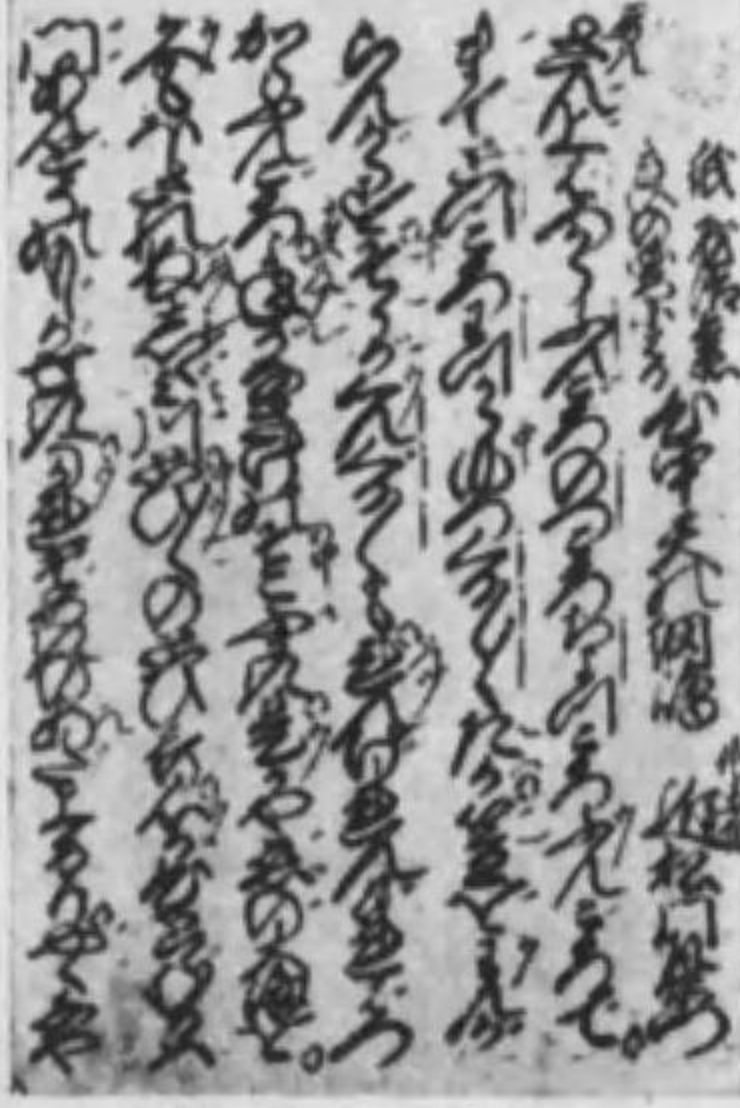
【参考】瑠璃天狗變(近松名作集下解説集)本編(守屋)新修歳時記(しんじゆ) 佛書 春夏秋冬四册【著者】中谷無涯【刊行】明治四十二年二月より四十四年一月に至る。佛書堂【解説】佛書の歳時記であるが、季節の排列は全然五十音順に依る辭典體を取つたので、この點は從來の歳時記に見なかつた所である。各季節には詳細な解説を施し、その中には、「葉賀草浪草(別題)」や「佛書歳時記(葉賀草)」から採つたものもあるが、著者の調査によるものも多く、引用は極めて原文に據り、異名・種類・成語あるものはこれを併舉し、古今の例句を擧げ、巻末に時候・天文・地理・宗教・人事・動物・植物の七門に分つた季節を添へて普通の歳時記の用を兼ねしめてある。その解説の正確を期し、詳細な點、用意の周到な點に於て、歳時記中出色のもので、後の類書の依據となつた點が多い。

『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ... 『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ、

『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ... 『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ、

『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ... 『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ、

『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ... 『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ、



(本 正) 鳥 園 天 中 心

十月十五夜の月を知るべに、小春と治兵衛は... 十月十五夜の月を知るべに、小春と治兵衛は

『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ... 『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ、

『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ... 『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ、

『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ... 『観書』明治以来の類書中、主なるものを挙げ、

時破戒の筈によつて一山鳴動し、久米之介は山を逐はれる。〔中巻〕(難波屋)娘お梅は京三條鳥丸の美濃屋作右衛門と今宵お梅と決まり、一家擧つて悦びの中に、浮かぬお梅は門口に出た時、顔被りの久米之介を認めて連れ込む。母親が新調度を見せに二人を二階にやつた所へ、高野の噂を耳にした作右衛門が嘯鳴り込んで来て、始めで気がついた雨風の音は、お梅の扱ひとで機嫌も直り、早速お梅を二階に伴ふ。夜着の中は久米之介が隠れてゐる。雨は間お梅の終る頃を見計つて、二階へ親儀の石打をかける。騒ぎで燈が消えた中を、母親は久米之介を誘ひ出す。併し久米之介の帯には、お梅が提まつてゐた。〔下巻〕久米之介お梅道行三年の契を交した二人は、恩義に迫られて最期の途についた。不動坂を越え、蛇神の傍を過ぎて、女人堂についた。



(註釋) 草 年 萬 中 心 本 書 註

者の手法も普通ではないが、父親の骨の傍に久米之介を自害させた。或は作者の一片の情かとも察せられる。吉野院での兼造の懇話の観音を頼まされた配合は、極めて効果的であると思ふ。〔影響〕明和八年五月、竹田和歌三芝居に上演された竹田三郎兵衛作の「お梅お梅八段」は、本曲の改作である。歌舞伎芝居にも、多少の改作を経て屋々上演されたが、上方歌舞伎には地狂言として、江戸歌舞伎には所作事として流行した。〔萬年草三三年忌〕草保四年、高野山蛇神。〔高野山蛇神三年忌〕草保四年、高野山蛇神。〔高野山蛇神三年忌〕草保四年、高野山蛇神。〔高野山蛇神三年忌〕草保四年、高野山蛇神。

居に上演された竹田三郎兵衛作の「お梅お梅八段」は、本曲の改作である。歌舞伎芝居にも、多少の改作を経て屋々上演されたが、上方歌舞伎には地狂言として、江戸歌舞伎には所作事として流行した。〔萬年草三三年忌〕草保四年、高野山蛇神。〔高野山蛇神三年忌〕草保四年、高野山蛇神。〔高野山蛇神三年忌〕草保四年、高野山蛇神。

大西三郎 作 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋)

大西三郎 作 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋)

大西三郎 作 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋)

大西三郎 作 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋) 草保正三(一)「お梅お梅八段」(註釋)

【挿紙】(上巻) 坂部左衛門邸 濱松の城... 主従山殿は、慶好の歸りに弓頭坂部左衛門の邸に休息した。この小姓山殿小七郎には慶好の兄で、五歳の時大阪の八百屋に養子に行つた半兵衛が、父親の十七年忌で歸省中だったので、恰も今日の調理役を勤めて、左衛門に見ええが出来た。殿の歸省の後で、家中の若侍達が小七郎への衆道の態を取り持てと半兵衛に迫つたので、弟に白装束をさせ、人々の決心のほどを試して、仲間の小一兵衛を見分に決めた。(中巻) (島田平右衛門宅)



(挿紙) (島田平右衛門宅)

山城上田村の六百姓平右衛門の姉嫁おかるは入聖平六の留守に、病父を看護してゐるさ中に、大阪新堀八百屋半兵衛に嫁にやつた妹のお千代が、良人の不在中、四月の身重をもつて姑去りにあつて送られて来た。お千代は而も三度目の嫁入りであつた。平右衛門が慰めてゐるところ、濱松からの歸省、それとは知らず見舞に寄つたのが半兵衛であつた。父親はお千代に「平家物語」紙王が段を讀ませ、清盛に當つて半兵衛を恨んだ。始めて様子を知つた半兵衛は、命にかけてお千代を預り、

【解説】 實説なるものと比較するに、本曲の勇が不自然な迄に好人物の描かれたのは、姑と立場を反対にするための誇張であらうが、かく姑を悪性とした方が、お千代の描寫にも、間接的に極めて効果があつた。自然に描寫されて成功した性格では、半兵衛が第一であらう。上巻に於て、弟の衆道を測つて情味を見せた場面に、既に彼の人物は相當説明された。これによつて、八百屋に歸つてお千代の顔を立てるために、自ら女房を去つてお千代と、両も直に女房をつれて死出の途に就く苦衷まで

【解説】 實説なるものと比較するに、本曲の勇が不自然な迄に好人物の描かれたのは、姑と立場を反対にするための誇張であらうが、かく姑を悪性とした方が、お千代の描寫にも、間接的に極めて効果があつた。自然に描寫されて成功した性格では、半兵衛が第一であらう。上巻に於て、弟の衆道を測つて情味を見せた場面に、既に彼の人物は相當説明された。これによつて、八百屋に歸つてお千代と、両も直に女房をつれて死出の途に就く苦衷まで

【挿紙】 清節三十年、つねに藩閥政府と闘つて来た唐澤勇將の娘瑞璃子は、浮遊癖くばかりの眞珠夫人と結婚したが、戀人の杉野直也と共に、船成金莊田の同遊會に赴いて計らずも悪魔の呪ひを受けた。即ち白面の鬼子と娘美奈子とある四十男の莊田が、瑞璃子を見染めて後妻にと求婚したが、金力萬能を持つ莊田は、執拗な苦肉の謀に依つて勇將を非常な窮地に陥れた。瑞璃子はウヂトとなつて身を以て復讐する悲壯な決心の下に、進んで莊田に嫁して名ばかりの妻となり、處女の懐まきと結婚の御慶とで莊田を納養して苦痛させた。そして半歳の後血に飢えた獸となつて追つて来た莊田は、白面の鬼子に倒されて死んで了つたのである。瑞璃子は勝つた。併し敵と戦ふために自ら心に塗つた毒はいつかその心にしみ入つて、瑞璃子はもうもとの瑞璃子ではなかつた。驚んだ心と處女とで未亡人なる妖艶さと豪華な自由とを以て、社交界に孔雀の如く君臨し、彼女の執事の蜘蛛の絲は徹くことなく犠牲を求めるのだった。その一人に男爵瑞璃子の大学生青木淳がゐた。彼は濡たされぬ戀に呻き悶えた末、死を求めて彷徨するうち自動車の奇蹟で重傷を負ひ、彼女の名を口にしたが死んで行つた。彼女を知つても瑞璃子は瑞璃子にして自由奔放な生

【挿紙】 清節三十年、つねに藩閥政府と闘つて来た唐澤勇將の娘瑞璃子は、浮遊癖くばかりの眞珠夫人と結婚したが、戀人の杉野直也と共に、船成金莊田の同遊會に赴いて計らずも悪魔の呪ひを受けた。即ち白面の鬼子と娘美奈子とある四十男の莊田が、瑞璃子を見染めて後妻にと求婚したが、金力萬能を持つ莊田は、執拗な苦肉の謀に依つて勇將を非常な窮地に陥れた。瑞璃子はウヂトとなつて身を以て復讐する悲壯な決心の下に、進んで莊田に嫁して名ばかりの妻となり、處女の懐まきと結婚の御慶とで莊田を納養して苦痛させた。そして半歳の後血に飢えた獸となつて追つて来た莊田は、白面の鬼子に倒されて死んで了つたのである。瑞璃子は勝つた。併し敵と戦ふために自ら心に塗つた毒はいつかその心にしみ入つて、瑞璃子はもうもとの瑞璃子ではなかつた。驚んだ心と處女とで未亡人なる妖艶さと豪華な自由とを以て、社交界に孔雀の如く君臨し、彼女の執事の蜘蛛の絲は徹くことなく犠牲を求めるのだった。その一人に男爵瑞璃子の大学生青木淳がゐた。彼は濡たされぬ戀に呻き悶えた末、死を求めて彷徨するうち自動車の奇蹟で重傷を負ひ、彼女の名を口にしたが死んで行つた。彼女を知つても瑞璃子は瑞璃子にして自由奔放な生

【挿紙】 清節三十年、つねに藩閥政府と闘つて来た唐澤勇將の娘瑞璃子は、浮遊癖くばかりの眞珠夫人と結婚したが、戀人の杉野直也と共に、船成金莊田の同遊會に赴いて計らずも悪魔の呪ひを受けた。即ち白面の鬼子と娘美奈子とある四十男の莊田が、瑞璃子を見染めて後妻にと求婚したが、金力萬能を持つ莊田は、執拗な苦肉の謀に依つて勇將を非常な窮地に陥れた。瑞璃子はウヂトとなつて身を以て復讐する悲壯な決心の下に、進んで莊田に嫁して名ばかりの妻となり、處女の懐まきと結婚の御慶とで莊田を納養して苦痛させた。そして半歳の後血に飢えた獸となつて追つて来た莊田は、白面の鬼子に倒されて死んで了つたのである。瑞璃子は勝つた。併し敵と戦ふために自ら心に塗つた毒はいつかその心にしみ入つて、瑞璃子はもうもとの瑞璃子ではなかつた。驚んだ心と處女とで未亡人なる妖艶さと豪華な自由とを以て、社交界に孔雀の如く君臨し、彼女の執事の蜘蛛の絲は徹くことなく犠牲を求めるのだった。その一人に男爵瑞璃子の大学生青木淳がゐた。彼は濡たされぬ戀に呻き悶えた末、死を求めて彷徨するうち自動車の奇蹟で重傷を負ひ、彼女の名を口にしたが死んで行つた。彼女を知つても瑞璃子は瑞璃子にして自由奔放な生

【挿紙】 清節三十年、つねに藩閥政府と闘つて来た唐澤勇將の娘瑞璃子は、浮遊癖くばかりの眞珠夫人と結婚したが、戀人の杉野直也と共に、船成金莊田の同遊會に赴いて計らずも悪魔の呪ひを受けた。即ち白面の鬼子と娘美奈子とある四十男の莊田が、瑞璃子を見染めて後妻にと求婚したが、金力萬能を持つ莊田は、執拗な苦肉の謀に依つて勇將を非常な窮地に陥れた。瑞璃子はウヂトとなつて身を以て復讐する悲壯な決心の下に、進んで莊田に嫁して名ばかりの妻となり、處女の懐まきと結婚の御慶とで莊田を納養して苦痛させた。そして半歳の後血に飢えた獸となつて追つて来た莊田は、白面の鬼子に倒されて死んで了つたのである。瑞璃子は勝つた。併し敵と戦ふために自ら心に塗つた毒はいつかその心にしみ入つて、瑞璃子はもうもとの瑞璃子ではなかつた。驚んだ心と處女とで未亡人なる妖艶さと豪華な自由とを以て、社交界に孔雀の如く君臨し、彼女の執事の蜘蛛の絲は徹くことなく犠牲を求めるのだった。その一人に男爵瑞璃子の大学生青木淳がゐた。彼は濡たされぬ戀に呻き悶えた末、死を求めて彷徨するうち自動車の奇蹟で重傷を負ひ、彼女の名を口にしたが死んで行つた。彼女を知つても瑞璃子は瑞璃子にして自由奔放な生

【挿紙】 清節三十年、つねに藩閥政府と闘つて来た唐澤勇將の娘瑞璃子は、浮遊癖くばかりの眞珠夫人と結婚したが、戀人の杉野直也と共に、船成金莊田の同遊會に赴いて計らずも悪魔の呪ひを受けた。即ち白面の鬼子と娘美奈子とある四十男の莊田が、瑞璃子を見染めて後妻にと求婚したが、金力萬能を持つ莊田は、執拗な苦肉の謀に依つて勇將を非常な窮地に陥れた。瑞璃子はウヂトとなつて身を以て復讐する悲壯な決心の下に、進んで莊田に嫁して名ばかりの妻となり、處女の懐まきと結婚の御慶とで莊田を納養して苦痛させた。そして半歳の後血に飢えた獸となつて追つて来た莊田は、白面の鬼子に倒されて死んで了つたのである。瑞璃子は勝つた。併し敵と戦ふために自ら心に塗つた毒はいつかその心にしみ入つて、瑞璃子はもうもとの瑞璃子ではなかつた。驚んだ心と處女とで未亡人なる妖艶さと豪華な自由とを以て、社交界に孔雀の如く君臨し、彼女の執事の蜘蛛の絲は徹くことなく犠牲を求めるのだった。その一人に男爵瑞璃子の大学生青木淳がゐた。彼は濡たされぬ戀に呻き悶えた末、死を求めて彷徨するうち自動車の奇蹟で重傷を負ひ、彼女の名を口にしたが死んで行つた。彼女を知つても瑞璃子は瑞璃子にして自由奔放な生

活を改めようともしなかつた。淑か美奈子の母として或は姉の如く心から慈しみながら、崇拝者崇拝者のために日曜の客間を聞きつけた。その中には青木淳の弟さへ加はつてゐたが、彼こそは美奈子に生れて始めての戀心を抱かせた青年に外ならなかつた。莊田母子の結婚への懸念にはこの青年だけが例外を許されたが、純情に燃える青年は、しかし瑞璃子に求婚せずにはゐられなかつた。そして初めて美奈子の心事を知つた彼女は、その目前で冷かに拒んだ。青年は恥辱と絶望と憤憤との憤憤から、その夜瑞璃子を浴室に繋ぎつけて、瑞璃子は美奈子を彼の手に託して、姉牡丹の崩れ、如くその生涯を終つた。

【解説】 若い會社員が偶然青木淳の横死に立會つて、謎の遺品を託されることから筆を起し、はじめ幾分探偵的興味を持たせながら、この複雑多岐な長物語を纏めて上げてゐる。あまりに異常な性格、あまりにまとまつた筋など、通俗小説とはいへ、懸すべき點はあるが、多くの時代的新鮮な題材を採り入れたのと、更に筆觸の新鮮さに依つて、連続中讀者の異常な歡迎を受け、新聞小説(別冊)の範疇を築いたものである。作者はその後の多くの佳作をもつてゐるので、これを以て名作と呼ぶことは出来ないが、従来所謂テマ小説を特色として、短中篇を以て文壇に推されてゐた作者が、通俗的長篇に手を染めた第一作として、特に記憶すべき所産と云ふべきである。執筆及び演劇に移されても同じく喝采を浴びた。(水木)

【挿紙】 清節三十年、つねに藩閥政府と闘つて来た唐澤勇將の娘瑞璃子は、浮遊癖くばかりの眞珠夫人と結婚したが、戀人の杉野直也と共に、船成金莊田の同遊會に赴いて計らずも悪魔の呪ひを受けた。即ち白面の鬼子と娘美奈子とある四十男の莊田が、瑞璃子を見染めて後妻にと求婚したが、金力萬能を持つ莊田は、執拗な苦肉の謀に依つて勇將を非常な窮地に陥れた。瑞璃子はウヂトとなつて身を以て復讐する悲壯な決心の下に、進んで莊田に嫁して名ばかりの妻となり、處女の懐まきと結婚の御慶とで莊田を納養して苦痛させた。そして半歳の後血に飢えた獸となつて追つて来た莊田は、白面の鬼子に倒されて死んで了つたのである。瑞璃子は勝つた。併し敵と戦ふために自ら心に塗つた毒はいつかその心にしみ入つて、瑞璃子はもうもとの瑞璃子ではなかつた。驚んだ心と處女とで未亡人なる妖艶さと豪華な自由とを以て、社交界に孔雀の如く君臨し、彼女の執事の蜘蛛の絲は徹くことなく犠牲を求めるのだった。その一人に男爵瑞璃子の大学生青木淳がゐた。彼は濡たされぬ戀に呻き悶えた末、死を求めて彷徨するうち自動車の奇蹟で重傷を負ひ、彼女の名を口にしたが死んで行つた。彼女を知つても瑞璃子は瑞璃子にして自由奔放な生

【挿紙】 清節三十年、つねに藩閥政府と闘つて来た唐澤勇將の娘瑞璃子は、浮遊癖くばかりの眞珠夫人と結婚したが、戀人の杉野直也と共に、船成金莊田の同遊會に赴いて計らずも悪魔の呪ひを受けた。即ち白面の鬼子と娘美奈子とある四十男の莊田が、瑞璃子を見染めて後妻にと求婚したが、金力萬能を持つ莊田は、執拗な苦肉の謀に依つて勇將を非常な窮地に陥れた。瑞璃子はウヂトとなつて身を以て復讐する悲壯な決心の下に、進んで莊田に嫁して名ばかりの妻となり、處女の懐まきと結婚の御慶とで莊田を納養して苦痛させた。そして半歳の後血に飢えた獸となつて追つて来た莊田は、白面の鬼子に倒されて死んで了つたのである。瑞璃子は勝つた。併し敵と戦ふために自ら心に塗つた毒はいつかその心にしみ入つて、瑞璃子はもうもとの瑞璃子ではなかつた。驚んだ心と處女とで未亡人なる妖艶さと豪華な自由とを以て、社交界に孔雀の如く君臨し、彼女の執事の蜘蛛の絲は徹くことなく犠牲を求めるのだった。その一人に男爵瑞璃子の大学生青木淳がゐた。彼は濡たされぬ戀に呻き悶えた末、死を求めて彷徨するうち自動車の奇蹟で重傷を負ひ、彼女の名を口にしたが死んで行つた。彼女を知つても瑞璃子は瑞璃子にして自由奔放な生

して、創刊から明治四十年前後にかけては、常...

進歩的の如きは、當時の本誌に於ては、草...

新心理主義文學 二十世紀の十年代になつてから、心理...

人は紙幣の相談をしてゐた。長蔵は終に良か...

新世帯 明治四十一年十月、国民新聞「刊行」...

新水島記 小説「新水島記」を二冊に編み...

味を以て、自然主義作家中では、とりわけ自...

江戶功徳寺の僧や、若僧は今一人の娘を...

新水島記 小説「新水島記」を二冊に編み...

「批評」一家の描かれた生活の一つの展...

「特質」意識の流をそのまゝに描くのであり、...

値段などを教へ始めた。幸福な月日は、滑...

新水島記 小説「新水島記」を二冊に編み...

「批評」一家の描かれた生活の一つの展...

挿話は、幼い四人のものを抱へて、水見...

「批評」一家の描かれた生活の一つの展...

心に激すことがあつて、いふ作を書いたもの、私達の時代に激いデカダンスをめぐつてツルハシを打ち込んで見ると、あつた。覚れずさんだ自分の心を振り起して見たら、生きながら地獄から、そのまゝ、あんな世界に生き返る目も来たと言つて見たいのもりであつた(文藝春秋、昭和二、一)と言つてゐる。これは同時に「新生」の内容と主張を告白してゐる。「破成(道場)以来、藤村の各長篇に見る自己告白の調子が最高調に到達したすがたであり、現実主義と息遣とが懷疑に懷疑を重ねて虚無感に行き詰りかけた過渡時代の産物である。文藝と表現に於ても在来の諸作と後年のそれ等のかけ橋となすものであり、且つ後年の新しい特徴であるところの予き象徴の要素と洗練論的世界観、人生観のすでに深く根ざし、且つ到るところに最初のすがたを示してゐるのを注意すべきである。また藤村の女性観と彼の根柢深いフェミニズム思想との病的なまでの病的な表白を見るべきである。(式部)

「新生社」(新編)「新編」を見よ。新編社「新編」文藝的結社【解説】文藝及び社会の革新を標榜して、雑誌「新編」が新編社から発行されたのは、明治二十九年七月である。社長にしてその主筆たる佐藤春夫(義高)は、それ以前、二三の雑誌に文藝評論を書いたが、愈々その抱負と自信を世に布かうとしてこれを出したのである。最初の発行所は牛込区内坂町にあつたが、次いで長延寺谷町に移り、更に神田一ツ橋通に移つた。この一ツ橋通の時代から、「新編」は漸次氣勢を加へ、折柄、大阪から上京した高須梅次(芳若)が入社して編輯に與ることとなつた。同時に

出版部を設け、橋香の創案によつて、在来の出版界の沈滞せる機運を打開して、新進の士々の著作を刊行することとなり、田岡雪雲の「雲雀」、山田花袋の「ふる郷」、久保天来の「野馬鹿」、戸澤始の「白鷺」、小島島水の「扇頭小登」等、續々刊行して非常な歓迎を受け、文壇に一派の新機運を興らすことを得た。かうして社運大に振ふに至つたので、一段の飛躍をなすべく、社を錦町に移したが、それは明治三十二年のことであつた。菊野であつた「新編」が四六倍刊に改まり、中村泰南直道、西村解夢(直志)、田口抱汀、正岡子規、陽、奥村梅草、平福百穂、登坂北嶺等が編輯同人となり、以前から關係してゐた金子澤園等と共に、新編誌上に種々の刷新を加へ、文壇打撃を叫ぶと共に、有力なる新進無名の士を世に紹介することに力を入れ、その評論は「直言直筆」を標榜し、燃ゆるが如き青年の意氣を以て八方に富つた。それは創刊以来、橋香の無類執筆で、文壇小觀からの傳統であり、主義であつた。そのため親友社、土門漢、島田等々からは、殊に忌み嫌はられた。次いで役員として、蒲原明、結城素明等も亦、「新編」に寄與するところがあり、一條成美の清酒なる挿畫は、この雑誌の一異彩であつた。明治三十四、五年頃には最も、發行部數一萬を越え、純文學雑誌としては空前の勢力と稱され、新編派は居然として文壇一方の勢力となつた。投稿欄の如きも人材多く、小説に評論に、長時に短歌に、見るべきものが少なくない。同時に、その中から知名の士を輩出した。それ等の人々の中

には、生田長江、片上伸、土屋義賢、吉村佳亮、昇野夢、河野省三、相馬御風、若山牧水、川路柳虹等がある。かうして「新編」は明治三十六年九月迄、その正系を維持したが、橋香が一轉換をなし、新編社を創めることとなつた爲め、その後は正岡子規の主宰で暫く發行を續け、轉じて藤村の經營に移り、明治四十二年末に至つて廢刊した。「新編」の正系は、明治三十七年五月に出た「新編」が繼承し、爾來刊行を續けること三十年に近く今日に至つてゐる。新編社同人は主力を文藝の發展に注



(新刊) 新聲

いたが、一面、社会問題にも留意し、尾尾藤海問題、學生風紀問題、文士生活問題等に就いて公正に論ずる所があつた。「附記」は、義高外等の新編社(S.S.)に就いては、「千紙本派」を参照。「高須」は、信西入道遺書目録「高須梅次」(通鑑人道叢書目録)を見よ。人生の幸福(シゲタ)の 戯曲 三幕【作者】正宗白鳥(發表)大正十三年四月改題「刊行」大正十四年一月、戯曲集「人生の幸福」に収録、新編社、後、戯曲集「ある心の影」及び日本戯曲全集第四十五巻所収【上演】大正

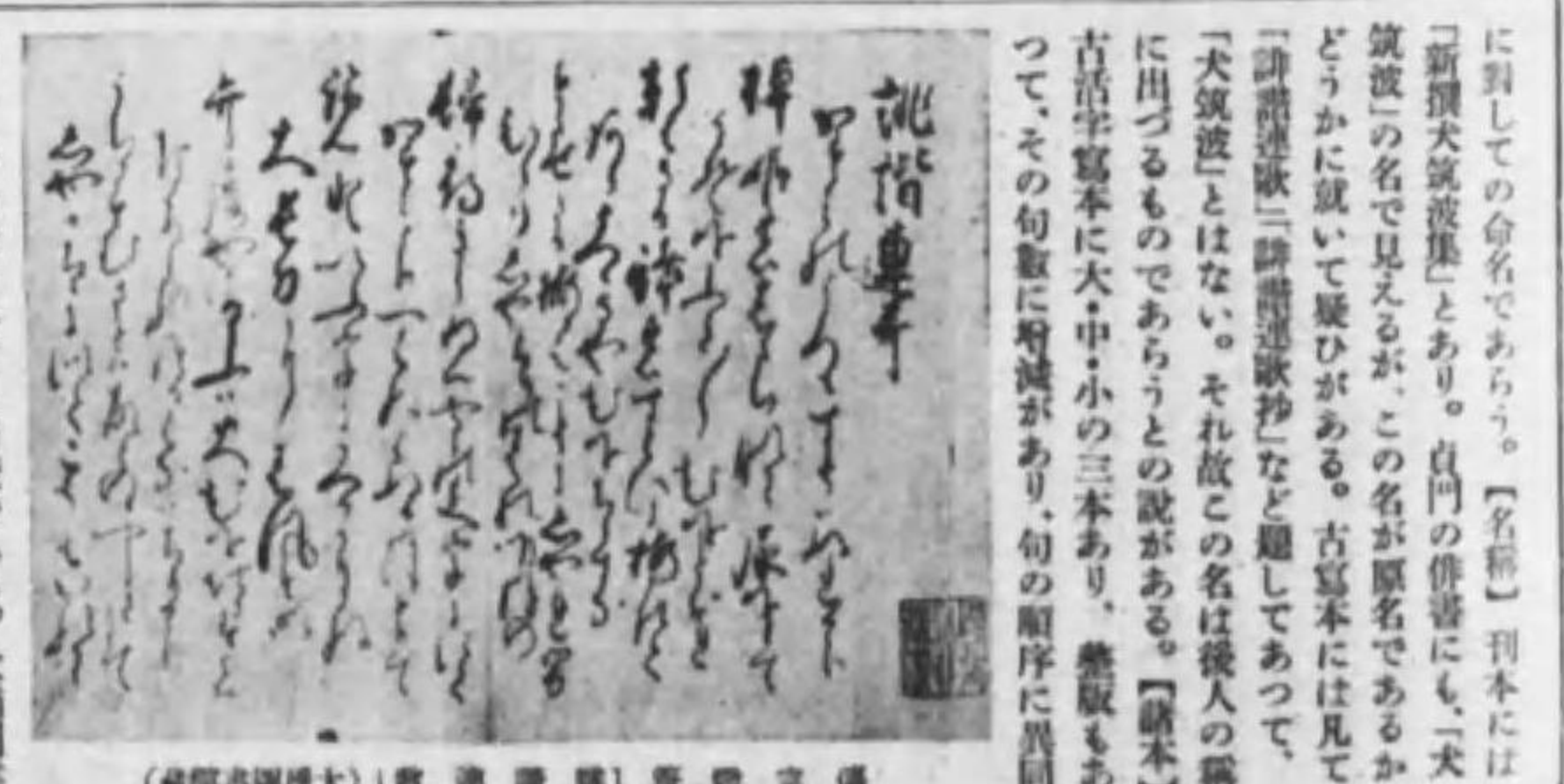
十三年十一月、帝國ホテル演藝場に於て新劇協會初演。配役、豊次郎(中村泰南)、喜多雄(梅谷)、妹かよ子(高橋千鶴)。演出は中村泰南。「櫻桃」 幾人か人を殺した父親の血をうけた以上、一生に一度は、父と同じ事をやらねばならぬといふ恐怖にかられてゐる兄の豊次郎は、別荘の裏山で若い女が殺されてゐるといふ話を聞き、前夜迷ひ汽車でついた弟の喜多雄の仕業ではないかと懷疑したり、丙午生れの異母妹のかよ子は結婚せず、今の中に殺した方が幸福だといふ妄想にかられて、その頂上、點で突如妹を絞め殺さうとするが、却つて隙をついたかよ子の猛烈な抵抗が兄の咽喉を断つた。命を救つて了。この事件に恐風狂氣した喜多雄は二つの殺人の加害者と自ら承認する。併し暫くしてかよ子も亦加害者是自己だと告白するが、友人寺演はそんな華奢な手で男の命がとれるものか、貴女もまた狂狂したのぢやないかと驚く。「批評」發表當時は、餘りに小説的だとの非難があつた。新編協會の上演に依つて見直され、又俄に世評を生んだ。特徴は作者の心靈の展開するまゝに描かれる内在的表現で、而も現實の核心に徹してゐる。虚無と懷疑と絶望の孤獨人、それを通過つて抜けた作者の美しく鋭い詩魂である。戯曲としての高潮は、第二幕、豊次郎を殺してからのかよ子の落着き拂つた水の如き冷たい動作、及びその會話である。併し第三幕は失敗である。「史的地位」震災後十三年から四年に亘り、「人生の幸福」を出発として白鳥の戯曲時代があらはれた。と共に文壇全時「新編社」の活躍、築地小劇場劇の播種等によつて、戯曲全盛の風をなした時だつた。その中に於て白鳥とせ

られ十三年度第一の收獲と稱賞を浴びたのが本作であつた。作者のこの時代の戯曲としては外に「行日」の出来事「ある心の影」「梅雨の頃」「蘭家の夫婦」「老情」「歡迎されぬ男」「静寂」「復讐の家」等の現代劇と、「安土の春」「藤原の最期」「尤秀と和巴」等の史劇があり、小説家の書いた戯曲として無二の好記録をあげ、多く上演されたが、その後は再び小説道に戻つた。人生のための藝術(シゲタ)の 戯曲 三幕【解説】人生のための藝術とは、即ち藝術のための藝術(藝術至上主義)を説く人々に反して立つ人々の言ふところであつて、一に人生派ともいふ。佛蘭内ならば、社會學の見地より美學を説明するギ・イヨオ(Guyau, 1857-1933)の如き、更にギ・イヨオの美學を一層廣くし、組織化したロシャのトルストイ(Tolstoj, 1828-1910)の文藝の如きを最とする。トルストイは言ふ、文藝藝術の目的を單に快樂を求め、美を演出し、他に何の有效なる目的はないと説くのは、恰も食物を攝取する目的は飽へに食欲の満足を得ることであるといふが如きものである。食物が人間の生きるに必要不可欠からざるものである如く、文藝藝術が人間生活に必要な要件であるとして考ふる時、初めて從來の誤つてゐた文藝から離れた眞の生きた藝術が作り出さるゝことを説くのである。快樂と美とのみを目標とするが故に、文藝は墮落して特殊階級の娛樂機關の如きものとなつてしまふ。最大多数に幸福感と、快活と、生きる力を鼓吹することが眞の藝術の任務であると説く。文藝とは實はかくあるべきもので、然らざる文藝は眞の文藝ではない、といふ。トルストイのこの主張に

鼓吹せられ、感化を受けた中で、最も大きな文藝家は、佛蘭西のロマン、ロランである。そしてトルストイは、その主張を具現するためには、特殊階級の立場を捨てて民衆の中へ行くことを求め、民衆が直接要求するものを表現せんことを求めたのである。ロランの民衆劇論の如きは、即ちこの主張の具現である。享樂主義、唯美主義、藝術至上主義(藝術)に対する全的反対の立場に立つ文藝の主張である。人生派(シゲタ)の 人生のための藝術(シゲタ)の 戯曲 三幕【解説】人生のための藝術とは、即ち藝術のための藝術(藝術至上主義)を説く人々に反して立つ人々の言ふところであつて、一に人生派ともいふ。佛蘭内ならば、社會學の見地より美學を説明するギ・イヨオ(Guyau, 1857-1933)の如き、更にギ・イヨオの美學を一層廣くし、組織化したロシャのトルストイ(Tolstoj, 1828-1910)の文藝の如きを最とする。トルストイは言ふ、文藝藝術の目的を單に快樂を求め、美を演出し、他に何の有效なる目的はないと説くのは、恰も食物を攝取する目的は飽へに食欲の満足を得ることであるといふが如きものである。食物が人間の生きるに必要不可欠からざるものである如く、文藝藝術が人間生活に必要な要件であるとして考ふる時、初めて從來の誤つてゐた文藝から離れた眞の生きた藝術が作り出さるゝことを説くのである。快樂と美とのみを目標とするが故に、文藝は墮落して特殊階級の娛樂機關の如きものとなつてしまふ。最大多数に幸福感と、快活と、生きる力を鼓吹することが眞の藝術の任務であると説く。文藝とは實はかくあるべきもので、然らざる文藝は眞の文藝ではない、といふ。トルストイのこの主張に

文藝の成立條件の批評と、その内容としての人生の批評との二義を包含してゐる。而してこの場合、人生の批評はつまり批評家の生活の内容即ち個性と、その比較的全照尺とし、標準とせねばならない。従つて人生そのもの、批評家その人の内生活の變化を豫想し得る限り、批評の標準も決して一定不變のものではないが、唯この批評に於ては批評家の全生活に照して批判するといふ用意を缺いてはならないのである。トルストイの批評(シゲタ)の 人生のための藝術(シゲタ)の 戯曲 三幕【解説】人生のための藝術とは、即ち藝術のための藝術(藝術至上主義)を説く人々に反して立つ人々の言ふところであつて、一に人生派ともいふ。佛蘭内ならば、社會學の見地より美學を説明するギ・イヨオ(Guyau, 1857-1933)の如き、更にギ・イヨオの美學を一層廣くし、組織化したロシャのトルストイ(Tolstoj, 1828-1910)の文藝の如きを最とする。トルストイは言ふ、文藝藝術の目的を單に快樂を求め、美を演出し、他に何の有效なる目的はないと説くのは、恰も食物を攝取する目的は飽へに食欲の満足を得ることであるといふが如きものである。食物が人間の生きるに必要不可欠からざるものである如く、文藝藝術が人間生活に必要な要件であるとして考ふる時、初めて從來の誤つてゐた文藝から離れた眞の生きた藝術が作り出さるゝことを説くのである。快樂と美とのみを目標とするが故に、文藝は墮落して特殊階級の娛樂機關の如きものとなつてしまふ。最大多数に幸福感と、快活と、生きる力を鼓吹することが眞の藝術の任務であると説く。文藝とは實はかくあるべきもので、然らざる文藝は眞の文藝ではない、といふ。トルストイのこの主張に

に對しての命名であらう。「名辭」刊本には「新撰大筑波集」とあり、貞岡の俳書にも、大筑波の名が見えるが、この名が原名であるかどうかは疑ひがある。古寫本には凡て「新撰大筑波集」と題してあつて、「大筑波」とはない。それ故この名は後人の稱に出づるものであらうとの説がある。「讀本」古活字寫本に大・中・小の三本あり、無版もあつて、その句數に増減があり、句の順序に異同がある。寫本に於ても同様である。大橋園書館蔵の傳宗齋集の「新撰大筑波集」と題するものに、附句だけ約八十章程しかない。それ故本集の内容は、宗齋初選以來移動し來つてゐるものかの疑ひがある。芭蕉以前俳諧集(俳諧文庫)貞岡俳諧集(俳諧文庫)所收。「成立」通説は本集中にある宗齋十三回忌追善の發句から考へて、永正十一年の編としてゐるが、回



(編者) 貞岡(大橋園書館蔵)

忌の句により直にその年とは定め難く、又本集中にある「道ひつらん」とあるらん」の

や、後れて、俳諧の中興者として貞徳一派を起した。貞徳は特に宗廟の檢討に重きを置いた。

く也足軒(松尾芭蕉)の批評が施してあるのが異つてゐるばかりである。

出仕難儀の上目の所勞に依つて、子息左中将爲備前守代つて持守出仕したと言ふ、目的所勞とは「新古今」の場合の定家のそれの如く、

人際、長壽法師(爲法印)等で「風雅集」(別項)の場合と比較すると、持明院、京師の人々の歌は減じ、大尊等、二條家の人々の歌が増して居り、新古今歌人の作が減少、新教撰風な歌人の作が大體に於て増加してゐる。

潤の歌がある。群書類従卷四九七所収本は、享和本の校異に用いた方のもので、これ等は共に抄本に属する。文政年中、京都の鈴鹿連

書の體裁をも混し、また同個傍の字を同様に分つた所もあつて、音引字書の體裁を用ひてゐる。所収の漢字約二萬九千四百四十字外に小字の字(日本製)の字、四百餘字を収めてゐる。

に依つたものと思はれるが、これ等の古代の字書や韻書は、或は散佚し、或は傳寫によつて大に面目を改めてゐるから、本書の字書は、我が古代並びに支那古代の字書の研究に資すること多大である。



(漢字書) 新撰字鏡

【新撰字鏡】しんせん 語源書 十二卷 【著者】昌住【成立】昌泰年間(諸本)抄本と完本とある。享和三年の刊本は本文一册、校異一册で、陸可彦の序(享和三年春日)、賀茂直

【新撰狂歌集】しんせん 狂歌集 二卷 【著者】維長老【刊行】未詳【諸本】別

【新撰七部集】しんせん 俳諧七部集 三十卷 【著者】萬多親王・藤原朝臣・藤原清時阿部

新粧之佳人

南翠外史(角書) 一(刊行) 明治二十年五月、古書修正文堂。再版本もある。明治文學名著全集(東京堂)所載。

【評】改進黨の名士水本清を主人公として、それに泉千代といふ美人を配し、日光中野寺蘭軒の奇遇から話を起してゐる。水本は風采黒髪如く、麗い男振であるが、淡泊で素朴な、國士の風格を備へ、千代は當時の婦人に似ず、政治趣味を帯び、小説などを讀まず、スペインアの教育論、その他時代に必要なる新知識を供給する書籍を愛讀してゐた。水本は



新式洋装の佳人

【批評】本質編輯・東海散士等の政治小説が人氣を得た頃のもので、編輯の「雪中梅」(別項)に比すれば幾分か進んで居り、東海散士の

【佳人之奇遇(別項)などよりは、ずつと現實味が加はつてゐるが、ただ前二者のやうに、實際政治界に生活した作家でないために、政治界の事情も、社會の事情も、たゞ「ちやうど」と盛澤山に並べてあるだけで統一がない。地の文の直譯調と會話の口語體の不調和も嫌味であり、人物の性格などは一つも描けてゐないが、明治二十年代の社會相をレビエー的に展開し、筋は幼稚ながらも、小説風に纏め上げた物珍らしさが、當時非常に受けたのであらう。なほ裝幀の美、全部石版印刷の挿畫の費澤とは共に空前といはれた。

【名義】山崎宗鑑の「新撰犬筑波集」(別項)に倣つて新撰と號した人のである。季吟の自序に、「連歌に波は彼ふたつのつくばのかゞみ世に(原)あきらかなれば、いま俳諧の集をえらばんも、これををいがたにてうつしとりてんこそたとひあたら

新撰犬筑波集

【名義】山崎宗鑑の「新撰犬筑波集」(別項)に倣つて新撰と號した人のである。季吟の自序に、「連歌に波は彼ふたつのつくばのかゞみ世に(原)あきらかなれば、いま俳諧の集をえらばんも、これををいがたにてうつしとりてんこそたとひあたら

【参考】國歌大系第八巻附題(歴代和歌教讀本) 考卷之五
【評】本居宣長の「成立」寛政十年(一七九八)「本」宣政十二年刊行の「日本書紀」神代卷を著者一流の古學の立場より批判註釋したものである。例の漢意漢文を指稱し、排斥することには到る處に辛辣であるが、その上に物語を自身に於ける矛盾の如きも亦非難せられてゐる。併してそれ等の議論には、「古事記」の所傳を以て唯一の正説とする前提が存してゐること少くない。唯、「書紀」の字句の解釋吟味等に於ては、まゝ、簡體すべき卓見がある。神代紀に於ける一書の説は、元來分注であつたとする考の如きも、その例の一つに數へられよう。

【参考】大村可全(九十七句)・萩田似雲(三十九句)・伊勢村朝朗(九十九句)・堀山保友(九十句)・如真(大津氏(百三十九句)・竹内三信(九十九句)・粟木田守武(三十六句)等である。貞徳以後の白門俳人の状況及び季吟の勢力關係を窺ひ得るものである。

【参考】藤原雅世(成立・由来) 至徳元年、爲重によつて「新撰拾遺集」が撰上せられてからは、教讀の事は久しく絶えてゐた。この間、政治的に種々の事件があつたが、その翌水承元年三月、義教、將軍に任ぜられ、十二月二十七日に後花園天皇の御退位あり、こゝに新撰連に會つて、水承五年、教讀の命が下つたのである。(文政)「教讀次第二開成記」などによると、水承五年八月二十五日に教讀の事が仰せ出された。開國法印權大僧都義孝、撰者雅世は「新古今」撰者の一人なる雅世の七世の孫で、雅世の雅世の二人は、時の將軍の家、即ち飛鳥井家は醍醐の家であるが、雅世は爲家から古今「源氏」の指南を受け、代々教讀にたづさはり、二條家の旁系の子孫地位にあつた。雅世、雅世の二人は、時の將軍義孝と親近してゐた關係と、二條家の人々に雅世に命が下つたのであらう。(義孝)かく雅世に命が下つた日に四季奉覽をなし、その時、雅世、假名序ともに書かれた。作者は一條攝政長良である。「南朝記傳」には、この日を全部奉覧の日としてある。水承十一年六月二十七日、教讀の命あつて七百年を経て撰成を終つた。「諸本」二十一代集本。國歌大觀集部(國歌大系第八巻附題)「内容」假名序、假名序の内容を比較すると、前者は簡

【別項】以後の男風として斥けられた「玉葉」風體(各別項)二集の響をつたへ、二條家以外後の重なる作者をばば編綴して、二條家の撰者のなしたる如き偏狭さのないのは、歌謡の争ひに關係なき家の出であつた故であらう。撰者雅世の家の人々、雅世・教讀・雅世・雅世・雅世・雅世等の作、集に入れるには、新古今調を明瞭に傳へ、優麗にすなほは歌はれてゐる。巻頭の「春來ぬといふより雪のふる年を四方に隔て、立つ霞かな」は、撰者の父雅世の歌である。かくて本集は雅世の雅世の歌の生氣ある事など、十三代集中出色の集であり、「玉葉」風體と飛び飛びに現はれた改革の氣をうけて、二條家の教讀の間に一轉機を造り、しかも教讀の最後をなしたものである。本集に新古今調が相當力強く取入れられた原因は、(一)撰者、飛鳥井家の歌風、(二)前集なる「新撰拾遺集」以後五十年間は、歌學史上、反二條家派の活躍感なりしこと、即ち花山院長親の「耕雲日傳」(應永十五年)、今川了俊の「讀本」(應永十年)より二十四年に至る間に、最も新古今調を高調せる「正歌物語」(別項)は、實に本教讀の命の下る三年前の、永享二年に成れる等、環境の力が相當ありしものと思はれる。

【附記】本集春上に、「春の御歌の中に」後龜山天皇御製「春はまた我がすむ方にかへるなり」萬葉の體の衣かりかね」とあるは、「新集和歌集」春上に載せられたる長慶天皇の御製で、五百番歌合の「四十番左」の歌である。長慶、後龜山兩帝が史上に混淆されて記され給つた一例である。【註釋書】本居宣長の「美濃地家高折括」巻下に本集より十九首を抄出して評

【参考】大村可全(九十七句)・萩田似雲(三十九句)・伊勢村朝朗(九十九句)・堀山保友(九十句)・如真(大津氏(百三十九句)・竹内三信(九十九句)・粟木田守武(三十六句)等である。貞徳以後の白門俳人の状況及び季吟の勢力關係を窺ひ得るものである。

【参考】藤原雅世(成立・由来) 至徳元年、爲重によつて「新撰拾遺集」が撰上せられてからは、教讀の事は久しく絶えてゐた。この間、政治的に種々の事件があつたが、その翌水承元年三月、義教、將軍に任ぜられ、十二月二十七日に後花園天皇の御退位あり、こゝに新撰連に會つて、水承五年、教讀の命が下つたのである。(文政)「教讀次第二開成記」などによると、水承五年八月二十五日に教讀の事が仰せ出された。開國法印權大僧都義孝、撰者雅世は「新古今」撰者の一人なる雅世の七世の孫で、雅世の雅世の二人は、時の將軍の家、即ち飛鳥井家は醍醐の家であるが、雅世は爲家から古今「源氏」の指南を受け、代々教讀にたづさはり、二條家の旁系の子孫地位にあつた。雅世、雅世の二人は、時の將軍義孝と親近してゐた關係と、二條家の人々に雅世に命が下つたのであらう。(義孝)かく雅世に命が下つた日に四季奉覽をなし、その時、雅世、假名序ともに書かれた。作者は一條攝政長良である。「南朝記傳」には、この日を全部奉覧の日としてある。水承十一年六月二十七日、教讀の命あつて七百年を経て撰成を終つた。「諸本」二十一代集本。國歌大觀集部(國歌大系第八巻附題)「内容」假名序、假名序の内容を比較すると、前者は簡

であつた。世論騒々として果ては可哀をも煩はすまでになつたので、惜しくも折角の業...

新著百種

新著百種 (しんしよ 百しゆ) 著者 解説 出版者 岩波書店... 第一號から第十七號まで、外に號外が一冊、計十八冊だけ出た...



(複製色) 種百著新

理學士で、私立学校の教師をかね、斯學の著述もあり、當時の出版界の變り者であつた。...

の名は次の通りである。 (第一) 紅葉山人作「物語六朝」(二十二年四月) (第二) 竹の會「物語六朝」(二十二年五月)...

神道 (しんちよ) 神道はかみのみちとも云ふ。即ち別項「神」の下に述べた神の道である。...

調し、神佛分離の思想を高調して、遂に神新の大業と共に、佛教の宗教神道は全く衰微に歸したのである。...

たのである。併し我が國民の多くの要求は、惟神の道の宗教的方面を發展して、神道の宗教を大成するにあつたのである。...

の教義は、天照大神を萬物の祖神とし、その神氣天地に遍滿し、一切萬物はその光明溫暖の中に生育せられ、自然の大道法に現はるとする。...

立し、扶桑教と稱することとなつた。 (實行教) 右の長谷川角行の遺教を承けて、肥前の人柴田花守出づ。...

朝夕に神を拜むこと。外邦の異教に劣らざることを。國恩に報い奉るため家業を怠らざることを。...

つたのであるが、實は維新時代初期の頃の偽作とせらる。今、續群書類第一編に收められてある。伊勢太神宮に關し、有益なる傳説あるも、主とするところは、佛教的思想を取り來つて、神道の教義を構成せんとし、殊に内容に對して外宮を重からしめんとする企圖が合まれてゐる。

【参考】五部書院神皇正統記(神皇正統記)○陽復記 (田中義一)

神道修成派(神道修成派)を以て、神道各派を見よ。

人道主義 Humanitarianism (英) Humanitarismus (露) 人道の理想を説き、人類の幸福を増すことが、道徳の最高の目的であるとする説であつて、人格の平等を認め、同情慈悲の獸身の如き愛他的行爲を以て本義とするものである。【沿革】十五世紀の文藝復興は、復古主義によつて、形式的になつた人間の生活或は思想に對し、個人を開放して自由を獲得せんとした運動で、既に人道主義的であるが、これはヒューマニタリヤニズムと又はは、ヒューマニズム、即ち人文主義又は人文學派と呼ばれてゐる。而して既に人道主義即ちヒューマニタリヤニズムが文藝思想として明かになつて來たのは、十九世紀英國文壇に於てである。當時、功利主義思想全盛の後を承けた英國文壇に於ては、これに對して反抗の聲をあげた者も多く、中にもカライアル・ラスキンの如き大批評家が、この主義のためには萬丈の氣概をあげてゐる。ディキンズは、その小説の中に、この主義を繰り込んで感んに功利主義によつて失はれた人道の回復を説いてゐる。これ等の思想、殊にディキンズのそれは、後に同國の作家ギンギンに大きな影響を與へて、人道主義は、漸次個人的色彩に

社会的色彩を加へ、ギンギンが来るプロレタリアの作家として、より多く認められてゐる位であるが、この思想が、ロシアに及ぼした影響は非常に大きな力となり、トルストイ・ドストエフスキー等に至つて、人道主義は殆ど完成したかの如き觀を呈し、今日では人道主義と云へば、直ちにトルストイを想起する程である。(ヒューマニズム参照)

【日本に於ける人道主義】人道主義は、日本文學にとつては、自然主義と共に最も大きな影響を與へた文藝思潮である。それが嚆矢として、明かに人道主義の旗色が鮮明になつたのは、明治四十三年に創刊された雜誌『白樺』に於てであつた。併しその前、明治十年代には既に『戦争と平和』の譯が出てゐる。抑々明治十年代、英國功利主義の思想に物足らなさを感ずてゐた日本の學界では、佛國の自由思想・革命思想を引き入れ、讀んでロマンの虛無思想を欲び迎へたのであるが、その虚無思想の代表者ストラブニヤクによつて、トルストイが紹介され、長谷川二葉子・矢崎健合の如き、トルストイを講堂に於て讀みしめたものである。併し人としてのトルストイは、先づ最初に親しみを感ずるやうになつたのは、徳富蘇峰であつて、明治二十五年には、『トルストイ傳』を著し、後にトルストイを訪問した。同二十六年には、田山花袋がトルストイの『コッパ』を抄譯して出した。これが我が國に於ける人道主義運動の第一期であつて、『白樺』のそれは第二期に當るのである。白樺派(別項)の連中は、久しく自然主義の下にあつた文壇に對して反抗し、解決へ、目的理想へ、光明へと導かうとしたのである。かゝる運轉の中へ、大正三年、世界戦争が始まつて、人道間

題、國家主義對世界主義の問題、戦争是非の問題が、世界を通じての痛切な問題となり、日本の人道主義も、一段と活氣を呈し、大正五年には『白樺』の外に、加藤武雄氏主宰の『トルストイ研究』なる雜誌も出た。かくて人道主義は、一時自然主義の分野を白領して、日本文學界を風靡するの勢ひを呈したが、大正十四五年頃からプロレタリアの文學が擡頭し來つた。けれども、大正、昭和にかけて、なほこの思想が日本文壇の主要なる一派をなしてゐた。

【人道主義】 中島博士(大宮氏)『刊行』明治二十九年『解説』 編者等が神道研究の材料たるべき珍籍を諸名家の所蔵の中から選んで輯めたものである。これを分類すれば遺儀論・顯微鏡・考證類・神道類・人物傳記類・社傳類・神道家傳記類・神道史類・神道大要論・二十一社書說辨・大嘗會傳・神道大意論・二十一日書・神道神祇考・方術原論・關西神祇考・神祇考・神祇考等二十三篇を收載するものであるが、各篇にその著者、内容の解説を付し、末尾に原本の異本書目・註釋書又は參考書を擧げてゐる。各篇は何れも原本の備を尊重したものでなく、讀み易いやうに校訂してあるのは、或る研究者に取つて遺憾とすべきであらう。(土井)

【神道本局】 神道各派を見よ。

【親證餘影】 神道 四巻 (著者) 繁津宣光『刊行』明治十五年『解説』 漢文の體裁で、讀書傳の餘に支那の歴史子集、諸典

籍・法帖・筆研・字義・事原・詩法・佛敎・佛典・僧尼等に就いて所感を述べたもの。明治十五年三條實美編纂、同十四年北長順の序、文久二年著者の自叙がある。繁津宣光著。【著者小傳】 繁津宣光、字は重光、通稱九藏、號は毅堂、名古屋藩士で、儒學を精研叙所を受けた。更に昌平學に學び、後、尾澤學士となつた。藩侯を輔けて勤王の功多く、維新後諸官を経て元老院議員に陞つた。詩文に名がある。明治十五年十月五日歿。享年五十八。(和田)

【信徳】 信人(姓名)伊藤氏。通稱助左衛門(號)梨梅園、竹犬子(生誕)寛永十年(一六三三)十一月十三日、享年六十六。(伊藤・聞歴) 幼時松永貞徳に見え、貞徳より徳の字を許さる。貞徳歿後、山本西武・高瀬梅庭に従つて道を學び、西武歿後ひたすら梅庭を師とした。談林派の勃興するに及び、その能と文力、師風を襲した。隨流の説に、「信徳は高談よりある、事おびたし」とあつて、異體の句が多かつたのである。併し時代の關係にもよつて漸く正風體の傾向を取つて、その七百五十韻には、芭蕉に「次韵(別項)ありしめるに至つた。芭蕉が江戸から書を寄せて上野の風體を問うたのに、「雨の日はやませけて行くかきつばた」の句を贈つたと言はれて行く。かくて芭蕉も漸く接近し、傾向も芭蕉に近いものであつたが、而も貞の革新者とはなり得なかつた。京新町通竹屋町下町に住し、俳諧の點者を業とした。【著作】 六百五十五韻(寛永三年刊) ○ 十百韻(同前刊) ○ 七百五十韻(別項) ○ 江戸三吟(別項) ○ 京三吟(別項) ○ 五十韻(別項) ○ 元禄三吟(別項) ○ 胡蝶判(別項) ○ 五韻言 ○ 白重 ○ 浮世妻 (田中)

鳥居清波(花見車高島橋十) 傳説集 其真身 ○ 講談家 清波 川文字百 ○ 佛家 白蓮寺 三宅山 ○ 佛家 奇人談 内文々 ○ 佛家 大聖國 年用 奇人 ○ しんとく丸 (丸) 説神淨瑠璃 六段 【作者】 未詳 (名稱) 主役の名、俊徳丸による。【成立】 内容辭句等より「小栗判官(別項)以後の製作。【刊行】 正保五年が最初。【諸本】 佐渡七大夫正本に数種ある。正保五年三月刊、十二行十三行交り二十八、三三、寛文元年九月刊山本版(徳川文藝叢書所収)。寛文頃刊形屋版十七行十三本等ある。享保頃の版も出たであらう。【題材】 諸曲(俊徳丸)、「小栗判官」を配して想を構へたので、諸曲(仲光)等も些かに働いてゐる。【初段】 中古河内國高安里に左衛門之系のおよしといふ長者があつた。子なきを愛へて都東山清水の觀音に參詣した。神は切なる願狀に感じて子を授けんと約したが、その子三歳の時、父母何れかが禍をうくべしと告げる。【二段】 (しんとく丸)とひめをこひ給ふ事)かくて生れたしんとく丸は十三歳の時、天王寺の稚児舞に選はれて、見事に舞ひ納めたが、その折、乾の機敷に見物の和泉國かげ山の長者のおとの姫を見染めた。彼の心を察した仲光は商人によつて懸文の使に立つた。姫は宛名のわれとも氣づかず、大和御面白く讀つた文を讀んでゆく。【三段】 (みだし所さいごの事) 姫は父母に勧められて返事を認めたが、これを受取つたしんとく丸の喜びは堪ふべくもない。さて、彼が生れて十三年間、何の凶事も現はれぬに、長者



(紙表) 丸くとんし

夫婦は神も嘘を言はれたと人々に語つたが、やがて御祭は果敢なく世を去つた。丸は悲みかくれて持徳堂に籠つた。【四段】 (けいぼじやけんしんとく丸) (いれいの事) 後話として興入れた八條殿の姫に、おとの次郎が産れて後、御祭は我が子可愛さにしんとく丸の一命を絶たす。清水に産つて神木に百三十六本の釘を打つて祈つた。筒のしんとく丸はそれがため眼がつぶれ、人の縁ふいれい者となつた。御祭から病人を捨てよと命ぜられた仲光は、力なく、遂に天王寺の法談へと若君を欺き連れ出したが、若君が假眠むに去り兼ねてゐると、恰も御祭の配下五百騎が聞討に寄せたので、これと渡り合つて最期を遂げた。【五段】 (おとひめしのび出たづね給ふ事) 翌朝、杜許にあつた眞堂によつて捨てられた事を覺り、袖乞をして天王寺七村を廻る。和泉國こぎの庄屋殿に着くや、本尊が老翁と現じて、この地の長者の施行をうけ、熊野本宮の湯に入れと教へる。おとの姫の館とも知らず、長者の許を訪ねたが、腰元共の冷笑に會つて逃げ走り、氣も挫けて天王寺に籠つた。おとの

基礎を固めたのは、その門弟鶴賀若狭と鶴賀新内とである。即ち若狭は作詞及び作曲者として新流の名作を残し、また新内は天性の卓絶した技術を以て、新流の聲調を特色づけて流行させた。劇場音楽としては幕末まで時たま、特殊のものに限られて用ひられたが、曲風の關係上、その用途は、常磐津、宮本文は清元等に比すべくもなく、微々たるものであつた。従つて劇場よりも劇場以外、殊に遊廓を中心としての流しや門附けに、寧ろその曲節が迎へられた。かくて文化頃から幕末に至つて數種の分派を生じ、弘化頃から京阪の地にも迎へられて、劇場にも用ひられた。新流の盛時は安永前後で、その後は左程盛衰の變遷がなく今日に及んでゐるが、現在では各派が四分五裂の觀を呈してゐる。勿論曲風の關係上、一部に限られ、常磐津や清元の如き勢力のないのは今も昔と同様である。

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵



本正内新賀鶴

後同曲ながら富士松は前記表現に努め、鶴賀は唯唯者の感情の焔に訴へる底の悲調一點張の如く思はれる。また岡田流の新作の如きは努めて現代の好尚向きに語られるので、新流内の如き感じをする。

【代】初名加賀殿。また若狭といふ百人。文化七年七月歿。初代新内の門下で、若狭の高弟鶴賀吉(初代)の實弟。(二代)通稱彦次郎。後に吉右衛門。生歿未詳。二代新内の門下で、鶴賀にも學ぶ。初め加賀殿といひ、鳥太夫・加賀八太夫の名を経て三代新内を襲ぐ。

蘭太夫・出雲守・都路加賀太夫・津留賀文彌等と變名して、芝居にも文政末頃まで出演し、天保弘化度まで活躍した。(四代)二代若狭太夫の改名。但し明治八年十月刊の「諸藝人名録」の新内節之部に、「和泉町(住)頭取鶴賀新内(まきこ)」とあるのはこれであらうか。(五代)祖元の初名(鶴賀若狭老)。但し二代若狭の初名(鶴賀若狭老)である。但し六代家元としては、現鶴賀若狭老である。

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

後同曲ながら富士松は前記表現に努め、鶴賀は唯唯者の感情の焔に訴へる底の悲調一點張の如く思はれる。また岡田流の新作の如きは努めて現代の好尚向きに語られるので、新流内の如き感じをする。

【代】初名加賀殿。また若狭といふ百人。文化七年七月歿。初代新内の門下で、若狭の高弟鶴賀吉(初代)の實弟。(二代)通稱彦次郎。後に吉右衛門。生歿未詳。二代新内の門下で、鶴賀にも學ぶ。初め加賀殿といひ、鳥太夫・加賀八太夫の名を経て三代新内を襲ぐ。

蘭太夫・出雲守・都路加賀太夫・津留賀文彌等と變名して、芝居にも文政末頃まで出演し、天保弘化度まで活躍した。(四代)二代若狭太夫の改名。但し明治八年十月刊の「諸藝人名録」の新内節之部に、「和泉町(住)頭取鶴賀新内(まきこ)」とあるのはこれであらうか。(五代)祖元の初名(鶴賀若狭老)。但し二代若狭の初名(鶴賀若狭老)である。但し六代家元としては、現鶴賀若狭老である。

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

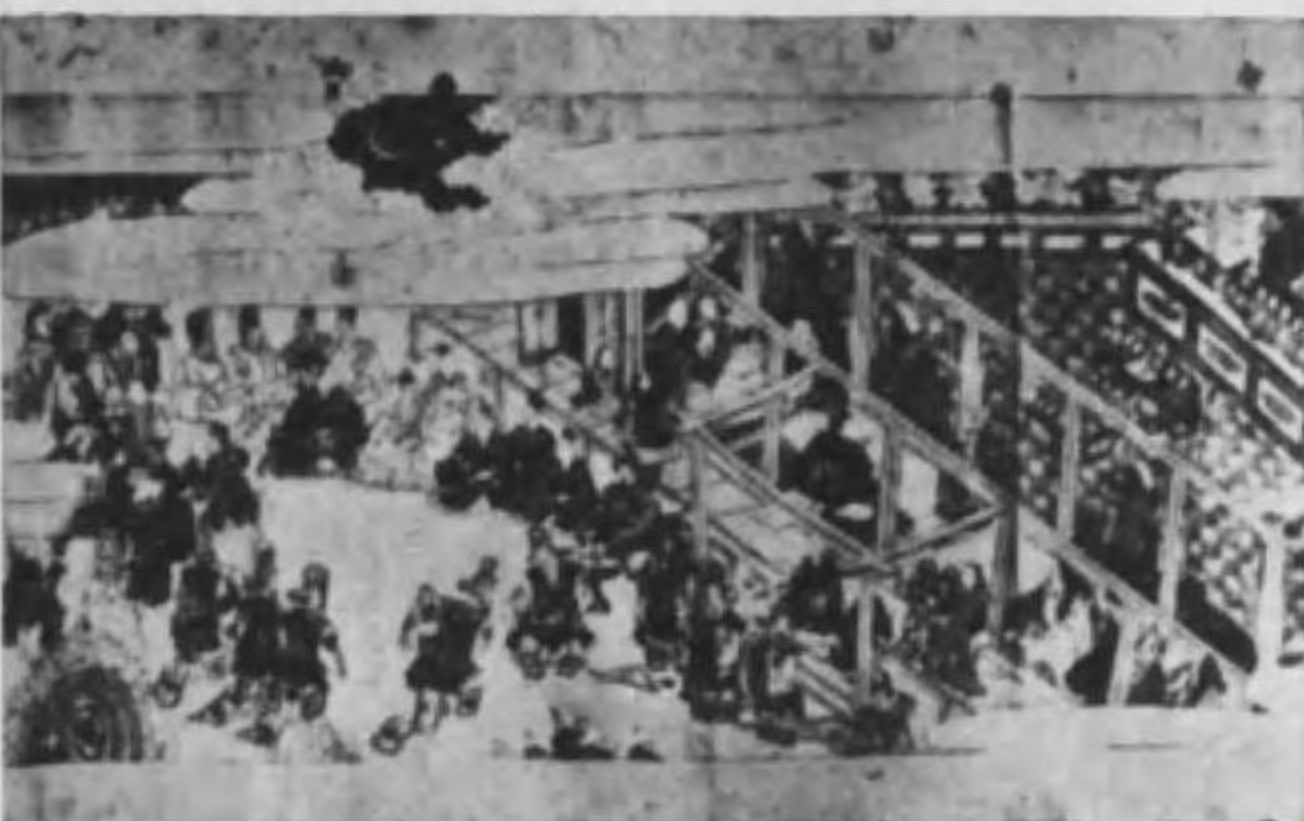
【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

【傳系】(一) 若狭系 宮古路後継の高弟宮古路加賀太夫が、寛延二年冬受領して富士松蔭庵と改名したに始まる(富士松蔭庵後継)。
【傳系】(二) 若狭系 富士松蔭庵の門弟富士松教賀太夫(前名宮古路)が、寛延三年師と斷ち、一派を成して朝日若狭と名乗り、更に寛政八年鶴賀と改稱したに始まる(朝日若狭後継)。(三) 新内系 (初代)本名岡田五郎次郎。初名宮古路加賀吉、後に鶴賀加賀八太夫、更に鶴賀新内と改む。安永三年八月十一日歿。享年六十一。湯方御家人。本所松倉町に住む。富士松蔭庵

べてゐる。それ故、今見ると、言説が粗枝大葉に偏し、少壯時代の客氣に任せて書いたところが見える。が、當時にあつては清新で活氣のあるその文體と、率先、平民主義的教育を力説した點に蘇峰が評論家として、自分の價値を初めて世に問うた第一の著作として、相當重視せらるべき歴史的意義がある。姉妹篇「蘇峰の日本」別題と彼は参照すれば、著者の思想は一層明白となるであらう。



創の縁起に併せて、本堂阿彌陀如來の靈驗の數々を掲げたもので、大永四年豊後親王の奥書によれば、當時眞如堂の住持明淨僧都が作

製したもので、縁起文は法務前大僧正公助がこれを草したものである。詞書は上巻が後醍醐天皇久國の御筆であり、阿書は上巻が後醍醐天皇、中巻が入道式部卿宮、邦高親王及び入道兼親王、下巻が入道前内大臣實隆及び前大僧正公助の御筆である。書者後醍醐天皇に就いては、この縁起の奥書以外に未だその名を見ず、蘇峰のほど明かでないが、恐らく足利末業に於ける土佐派系統の貴人であらう。併しその作風には、さすがに時代の特色を反映して漢書の影響も尠からず、純大和體の風格から聊か遠くなつてゐる。當時は土佐派の衰頹時代であつて、この繪巻の如きもその描寫が型にはまつた觀があるが、筆者に併せて製作の由來も年時も明かな點で、また貴重な資料である。

神皇正統記

【著者】北高親房【名義】我が國が神祖の直系、正統の天皇によつて統御せられ来り、又永久に統御せらるべきこと、而して後醍醐天皇・後村上・後醍醐の直系であり、正統の天皇である事を明かにせんがために、我が國の歴史を説いた書物なるが故の命名である。【成立】延元四年の秋、常陸の小田城に於て著し、後村上・天皇に獻したものと考へられる。但しこの延元四年の初稿は、今傳はつてゐない。今日見る所は、興國四年七月開城に於て修訂した本である。【諸本】親房自筆の本は、類聚有餘抄によれば、伊勢の八神主智仲の許に傳はつてゐたといふが、果して事實であるか疑はしい。現に宮内省に納まつた本は度會家より出た本であつて、或は右智仲の複製本かと思はれるが、それは戰國時代のものであり、一・二の兩卷のみで以下を缺いてゐる。

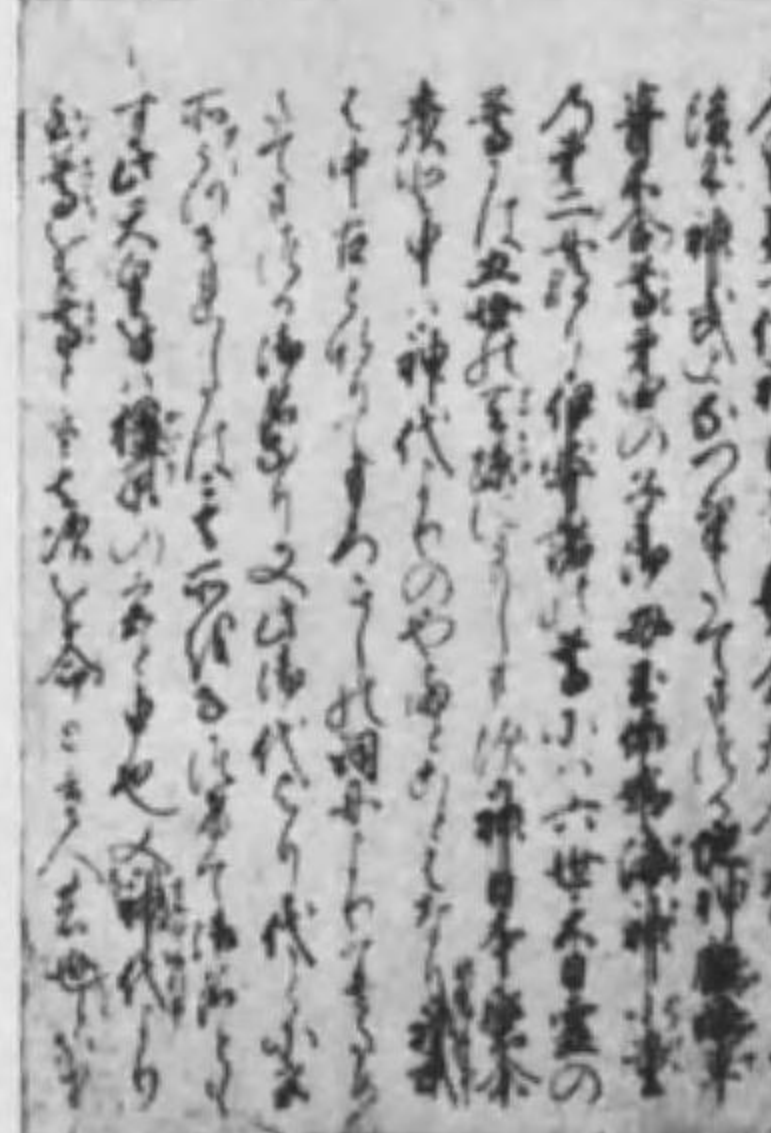
遂に明治維新の大業が成つたのは、神皇正統記の力が發揮せられた點であつて、親房の目的は、數百年を経て、こゝに初めて達成せられたといふべきである。

【著者小傳】親房は權大納言師重の子であつて、官は大納言に至り、位は正二位に昇り、博學宏才を以て朝廷に重んぜられたが、その輔導し奉つた世良親王の御早世を歎いて、元徳二年九月まで三十八歳にして官を退き、入道して名を宗文と改めた。併しやがて、建武・延元の大事に際しては、嫡子顯家を輔けて王政の復興に努め、延元三年五月、顯家被殺の後には自ら陣頭に立つて回復に力めた。當時親房の計畫は官軍の主力を以て奥州を定め、こゝを本據として、中央を圍らうといふにあつた。然るに奥州下の途甲、暴風雨に遭つて船は四散し、親房の乗船一艘のみ常陸に漂着した。これより六年間、常陸に於て苦戦したが、初は小田城に在り、後開城に移つた。而して「神皇正統記」はこの間に成り、その十二月には親房の歸郷に成つたかは察するに十分である。正平九年賀名生に歿す。

奏王破陣樂

【参考】神皇正統記研究 平泉堂(日本文學講義)とを表はす樂の意である。【異稱】神功破陣樂・齊正破陣樂・大定破陣樂・大定太平樂・天策上將樂・七德舞【性質】唐樂・新樂・或は古樂・中曲。太食調(或は乞食調)曲に屬する。七帖(拍子各二十)、舞があり、四人で舞ふ。舞者は金色の鎧をつけ、金甲をかぶり、太刀を帯び、胡鈴を下げ、魚袋・魚形・弓袋を背負ひ、鉾を持つて舞ふ。敵陣を破るに象り、非常に勇壯な

中世の古寫本は幾つか世に聞えてゐるが、多くはその所在を失つてしまつた。群書類從に收められてゐるのは、常陸の六藏寺本であるが、その大永八年の寫本は今はない。應永四年の謄本のある書院本は最も世に喧傳してゐるが、これも今同院にはなく、池田龜氏の手に移した書院舊藏本が即ちそれである。すなはち、それは應永の寫本ではなく寛永の轉寫本である。併し白山本は幸に今に傳はつてゐる。これは加賀の白山比咩神社に傳はつた本で、享祿四年上道氏榮の謄本である。享祿本とも呼ばれてゐるが、日置謙氏の説によれば、これは所藏者の謄本であつて書寫の奥書ではなく、原筆者は永享十年初夏と記すのみで名を明記しないが、紙質・筆蹟共に「白山記」に等しい所から、「白山記」の筆者完成の手に成つたと推定し得るといふ。京都の諸書本に書寫年代を明記しないが、恐らくはこの白山本と相前後するものであり、頗る珍重するに足る。日光の天海藏本も戰國末の書寫にかゝる。近世に入つては慶安二年に六册にして開板せられた。又群書類從にも收められて世に流布するに至つた。明治以後の板行は随分多數に上つてゐる。【内容】神代より始めて、後村上・天皇に至るまで、神々の御徳、天皇御代々の御事蹟を略述し、以て建國の由來を明かにし、國體の隆盛を示したものであつて、君の御爲めには政道の御心得となり、臣下のために日本國民としての自覺を促したものである。こゝに



及川虎寛著書名大體思想(註)とを上演した。これは東京の生んだ最初の書生芝居であり、男女合同劇であると共に、政治的目的意識なき純粹演劇を志し、その改革を標榜して立つた唯一の新團體として記憶せらるべきである。その宣言に於て、

新派劇

【新派劇】(註)「演劇」明治中期に興つた一種の俗劇。在來の歌舞伎劇を批判して「異議」といふに對し、新派劇或は新派といふ。【異議】その起原する所よりして、最初は壯士芝居・書生芝居とも呼ばれた。【治本】(發定期)元來、何等藝術革新を敢て試みられなものでなく、新時代の演劇といふ理想の下に、歌舞伎劇の病弊を衝かして行はれたものでない。即ち自由民権の叫び喧はれた言論を僅に舞臺上に吐露すべく演劇の形式を借りた事が、新派劇を生む因由となつた。當時壯士の一人たる角藤定憲(別項)が自作の政治小説を脚色した「家譜の書生」を掲げ、同志を糾合して「大日本藝術演劇會」なる壯士芝居の團體を組織して、明治二十一年十二月大阪西區船場町の新町座で開演したのが濫觴である。いはばその風靡りな趣向が世人の耳目を驚かして大入を齎した盛況を見て、同じく壯士であり自由童子といふ演説使ひであつた川上哲三郎別項は、「書生仁輪加」と名乗る大阪俄の一座を率ひて政論鼓吹に努めたが、遂に藤澤凌次郎等と結んで書生芝居なるものを興し、明治二十四年二月、泉州堺の卯の目座で「新國美談」(板垣君遺囑實記)を以て旗揚げした上、間もなく東京へ進出して來て引續く興行に成功することが出来た。そしてこれに刺戟されて立つたのが伊井野輝(別項)の主盟した「男女合同改良演劇」で、明治二十四年十一月淺草演劇會(別項)に據つて水野好美、女優千歲末城等と依田學海作「政黨美談」女優

は中世の特色は現れずして、寧ろ中世的偏執を脱却したる純日本精神の發露を見る。末世末法思想の否定がそれである。實利實益主義の排撃がそれである。印度や支那の傳説を棄てて日本獨特の神話に據つたこと、佛敎・佛敎の見方に據らずして純日本的立場から歴史を見直したること、これ等を以て本書の特色とする。【監修】本書の史観は、近世の史學界思想界を風靡した。近世の史學は、本書の見方を正當とし、これを出発點として發展した。

導つてお染が尋ねて来るので、おみつは嫉妬する。久松の肩を揉む久松と交すおみつは...



(本正) 文藝歌取新

「構想」お染久松の悲劇を骨子としつつ、ここに重寶をめぐり悪人の奸計を繰り入れ、お染の苦悶を更に前面に押し出して来る...

「審美綱領」お染久松の悲劇を骨子としつつ、ここに重寶をめぐり悪人の奸計を繰り入れ、お染の苦悶を更に前面に押し出して来る...

審美綱領 著者 大村西園 著書 二冊 著者 大村西園 著書 二冊 著者 大村西園 著書 二冊...

新美辭學

【著者】鳥村抱月【刊行】明治三十五年五月早稲田大學出版部【内容】...

解説し、修辭論に於ては、泰西の修辭學の原理を基礎として、これに東西文學の類例を當て嵌め、美辭に於ては、その當時に於ける西洋の最新美辭マシーナルの修辭學の基礎に立つて、快苦と美態との關係を説き、ひいて美の哲學的方面と科學的方面との統一を企て、かくしてこの美辭論に依つて修辭論に美學的基準を與へようとしたものである。

「史的地位」この論議は彼が「誤解せられたる半歌主義」の中で言つてゐるやうに、實行が認められた。併しその反對にこの反對と非難は大きかつた。世間は内容も見ずに半歌主義を好色主義と見做してゐたのである。併し正しく讀んだものは、数多き自然主義の論客の中に、彼の思想の一端地を抜くものがあることを知つた。ただ彼の思想を直ちにあと附けるべき作品が以前になつたので、その效力を減殺したが、更に第二論「新自然主義」小説「批評」(放浪(各道)の刊行に依つて彼の眞價が明るくなつて行つた。

付くのである。象徴詩人等は近代の神祕主義者であると言つてよい。神人合一の境界、若しくは人間は半神半獣の存在である。その物質的的方面を主として開放したる文藝を自然主義であるとするの對して、その殘された神祕主義の方面を開放するところの近代神祕主義文藝は成立するものと考へるのである。モリス・マアテルリンクの戯曲の如きはこの派の代表作品であり、ボルトク・ロオデルの戯曲の如きもこれに屬する。マアテルリンクは彼の目醒め、靈の交感、それを我々の日常生活の間に認め、それを暗示することをも使命とする。彼の處女作「マレヌ」からして、死を取扱つた五篇の一幕物、二人者「群首」「七王女」(内部「タンタジールの死」、更に彼の傑作といはる「ペレアスとメリザンド」及び「アラディオとパロミド」、そして「アグラペムとセリセット」は、まさしく彼の代表作品である。彼が「貧者の實」(観智と運命)などの論文で説く「心魂」とは我々の頭腦の最も美しい願望の相「観智」とは我々のその美しい靈の動き「心魂」といふ事を彼は更に進んで、人間の死後に於ける靈魂の存在状態の説明、その喚召をも研究し、説明してゐる。これは近代のスピリタズム(Spiritism)の學說とも一致するものであつて、この方面の研究はアメリカに於ても盛んになされてゐる。

【著者】岩野泡鳴【刊行】明治三十九年六月佐久良書房。泡鳴全集第十五巻所収。【内容】全部で二十二章、初めメ、テレルリンクの神祕説、エママンの自然論から説き起して、自然即心靈、善惡肯定の論、悲劇の内憂、戀愛論と説き進んで、最後に、利那的文藝觀を樹立し、新美辭論を述べ、シヨウベンハウエルの音樂論を説き終る約二百枚の大論文である。而してその最も旨は「二枚の論文」は「存在は盲目で、意識的に云へば、無目的である」と云ふ點で、彼の利那主義世界觀の根柢は鼓にあつたのである。更に「便等は實に悲劇の内なる靈である」と叫び、悲劇を脱したと思へば、すぐ又別の悲劇が来るのだから、いつそこれを食つてこれに堪へ、これを生命とすべきである、所謂自食自愛の人間觀、生の哲學に到達すべきを暗示してゐる。半歌主義の所以である。又彼の文藝觀を要約すれば、實寫主義・天才主義・實行主義・利那主義・無解決主義であつて、功利主義的文藝、又は享樂主義的文藝に相反する立場で、文藝とは天才が天才を食ふ所の活動であるとする。従つて文藝の感染力も亦無目的である。最後に彼は「僕は精進するが、當來の文藝は解脱と解決のない表象悲劇で、それが観想的で、又同時に律語の意に合つてゐるものでなければならぬ」と結んだ。【批評】部分々々いかにも天才的な豐富な名論を見る。そして一方にその努力、著者自身の知識の深さに敬服する。併しまだ多分に神祕的であり、論調も熱情に走つて晦澁さを免れず、論理の矛盾誤謬も多い。併し當時の難敵なジャアナリスチックな自然主義論者に比すれば、彼の所見の堅實性、彼の思想の豊富深刻な面に及ぶことはない。殊に目的意識や寓意を以て文藝の本旨と考へる劣等な文藝家を敢然と罵倒した所は痛快である。

新百家説林... 大田原博 吉川弘文館編... 明治四十年より四十一年に至る...

神佛習合... 本地垂迹... 新武進傳來記... 浮世草子... 六部(作者)不詳...

新舞踊... 明治以前の舞臺藝術としての舞踊... 近代舞踊としての舞踊を興さうとした新舞踊である...

新舞踊... 明治以前の舞臺藝術としての舞踊を興さうとした新舞踊である... 近代舞踊としての舞踊を興さうとした新舞踊である...

つぎに『俄仙人』『金毛鼠』『休羅僧』『お夏狂』『山山拾得』...

ウズ』と同意義であった。西曆一八二七年、英人モリソンは廣東に於て英文新聞「カントン・レヂスター」...

るに至るのであるが、現代の如き公衆の感情冷靜にして各自の判断によつて行動せんとする時代に於ては、意見よりも報道を主とする新聞紙が発生するのである...

は、皆これに屬する。新聞新聞に比すれば讀者の範圍も廣く、言ふに足らないが、讀者の結合は非常に強固である...

寄せたるもの、安政以後は海外知識に關するものが多數發行され、その他大體地獄に關するものは、時代の別なく發行された...

發行した。『官報』(中外新聞)十三卷、官報合設發行、十六卷、官報香港新聞(八卷)、官報中外雜誌(七卷)はそれである...

資本主義化する新聞の中にも、時々社会主義的傾向を露骨に表現して青年学生間に好評を博しつつあるものもあるが、これはむしろ販賣政策のためであつて、無産階級擁護の意志を有するものではない。

【参考】日本新聞発達史小野秀成「開闢新聞發
生史」小野秀成「明治文化全集」第1巻
明治新聞雜誌文庫所載目録（東京帝國大學
學部）
○綜合ジャーナルズ講座（内外社）
K. Bucher: Germanische Aufstufung für
Zeitungskunde. | K. Brunsbach: Mo-
derne Zeitungskunde. | F. Dawid: Die
Zeitungen. | O. Groth: Die Zeitung.
Bd. | C. yost: The Principle of
Journalism. | Remarks on Treats
in Chinese, with a list of books written
and printed by the members of the
Ultra Ganges Mission (Chinese Re-
corder Vol XVI No. 8. 897) | Hemi
Condit La Paris enquiem en Chine
(Revue de l'Extrême Orient Vol I,
p. 222)

新聞小説の意義、新聞紙の讀者は社會の全階層に亘る關係から、文學及び小説に興味を持つ讀者層も極めて多い。その意味から、新聞紙に小説を掲載することは、商品としての新聞企業として、當然思ひつかれる計畫である。世界各國では、フランスを第一とし、ドイツ(別項)の形式も或る點のために發展したといはれる。英米伊も、稀れに新聞に小説を掲載する。デュニル、デフォの「ロビンソン・クルソウ」や、ビイチヤア、ストオ夫人の

アンクルトムス・ケンピン」は、みな新聞小説として掲載されたといふ類、今日では、支那と日本が、新聞に最も多く小説を掲げる國土である。日本の新聞小説は「讀物」とは、新聞紙の販賣高の二十パーセントは、受ける讀物物の魅力によるといふ。小説を讀みたくも、單行本や雑誌を買ふ餘裕がなく、もしくは興味がないといふ新聞讀者に對して、新聞小説は、前者の要求を満たすと共に、小説を讀む興味を刺激する。又新聞小説は、多くの讀者に、新聞を愛読する機會を與へ、藝術や文學に興味を持たせる。又新聞は、その日その日の出来事を掲載するだけ、ゆとりがなく、讀者は徒らに「いら／＼した気分」で読まされる。小説のやうに、現實に關係ない人情や人事のいきまづを並べて置く、記事によつて「いら／＼させる」気分を誘ふかせるといふのが、消極的な新聞小説存在の理由でもある。

それが日本では、出版企業の關係から、長篇小説を書きおろしつゝ出版しない。長篇小説は、多く新聞によらねばならない。また新聞紙は、讀者層が廣いため、新聞小説も、新聞紙の興味が安易に安んずる必要があり、どうしても通俗小説を導くことになる。新聞の「讀物」が、一般に通俗小説と解されるのはそのためである。新聞紙は一日限りの生命であるために、作家は一日毎に無理にもやまを待つて明日への好奇心をひくのが法則なので、高級な小説は割合に出ない。しかし、それは全然例外ではなく、一二の新聞では、文壇の最高峰である作家を絶えず掲げてゐた。また掲げてゐる。次に新聞小説は、長篇ばかりでなく、中篇、短篇、コントをも掲げる。明治以後昭和に亘る大小作家で、新聞に小説を掲げ

ない作家は、殆ど無いといつてよい。
【日本の新聞小説】明治九年頃、毎日の報章を輸入して發行するのを誇りとしてゐた「平假名輸入新聞」が、いつも急いで輪の版木を彫るので、不手際になることを避けるために、記者前田夏繁著者に「金之助の話」なる小説を書かせ、挿畫に二三四回の版下の餘裕を作らせた。これが新聞(小説)を載せ、挿畫を載せた。これが新聞(小説)を載せ、挿畫を載せた。これが新聞(小説)を載せ、挿畫を載せた。

【日本の新聞小説】明治九年頃、毎日の報章を輸入して發行するのを誇りとしてゐた「平假名輸入新聞」が、いつも急いで輪の版木を彫るので、不手際になることを避けるために、記者前田夏繁著者に「金之助の話」なる小説を書かせ、挿畫に二三四回の版下の餘裕を作らせた。これが新聞(小説)を載せ、挿畫を載せた。これが新聞(小説)を載せ、挿畫を載せた。これが新聞(小説)を載せ、挿畫を載せた。

【日本の新聞小説】明治九年頃、毎日の報章を輸入して發行するのを誇りとしてゐた「平假名輸入新聞」が、いつも急いで輪の版木を彫るので、不手際になることを避けるために、記者前田夏繁著者に「金之助の話」なる小説を書かせ、挿畫に二三四回の版下の餘裕を作らせた。これが新聞(小説)を載せ、挿畫を載せた。これが新聞(小説)を載せ、挿畫を載せた。これが新聞(小説)を載せ、挿畫を載せた。

しくは保護階級によつて、這般的文化的價値物が發生し進歩する。神話的思考から生れた物語を一括して人文神話と呼ぶ。自然神話(別項)に對立する神話學上の呼ばれである。【解説】人文神話は、人類生活に於ける文化形相の發生進歩を靈格的意志活動に歸せんとする解釋態度の説話的顯現である。その説明若しくは叙述の對象は、自然ではなくて、人文である。従つて自然神話に於て、自然物(若しくは現象)の人格化であるのが主たる地位を占むるに對し、人文神話に於て、主役を演ずるものは、(一)自然神から變存した人文神、(二)發生の本源から文化的價値物を發せしむる人文神、(三)文化過程の促進に功績の顯著な人間が昇華せられて神格に進化したもの、(四)半神半人の境にある人文的英雄等であり、物語の舞臺も多くの場合人間界である。【種類】人文神話は、文化形相の殆ど全部を説明若しくは叙述の對象とするばかりでなく、文化形相そのものが時代と共に複雑化するが故に、その種類が甚だ多い。その主たるものを舉ぐれば、(一)人類創成神話。文化の産出者たる人類がいかにして發生したかを説くもので、(イ)或る事物から進展したとなすもの、(ロ)神が或る事物を素材として創造したとなすもの、(ニ)或る種族から化生したとなすもの、(三)或る處(國)へは天から出現したとなすもの等がある。(二)人類の死の起原を説く神話。(イ)或る人間が禁制を破棄したため、(ロ)好奇心のため、(ハ)貪慾のため、(ニ)動物が神の使命を誤り傳へた爲めなど、その形式が頗る多様である。(三)火の起原を説明する神話。多くは或る動物又は文化的英雄が、他から盗み來つて人類に傳へたと説く。

プロメテウスの(Prometheus)が天界に上り、太陽の火を盗んで人類に與へたとし、由來神話の如き、少年が多くの動物と共に山に登り、そこに火を盗んでゐる様子を捉へて、皆さうである。かくて神話學上、火の盗り、冒険等に關する神話。(五)牧羊・農業・商業・航海等の發生進歩を説く神話。就中、自然民族・文化民族を通じて、生活經濟としては農業に依する事が最も大であるため、食用植物・雑穀の起原、超自然存在からの耕作法・灌漑法の示教、農耕を掌る神及び農作物に内蔵する精靈の行動等を説く神話が著しく多数である。これを一括して農業神話と呼ぶ。(六)家族制度・社會制度・法律・道徳律、種々の風習、呪禁等の成立由來や、それ等の破棄の結果を説く神話。その中でも最も多いのは婚姻神話、風習神話及び呪禁神話である。(七)死後の生活に關する神話。(八)生活感に關する神話。食物・財寶、その他生活上の欲望を充足させる無量の無限に産出する如意寶や、不老不死の仙境に關する神話。就中如意寶説話は、物語に現る、如意寶の種類及び性質が、文化の進展による人類の欲望の複雑化及び價値觀念の變遷と全く符合してゐる點で、最も注目すべきものである。(九)祭祀神話。種々の呪術的及び宗教的實修儀禮の起原や成立を説く神話である。(十)祭儀と神話との關係は相互的である。神話の内容が祭儀として實行せられる場合があり、反対に祭儀が先行して、その説明として神話が生れる場合もあるが、普通の現象としては、祭儀が神話に先行するものである。(一〇)家系祖先・氏族・部族の名等

【新平家物語】(1)「新平家物語」の神話(2)「新平家物語」の神話(3)「新平家物語」の神話(4)「新平家物語」の神話(5)「新平家物語」の神話(6)「新平家物語」の神話(7)「新平家物語」の神話(8)「新平家物語」の神話(9)「新平家物語」の神話(10)「新平家物語」の神話(11)「新平家物語」の神話(12)「新平家物語」の神話(13)「新平家物語」の神話(14)「新平家物語」の神話(15)「新平家物語」の神話(16)「新平家物語」の神話(17)「新平家物語」の神話(18)「新平家物語」の神話(19)「新平家物語」の神話(20)「新平家物語」の神話(21)「新平家物語」の神話(22)「新平家物語」の神話(23)「新平家物語」の神話(24)「新平家物語」の神話(25)「新平家物語」の神話(26)「新平家物語」の神話(27)「新平家物語」の神話(28)「新平家物語」の神話(29)「新平家物語」の神話(30)「新平家物語」の神話(31)「新平家物語」の神話(32)「新平家物語」の神話(33)「新平家物語」の神話(34)「新平家物語」の神話(35)「新平家物語」の神話(36)「新平家物語」の神話(37)「新平家物語」の神話(38)「新平家物語」の神話(39)「新平家物語」の神話(40)「新平家物語」の神話(41)「新平家物語」の神話(42)「新平家物語」の神話(43)「新平家物語」の神話(44)「新平家物語」の神話(45)「新平家物語」の神話(46)「新平家物語」の神話(47)「新平家物語」の神話(48)「新平家物語」の神話(49)「新平家物語」の神話(50)「新平家物語」の神話(51)「新平家物語」の神話(52)「新平家物語」の神話(53)「新平家物語」の神話(54)「新平家物語」の神話(55)「新平家物語」の神話(56)「新平家物語」の神話(57)「新平家物語」の神話(58)「新平家物語」の神話(59)「新平家物語」の神話(60)「新平家物語」の神話(61)「新平家物語」の神話(62)「新平家物語」の神話(63)「新平家物語」の神話(64)「新平家物語」の神話(65)「新平家物語」の神話(66)「新平家物語」の神話(67)「新平家物語」の神話(68)「新平家物語」の神話(69)「新平家物語」の神話(70)「新平家物語」の神話(71)「新平家物語」の神話(72)「新平家物語」の神話(73)「新平家物語」の神話(74)「新平家物語」の神話(75)「新平家物語」の神話(76)「新平家物語」の神話(77)「新平家物語」の神話(78)「新平家物語」の神話(79)「新平家物語」の神話(80)「新平家物語」の神話(81)「新平家物語」の神話(82)「新平家物語」の神話(83)「新平家物語」の神話(84)「新平家物語」の神話(85)「新平家物語」の神話(86)「新平家物語」の神話(87)「新平家物語」の神話(88)「新平家物語」の神話(89)「新平家物語」の神話(90)「新平家物語」の神話(91)「新平家物語」の神話(92)「新平家物語」の神話(93)「新平家物語」の神話(94)「新平家物語」の神話(95)「新平家物語」の神話(96)「新平家物語」の神話(97)「新平家物語」の神話(98)「新平家物語」の神話(99)「新平家物語」の神話(100)「新平家物語」の神話(101)「新平家物語」の神話(102)「新平家物語」の神話(103)「新平家物語」の神話(104)「新平家物語」の神話(105)「新平家物語」の神話(106)「新平家物語」の神話(107)「新平家物語」の神話(108)「新平家物語」の神話(109)「新平家物語」の神話(110)「新平家物語」の神話(111)「新平家物語」の神話(112)「新平家物語」の神話(113)「新平家物語」の神話(114)「新平家物語」の神話(115)「新平家物語」の神話(116)「新平家物語」の神話(117)「新平家物語」の神話(118)「新平家物語」の神話(119)「新平家物語」の神話(120)「新平家物語」の神話(121)「新平家物語」の神話(122)「新平家物語」の神話(123)「新平家物語」の神話(124)「新平家物語」の神話(125)「新平家物語」の神話(126)「新平家物語」の神話(127)「新平家物語」の神話(128)「新平家物語」の神話(129)「新平家物語」の神話(130)「新平家物語」の神話(131)「新平家物語」の神話(132)「新平家物語」の神話(133)「新平家物語」の神話(134)「新平家物語」の神話(135)「新平家物語」の神話(136)「新平家物語」の神話(137)「新平家物語」の神話(138)「新平家物語」の神話(139)「新平家物語」の神話(140)「新平家物語」の神話(141)「新平家物語」の神話(142)「新平家物語」の神話(143)「新平家物語」の神話(144)「新平家物語」の神話(145)「新平家物語」の神話(146)「新平家物語」の神話(147)「新平家物語」の神話(148)「新平家物語」の神話(149)「新平家物語」の神話(150)「新平家物語」の神話(151)「新平家物語」の神話(152)「新平家物語」の神話(153)「新平家物語」の神話(154)「新平家物語」の神話(155)「新平家物語」の神話(156)「新平家物語」の神話(157)「新平家物語」の神話(158)「新平家物語」の神話(159)「新平家物語」の神話(160)「新平家物語」の神話(161)「新平家物語」の神話(162)「新平家物語」の神話(163)「新平家物語」の神話(164)「新平家物語」の神話(165)「新平家物語」の神話(166)「新平家物語」の神話(167)「新平家物語」の神話(168)「新平家物語」の神話(169)「新平家物語」の神話(170)「新平家物語」の神話(171)「新平家物語」の神話(172)「新平家物語」の神話(173)「新平家物語」の神話(174)「新平家物語」の神話(175)「新平家物語」の神話(176)「新平家物語」の神話(177)「新平家物語」の神話(178)「新平家物語」の神話(179)「新平家物語」の神話(180)「新平家物語」の神話(181)「新平家物語」の神話(182)「新平家物語」の神話(183)「新平家物語」の神話(184)「新平家物語」の神話(185)「新平家物語」の神話(186)「新平家物語」の神話(187)「新平家物語」の神話(188)「新平家物語」の神話(189)「新平家物語」の神話(190)「新平家物語」の神話(191)「新平家物語」の神話(192)「新平家物語」の神話(193)「新平家物語」の神話(194)「新平家物語」の神話(195)「新平家物語」の神話(196)「新平家物語」の神話(197)「新平家物語」の神話(198)「新平家物語」の神話(199)「新平家物語」の神話(200)「新平家物語」の神話(201)「新平家物語」の神話(202)「新平家物語」の神話(203)「新平家物語」の神話(204)「新平家物語」の神話(205)「新平家物語」の神話(206)「新平家物語」の神話(207)「新平家物語」の神話(208)「新平家物語」の神話(209)「新平家物語」の神話(210)「新平家物語」の神話(211)「新平家物語」の神話(212)「新平家物語」の神話(213)「新平家物語」の神話(214)「新平家物語」の神話(215)「新平家物語」の神話(216)「新平家物語」の神話(217)「新平家物語」の神話(218)「新平家物語」の神話(219)「新平家物語」の神話(220)「新平家物語」の神話(221)「新平家物語」の神話(222)「新平家物語」の神話(223)「新平家物語」の神話(224)「新平家物語」の神話(225)「新平家物語」の神話(226)「新平家物語」の神話(227)「新平家物語」の神話(228)「新平家物語」の神話(229)「新平家物語」の神話(230)「新平家物語」の神話(231)「新平家物語」の神話(232)「新平家物語」の神話(233)「新平家物語」の神話(234)「新平家物語」の神話(235)「新平家物語」の神話(236)「新平家物語」の神話(237)「新平家物語」の神話(238)「新平家物語」の神話(239)「新平家物語」の神話(240)「新平家物語」の神話(241)「新平家物語」の神話(242)「新平家物語」の神話(243)「新平家物語」の神話(244)「新平家物語」の神話(245)「新平家物語」の神話(246)「新平家物語」の神話(247)「新平家物語」の神話(248)「新平家物語」の神話(249)「新平家物語」の神話(250)「新平家物語」の神話(251)「新平家物語」の神話(252)「新平家物語」の神話(253)「新平家物語」の神話(254)「新平家物語」の神話(255)「新平家物語」の神話(256)「新平家物語」の神話(257)「新平家物語」の神話(258)「新平家物語」の神話(259)「新平家物語」の神話(260)「新平家物語」の神話(261)「新平家物語」の神話(262)「新平家物語」の神話(263)「新平家物語」の神話(264)「新平家物語」の神話(265)「新平家物語」の神話(266)「新平家物語」の神話(267)「新平家物語」の神話(268)「新平家物語」の神話(269)「新平家物語」の神話(270)「新平家物語」の神話(271)「新平家物語」の神話(272)「新平家物語」の神話(273)「新平家物語」の神話(274)「新平家物語」の神話(275)「新平家物語」の神話(276)「新平家物語」の神話(277)「新平家物語」の神話(278)「新平家物語」の神話(279)「新平家物語」の神話(280)「新平家物語」の神話(281)「新平家物語」の神話(282)「新平家物語」の神話(283)「新平家物語」の神話(284)「新平家物語」の神話(285)「新平家物語」の神話(286)「新平家物語」の神話(287)「新平家物語」の神話(288)「新平家物語」の神話(289)「新平家物語」の神話(290)「新平家物語」の神話(291)「新平家物語」の神話(292)「新平家物語」の神話(293)「新平家物語」の神話(294)「新平家物語」の神話(295)「新平家物語」の神話(296)「新平家物語」の神話(297)「新平家物語」の神話(298)「新平家物語」の神話(299)「新平家物語」の神話(300)「新平家物語」の神話(301)「新平家物語」の神話(302)「新平家物語」の神話(303)「新平家物語」の神話(304)「新平家物語」の神話(305)「新平家物語」の神話(306)「新平家物語」の神話(307)「新平家物語」の神話(308)「新平家物語」の神話(309)「新平家物語」の神話(310)「新平家物語」の神話(311)「新平家物語」の神話(312)「新平家物語」の神話(313)「新平家物語」の神話(314)「新平家物語」の神話(315)「新平家物語」の神話(316)「新平家物語」の神話(317)「新平家物語」の神話(318)「新平家物語」の神話(319)「新平家物語」の神話(320)「新平家物語」の神話(321)「新平家物語」の神話(322)「新平家物語」の神話(323)「新平家物語」の神話(324)「新平家物語」の神話(325)「新平家物語」の神話(326)「新平家物語」の神話(327)「新平家物語」の神話(328)「新平家物語」の神話(329)「新平家物語」の神話(330)「新平家物語」の神話(331)「新平家物語」の神話(332)「新平家物語」の神話(333)「新平家物語」の神話(334)「新平家物語」の神話(335)「新平家物語」の神話(336)「新平家物語」の神話(337)「新平家物語」の神話(338)「新平家物語」の神話(339)「新平家物語」の神話(340)「新平家物語」の神話(341)「新平家物語」の神話(342)「新平家物語」の神話(343)「新平家物語」の神話(344)「新平家物語」の神話(345)「新平家物語」の神話(346)「新平家物語」の神話(347)「新平家物語」の神話(348)「新平家物語」の神話(349)「新平家物語」の神話(350)「新平家物語」の神話(351)「新平家物語」の神話(352)「新平家物語」の神話(353)「新平家物語」の神話(354)「新平家物語」の神話(355)「新平家物語」の神話(356)「新平家物語」の神話(357)「新平家物語」の神話(358)「新平家物語」の神話(359)「新平家物語」の神話(360)「新平家物語」の神話(361)「新平家物語」の神話(362)「新平家物語」の神話(363)「新平家物語」の神話(364)「新平家物語」の神話(365)「新平家物語」の神話(366)「新平家物語」の神話(367)「新平家物語」の神話(368)「新平家物語」の神話(369)「新平家物語」の神話(370)「新平家物語」の神話(371)「新平家物語」の神話(372)「新平家物語」の神話(373)「新平家物語」の神話(374)「新平家物語」の神話(375)「新平家物語」の神話(376)「新平家物語」の神話(377)「新平家物語」の神話(378)「新平家物語」の神話(379)「新平家物語」の神話(380)「新平家物語」の神話(381)「新平家物語」の神話(382)「新平家物語」の神話(383)「新平家物語」の神話(384)「新平家物語」の神話(385)「新平家物語」の神話(386)「新平家物語」の神話(387)「新平家物語」の神話(388)「新平家物語」の神話(389)「新平家物語」の神話(390)「新平家物語」の神話(391)「新平家物語」の神話(392)「新平家物語」の神話(393)「新平家物語」の神話(394)「新平家物語」の神話(395)「新平家物語」の神話(396)「新平家物語」の神話(397)「新平家物語」の神話(398)「新平家物語」の神話(399)「新平家物語」の神話(400)「新平家物語」の神話(401)「新平家物語」の神話(402)「新平家物語」の神話(403)「新平家物語」の神話(404)「新平家物語」の神話(405)「新平家物語」の神話(406)「新平家物語」の神話(407)「新平家物語」の神話(408)「新平家物語」の神話(409)「新平家物語」の神話(410)「新平家物語」の神話(411)「新平家物語」の神話(412)「新平家物語」の神話(413)「新平家物語」の神話(414)「新平家物語」の神話(415)「新平家物語」の神話(416)「新平家物語」の神話(417)「新平家物語」の神話(418)「新平家物語」の神話(419)「新平家物語」の神話(420)「新平家物語」の神話(421)「新平家物語」の神話(422)「新平家物語」の神話(423)「新平家物語」の神話(424)「新平家物語」の神話(425)「新平家物語」の神話(426)「新平家物語」の神話(427)「新平家物語」の神話(428)「新平家物語」の神話(429)「新平家物語」の神話(430)「新平家物語」の神話(431)「新平家物語」の神話(432)「新平家物語」の神話(433)「新平家物語」の神話(434)「新平家物語」の神話(435)「新平家物語」の神話(436)「新平家物語」の神話(437)「新平家物語」の神話(438)「新平家物語」の神話(439)「新平家物語」の神話(440)「新平家物語」の神話(441)「新平家物語」の神話(442)「新平家物語」の神話(443)「新平家物語」の神話(444)「新平家物語」の神話(445)「新平家物語」の神話(446)「新平家物語」の神話(447)「新平家物語」の神話(448)「新平家物語」の神話(449)「新平家物語」の神話(450)「新平家物語」の神話(451)「新平家物語」の神話(452)「新平家物語」の神話(453)「新平家物語」の神話(454)「新平家物語」の神話(455)「新平家物語」の神話(456)「新平家物語」の神話(457)「新平家物語」の神話(458)「新平家物語」の神話(459)「新平家物語」の神話(460)「新平家物語」の神話(461)「新平家物語」の神話(462)「新平家物語」の神話(463)「新平家物語」の神話(464)「新平家物語」の神話(465)「新平家物語」の神話(466)「新平家物語」の神話(467)「新平家物語」の神話(468)「新平家物語」の神話(469)「新平家物語」の神話(470)「新平家物語」の神話(471)「新平家物語」の神話(472)「新平家物語」の神話(473)「新平家物語」の神話(474)「新平家物語」の神話(475)「新平家物語」の神話(476)「新平家物語」の神話(477)「新平家物語」の神話(478)「新平家物語」の神話(479)「新平家物語」の神話(480)「新平家物語」の神話(481)「新平家物語」の神話(482)「新平家物語」の神話(483)「新平家物語」の神話(484)「新平家物語」の神話(485)「新平家物語」の神話(486)「新平家物語」の神話(487)「新平家物語」の神話(488)「新平家物語」の神話(489)「新平家物語」の神話(490)「新平家物語」の神話(491)「新平家物語」の神話(492)「新平家物語」の神話(493)「新平家物語」の神話(494)「新平家物語」の神話(495)「新平家物語」の神話(496)「新平家物語」の神話(497)「新平家物語」の神話(498)「新平家物語」の神話(499)「新平家物語」の神話(500)「新平家物語」の神話(501)「新平家物語」の神話(502)「新平家物語」の神話(503)「新平家物語」の神話(504)「新平家物語」の神話(505)「新平家物語」の神話(506)「新平家物語」の神話(507)「新平家物語」の神話(508)「新平家物語」の神話(509)「新平家物語」の神話(510)「新平家物語」の神話(511)「新平家物語」の神話(512)「新平家物語」の神話(513)「新平家物語」の神話(514)「新平家物語」の神話(515)「新平家物語」の神話(516)「新平家物語」の神話(517)「新平家物語」の神話(518)「新平家物語」の神話(519)「新平家物語」の神話(520)「新平家物語」の神話(521)「新平家物語」の神話(522)「新平家物語」の神話(523)「新平家物語」の神話(524)「新平家物語」の神話(525)「新平家物語」の神話(526)「新平家物語」の神話(527)「新平家物語」の神話(528)「新平家物語」の神話(529)「新平家物語」の神話(530)「新平家物語」の神話(531)「新平家物語」の神話(532)「新平家物語」の神話(533)「新平家物語」の神話(534)「新平家物語」の神話(535)「新平家物語」の神話(536)「新平家物語」の神話(537)「新平家物語」の神話(538)「新平家物語」の神話(539)「新平家物語」の神話(540)「新平家物語」の神話(541)「新平家物語」の神話(542)「新平家物語」の神話(543)「新平家物語」の神話(544)「新平家物語」の神話(545)「新平家物語」の神話(546)「新平家物語」の神話(547)「新平家物語」の神話(548)「新平家物語」の神話(549)「新平家物語」の神話(550)「新平家物語」の神話(551)「新平家物語」の神話(552)「新平家物語」の神話(553)「新平家物語」の神話(554)「新平家物語」の神話(555)「新平家物語」の神話(556)「新平家物語」の神話(557)「新平家物語」の神話(558)「新平家物語」の神話(559)「新平家物語」の神話(560)「新平家物語」の神話(561)「新平家物語」の神話(562)「新平家物語」の神話(563)「新平家物語」の神話(564)「新平家物語」の神話(565)「新平家物語」の神話(566)「新平家物語」の神話(567)「新平家物語」の神話(568)「新平家物語」の神話(569)「新平家物語」の神話(570)「新平家物語」の神話(571)「新平家物語」の神話(572)「新平家物語」の神話(573)「新平家物語」の神話(574)「新平家物語」の神話(575)「新平家物語」の神話(576)「新平家物語」の神話(577)「新平家物語」の神話(578)「新平家物語」の神話(579)「新平家物語」の神話(580)「新平家物語」の神話(581)「新平家物語」の神話(582)「新平家物語」の神話(583)「新平家物語」の神話(584)「新平家物語」の神話(585)「新平家物語」の神話(586)「新平家物語」の神話(587)「新平家物語」の神話(588)「新平家物語」の神話(589)「新平家物語」の神話(590)「新平家物語」の神話(591)「新平家物語」の神話(592)「新平家物語」の神話(593)「新平家物語」の神話(594)「新平家物語」の神話(595)「新平家物語」の神話(596)「新平家物語」の神話(597)「新平家物語」の神話(598)「新平家物語」の神話(599)「新平家物語」の神話(600)「新平家物語」の神話(601)「新平家物語」の神話(602)「新平家物語」の神話(603)「新平家物語」の神話(604)「新平家物語」の神話(605)「新平家物語」の神話(606)「新平家物語」の神話(607)「新平家物語」の神話(608)「新平家物語」の神話(609)「新平家物語」の神話(610)「新平家物語」の神話(611)「新平家物語」の神話(612)「新平家物語」の神話(613)「新平家物語」の神話(614)「新平家物語」の神話(615)「新平家物語」の神話(616)「新平家物語」の神話(617)「新平家物語」の神話(618)「新平家物語」の神話(619)「新平家物語」の神話(620)「新平家物語」の神話(621)「新平家物語」の神話(622)「新平家物語」の神話(623)「新平家物語」の神話(624)「新平家物語」の神話(625)「新平家物語」の神話(626)「新平家物語」の神話(627)「新平家物語」の神話(628)「新平家物語」の神話(629)「新平家物語」の神話(630)「新平家物語」の神話(631)「新平家物語」の神話(632)「新平家物語」の神話(633)「新平家物語」の神話(634)「新平家物語」の神話(635)「新平家物語」の神話(636)「新平家物語」の神話(637)「新平家物語」の神話(638)「新平家物語」の神話(639)「新平家物語」の神話(640)「新平家物語」の神話(641)「新平家物語」の神話(642)「新平家物語」の神話(643)「新平家物語」の神話(644)「新平家物語」の神話(645)「新平家物語」の神話(646)「新平家物語」の神話(647)「新平家物語」の神話(648)「新平家物語」の神話(649)「新平家物語」の神話(650)「新平家物語」の神話(651)「新平家物語」の神話(652)「新平家物語」の神話(653)「新平家物語」の神話(654)「新平家物語」の神話(655)「新平家物語」の神話(656)「新平家物語」の神話(657)「新平家物語」の神話(658)「新平家物語」の神話(659)「新平家物語」の神話(660)「新平家物語」の神話(661)「新平家物語」の神話(662)「新平家物語」の神話(663)「新平家物語」の神話(664)「新平家物語」の神話(665)「新平家物語」の神話(666)「新平家物語」の神話(667)「新平家物語」の神話(668)「新平家物語」の神話(669)「新平家物語」の神話(670)「新平家物語」の神話(671)「新平家物語」の神話(672)「新平家物語」の神話(673)「新平家物語」の神話(674)「新平家物語」の神話(675)「新平家物語」の神話(676)「新平家物語」の神話(677)「新平家物語」の神話(678)「新平家物語」の神話(679)「新平家物語」の神話(680)「新平家物語」の神話(681)「新平家物語」の神話(682)「新平家物語」の神話(683)「新平家物語」の神話(684)「新平家物語」の神話(685)「新平家物語」の神話(686)「新平家物語」の神話(687)「新平家物語」の神話(688)「新平家物語」の神話(689)「新平家物語」の神話(690)「新平家物語」の神話(691)「新平家物語」の神話(692)「新平家物語」の神話(693)「新平家物語」の神話(694)「新平家物語」の神話(695)「新平家物語」の神話(696)「新平家物語」の神話(697)「新平家物語」の神話(698)「新平家物語」の神話(699)「新平家物語」の神話(700)「新平家物語」の神話(701)「新平家物語」の神話(702)

る。しかし東北は酒本に先例もあり、又...

新野問答 野宮定基著 一説に本書は...

新集 宗良親王の御歌とを合せ考へて、(一)北朝の...

新集 宗良親王の御歌とを合せ考へて、(一)北朝の...

新集 宗良親王の御歌とを合せ考へて、(一)北朝の...

る。「我が宿と頼まずながら吉野山花になれ...

新吉原常々草 宗良親王の御歌とを合せ考へて、...

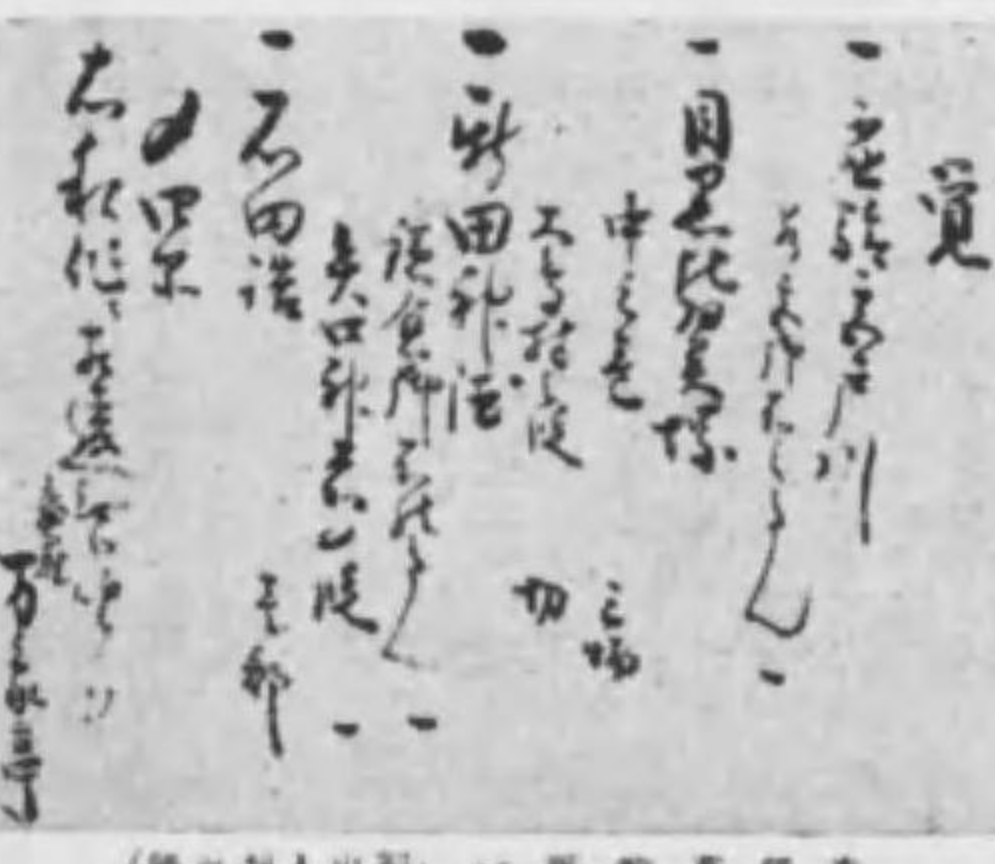
新集 宗良親王の御歌とを合せ考へて、(一)北朝の...

新集 宗良親王の御歌とを合せ考へて、(一)北朝の...



な警察充進にあると見るのが正當であり、從つてこゝに意識的の勞働の出発點がある。即ち判據力の増大、正當的の持續が考へられる。心的轉機として見れば神祕が働くところは、(一)創作活動の初期の段階(創作の心理準備)に、即ち前想に現はれる場合と、(二)比較的後の段階たる表現、外面化のときに現はれる場合とに分けて見る事も可能であらう。多くの藝術家について觀察すれば、神祕は(イ)藝術の種別、(ロ)作家の素質類型、(ハ)彼等の習慣や生活様式、(ニ)周囲の事情等々、これらに應じて發現の仕方は異なる。次に美的陶醉の状態、神祕の狀態を人為的に醸成するため、外部的刺激を取つた主要例を二三挙げると、(一)ハイドン、ワグネルは特別仕立の衣服を纏ふことにより、バルザックは白い寝衣を着て燭燭の灯の下で筆を執ることにより、シムラーは林檎の香をかき、或はアルコールを取り、ボリ、ミニセ、ホフマン等は酒を嗜り、その他の人々も、茶、コーヒー、或は薬品を取つたことが傳へられてゐる。創作の心理、天才の素質【参考】 Hartmann: *Art = Volubel: System d. Art*. Bd. III. 〇判斷力批判カント(大友成徳) (村田)

森羅萬象(二世) 狂歌師・戯作家(本名) 森島甫俊、中野中良と改む。河原は萬象、字は萬臣(別號) 桂林、二世森羅萬象、萬象亭、森羅子、二世天然老人、二世風來山人、源平藤原、築地善好、月池老人。狂歌は竹杖翁と云ふ。依つて竹杖翁とも云ふ。萬象は「はんしやう」と訓むのが普通であるが、彼の著者には「まんざう」と訓んであるものも存する。【生没】 寶曆四年に生れ、文化五年(二四六八)十二月四日歿す。享年五十五【墓所】 芝二本



（森羅山人山陽） 森羅萬象 遺稿

觀上行寺【開歷】 徳川將軍家西丸重隆桂川國調三の子。兄は市岡國調で、父の業を繼ぎ二百俵の祿を受けた開歷で、大槻玄津と共に萬國圖説を譯した人である。桂川家は元來森島姓であるが、祖父の時先祖の節匠たり、風山氏の高直を娶れたため、風山の下を流るゝ意で桂川と名乗つた。市書はかゝる名家に生れ、かゝる兄をもつてゐたので、自ら蘭學の造詣深く、「蘭語箋」「紅毛雜話」「萬國新話」等の著作がある。隨つて平賀源内にも近づいたと見え、その門人となり、文學方面にも向つたのである。森羅萬象以下の諸號は、平賀源内(風來山人)の號を譲られたり、又は繼承したりしたのである。森羅萬象は當然二世であるが、門人森羅萬高に譲るに至り、世間では彼を一世萬象と呼び、萬高を二世と稱してゐる。又一方では十八大通の一人として、藏前の富豪等と交際し、享樂の世界に出入した。彼が書て前田侯に招聘せられたながら、備かに數ヶ月で放仕したのも、江戸の遊民として嚴格な宮仕へは出来なかつたのであらう。或る時京都都賀(泉原)を訪れ、近頃品川に通ひ續け二箱を賣つたと言つた。一箱を千兩の意に解して眞銀も驚いたが、彼が本箱二箱と説明したので聞いて、「一座皆笑つた」と云ふ。彼の生活と性格の一端が知られよう。彼の處女作は、滑稽本では「金のなる木(寶永九年)」、黄表紙では「さうは虎之巻(天明元年)」、酒落本では「眞女意圖(天明元年)」である。【業績】 (酒落本作家として) 初め山東京傳と親交あり、酒落本中に彼を世に紹介したりしてゐたが、「田舎芝居(天明七年)」開歷の序に京傳の酒落本を暗に批評して以來絶交した。要するに酒落本に對する兩者の創作態度の相違から來た衝突である。風來山人歿後、晩年森羅萬象の號を門下七珍萬象(口仁左衛門)に譲り、芝文堂(別號)の門に入つて築地善好と稱した。蓋しその住宅が築地にあつたため、月池老人の號もこれに基く。(以上山陽) (讀本作家として) 泉原野語の實録を除いては、概ね奇談に偏し、支那小説から題材を取つたものが多く、講談家としては群々たるものである。「黄表紙作者として」 酒落を主と見せながらも通を弄ぶことなく、細かい穿ちを見せながら毒舌を弄ることが無い。大體に於て輕妙で活舌を弄ることが無い。従夫以來記一則が最も傑出する作であり、「萬象亭戯作叢書」も亦、傳風の傾向によつて知られてゐる。多く芝文堂の影響を受けてゐるが、「鼻下物語」に據れる、相州小田原相説が、その傾向を代表する作である。【著作】 (酒落本) 眞女意圖(別項) 〇二日際尼

【参考】 天明四年(別項) 〇富ヶ岡大論(百年) 〇編神緯錄(天明六年) 〇田舎芝居(天明七年) 〇蘭語箋(天明七年) 〇金のなる木(寶永九年) 〇富世傳通記(天明二年) (以上山陽) 〇見立假體(天明三年) 〇實本基性(寛政三年) (狂歌) 繪本見立假體(天明三年) 〇繪本青表紙(三冊) (同七年) (讀本) 泉原風及紙五卷(寛政五年) 〇月下清談(五卷) (天明十年) 〇噴火玉の枝(五卷) (天明二年) 〇泉原野語(五卷) (文化六年) 〇千九梅(不詳) (黄表紙) さうは虎之巻(天明元年) (從夫以來記) (同四年) (別項) 〇萬象亭戯作叢(同四年) 〇親ヶ濱成寺(同六年) 〇面背不背(同七年) 〇竹路老實山吹色(寛政六年) 〇相州小田原相説(同七年) 〇中華手本唐人歳(同八年) (以上山陽)

森羅萬象(二世) 狂歌師・戯作家(本名) 樋口仁左衛門(別號) 雨洲子。初め七珍萬象。後、森羅萬象【生没】 寶曆十二年に生れ、天保二年(二四九一)七月二十六日歿す。享年七十。【法名】 釋玄運居士(墓所) 築地西本願寺中野中良(開歷) 江戸の人、家説を福島屋といひ、芝野田久保野にて錦泉堂といふ菓子屋を營んでゐた。萬象の門人となり、七珍萬象又は森羅萬象と號し、寛政九年に師萬象の號を襲いで二世となつた。四方側の判者として最後まで狂歌のために盡したが、學才初代に落ち及ばず、隨つてその功績も華ならなかつた。黄表紙の作、十餘部があつたが、これといふ傑作も聞えず。わづかに目出度い事を願つたので注意される位であつた。生前金座役人某の庶子徳次郎といふ者を養子として福島屋仁左衛門の名を譲り、又三世森羅萬象の號をも繼承せよたが、この人は維新前後に移り、間もなく同所

取したとの事である。【著書】 狂歌武藏風流二冊(狂歌室と合撰文化元年刊) 〇東風流六々歌仙一冊(寛政四年刊) 〇職人妻侍遊歌合二冊(寛政五年刊) 〇俳諧歌調集百首十冊(寛政九冊刊) 〇俳諧歌調集百首四冊(寛政十二冊刊) 〇四方歌垣遊集一冊(同四年刊) 〇俳諧歌有聲百首六冊(寛政年間刊) 〇俳諧歌有聲百首五冊(同七) 〇狂歌萬葉風流集二冊(同上)

新羅陵王(別號) 雅樂曲【名義】 有名なる(羅陵王) (別號) に準じ、これを新形式に改作したるに依つてこの名があるか。【實録】 唐長樂(開長樂ともあるが開長樂の誤か) 【性質】 唐樂、古樂の中曲。沙陀調の曲であるが、今は壹感調曲に屬する。破拍子十六、急拍子十六。今は破は絶えた。舞も古くはあつたと見え、「仁智要録」には、この舞は弘仁の御時、勅あつて左兵衛府に賜ふとあるが、今は絶えてしまつた。起源・傳來、共に未詳。【田邊】

親賢(別號) 眞宗開祖【俗姓】 日野氏(別名) 善信【諱號】 眞賢大師【生没】 承安三年(一〇九三) 〇東風流六々歌仙一冊(寛政四年刊) 〇職人妻侍遊歌合二冊(寛政五年刊) 〇俳諧歌調集百首十冊(寛政九冊刊) 〇俳諧歌調集百首四冊(寛政十二冊刊) 〇四方歌垣遊集一冊(同四年刊) 〇俳諧歌有聲百首六冊(寛政年間刊) 〇俳諧歌有聲百首五冊(同七) 〇狂歌萬葉風流集二冊(同上)

はれたと云ふ。承和元年に、九歳で書院院に入りて前大僧正圓圓に就いて得度し、法名を範賢と云ふたと傳へてゐる。従、比叡山に登りて學問修行したが、二十年に及び、圓圓の深義を研究したが、出處の要道を得得ないのので、六角堂の觀世音菩薩に祈願し、靈夢に依つて感發し、比叡山を下りて黒谷の草庵に法上人源空を訪うて弟子となり、禪空と號し、淨土教に歸依して専修念佛の行者となつた。即ち云はく、「然佛先釋迦、建仁辛酉、真・修行分歸(本願)」。當時京都は源空が没落し社會人心の安定するところとなつた。源空は貴族老翁の如く集まつた。源空は阿彌陀佛の選擇本願に依つて、現世の福土を厭離し、來世の淨土を欲求することを勸説教導し、一世の歸向を受けたのである。然るに佛教の諸宗の學僧等は、源空の首倡するところを非難攻撃した。源空の門下の下が、繁興するに因り、漸く弊害があつて、風俗を壞亂する者もあつた。元久元年十一月、源空は七ヶ條起請文を發して、請弟子を戒諭した。この七ヶ條起請文に連署する者二百餘人。親賢も佛名を以て署名した。翌二年、源空より恩命を受けて、その撰述にかゝる「選擇本願念佛」を著寫し、且つ眞影を附贈せられた。除えて承元元年、興隆寺兼徒の奏により、專修念佛は停止せられ、源空及び一門の請弟子を罪科に處せらるゝこととなつた。乃ち源空は土佐に配流せられ、親賢は越後國府に配流せられた。この時俗體とせられて姓名を藤井善信と云つた。「北國東國の浪浪時期」 承元元年に、三十五歳で、越後に下り、國府に藤居す

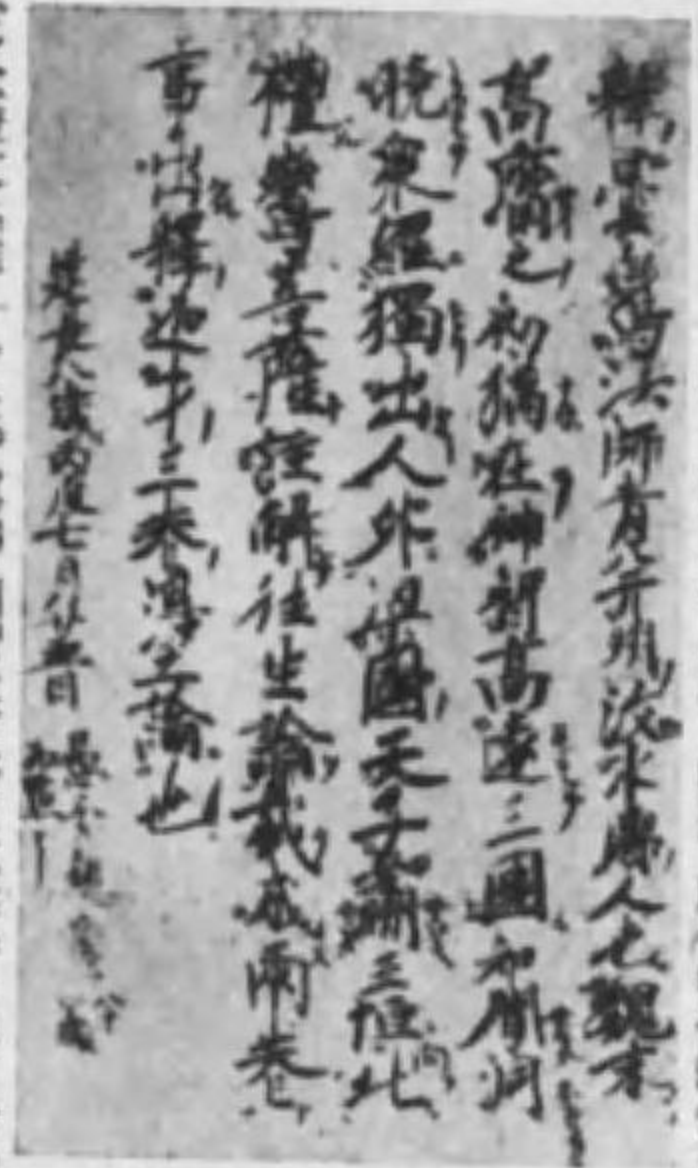


(藏書印本) 影の城安

ることとなつた。これより親賢の身邊は大に變り、心機も亦大に改まつたやうである。師源空と共に俗體とせられて配流せられたのであつたが、その後大に感ずるところあり、僧と云ひ、僧と云ふも、形式に過ぎず、かゝる形式に拘束せらるゝことなく、精神に活躍せんとし、自ら僧にあらず、俗にあらずとて、愚亮と號した。即ち云はく、「爾已非僧非俗、是故以亮字爲性也」。當時天台宗より出た親賢、聖賢等が、法戒を携へてゐたことも親賢が早く法戒を携へてゐたことも事實であらう。併しこれには種々の異説があることとなつた。これより親賢の身邊は大に變り、心機も亦大に改まつたやうである。師源空と共に俗體とせられて配流せられたのであつたが、その後大に感ずるところあり、僧と云ひ、僧と云ふも、形式に過ぎず、かゝる形式に拘束せらるゝことなく、精神に活躍せんとし、自ら僧にあらず、俗にあらずとて、愚亮と號した。即ち云はく、「爾已非僧非俗、是故以亮字爲性也」。當時天台宗より出た親賢、聖賢等が、法戒を携へてゐたことも親賢が早く法戒を携へてゐたことも事實であらう。併しこれには種々の異説があることとなつた。

一論(即ち無量壽經・觀無量壽佛・阿彌陀經・淨土論を正依とし、尤も無量壽經を尊重し、その深義を發揮し、阿彌陀佛の本願を引用したもので、細論釋及び偈書等七十餘部を引用したる)。親賢が比叡山等に於て學問修行の時に披抄したもの整理選用了したものであらう。實は越後の國府に配流の時以來、常にこの選述に心意を用ひたものであらう。その全部の結構等より見て、決して一時の製作でないことが想察せらるゝ。當時一時の歸向する者甚だ多く、高弟眞傳・性信等が開いてゐる。この後、親賢が武藏・相模及び甲斐等の地方を廻歴したことは、これ等の地方に教化を受けた弟子があり、遺跡が傳へられてゐることに依つて推知せらるゝのである。尋いで三河に入り、近江の木部地方に留まり、後京都に歸つて隱棲した。妻惠信尼は東國より直ちに越後に歸り、京都には隨從しなかつた。末女の彌女及び弟子某位が隨從した。(京都の隱棲時期) 親賢の京都再歸は記録はないが、嘉禎元年六十三歳の頃であらう。京都に於ても定住することなく、三條宮小路、五條西洞院等に隱棲した。三條宮小路は親賢の弟東塔善法坊主僧都尋有の所である。窮乏の生活をなし、著作に耽つてゐた。彌女を久我通光・日野廣綱等の下に送つたが、その實は生活の資助を得たものであらう。この間にあつて、常に東國の門下に書狀を送つて教導し、東國の門徒は、交々京都に上つて隱棲を助うた。當時東國より後く紀伊の眞野權現に參詣する者が少くなかつた。その途申京に入り、東國教化で緣故のある親賢を訪うた者もあつた。親賢は、京都に歸つて後、街頭に出て道俗を教化しようとはしなかつたので、極めて靜謐な生活

であつた。京都の門徒には弟子輩位一人門徒としてゐたやうである。この間に、漢文和文で撰述したものが多い。寛治二年に、淨土和讃、高僧和讃二百十餘首を撰述した。三部經即ち無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經等の教説、三國七部即ち印度支那、日本の淨土教の列祖の事蹟教説を四句一聯の詩を以て撰述したものである。建長七年に、淨土文類集抄三淨土三經往生文類「愚弄抄」三卷、



(寺園本) 淨土宗祖師遺教

谷の藝所を改め移し、青水の北の邊りに影堂を建立し、親愛の影像を安置し、覺悟尼影堂の留守職となる。親愛七子あり。一は範堂、後に改めて印信と云ふ。二は小黒女房、三は盛信房、四は信房、五は益方入道有房、六は高野尼、七は彌女、後に覺悟尼と云ふ。一門の弟子甚だ多く、眞傳、性信、顯智、源海、了海、明空、蓮位、唯圓、顯信等神教化を助けた。眞傳、顯智は下野に専修寺を興し、親愛を第一代となした。覺悟尼の後、覺悟、覺如血統相承して、影堂留守職となり、覺悟に至りて本願寺を興し、親愛を第一代となし、善覺の子如信を勸請して第二代とし、自ら第三代となる。



(寺園本) 浄土宗祖師遺教

以上の外に、親愛の書狀は、「血脈文集」等に収録したるものがあり、専修寺本願寺に自筆のものも存してゐる。なほ親愛の撰述と傳ふるものあれども、半信傳すべきものではない。「人物」親愛は京都に生れたが、壯年時代の流浪困苦に自ら身心を鍛練した。惠信尼の消息に依れば、一度下野の佐賀で熱病に罹つたことがあるが平生頗る壯健であつた。高野を兼ねても老如の顔が見えない。隨つて性格は剛毅堅忍であつた。興福寺の奏言に依つて諱科に處せられたことを記述し、「主上臣下、背法違義、成忿結怨」と云うてゐる。當時憤然として抗争せんとする風風が見える。併し叡山累谷時代の學人的生活から一變して、「教行信證」の順序等に表現せられてゐる心境は、極めて平靜寛厚である。佛陀の慈悲を仰いで康寧の生活に入つてゐる状況が見えてゐる。北國東國の流浪時期は、暫人的生活と云ふべきである。晩年京都に入つて隠棲するに至つて、益々性情が圓熟成した。「三帖和讃」等の製作に依つて想案すれば、當時の世相を透視し、然々として自得の境地にあつて、渾然たる一親愛の宗持人の面影があつて、要するに親愛の一生九十年、常に人格の進歩が見える。剛毅堅忍であり、平靜寛厚である。殊に晩年、その一門の弟子等に與へた書狀に依れば、極めて懇切親切であつた。共に佛陀の慈悲に浴す。何を教へて弟子と云はん。親愛には一人の弟子もない、と言つてゐる。こゝに親愛の性格があり、主義がある。こゝに親愛の「參考」親愛聖人御遺教集〇末燈抄〇嘆

存覺上人一期記〇最須重神詞事〇反古裏〇本願寺文書〇専修寺文書〇親愛上人全集 集賢山 松原 親鸞上人繪傳 しのんらん 繪卷「解説」この繪傳としては、本願寺三世覺如上人が永仁三年に二卷本を撰述して信濃縣康樂寺の法照淨賢に描かされたものが、蓋し最初であらう。而して今、觀宗の諸寺院に藏せられてゐる。

る「親愛上人繪傳」には、覺如畫、淨賢畫と傳へらるゝものも尠くないが、永仁の原本と稱すべきものもなく、皆それ以後の複製である。この繪傳の畫者淨賢の住した康樂寺は、信濃國東段郡碓氷村に在り、鎌倉末葉より足利初葉に亘つて、淨賢を初代として宗尊、圓寂等、數代畫家が輩出してをり、これ等が皆親愛繪傳の製作に從事してゐたことは注目し得る。近頃これを康樂寺派と呼ぶに至つた。同寺の過去帳によれば淨賢は延文三年八月十二歳で、宗尊は應安三年七十八歳で、圓寂は至徳元年六十七歳でそれと記してゐる。この康樂寺派の製作に係る親愛繪傳の遺品としては伊勢専修寺の五卷本、京都東本願寺の四卷本兩様、常陸照願寺の四卷本等が顯著であり、その他この種の繪傳としては京都西本



(康樂寺本) 親愛上人繪傳

願寺、三河妙源寺、如雲輪寺、信濃康樂寺、後深澤寺、甲斐高野寺、常陸淨光寺、武蔵報恩寺等の諸本があり、中には掛幅仕立の圓筒もある。東本願寺本兩様のうち、一は康永二年宗尊、圓寂の二筆に成るものであり、他は貞和二年釋弘願の署名あるものを詳かにしない。専修寺本、照願寺本等は、淨賢の傳あるも、蓋し信據し難く、蓋しまた等しく南北朝前後の製作である。これ等いづれも皆淨賢本に基つたものと思はれ、その畫様の如きならざれば、鎌倉以後に於ける地方藝術として、康樂寺派の發展と傳統とを知る上に興味ある遺作である。(田中一)

心理學的美學 心理學的研究方法とする美學。近代の自然科學の勃興と共に、單に自然の物質的方面のみならず、人間の精神的方面に對しても自然科學的方法によつて研究するやうになり、こゝに人間心理に對する自然科學的研究の一として心理學が隆盛となる。然るに吾々の美と稱するものも、事實として見れば又人間の心理作用に外ならぬ故に、これが研究は心理作用一般を究むる心理學に依らねばならぬとして、心理學の見地から美を一の經驗的事實として説明しようとする研究が、この心理學的方法に依る所謂心理學的美學である。併しこの心理學と云ふ實際的方法の相違により、心理學的美學も内省心理學的美學と、實驗心理學的美學とに分れる。前者は主として、美的享受、創作に於ける心理作用を主觀的に内省することによつて心理的法則を求め、後者は主として、美的享受、創作に現れたる心理作用を客觀的に實驗する

ことによつて心理的法則を求め、隨つて文前者は心理學的美學に於ける主觀主義的美學といはれ、後者は心理學的美學に於ける客觀主義的美學ともいはれる。又その研究對象が個人でなく民族である場合に、民族心理學的美學と稱する。又心理學上に於ける快不快を論ずる快苦論の地から一切の美的心理作用を説明しようとする美學は、快苦論的美學といはれる。内省心理學的美學者としてはラング(Lange)、フックス(Fuchs)、フョケルト(Foerster)、ツァンク(Zenker)等があり、實驗心理學的美學者としては、主として生理心理學的美學者がある。民族心理學的美學者としてはグント(Wundt)がある。快苦論的美學はトーンシャウ(Otenshal)によつて唱へられる(生理心理學的美學者)。

た機械的の性格が出来上る。ゾラが「赤と黒」を評して、「心理的機械的であつて、人生の相ではない」といつた言葉は、單に諷刺のみではない。なほこの種の小説としては、以上に挙げたものの外に、ロシアのドストエフスキ、アンドレーエフの作品が特に聞えてゐる。前者の「罪と罰」、後者の「赤い笑ひ」は恐らく心理小説の双璧であらう。又チーフの短篇には心理小説として優れたものが多い。チーフの流を汲んだ英國のカザリン・マンスウィールドの諸短篇も亦獨特な心理小説である。なほ英國での心理小説家としてはステューヴンソン、メリテイスが挙げられ、米國ではボウが挙げられる。

【日本に於ける心理小説】日本に於ては、未だ劃期的といはれる心理小説(前項)が出てゐない。榮式部の「源氏物語」には、優れた心理描寫が所々にあるが、全體として心理小説とはいへない。西鶴の小説に就いても亦同様である。明治になつてから最初の心理小説として挙げられるのは、尾崎紅葉の「三人妻」多情多恨(各別項)などであるが、類型の心理が描けてゐるだけで、未だ特殊な女性心理を表現する域に達してゐない。眞に心理小説として見るべきものは夏目漱石の「明暗」(別項)である。大正時代に入つて心理小説に妙技を揮つたのは、「俄あれ」(恐しき結婚)等の作者岩野鷗外、范の犯罪「好人物の夫婦」等の作者岩谷小波等である。又昭和の新興藝術派の作家の中には、英倫の新しい心理主義文學の影響を受けて、その方面で試作してゐる者があるが、未だ特殊すべきものは現れない。



神靈矢口渡 (石原大蔵) 畫

【人類學的美學】(新村) 人類學的美學(Anthropologic Aesthetics) 人類學の見地から、原始民族の藝術を研究する美學。文化民族の藝術を社會學的に究むには、先づこれが起原たる原始民族の本質と條件とを究めなければならぬ。この原始民族の生活の、發展の法則を明らかにする事は人類學である。茲に人類學的美學が生ずる。この見地をとる學者としては、グロッセ(Grosz)、マン(Dilthey)がある。

【参考】Grosz, E.: 'Anfänge der Kunst', Isgl. H. H. V.: 'The Origin of Art', 1904. 人類學的美學(新村) 人類學的美學(新村) 人類學の見地から、原始民族の藝術を研究する美學。文化民族の藝術を社會學的に究むには、先づこれが起原たる原始民族の本質と條件とを究めなければならぬ。この原始民族の生活の、發展の法則を明らかにする事は人類學である。茲に人類學的美學が生ずる。この見地をとる學者としては、グロッセ(Grosz)、マン(Dilthey)がある。

【参考】Grosz, E.: 'Anfänge der Kunst', Isgl. H. H. V.: 'The Origin of Art', 1904. 人類學的美學(新村) 人類學的美學(新村) 人類學の見地から、原始民族の藝術を研究する美學。文化民族の藝術を社會學的に究むには、先づこれが起原たる原始民族の本質と條件とを究めなければならぬ。この原始民族の生活の、發展の法則を明らかにする事は人類學である。茲に人類學的美學が生ずる。この見地をとる學者としては、グロッセ(Grosz)、マン(Dilthey)がある。

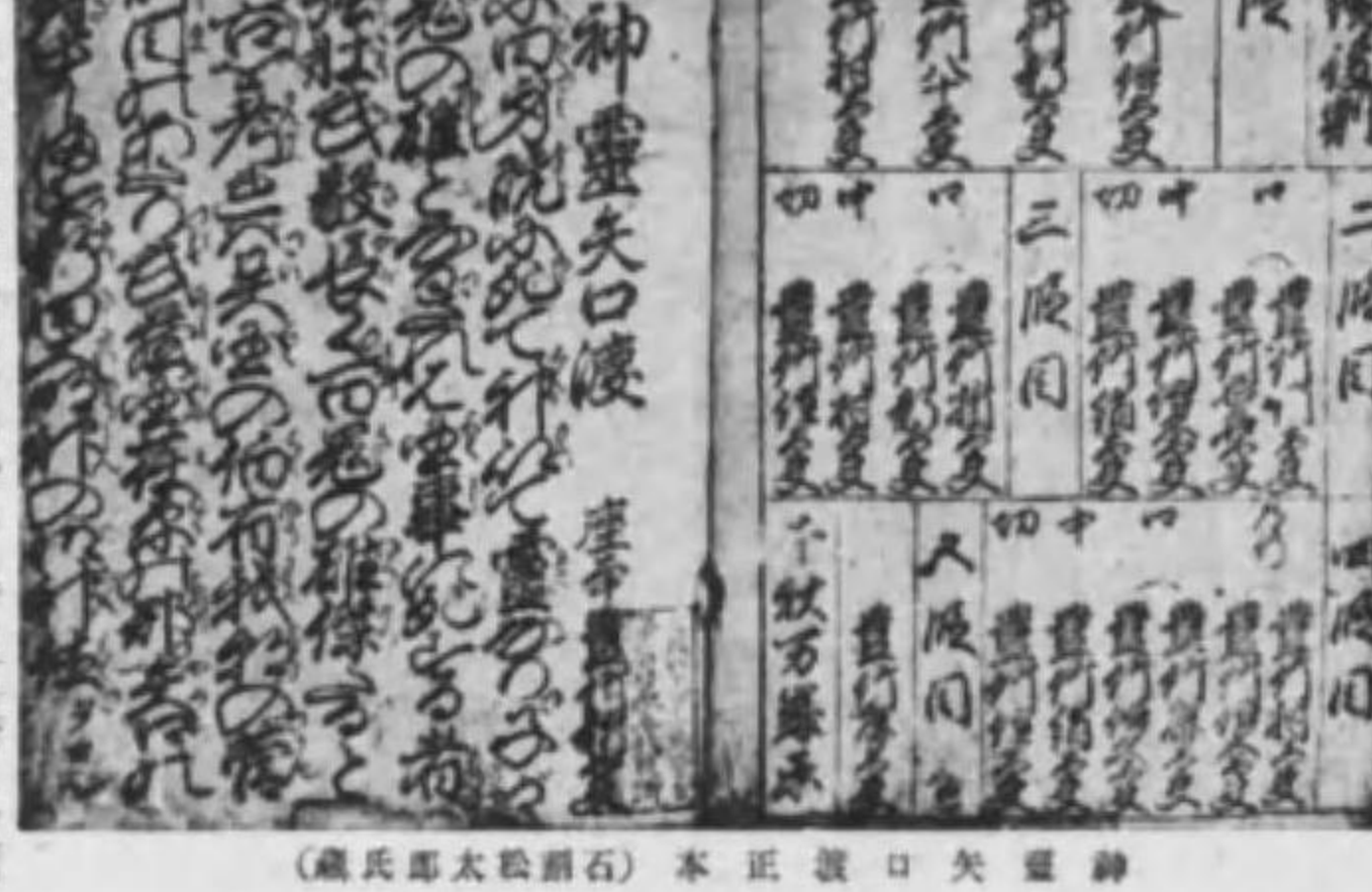
【参考】Grosz, E.: 'Anfänge der Kunst', Isgl. H. H. V.: 'The Origin of Art', 1904. 人類學的美學(新村) 人類學的美學(新村) 人類學の見地から、原始民族の藝術を研究する美學。文化民族の藝術を社會學的に究むには、先づこれが起原たる原始民族の本質と條件とを究めなければならぬ。この原始民族の生活の、發展の法則を明らかにする事は人類學である。茲に人類學的美學が生ずる。この見地をとる學者としては、グロッセ(Grosz)、マン(Dilthey)がある。

【参考】Grosz, E.: 'Anfänge der Kunst', Isgl. H. H. V.: 'The Origin of Art', 1904. 人類學的美學(新村) 人類學的美學(新村) 人類學の見地から、原始民族の藝術を研究する美學。文化民族の藝術を社會學的に究むには、先づこれが起原たる原始民族の本質と條件とを究めなければならぬ。この原始民族の生活の、發展の法則を明らかにする事は人類學である。茲に人類學的美學が生ずる。この見地をとる學者としては、グロッセ(Grosz)、マン(Dilthey)がある。

【参考】Grosz, E.: 'Anfänge der Kunst', Isgl. H. H. V.: 'The Origin of Art', 1904. 人類學的美學(新村) 人類學的美學(新村) 人類學の見地から、原始民族の藝術を研究する美學。文化民族の藝術を社會學的に究むには、先づこれが起原たる原始民族の本質と條件とを究めなければならぬ。この原始民族の生活の、發展の法則を明らかにする事は人類學である。茲に人類學的美學が生ずる。この見地をとる學者としては、グロッセ(Grosz)、マン(Dilthey)がある。

兵車之助も歸國する。やがて諸侯八郎が深手を負うて戻り、矢口に於ける義興の憤死を報ずる。討手が寄せるとの報せに六郎は討死を主張するが兵車之助は降参説を固守して論争する。海は夫を諷めるが却つて縛られるので、腕を切り御堂を伴ひて城を落ちる。六郎も若君を巻き込んで城を破つて逃れる。(三段) (續前)

【御堂と海とは雲助長蔵等のために危地に陥られるが機智を以て逃れる。南無六郎は若君を以て隠し六十六部に身を棄して通りかゝるが、長蔵等に襲はれて傷つく。(山良兵衛部)宿を乞うた御堂と海とは、今は足利に仕へる兵車之助にすげなく道拂はれる。六郎も落ちて来て邸内に隠れるが、長蔵の訴へにより竹澤監物は足利の上使として徳壽丸の首を取に乘込むので、兵車之助は六郎を射殺し若君の首を討つて逃出す。御堂や海は悲嘆にくれるがこれは兵車之助の苦肉の計で、一子友千代を身代りに立てたのであつた。(四段) (進行比翼の袖) 義孝と豪との道行。(生麥村庵)庵の主人が落着の男女を匿まつたのを知つて無頼漢萬八が強請りに来る。道念は矢口で生き残つた義興の旗持ちで、義孝夫妻に新田家の旗を渡して逃れしめ、百姓達を引連れて押寄せた萬八を、狐の面を被つて散々に刺す。(矢口渡領兵衛住居) 義興謀殺に疎動のあつた留守領兵衛は、足利の恩賞に預つて豪奢な生活を送つてゐるが、今日しも落人詮議の件で庄屋の宅へ出かけて



神靈矢口渡 (石原大蔵) 畫

【参考】Grosz, E.: 'Anfänge der Kunst', Isgl. H. H. V.: 'The Origin of Art', 1904. 人類學的美學(新村) 人類學的美學(新村) 人類學の見地から、原始民族の藝術を研究する美學。文化民族の藝術を社會學的に究むには、先づこれが起原たる原始民族の本質と條件とを究めなければならぬ。この原始民族の生活の、發展の法則を明らかにする事は人類學である。茲に人類學的美學が生ずる。この見地をとる學者としては、グロッセ(Grosz)、マン(Dilthey)がある。

【参考】Grosz, E.: 'Anfänge der Kunst', Isgl. H. H. V.: 'The Origin of Art', 1904. 人類學的美學(新村) 人類學的美學(新村) 人類學の見地から、原始民族の藝術を研究する美學。文化民族の藝術を社會學的に究むには、先づこれが起原たる原始民族の本質と條件とを究めなければならぬ。この原始民族の生活の、發展の法則を明らかにする事は人類學である。茲に人類學的美學が生ずる。この見地をとる學者としては、グロッセ(Grosz)、マン(Dilthey)がある。

【参考】Grosz, E.: 'Anfänge der Kunst', Isgl. H. H. V.: 'The Origin of Art', 1904. 人類學的美學(新村) 人類學的美學(新村) 人類學の見地から、原始民族の藝術を研究する美學。文化民族の藝術を社會學的に究むには、先づこれが起原たる原始民族の本質と條件とを究めなければならぬ。この原始民族の生活の、發展の法則を明らかにする事は人類學である。茲に人類學的美學が生ずる。この見地をとる學者としては、グロッセ(Grosz)、マン(Dilthey)がある。

つて、劃期的な機運を拓いた。その外、エッセイを新古典的な美しい文体で発表する新隨筆として、國文學界で落合直文・小中村義典・大町桂月・柳井南江・武島羽衣があり、西歐文學の詩想を醸成する人々に、島崎藤村・島村抱夜・戸川秋骨・北村透谷・平田亮木等があつた。その間に、『國民之友』に發表された高橋三昧の『吾亡妻』があり、山路愛山を客員とする民友社誌の青年記者連にも、すぐれた清新なエッセイが見られる。明治三十年後になつては矢野龍溪の隨筆的著述『中江野矢の一年有半』(別冊)が共に讀まれた。前者は、豊富な學識と趣味が、眞實な行文に心ゆくまで反映してゐる。後者の奇矯で峻拔な世相観は、『一年有半』著述の動機と相俟つて、斷然、劃期的な評判になつた。さて明治の既成文壇では、紅葉が『煙霞樓』(別冊)等で、紀行文にその才華を發揮しつつある一方、幸田露伴が該博な識見を隨筆方面に移して来て、『しほまぢ草』から、『隨筆』(長語)等に、彼一流の卓抜な世相観を展開して来る。それより前に、櫻痴(露伴)が輕快なタッチを持つた紀行文を随筆として發表して、露伴の『あられ酒』(別冊『日用帳』)ひかへ、藤村の『辛味に懲らした批評』を發表して、劃期的な一面を拓いた。その外、明治から大正に引續いて、文壇的な隨筆家は相當に多い。内田魯庵は、『翻譯』(別冊)、『隨筆』(別冊)の二冊の相俟つた『あらし』の如きものであつて、その隨筆も亦劃期的であるとも云へよう。

一、本隨筆は自筆本に依り得るものは自筆本に、刊本は編輯の古例の通りに、原稿本は二三の原本を校合して、最善なきを期したものである。一、本隨筆は著者の個性を尊重し、又一面からは古書保存を期したいと思ふが故に、一切字句の訂正をせず、凡て原本の儘とした。

二、本隨筆は著者の個性を尊重し、又一面からは古書保存を期したいと思ふが故に、一切字句の訂正をせず、凡て原本の儘とした。

三、本隨筆は著者の個性を尊重し、又一面からは古書保存を期したいと思ふが故に、一切字句の訂正をせず、凡て原本の儘とした。

探り入れられる範圍は、文壇と文學・國語等の世界であるが、青風には『日和下駄のやうに、回顧趣味の鋭い風刺と、個性的な藝術至上主義が、巧みな融合に孤高な爽やかさを見出す。菊池寛は、無造作に主観を投げ出して、當るも當らぬも、その率直さに愛嬌がある。詩人としての海田波菜は、自然を冥想する隨筆家として轉身して、その機智に富んだ濃厚な觀察に、眞似の出来ない風致を醸成してゐる。歌人齋藤茂吉も、隨筆家として、殊に歌人の評論に、深刻な透きを見せる。柳田泉には、『雪國の春』(海内小記)その他がある。土俗學の有数の學徒としての彼は、田山花袋の友人として詩人肌の靈妙な光澤を創作に浮き出す。國際的な英文學者野口米次郎は、幾多の日本書家論の外に、『松の木』(別冊)『國政の世界』など、隨筆で、異國的な日本文明批評を語り、日本に歸化した小泉八雲と、日本を第二の故郷としたチルベルの感想集は、靈高な人格の表現として香氣が人にせまる。英文學者では、岡倉山三郎・田部重治・別所徳之助等も、人事・山嶽・自然ととりまゝの姿で英國的・日本的な、何れも優れたエッセイである。評論家としての長谷川如是閑は、多少のニヒリズムの風刺を底にひろめた述語と機智に満ちた隨筆家として、聰明無比である。上小川小の、『その日その日は』、『文壇以外では』、故人波多野水五郎の、『島の日』その他が、多角な注意深い觀察に富み、『茶會記』の高橋藤村と一對の、實業家の筆人であつた。市島春城・三田村武蔵も、『朝山陽』、『高島隨筆』等で、一方はユーモラスであり、一方は、底知れぬ史的知識の餘蘊を見せる。

學界では、故宅三軒が、隨筆家らしい閃めきを少數の制作に残してゐるが、故郷山崎郎にも、愛護すべき風情ある隨筆がある。醫學界では、正木不如丘・高田義一郎・田中香洲・小南又二郎等が、醫眼で見た犯罪學の、隨筆的文獻を豊富に提供する。漱石亡き後に、同じ寫生文から出た吉村冬彦は、科學的特徴を兼ねた隨筆家として、理論的特徴を兼ねた隨筆家として、學界に一二の地位に推される。行文の屈折性が、ちつとも學者のきこち無さを感ぜしめない。新村出の南嶺研究は、『南嶺更紗』以下の異國的新發現を、なだらかな文體に巧みに盛り上げて、一時の切支丹物流行の前線に立つた。ただ同じ學界でも、『勇義書』の法學博士和田垣謙三の後は、續ぐものはない。法學博士といへば、隨筆家としての彼常清佐氣象學の藤原咲乎も、それぞれ隨筆家としての業績を示してゐる。軍籍では櫻井忠温と水野廣徳がある。新聞雜誌界では、故土屋大夢が、あまりに多数に知られぬが、一寸類の無い着想があつた。新藤戸相造には、『歸郷の産』その他がある。『探十の世界見物』によつて、漱石の假面であるかと思はせた故郷野村十(通川玄耳)は、『從軍三年』(別冊)以下、その他好隨筆家である。杉村楚人冠は、『新佛教』の昔から、斯界の老手として最も讀者が多い天成的個性的な隨筆家である。『七花八裂』のふところその他、どれも讀む價值がある。下村海舟は建築の新隨筆家で、『一番茶』以下、關所雜談、文字通りの隨筆家である。過去の人として、外に日南草堂集の『福本日南』、『阿公全集』の大庭阿公がある。大正末期に、『隨筆』隨筆が發刊され、『文藝春秋』その他が

を集めたものではない。それは下記の内容目次を見ればわかる。編者の例言の中左の三則は、本書編輯の趣意を窺ふに足る。

一、本書の配列の順序は年代によらず、類別にかはらず、随筆的支持し、随筆を編んで、其趣に一編の相俟つたものとしたのであつて、その編輯も亦劃期的であるとも云へよう。

二、本隨筆は自筆本に依り得るものは自筆本に、刊本は編輯の古例の通りに、原稿本は二三の原本を校合して、最善なきを期したものである。一、本隨筆は著者の個性を尊重し、又一面からは古書保存を期したいと思ふが故に、一切字句の訂正をせず、凡て原本の儘とした。

三、本隨筆は著者の個性を尊重し、又一面からは古書保存を期したいと思ふが故に、一切字句の訂正をせず、凡て原本の儘とした。

四、本隨筆は著者の個性を尊重し、又一面からは古書保存を期したいと思ふが故に、一切字句の訂正をせず、凡て原本の儘とした。

五、本隨筆は著者の個性を尊重し、又一面からは古書保存を期したいと思ふが故に、一切字句の訂正をせず、凡て原本の儘とした。

六、本隨筆は著者の個性を尊重し、又一面からは古書保存を期したいと思ふが故に、一切字句の訂正をせず、凡て原本の儘とした。

七、本隨筆は著者の個性を尊重し、又一面からは古書保存を期したいと思ふが故に、一切字句の訂正をせず、凡て原本の儘とした。

八、本隨筆は著者の個性を尊重し、又一面からは古書保存を期したいと思ふが故に、一切字句の訂正をせず、凡て原本の儘とした。

九、本隨筆は著者の個性を尊重し、又一面からは古書保存を期したいと思ふが故に、一切字句の訂正をせず、凡て原本の儘とした。

十、本隨筆は著者の個性を尊重し、又一面からは古書保存を期したいと思ふが故に、一切字句の訂正をせず、凡て原本の儘とした。

初しく、伊勢音頭、キルルリ、よいわい、な〜うさき〜、梅田堤、うかれ座頭、文七の隨筆以下合せて五十三篇、この内に潮來替歌、叶見世、どうじやいな、奥作思へば、飛龍子、きたさのさ、紺の前巻、雲村、茶摘、しよんが、い、い、や、新内節、ちよんがれ等がある。四編は、江戸二十しよんが以下六十二首。この内に十九首のことごとく、富士の白雪、さまざま、御所の御庭に、池田伊丹、すいたとさ、歌考等がある。以上、何れも主として京阪地方に行はれたもの。

【水鏡集】著者、北原白秋。【刊行】大正十二年六月、アルス版。【内容】主として口語體の水鏡風の詩を収めてゐる。『白金の獨樂』以後のこれ等の詩風は、小田原生活の所産であり、その水鏡風の精神は、地涯的にこれ等の詩に一貫してゐると思ふ。著者自身には、歌集『雀の卵』(別冊)と共に、更生の詩集として記念すべきものである。中に『雀の卵』(別冊)等の詩を収めてゐる。なほ序に代へて、新詩論(藝術の開光)を巻頭に掲げてゐる。

【醉者詩集】著者、河井醉者。【刊行】大正十二年一月一日、アルス版。【内容】既刊詩集『無名』(別冊)、『塔影』(三十八年)、『影』(三十九年)、『塔影』(四十三年)及び新作を加へたものである。附録一巻はその友人賀樂狂夫の編で、本編の上梓せられようとするのを聞いて、吉地後援に關つたものと云ふ。【刊行】文化四年【解説】古い文書、尺牘、公論、切書、利本、印章、圖畫、その他名人の遺物等を採寫して説明を加へたもの。上巻に伊都内親王手判より劇場公論に至る二十項、下巻に土肥二三書より嵐

隨筆を収給する編輯様式を探つてから、隨筆編が、雜誌になつてはならない重要な讀み物となり、それだけ、昭和期に入つては、有望な隨筆家の新人が無数に現はれ、明治期に見られない盛衰を示してゐる。(以上千恵)

【隨筆集】著者、日本隨筆集。【刊行】國民文庫刊行會【刊行】明治四十五年【内容】『國民文庫』の内に収めたもので、『隨筆集』(雲萍雜誌)『花月草紙』(二稿)『隨筆集』(四部)を含む。

【隨筆大觀】著者、六册【編者】梅園謙【刊行】明治四十五年再版【内容】『珍書文庫』の内として、江戸期隨筆學者等の著に係る隨筆中、編者が比較的珍しいと認められた二十七部を集めたもので、校訂の意味で多少の加筆をした所がある。巻一の首に序文例言があり、毎巻首に所收書目が掲げられてゐる。全部の内容目次は左の通りである。

(第一) 隨筆集(三篇) 隨筆(天野野矢) 隨筆(二) 隨筆(三) 隨筆(四) 隨筆(五) 隨筆(六) 隨筆(七) 隨筆(八) 隨筆(九) 隨筆(十) 隨筆(十一) 隨筆(十二) 隨筆(十三) 隨筆(十四) 隨筆(十五) 隨筆(十六) 隨筆(十七) 隨筆(十八) 隨筆(十九) 隨筆(二十) 隨筆(二十一) 隨筆(二十二) 隨筆(二十三) 隨筆(二十四) 隨筆(二十五) 隨筆(二十六) 隨筆(二十七)

【隨筆文學選集】著者、正編十二册 續編六册【編者】梅園謙【刊行】昭和二年【内容】江戸時代の諸作家の、隨筆の比較的興味あり珍奇なものを中心とし、これに特殊の題目に關する小冊子若干を交へて、一系統として『隨筆文學選集』の稱を與へたものである。故に嚴正の意味に於ける隨筆のみ

に東行の途上、母常盤が討たれたと思つて藍...



領の享保三年正月以前のものであるまいと...

て提議界を感し、その腹主たる親があつた。

才子、佳人、大團圓といふ舊い形式を巧妙に利...

一稿第一高等中學校講堂で演劇改良の演説...

に思召をこぼしつつ、やがて主の伯父の許に...

きに、通使が水原四年八月、薩人頭任じたの...

が冷泉郷の北と西との間にありと記し、今...

置したが、これが國の新報社に調査部の創始であり、また記事審査部、月刊グラフを創始した。彼は新聞紙の一種たるのみならず、特に調査部を長に、「ちまのかは」「藤のどころ」「湖畔の」「新聞紙」新聞社の内外「新聞の語」等数篇の著述のほか、長篇小説「うるさき人」の作がある。株式會社朝日新聞社監査役、東京朝日編輯局顧問の要職に在る。

杉森孝次郎

評論家「號」著者。明治十四年静岡縣小笠原市山田村に生れた。同三十九年早稲田大學文科卒業、母校に教鞭を取る。大正二年十月より同八年三月まで文部省留學生として歐洲にあつた。初め獨逸に留學したが、獨逸流の概念的に煩瑣な哲學は彼の好むところでもなく、幾許もなく英國に轉じた。彼の思想が、その構想や表現に於て英國哲學者の風貌を持つのは、一つには彼の好尚の然らしめるところによるが、又その教養の源泉が主としてそこにあつたからである。留學中彼は「The Principles of the Moral Empire」の著者とした。留學前にも彼は注意すべき評論を書いてゐたが、歸朝後は母校に教鞭を取りながら専ら評論を執筆した。彼の專攻は、先づ倫理學として見るべきであらうか。併しながら彼の教養は、哲學、倫理學、社會學の何れにも通じてゐて、これ等諸學の立場を統一し、彼獨特の文明評論、社會評論をなすところに特徴を持つてゐる。彼は一科學の學者といふよりは單に評論家といふがふさはしい。彼の表現は最も獨特なもので、その文章の一句一句に含蓄ある語を使ひ、彼一箇の風貌を表現して、何人の模倣をも許さない。現代日

杉山丹後

浄瑠璃太夫。浄瑠璃史を不例の浄瑠璃大鑑史と稱し、七郎左衛門「別名」受領して藤原清隆と名乗る。「生段」「法名」東山高哲。浄瑠璃の門に入りて直傳の本節を語り、元和年中、江戸に下つて芝居を建てて流行した。傳へられるので、藤原清隆に先立ち、江戸浄瑠璃界の開祖と見られる。承應年中、上洛して受領したが、その後は江戸に下らなかつたらしい。その子も、後受領して肥前藩と名乗つた。父子靡々將軍家に浄瑠璃を絶かせ、その實として禁地に無教の愚癡を許されたといふ。丹後の語り物として傳へられた名題に「清水御本地」「生實等がある外、古く五郎の本節といはれた「安口の判官」「弓藏」が「江戸井田」五輪くさき等も彼の語り物と見られるといふ説がある。語り口に就いては所傳がない。(守鹿)

杉山丹後 浄瑠璃太夫。浄瑠璃史を不例の浄瑠璃大鑑史と稱し、七郎左衛門「別名」受領して藤原清隆と名乗る。「生段」「法名」東山高哲。浄瑠璃の門に入りて直傳の本節を語り、元和年中、江戸に下つて芝居を建てて流行した。傳へられるので、藤原清隆に先立ち、江戸浄瑠璃界の開祖と見られる。承應年中、上洛して受領したが、その後は江戸に下らなかつたらしい。その子も、後受領して肥前藩と名乗つた。父子靡々將軍家に浄瑠璃を絶かせ、その實として禁地に無教の愚癡を許されたといふ。丹後の語り物として傳へられた名題に「清水御本地」「生實等がある外、古く五郎の本節といはれた「安口の判官」「弓藏」が「江戸井田」五輪くさき等も彼の語り物と見られるといふ説がある。語り口に就いては所傳がない。(守鹿)

たか不明であるが、治國の大業を終へて當世國に去つたとあるから、こゝが當世國であると見なくてはなるまい。記紀に載せた神功皇后の歌に「當世に居ます勢立たす少御神」とあるのは、これを裏書する。さうすればこの神は、當世國から現れて、民衆に惠福を與へた後、また當世國に還つたことになり、民間信仰に於ける當世神の行儀と全く一致する。文德天皇養正三年に、當世の海岸に二つの怪石が出現し、神が人に憑いてこの國を造り給へて東海に去つた大空母知少比古奈が、民を濟すためにまた還り來つたのであると云つたので、その石神が延喜式内に列せられたといふ記述から、當世國を東方海中に求め、且つ奈良朝初期の人が當世國と當世國を同一視したことが事實と併せて考へて、この神の當世國に關する古代人の思想をそこに窺はうとするのは、些か無理であると思ふ。さうした傳承は、頗る純朴な民間信仰から遠ざかつてゐるからである。またこの神が海上から渡來して後に當世國に去つたといふ事を解して、出雲が領土と交通してゐた事實の反映であるとなす説もある(次田彌兵衛「古事記新編」)。なる程、日神の關係は、古くから頗る密接であり、素戔嗚尊の渡神話、國引神話等は確かに這般の關係の產物であるらしい。しかし當世國がどこに存在したと考へられたにしろ、かうした解釋だけでは、少産名神の我が國土への出現と過去との動機に關して、大した示唆を與へ得るとは思はれない。多産具久(多産具)は兼録とすのが通説であるが、或る學徒はこれを後編の神を意味するものとなし、更に他の學徒は谷山山子であり、くはは(瀨田くは)「瀨田」の第



(瀨田書院大書庫) 杉山丹後

り、身の一大事を尋ねべき知識もおぼえれば、つゞつとして暮らしてゐるうち、病重りて死期の迫るを知り、多年召使つたにらみの介を枕邊に呼びて後事を託し、唯に江戸住居の時に妾に産ませた竹若の行末を頼み、「やぶ醫者の竹の一字の名をすてしふん」の世をのがれこそ行け」といふ辭世の狂歌と、大徳神歌之圖といふを家訓として書き残したといふ。「解説」序文にもあるが、全く「竹若物語」と「休咄(各別項)」を撰して取合せた輕口、又狂歌話である。終りの所は頗る眞面目で、何だか自分の事で暗示してゐるやに思はれる。作意は質素節約を費んで、食欲を勤めた所にある。作者は里木子一といひ、その傳は詳かでないが、序文に、「于時延寶七年の年孟陽仲治江城の旅里木子一みちもとと云者麻布なりし片隅に居りて是を全し六冊と分ちてやみぬ」とあり、又跋のうちに、泉州の旅人といふ事があるから、作者は堺の人で、當時江戸に假寓してゐたものらしいと思はれる。「日本小説年表」には、前記「みちもと」から探索したものであらう。里木子一は茶人野本道元の匿名だと記してゐる。野本道元は石州流の茶人で片桐貞昌に茶屋を學んだといふ事が「茶人系圖」に出てゐる。兎に角作者は、餘程狂歌を好み、得意でもあつたやうで、到處に詠んでゐるが、名吟らしいものは見えない。「水谷」

本が持つた最も有力な文明評論家の一人と呼べるべきである。嘗て聖道主義を唱道した。『The Moral Empire』の外に、邦文の評論集や單行の著作が多く、人類の再生「新社會の原則」「社會人の誕生」「神になる意志」「國家の明日と新政治原則」「倫理學」「性意識の哲學化」「社會進歩の純粹原則」「社會學」「綜合倫理學」等がある。(土田)

杉山丹後 浄瑠璃太夫。浄瑠璃史を不例の浄瑠璃大鑑史と稱し、七郎左衛門「別名」受領して藤原清隆と名乗る。「生段」「法名」東山高哲。浄瑠璃の門に入りて直傳の本節を語り、元和年中、江戸に下つて芝居を建てて流行した。傳へられるので、藤原清隆に先立ち、江戸浄瑠璃界の開祖と見られる。承應年中、上洛して受領したが、その後は江戸に下らなかつたらしい。その子も、後受領して肥前藩と名乗つた。父子靡々將軍家に浄瑠璃を絶かせ、その實として禁地に無教の愚癡を許されたといふ。丹後の語り物として傳へられた名題に「清水御本地」「生實等がある外、古く五郎の本節といはれた「安口の判官」「弓藏」が「江戸井田」五輪くさき等も彼の語り物と見られるといふ説がある。語り口に就いては所傳がない。(守鹿)

たか不明であるが、治國の大業を終へて當世國に去つたとあるから、こゝが當世國であると見なくてはなるまい。記紀に載せた神功皇后の歌に「當世に居ます勢立たす少御神」とあるのは、これを裏書する。さうすればこの神は、當世國から現れて、民衆に惠福を與へた後、また當世國に還つたことになり、民間信仰に於ける當世神の行儀と全く一致する。文德天皇養正三年に、當世の海岸に二つの怪石が出現し、神が人に憑いてこの國を造り給へて東海に去つた大空母知少比古奈が、民を濟すためにまた還り來つたのであると云つたので、その石神が延喜式内に列せられたといふ記述から、當世國を東方海中に求め、且つ奈良朝初期の人が當世國と當世國を同一視したことが事實と併せて考へて、この神の當世國に關する古代人の思想をそこに窺はうとするのは、些か無理であると思ふ。さうした傳承は、頗る純朴な民間信仰から遠ざかつてゐるからである。またこの神が海上から渡來して後に當世國に去つたといふ事を解して、出雲が領土と交通してゐた事實の反映であるとなす説もある(次田彌兵衛「古事記新編」)。なる程、日神の關係は、古くから頗る密接であり、素戔嗚尊の渡神話、國引神話等は確かに這般の關係の產物であるらしい。しかし當世國がどこに存在したと考へられたにしろ、かうした解釋だけでは、少産名神の我が國土への出現と過去との動機に關して、大した示唆を與へ得るとは思はれない。多産具久(多産具)は兼録とすのが通説であるが、或る學徒はこれを後編の神を意味するものとなし、更に他の學徒は谷山山子であり、くはは(瀨田くは)「瀨田」の第

臨陣と共に新編國に到り、曾戸茂梨のところにゐるが、長居を欲しないで出雲に渡つたといふ説話。...

うに、多くの民族に共有せられる説話の一つで、本来水中に棲むと信ぜられた蛇類に、年一回、乙女の犠牲をさしげた風習から生れたものであらう。...

呪師(名譽) 元來は呪禁師と云ひ、後に呪師、または日本風に呪師とも云ふ。...

鈴木重嶺(名譽) 田村の草子を見よ。(小き) 鈴木重嶺(名譽) 田村の草子を見よ。...

きてゐる小平次の新編演舞場に於ける上場は絶大の好評を博した。...

に入り、幹部に昇進して顧問となり、病を得て職を退いた。...



田代 木島魚(大) 地蔵頭等。...

た。彼の簡筆の才は自然照照の微妙な小品文章に出でゐるが、この方は讀者の注意を引いてはゐない。...

柳宗元(名譽) 柳宗元(名譽) 柳宗元(名譽) 柳宗元(名譽) 柳宗元(名譽)...

毒の種さへ取り戻せば本領安堵といふ小松左衛門の扱ひの下に、桂之丞は更次小雲及び家来の八平を従へて...

た。樫六は強姦評判の後家の頼商人高根の家から奪つて来た金を八平に與へる。その金で桂之丞の病氣は平癒した。折から桂之丞は東...

に對しては表面のみの夫婦關係にとり、ひそかに雪次郎との仲を許してやる。而も雪次郎が義を重んじて出奔した後、雪次郎の風と承知で桂之丞をおのが實子として養育したの...

を提出させ、本文は少しくわけてその疑問を解決させるといふ順序になつてゐる。そのうち少くない。後の種彦の作には、その種彦のものはないやうである。『史的地位』この作は種彦の草紙の處女作だと『櫻痴物語』(別冊)の「伊勢の巻」で種彦門人笠原仙果はいつてゐる。従つて後の種彦を決定するものも存在を抽出する意味に於て、注意すべきものが多い。種彦の草紙に於て、注意すべきもの...

「本領安堵」の編者大塚のほなしに得るところがあつたことは、作者もほのかすところであつた。更に又重要な一事は、種彦がそれ等を部分的な據りどころとするだけでなく、全體の輪廓を、三馬の作の「對男時花川」(別冊)に得てゐることである。東郷天と鬼の角兵衛、初五郎と桂之丞、淺香十内と青砥左衛門、金鶴の一輪、銀鶴の香爐と友切丸、身毒の鏡、綾太郎と妻初花、雪次郎の問答と九右衛門、女房おなほ、おなほの後夫仲七の問答など殆ど相似てゐる。特にそれ等を種彦の選びに於ては、全く同じやうな足取といつてよい。即ち種彦は前年出版の三馬の作を見てこれを模倣すると共に、彼が近松の諸作を利用して、ただその利用の點のみを模倣して、三馬を手本にしたことは黙して止めたのであらう。種彦の初期の態度を見るがために、見逃し難いやうに思はれる。(山口)

大正五年六月長女を挙げ、親としての愛と歡びを感じ、子供のための讀み物に着眼するやうになつた。そして純情的の興味から湖水の女ほか三篇の童話を書いたのが、そもそも童話になつた。これは最初偶然の動機となつた。かくて六年には『世界童話集』の名の下に『黄金鳥』以下二十一篇の童話を著し、七年六月に至つて、決然、兒童雜誌「赤い鳥」(別冊)を創刊して新興童話運動の急先鋒となつた。『著作』小説は、『三重吉全集』全十三巻に悉く収録してある。童話類は前記の外、古事記物語「アンデルセン童話集」二巻(別冊)等がある。彼の作の根柢を流れるものはロマンチズムであるが、作品の運び方はリアリスティックである。テーマは殆ど理想の所産であり、唯美主義的なりリズムによつて終始一貫されてゐる。童話に於ては、個體又は再話が多いが、その作品の精選と文章の清新に、新童話としての生面がある。『童話』明治から大正にかけての、唯一の唯美主義的童話作家である。純情的な而も感性的な、そしてロマンチックでありながら、十分にリアルな作風は、純美にして清麗なる表現と相持つて、近代日本文學史上、何人の追隨をも許さないものがある。又「赤い鳥」によつて童話の内容的價値を著しく高め、優れた童話作家を生んだことも、不朽の功績である。(童話参照) 江口山田



鈴木三重吉

「附記」宣長にはこの外に「自撰歌」がある。これは寫本で本居家に傳はり、昭和四年より寛政七年までの歌を自ら撰出したもので、年代順に分けてある。但し各一年の間の作は、大方、四季、雑、雜等の分類となつてゐる。天明二年以後の歌は、古風と近風とに分つて載せた。寛政二年の歌は、古風・近風に分つたが、寛政三年以後はまたこの分ちがない。種彦日本歌學全集の本居宣長全集、及び校註國歌大系(近代諸家集)第二巻に入つた。宣長の歌集には、その他に、「玉簫百首」(見本のめぐみ「枕の山」)等があり、何れも本居宣長全集に入つてゐる。「玉簫百首」には本居宣長の「玉簫百首解」があり、本居宣長全集に入つてゐる。(宣長参照) (佐佐木)

「附記」宣長にはこの外に「自撰歌」がある。これは寫本で本居家に傳はり、昭和四年より寛政七年までの歌を自ら撰出したもので、年代順に分けてある。但し各一年の間の作は、大方、四季、雑、雜等の分類となつてゐる。天明二年以後の歌は、古風と近風とに分つて載せた。寛政二年の歌は、古風・近風に分つたが、寛政三年以後はまたこの分ちがない。種彦日本歌學全集の本居宣長全集、及び校註國歌大系(近代諸家集)第二巻に入つた。宣長の歌集には、その他に、「玉簫百首」(見本のめぐみ「枕の山」)等があり、何れも本居宣長全集に入つてゐる。「玉簫百首」には本居宣長の「玉簫百首解」があり、本居宣長全集に入つてゐる。(宣長参照) (佐佐木)